

2020 年度

博士学位論文

恋愛コミュニケーション プロセスに関する日本の研究

-現代の日本人男女はどのようにして交際相手と

出会い、「付き合う関係」を構築するのか-

指導教員 宮原 哲 教授

文学研究科 英文学専攻

21DC001

友池 梨紗

目次

第1章 序論

1.1. 現代社会でのコミュニケーション学的重要性	1
1.2. テーマの設定（「日本人の恋愛」）	2
1.3. 西洋中心主義コミュニケーション学からの脱却	4
1.4. 実学志向のコミュニケーション研究を目指して	6
1.5. 期待される研究成果	7
1.6. 「コミュニケーション」とは何か	8

第2章 「恋愛」にまつわる先行研究概観

2.1. 「恋愛」ということばの起源と変遷	12
2.2. 「恋愛」と「結婚」の結びつき	14
2.3. 「出会いの経路」の縮小	19
2.4. 「出会いの経路」にたどり着く人びと	20
2.5. 「恋愛」の嗜好品化と多様化	22
2.6. 人間関係とコミュニケーション	24
2.7. 「付き合う」ための「告白」	26
2.8. 「恋愛」にまつわる決まりごと	27
2.9. 先行研究まとめ	30

第3章 本研究の視点

3.1. 問いの設定	31
3.2. 参考とする人間関係構築理論・モデル	33

第4章 一次調査

4.1. 調査対象者と調査方法	38
4.2. 調査手続き	39
4.3. データの分析方法	40
4.4. 結果と考察	53
4.4.1. 「出会い」に基づいた恋愛コミュニケーションプロセスの分類	53
4.4.2. 「偶発的出会い」と「自律的出会い」	65
4.4.3. 時代背景に伴った「出会い」の変遷	69
4.4.4. 関係初期の不確実性減少行動	72
4.4.5. 「付き合う関係」構築後のコミュニケーション	75
4.4.6. 儀礼的行為としての「告白」	79
4.4.7. ターニングポイントへの着目	83
4.4.8. シンボリック相互作用論的アプローチの提案	86

第5章 二次調査

5.1. 調査対象者と調査方法	90
5.2. 調査手続き	91
5.3. データの分析方法	93
5.4. 結果	97
5.5. 考察	117
5.5.1. シンボリック相互作用論的アプローチ	117
5.5.2. 「出会い」への再着目	120
5.5.3. 「自己開示・情報入手」と関係発展	123
5.5.4. 恋愛におけるメディア・コミュニケーションの重要性	127
5.5.5. 最大のターニングポイントとしての「告白」	129
5.5.6. 第三者の影響力	132
5.6. 二次調査まとめ	135

第6章 総合考察

6.1.	関係の土台を作る「出会い」への着目	136
6.2.	「付き合う」までの長い道のり	138
6.3.	「結果」より「過程」重視の日本人	141
6.4.	「告白」という「儀式」	142
6.5.	「告白・関係の確認」によって生じる「気のおけない関係」	144
6.6.	第三者の存在と役割	146
6.7.	日本的コミュニケーションとシンボリック相互作用論	150

第7章 結論

7.1.	本研究の残された課題	152
7.1.1.	調査対象者と調査方法	152
7.1.2.	「恋愛」以外の対人関係	153
7.2.	将来の展望	153

謝辞	154
----------	-----

引用文献	155
------------	-----

付録（調査データ）	164
-----------------	-----

第1章 序論

1.1. 現代社会でのコミュニケーション学の重要性

今日の世の中は便利なものであふれている。自動車や家電、インターネット、スマートフォン（以下スマホ）など日々の生活の負担を軽減してくれる技術の発達は著しく、私たちはその恩恵を受けながら快適な生活を送っている。

一方で、私たちは便利な暮らしと引き換えに人と顔を合わせて会話する多くの機会を失った。道に迷ってもスマホのナビさえあれば人に声をかける必要はなく、セルフオーダーやセルフレジを導入している店では店員と一言も話さないまま注文から支払いまで済ませられる。口頭でのやりとりは手軽なメールやチャットに取って代われ、人と接している時間よりもスマホやパソコンの画面と対峙している時間の方が長いという人も少なくない。電車の向かいに座っている人が全員スマホを操作している、そんな光景が日常と化した現代では相手と顔を合わせたコミュニケーションができない・したくないという人が増えており、コミュニケーションのあり方が問い直されている(宮原、2006)。

いつの時代もコミュニケーションは人と人とを結びつける重要概念として認識されてきたはずだが、とりわけ現代では生きる術の要かのように語られている。例えば、「企業が新卒者の採用にあたって重視した能力」第1位は、2004年から16年連続「コミュニケーション能力」となっている(日本経済団体連合会、2018)。2位の「主体性」、4位の「協調性」もまたコミュニケーションの一種であり、企業に所属するためには他者と「効果的なコミュニケーション」に従事することが求められることが見て取れる。また、「コミュ力(コミュニケーション能力)」・「コミュ障(コミュニケーション障害)」などのことばが日常で頻繁に使われることから現代日本には「『コミュニケーション能力』が強調される社会状況がある」(貴戸、2018、p.24)ことがよくわかる。

問題はこれだけコミュニケーション(能力)の重要性が謳われているにもかかわらず「コミュニケーションとはなにか?」という根本的な議論が置き去りにされていることにある。私たちは「コミュニケーション」を日常の中に溶け込んだ自明的概念と捉える傾向にあり、改めてその本質を問い直すことはない。人が「コミュニケーション」と言うとき、それは「単なる『話し方』や『ふれ合い』といった極めて狭く、表面的な意味」を指すのみで人間のコミュニケーションを織り成すさまざまな複雑要素は除外されやすい

(宮原、2011a、p.174)。そのため、「効果的なコミュニケーションが必要だ」、「コミュニケーションを十分に取ろう」と主張する人に「一体どのような状態になれば『効果的(十分)なコミュニケーション』が図れていると言えるのか」と尋ねても明確な回答は期待できない。つまり、現代を生きる多くの人々は「コミュニケーション」の重要性を理解しつつも、そのことばが指す中心概念を理解しているとは限らず、他者との関係の中で生じる問題も「あれはコミュニケーション不足が原因だった」などの抽象的なことばで片付けざるを得なくなっている。

そんな中、『コミュニケーションとは』という抽象的で壮大な疑問に対して、社会でその哲学的、実践的価値が認められるような答え」を導き出し、人に示唆を与えようと挑戦を続けているのがコミュニケーション学である(宮原、2011a、p.6)。コミュニケーション学とはコミュニケーションにまつわる日々の出来事や現象に着目し、その実態を探究して理論化することで人びとの疑問に対する答えを導き出そうとする学問である(West & Turner, 2010)。換言すれば、当学問は抽象的なコミュニケーションの定義や概念を具象的な言語に置き換えることで、それを読んだ人が自身のコミュニケーションの自明性を疑い、自分の身の回りで起きているコミュニケーションを客観的に見る機会を与えていることになる。

これまでもコミュニケーションにまつわる問題は数多く存在したはずだが、人びとはそれらを大きな問題と捉えてこなかった。それは「コミュニケーションの知識は生きていく中で自然と身につくものだ」という意識が強かったことが一番の要因だろう。しかし、実際のコミュニケーションは人びとが考えるより複雑なシステムで成り立っており、個々人が意識的に学ぶことが求められる。すなわち、一人ひとりがコミュニケーターとしての自覚を持ち、自身のコミュニケーションを客観的に分析できる力を身につけることが鍵となる。そんな人びとの気づきを高める学問としてコミュニケーション学は今後日本で大きな役割を担うこととなるだろう。

1.2. テーマの設定 (「日本人の恋愛」)

以前の日本は見合い結婚や職縁結婚(職場での出会いを通しての結婚)が主流だったことから未婚者男女は日々の生活の中で「交際相手とめぐり会う」のが「自然」なこととされていた。一方、そのような文化が衰退した現代では「恋人が欲しい」と思った場合、

自ら動いて他者と関わっていくことが求められるようになった。合コンや結婚相談所といった体系的出会いは現代でも交際のきっかけとして挙げられるものの、いわゆる昔の「お節介お婆さん」とは異なり、出会いのほんの入口を紹介してくれる程度である。そんな中、恋人がいない且つ欲しいと思っている人びとに恋人ができない理由を尋ねると「(異性との) 出会いがない」という回答が一番多く挙げられる(内閣府、2014)。このことから、現代の恋愛には「交際相手候補と出会う」という容易には超えられないハードルが立ちだかっていることがわかる。そして二人の仲を取り持つ「仲人」が不在となった今、育った環境が異なる二人が関係を構築し、その関係を維持し、関係を親密なものに発展させるためには以前にも増して当事者たちのコミュニケーション能力が問われる事態となっている。

また、近年はインターネットの普及で日常生活では出会えない相手とも出会えるようになった一方、交際を求める人たちがオンラインという一つのプラットフォームに集うことで恋愛競争が激化しており、以前にも増してコミュニケーション能力の格差が恋愛格差に直接的に反映されるようになってきている。Heino, Ellison, and Gibbs (2010) は、近年人気を集めているマッチングアプリに着目し、利用者が画面上にリストアップされた異性の情報(登録者本人が作成したプロフィールやその人のアプリ上の人気度)を基に相手の魅力を判断し、気に入った相手に「いいね!」を送る様子はまるで通販サイトで自分が求める商品を検索し、口コミや商品ランキングなどを基に「欲しい」と思った商品をカートに入れていく消費者のようであると考え、**relationship shopping** (relationship + shopping : 関係の買い物) という造語を考案している。同文献は、利用者一人ひとりが商品となることから自己ブランディングが鍵を握ることや相手との対面時(商品が手元に届いたとき)に「思っていたものと違う」と感じててもそれは自己責任であることを示唆している。これらのことから、自分の良さを上手に発信できる人は多くの異性から「いいね!」を受け取ることができる一方、そうでなければ「いいね!」が全くもらえず一人の異性と会話することもできないままアプリを退会するような人があることは容易に想像できる。実際にマッチングアプリを見ても一部の人気会員にばかり「いいね!」が集まっており、その人たちにばかり注目が集まってしまっているのが現実である。

これまで恋愛や結婚は「個人的な問題」としてないがしろにされてきた節がある。しかし、「今日のように『自由な』恋愛や結婚が許される社会において、魅力の低い人びとが恋愛や結婚をしていくのは難し(く)」(田中、2011、p. 73)、異性と出会えず悩む人や

自分を上手にアピールできず悩む人がいることから、その悩みを解決する学術的知見を探究することは大いに意義がある。とりわけ今日の日本で恋愛について考えた場合、「コミュニケーション能力」が大きな鍵を握ることが示唆されたことから日本人の恋愛をコミュニケーション学の観点から調査を進めていくことは大きな意味を持つと言えるだろう。これらのことを踏まえ、本論文のトピックを「日本人の恋愛」とする。

1.3. 西洋中心主義コミュニケーション学からの脱却

「コミュニケーション」とは英語の *communication* をそのままカタカナ表記で使用していることから起源が西洋にあることは想像に難くない。初のコミュニケーション学会（現在の日本コミュニケーション学会）が設立されて体系的なコミュニケーション研究が始まったのが今から約 50 年前（1971 年）の日本と比べ、西洋のコミュニケーション研究の歴史は古代ギリシャ時代にまでさかのぼる（Braithwaite & Baxter, 2008）。その歴史の長さから西洋発祥の概念・理論・モデルは数多く存在し、西洋以外の文化圏でも無意識もしくは無条件に西洋起源のものが起用される傾向がある。換言すれば、西洋人（主に欧米人）のコミュニケーション体系が世界中のコミュニケーション代表かのように取り扱われることがコミュニケーション学の領域では暗黙の了解となってきたことを意味する（Miike, 2017）。

「メッセージのやりとり」というコミュニケーションの表面的な部分だけを見れば、西洋で開発された「ものさし」で他の文化のコミュニケーションを調査することも問題ないように思えるかもしれない。しかし、コミュニケーションと切っても切り離せない関係にある文化的背景を度外視することは時に大きな誤解を招く。例えば、調和に重きを置く日本社会では周囲に合わせて自分の考えを柔軟に変えることは良いこととして捉えられるが、個の一貫性を重視する西洋人には「意思の弱い民族」として映ってしまう（Tezuka, 1992）。日本人が会議や交渉を円滑に進めるために意見や情報を事前に共有する戦略（「根回し」）さえも西洋の人間からすると「共謀」と捉えられてしまう可能性が示唆されている（Saito, 1982）。このことは特定の文化圏ではコミュニケーション能力が高いとされる人でも、ひとたび西洋のものさしで測定されれば能力が低い人になってしまう可能性を示唆する。

北山・唐澤（1995）が主張するように、推論や思考、動機づけといった「高次の心理

プロセスの多くは、人がある文化、社会環境に能動的に適応しようと努めるその結果生体内に成立していくもの」(p.135)である。それにもかかわらず、あらゆる文化を十把一絡げに西洋的観点から捉えようとする非論理的考察につながる危険性を伴う(Miike, 2017; 宮原、2011b)。

この問題に対し、近年では非西洋文化の視点を積極的に取り入れる試みが進められている。中でもアジア研究を専門とする三池(2019)はアジアの言語、宗教・哲学、歴史そして美学を研究の中核とする「アジア中心性(Asiacentricity)」を推進しており、「多様なアジアの伝統を理論的資源として蘇らせ更に活性化させなければならない」と主張する。このとき、アジア中心性が目指すのはアジアを世界の中心に位置させることではなく、アジア人のコミュニケーション行動をアジア人の視点から観察した上で理論化することである(Miike, 2018; 2019)。すなわち、アジア中心性とはこれまで研究の縁に追いやられていた自国の文化を中心に据えて自国独自のものさしを開発することの重要性を訴えた概念なのである。

なお、過去の研究で日本人に焦点を当てたものがなかったかというそうではない。既存の日本人研究を概観すると、自分と相手との間に自己アイデンティティを見出して相手との間柄に合わせて自身の態度を変えたり(北山・唐澤、1995; 浜口、1977; 1982)、タテのつながりを意識して年功序列や先輩・後輩意識を強く持ったり(中根、1967; 2019)、相手との感情的つながりを尊重して直接的表現を避けて婉曲的に自分の考えを示したり(Okabe, 1983)、話し手が遠慮気味に発したことばを聴き手が察してことばに隠された意味を補ったりする(Ishii, 1984)日本人の特徴が示されている。このような日本人特有のコミュニケーションスタイルは自分の中に核となるアイデンティティを確立させ、ウラオモテない一貫した主張を最良のコミュニケーションと捉える西洋人からすると奇妙に感じられるかもしれない。しかし、Watanabe(2018)が主張するように他者への配慮やことばの裏に隠された暗示的意味を読み解く力を大切にする教えを子どもころから受けている日本人にとっては至極あたりまえの価値観として共有されているのである。

このように自国の視点を中心に据えてコミュニケーションのあり方を俯瞰することで西洋中心の視点からでは見えてこない結論を導き出すことができる。問題は日本国内のコミュニケーション研究は依然として西洋起源の概念・理論に依存している傾向にあり、「『日本人研究者による、日本人を対象とした』対人コミュニケーション理論や概念構築の試み」(中西、2011、p.23)が喫緊の課題として長年掲げられ続けていることにある。

これらのことを踏まえ、本論文では日本人である筆者が日本人を対象に調査を進めることで日本のコミュニケーション研究の発展を促進させることをひとつの目標とする。谷本（2008）が主張するように「恋愛」も文化の影響を強く受けていることから「日本人の恋愛」という社会的状況を特定の間関係の場と捉え、彼（女）らのコミュニケーションのあり方を探ることで日本人特有のコミュニケーションスタイルの可視化につながる知見の習得が期待できる。本論文の調査を通じて、既存の日本コミュニケーション研究（対人、組織、医療、異文化、家庭など）では見えてこなかった点から日本人のコミュニケーションのあり方を探っていきたい。

1.4. 実学志向のコミュニケーション研究を目指して

いかなる分野においても学術研究を進める上では「学問的意義」に加え「社会的意義」を示すことが求められる（中西、2011）。前者の「学問的意義」は先行研究に基づく学問的知見の蓄積と発展を指し、先に挙げた日本人研究者による日本人を対象とした研究の促進がこれに当たる。後者の「社会的意義」は研究成果による社会的還元を指し、社会が抱える課題解決につながる知見の提供を意味する。つまり、学術研究とは机上の空論に留まらない理論・概念を提唱して「人びとに正しい理解を促進し、人びとを啓蒙し、さらには、日常の対人関係の問題解決のヒントを与える」（中西、2011、p.21）ことが求められる。とりわけ「実学的な色合いが非常に濃い学問領域」（中西、2011、p.132）にあるコミュニケーション学は実社会との結びつきを意識した研究が推進される（松永、2013）。

他者と共に生きる私たちの日常がコミュニケーションと密接な関係を持つことは言うまでもない。人間社会を生きる人間はもれなく全員「コミュニケーター」としての役割を担い、日々「コミュニケーション」を体験する。ある意味コミュニケーションは私たちが生活する現実社会を構築する基礎であり、コミュニケーションなしの生活は考えられない。このような背景の下、人は他者との関わり合いの中で生じる悩みを解消する知見を求めるようになる。学術的研究とは、そのような人びとの悩みを解決する糸口となる示唆を提供できる研究を達成して初めて社会的意義を果たすこととなる。

コミュニケーション学の実学志向性を明確に提言した Robert T. Craig（1999）は、当学問のアイデンティティが定まっていなかったところに「既存するコミュニケーション理論はすべて私たちの日常的言動に基づく」という点からコミュニケーション学を実学性

の高さと結びつけた。日本コミュニケーション研究の実学志向性を推進する松永(2013)もコミュニケーション研究の理想は「現実社会の中で発生しているコミュニケーション上の課題に対して、解決の糸口となる理論や知見を提供する」こと (p.132) だと述べている。これらのことを踏まえ、本論文では「恋愛」にまつわる人びとの悩みを解決する糸口となる知見の提供を一つの目標に、実学志向的研究を心がける。

1.5. 期待される研究成果

本論文では上述した二つの意義（「学問的意義」、「社会的意義」）に則って、これまで学術的議論としてあまり取り上げられてこなかった「日本的恋愛コミュニケーション」、中でも異性間の恋愛に焦点を当てて研究を進める。今回調査対象を異性間に限定するのは多様なセクシュアリティが存在することを承知の上で一度の研究ですべてを扱うことは難しいと判断したためである。なお、本テーマを取り上げることで期待される成果は大きく分けて以下の3つが挙げられる。

まず、恋愛コミュニケーションの研究はコミュニケーションの他の領域（例：対人、組織、異文化、家族、医療など）と同様に欧米主導であることから「日本的恋愛コミュニケーション」に特化して問題点と枠組みを示すことは今後の日本文化の特徴を取り入れたコミュニケーション研究の足がかりになると期待される。「恋愛」というと「誰かを好きになることは文化問わず人間の本能だろう」と思われるかもしれないが、実際にどのような感情・事態・行動を「恋愛」と呼ぶかは文化的規範に左右され、その実態は文化によって大きく異なる (Metts, 2006 ; 谷本, 2008)。その上で、菅野 (2001) の言うように「恋愛は『個人のもの』だが、いかなる個人もその属する社会との関わりのなかで、思考し行動する」(p.219) と考えるならば、個々人の恋愛コミュニケーション行動を調査することで日本特有のコミュニケーション行動に関する知見を深められると考えられる。

次に、恋愛コミュニケーション研究を進めて現代の日本人の恋愛コミュニケーションの実態を可視化することは恋愛コミュニケーションにまつわる人びとの悩みを解消する知見の提供につながると期待される。上述したように現代の日本では個々人の積極性とコミュニケーション能力が「恋愛成就」の鍵を握ると言われている (田中, 2011)。なお、以前の日本のように出会いを提供してくれる仲人がいない現代では「異性との出会いの場所がわからない」、「どのように声をかけたらよいかわからない」、「恋愛交際の進め方

がわからない」といった悩みを抱えている人が多く存在することが内閣府（2017）の調査でも示されている。これらのことから、日本人の恋愛コミュニケーションのあり方を探ると共に課題を可視化し、机上の空論に留まらない実社会に還元される研究を推し進めることは実学志向のコミュニケーション研究の促進にもつながると考えられる。

最後に、これまで文学・心理学・社会学に偏っていた国内の恋愛研究をコミュニケーション学の観点から調査することで「日本人の恋愛」にまつわる新たな側面を発見できると期待される。ここでいう「コミュニケーション」とは多くの人が考える「話し方」や「ふれ合い」といった表面的概念ではなく、「二人の人間関係を作り上げる土台となる」コミュニケーションを意味する。すなわち、本論文で取り扱うのは「恋愛という状況で異性からモテる話し方や身の振る舞い方」といった内容ではなく、「二人の男女を『付き合い関係』に導く過程としてのコミュニケーション」である。2.6.で詳述するが、いかなる人間関係も人と人がコミュニケーションを重ねた結果生じる「コミュニケーションの産物」であり、人間関係を調査する上で特定の感情や関係が生起するまでの「過程」に着目することは大きな意義を持つ（Cappella, 1988）。一方で、既存の恋愛研究は「恋愛感情／関係の生起・維持・終焉」など、コミュニケーションの「結果」にばかり焦点を置いている傾向にある。そこで、本論文では二人の相互作用の「過程」に焦点を置くコミュニケーション学の観点から恋愛を紐解き、既存の研究からは見えてこなかった恋愛の側面を見出すことを期待する。

1.6. 「コミュニケーション」とは何か

そもそも「コミュニケーション」とは何か。定義はさまざまだが本論文では「言語・非言語のシンボルを介して意味共有を行う過程」（Galvin & Wilkinson, 2011, p.6）とする。

まず、私たち人間は「シンボル」を使って他者と意思疎通を図るという点で他の動物と大きく異なる。ここで言う「シンボル」とは人や物、場所といった目に見えるものから感情や考え方といった目に見えないものまでを「象徴するもの」である。人はシンボルをコミュニケーションの道具として使うことによって他者と意見交換したり、感情を伝え合ったり、自分の中で考えを巡らせたりすることができる。シンボルは大きく分けて「言語」（話し言葉、書き言葉）と「非言語」（表情、声のトーン、アイコンタクト、ジェスチャー、姿勢、見た目、身体的距離感など）の2種類あり、人はそのときの文脈や相手

との関係に合わせてシンボルを選択し、コミュニケーションに従事する。例えば、Bさんに恋心を抱くAさんが自分の想いを伝えようと考えたとき、Aさんは「好きです」と自身の感情をことばにしたり、Bさんの目をじっと見つめたり、Bさんが困っているときに助けるといった言動を取ることが予想される。これら全ての言動はAさんにとって「好意を象徴するもの」であり、シンボルである。BさんはこのAさんの言動（シンボル）から「Aさんは自分のことが好きなんだ」と認識することもあれば「Aさんはとても親切な人だ」とAさんが意図したものと違った解釈をすることもある。人は子どものころから周囲の人間と関わり合う中でシンボルの活用法を無意識に学び、メッセージの送り手となれば無限の選択肢の中から自分の意図を相手に伝えるのに最適だと考えられるシンボルを選択し、受け手となれば相手から送られたシンボルに自分なりの解釈を加えて相手の意図を読み取ろうとする。

注意すべきは使われるシンボルそのものには初めから意味は備わっておらず、私たち人間がコミュニケーションの中で恣意的に意味を付与していることにある。なぜなら、全く同じシンボルでも「誰が」「誰に」「いつ」「どのような場面」で使うかによって意味が変化し、一方が意図した意味が他方に正確に伝わらない可能性も大いに考えられるからである。例えば、上の例でBさんが「Aさんはとても親切な人だ」と解釈したならば、Aさんの本意は伝わっていないことになる。他にも、AさんがBさんに「付き合っ」と言ったとする。メッセージの送り手であるAさんがこのことば（シンボル）に「恋人になってほしい」という意味を込めたとしてもBさんが「付き合う」を「行動を共にすること」と捉えれば「どこに行きたいの？」と的はずれな返答をしてしまうかもしれない。このような認識の相違は双方が同じシンボル（「付き合ってください」という発言）に異なる意味を付与したために生じるものである。おおよそ似たような解釈に至ったとしても、個々人の過去の経験によって細かいニュアンスにはズレが生じる。

そんな恣意的特徴を持つシンボルを使って人びとは「意味共有」を最終目的に掲げ、コミュニケーションに従事する。コミュニケーション（communication）ということばは元々ラテン語で「共有」を意味する *communis* から派生したものであり、「意味共有」がコミュニケーションの中心概念だと捉えることができる。例で考えるならばAさんは自分の意図した内容がBさんに伝わっていないことに気づいて『恋人』として『付き合っ』ってことだよ」とことばを重ねるかもしれない。そうすることでAさんとBさんの間で「Aさんは恋人としての交際を申し込んでいる」という意味が共有される。

なお、「コミュニケーション」というと「送り手」と「受け手」の2つに役割が分断される傾向にあるが実際のコミュニケーションはトランザクショナルモデル（図 1-1）でも示されているように二人のコミュニケーターがいて、双方がコミュニケーションに従事する中で両者の間に意味が共有ないし構築されることから各々の役割を固定することは非常に困難になる。

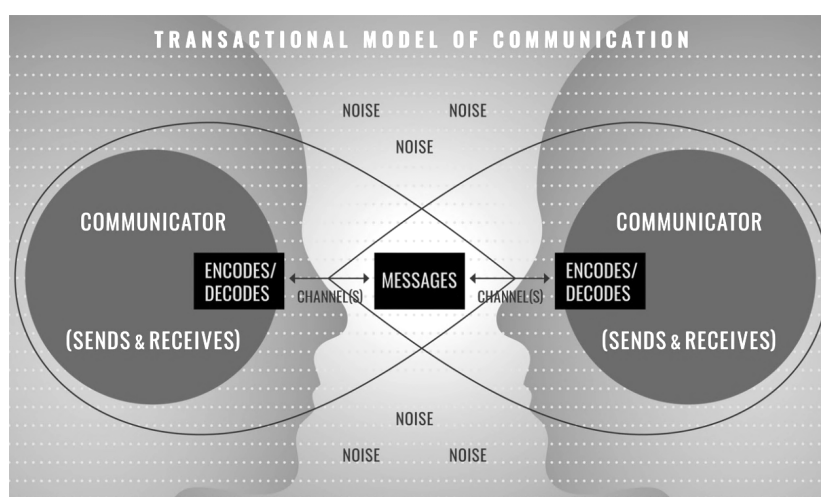


図 1-1 Transactional Model

出典：National Communication Association. (n.d.). What is communication? <https://www.natcom.org/about-nca/what-communication> (2020年9月8日最終閲覧).

また、「コミュニケーション」というと「あのときの彼のあの発言は…」と特定の場面を切り取って言及されがちだが、実際のコミュニケーションは写真のように静的なものでなく、映像のように動的なものである。二人の人間がシンボルを介して意味を構築・共有する過程はまさしく継続的プロセスであり、ゆえにコミュニケーション学はコミュニケーションそのものを「過程」と見なす。また、コミュニケーションの動的特徴を念頭に一つひとつの人間関係に着目してみると特定の関係は二人が出会った瞬間から始まり、その後の相互交流によってその二人にしか創れないオリジナルな関係が発展されることがわかる。二人は、やり取りを通して自分たちのコミュニケーションパターンを構築し、そのパターンに従ってシンボルのやり取りを交わしていく。たとえ前回の交流から長い時間が経っていても二人の関係は過去のコミュニケーションが土台となるため、二人の過去を無視して二人の関係を深く理解することはできない。なお、二人の関係は相互交流の積み重ねによって日々更新されるため、映像と同じようにどこを切り取っても二つとして全く同じ形になることはない。これらのことからコミュニケーション学では「過

程」が大きな意味を持つこととなる。

本論文ではこの「言語・非言語のシンボルを介して意味共有を行う過程」というコミュニケーションの定義の下、男女二人の恋愛コミュニケーションプロセスに焦点を当てて調査を進めていく。中でも交際相手との出会いが少なく、出会えてもコミュニケーション能力不足で交際に至ることができないと悩む男女が多いことから二人の男女が出会ってから「付き合う関係」に至るまでのコミュニケーションプロセスに焦点を当てて調査を進めていく。

第2章 「恋愛」にまつわる先行研究概観

コミュニケーション学の観点から日本人の恋愛を分析した研究は少ないが、ひとたび他の分野に目を向けると文学、心理学、社会学など、さまざまな分野の専門家たちが「恋愛」をテーマに議論を重ねてきたことに気づく。

2.1. 「恋愛」ということばの起源と変遷

「恋愛」:「特定の異性に特別の愛情をいただき、高揚した気分で、二人だけで一緒にいたい、精神的な体験を分かち合いたい、出来るなら肉体的な一体感も得たいと願いながら、常にはかなえられないで、やるせない思いに駆られたり、まれにかなえられて歓喜したりする状態に身を置くこと」(『新解明国語辞典』第5版、1997)

「恋愛」:「特定の異性に対して他の全てを犠牲にしても悔いが無いと思いつむような愛情をいただき、常に相手のことを思っては、二人だけでいたい、二人だけの世界を分かち合いたいと願い、それがかなえられたと言っては喜び、ちょっとでも疑念が生じれば不安になるといった状態に身を置くこと」(『新解明国語辞典』第7版、2011)

「恋愛映画」、「恋愛小説」、「恋愛関係」、「恋愛結婚」など「恋愛」ということばは日常の至るところで使われる。生まれも育ちも日本で「恋愛」という単語を耳にしたことがないという人はいないだろう。一方で、『恋愛』ということばが指すものがなにか」と問われて瞬時に答えられる人はどれほどいるだろうか。

『広辞苑』(第6版;2008)で「恋愛」を引くと「男女が互いに相手をこいしたうこと。また、その感情。こい」と簡潔に記されている。冒頭で引用した『新解明国語辞典』(第5・7版)には少々具体的に記されているが本来「恋愛」とは抽象的概念であるため辞書の説明でさえも曖昧さが残るように感じられる。なおも辞書の定義を参考にするならば、おおよそ「二人の人間が(今回取り上げた2つの辞書では「男女」に限定されているが)互いを思い合うこと」を「恋愛」と呼ぶのだと考えられる。一方で、同じ『新解明国語辞典』でも第5版(1997)と第7版(2011)の定義を見比べると14年間で内容が変わっ

ていることに気づく。それだけ「恋愛」は定義することが難しいとも考えられる。では、そもそも日々何気なく使われている「恋愛」ということばやその概念はどこで生じ、どのような変遷を経て今ある形にたどり着いたのだろうか。

今日私たちが当たり前のように使っている「恋愛」ということばは1870年代に西洋語の love や amour の翻訳語として新しく考案されたもので、それ以前の日本に「恋愛」ということばはおろか、その概念すら存在しなかったという定説がある（柳父、1982）。当時の小説を題材に日本人の love 概念の受容を検証した佐伯（1999）は「明治という新しい時代にあって、男と女の関係もまた、新しい時代にふさわしいものが追い求められたが、その理想は従来の日本語で男女の好意を表現していた『色』や『恋』や『情』といった表現ではなく、西洋のハイカラな魅力に満ちた『ラブ』の翻訳語である『愛』『恋愛』という新しい言葉に託された」と考察しており、近代以前の「色」、「恋」、「情」と呼ばれる肉体関係を伴う男女関係を下劣なもの、近代以降の精神的つながりを重視する「愛」、「恋愛」を高尚なものとしてきっぱり二分化している。この柳父や佐伯の主張に従えば「恋愛」ということばないし概念はそれまでの男女関係を指す「色」、「恋」、「情」に取って代わるものとして西洋から入り込んできた「輸入品」だったということになる。

一方で、ことばが創られる以前の日本にも恋愛そのものは存在したと「恋愛輸入品説」を強く否定する声も多くある（小谷野、1997；2005；2010；菅野、2001；宮野、2014）。恋愛輸入品説否定派の彼（女）らは近代以前の日本にもたったひとりの人を想って命を絶つほどの「真摯な男女の恋情」（菅野、2001、p.36）が確かにあったと主張している。その上で「いまだ江戸の儒教的価値観の根強かった明治において、『恋愛』という新しい概念がきわめて大きなインパクトを持ったことは間違いなく、江戸時代との比較で考えるなら、やはり近代の『恋愛』は、それまでと違う特徴を備えていたと言えるだろう」（宮野、2014、p.119）と述べている。つまり、彼（女）らの主張は西洋的恋愛観の導入によってもたらされたのは「恋愛」という概念そのものではなく、それまで日本で共有されていた恋愛の定義の塗り替えだったということになる。

歴史的背景に目を向けると「恋愛」ということばと西洋的恋愛観の普及は明治～大正期の知識人およびキリスト教徒によって進められたことがわかる。例えば明治期に活躍した評論家／詩人の北村透谷は『厭世詩家と女性』で「恋愛は人生の秘鑰（ひやく；秘密を解く鍵のこと）なり」（1970、p.81）とインパクトあることばで世に恋愛の素晴らしさを訴えた。また、大正期に恋愛ブームを巻き起こした厨川白村は『近代の恋愛観』で恋愛

を「悠久永遠の生命の力がこもる」(1922、p.3)ものとし、「恋愛結婚論」(結婚ないし性は恋愛に基づくべきだという主張)の観点から当時主流だった愛のない見合い結婚を「売春結婚」だと非難した。

こうした知識人の語りを経て「愛」、「恋愛」ということばおよび西洋的恋愛観は高尚なものとして認識されるようになり、彼らの努力の甲斐あって恋愛の定義には「結婚は恋愛のうえになさなければならない」とする恋愛結婚イデオロギーと「恋愛は誰にでもできる、して当然」とする恋愛至上主義の2項目が追加された(小谷野、2005;菅野、2001)。なお、この価値観は現代にまで引き継がれており、今の日本で「結婚」と言えば「恋愛結婚」だと考える人が多く、映画やドラマをはじめとするメディアは「恋愛をするのはいいこと、当たり前のこと」(小谷野、1999、p.11)だと囁き続けている。近年、「若者の恋愛離れ」がメディアなどで度々取り上げられることも「恋愛はすべきものである」という考えが日本人の中で根付いているからではないかと考えられる。

2.2. 「恋愛」と「結婚」の結びつき

今日の日本では「未婚者の男女が出会い交際関係が成立して、一定の交際期間を経た後に婚姻関係を結ぶ」(茂木・石田、2016、p.45)恋愛結婚が主流となっており、「親や親戚、上司、さらには見合い斡旋業者の紹介に基づいて行われる」(山田、2019、p.10)見合い結婚は一昔前の結婚体系だと考える人が多い。現代の日本はすっかり『恋愛結婚』の時代」(加藤、2004、p.11)にあり、「好きな人同士で結婚する」という風潮が当たり前になっている。しかし、歴史を振り返ると恋愛と結婚の結びつきが今ほど強くなったのは高度経済成長期以降と比較的最近のことであることが読み取れる。

日本も結婚制度が整っていなかった平安にまで時代を遡ると誰しもが自由に結婚相手を選択することができ、男女の関係は比較的平等だったことを知る。平安といえば恋愛や性に対しておおらかな時代で夫が妻の家に会いに行く通い婚が通例だったことから「心のおもむくままに恋愛を楽しむこと」が可能だった(菅野、2001、p.37)。しかし、鎌倉時代に入ると権力を最重要視する武士たちの間で政略結婚が流行し、男女が自らの恋愛感情で結婚相手を選ぶことは許されなくなった。血統の重要性から女性の姦通は重罪とみなされ、「女性の自由恋愛は『家』の存続に反するため禁じられ」、当時の女性は「結婚の道具」と化してしまった(菅野、2001、p.38)。一方で、誰と結婚しても大きな

差が見られない庶民の間では自由恋愛に基づいた結婚が続けられた。農村社会では労働力が重視され、子孫繁栄が推進されていたことから男性が女性の家を訪問する「夜這い」が推奨され、女性の処女性もさほど重視されることはなかった（赤松、2004）。

しかし、そんな庶民の結婚も徐々に家父長制に取り込まれ、「個人の意思よりも家の都合が優先」されるようになり、子の結婚は親が仕切るようになった（菅野、2001、p.41）。恋愛と結婚が切り離されるようになった当時は結婚した夫婦の間に愛があるとは限らず、上流階級を中心に男性が妻の他に妾を囲い、遊郭に出かけて一時の色事を楽しむことも珍しくなかった（宮野、2014）。子孫繁栄に重きが置かれていた明治初期には「一人の男性が妻と妾という複数の女性を抱え込む『妻妾（ちくしょう）制』」がはびこっており、明治3年に制定された「新律綱領」では妾が法的に妻と同等の権利を持つと定められていたほどであった（加藤、2004、p.63）。宮野（2016）の言うように「どこまでも女性は『家のため（見合い結婚）』あるいは『男のため（遊郭）』の道具であって、女性自身の意思が尊重されることは少な（く）」（p.183）、男女間の不平等性はかつてないほど高まっていた。このような時代においては小谷野（1999）の主張するように「男女が相思相愛に陥って激しい恋愛感情を抱き合う、などということは、選ばれた人間、特別恵まれた人間にしか訪れないものだ」と考える人が多かったにちがいない（p.11）。

そんな儒教的男尊女卑の思想が蔓延する日本で「このままではいけない」と立ち上がったのは欧州列強に躍起に追いつこうとした知識人ないしキリスト教徒たちであった。中でも「隣人愛」を根本的倫理に持つキリスト教徒たちにとっては「生活の中でもっとも身近にいる夫婦でさえ、その平等が達成されていないというのはゆゆしき事態」（宮野、2016、p.183）であり、解決すべき課題であった。どうにか欧州に近付こうとした彼らが一番に目指したのは一夫多妻制の撤廃および一夫一婦制の確立であり、「恋愛結婚論」の価値化であった（宮野、2016）。ここで言う「恋愛結婚論」とは赤の他人同士である夫婦が互いを自分のことのように大切にするためには相手を慈しむ「恋愛」が不可欠だとする考え方である。

なお、明治は「個人化」が大きく進んだ時代でもあった。士農工商という身分制度によって人生の指標が身分によってあらかじめ決まっていた江戸時代以前から一変、明治に入ると新政府が「人びとに職業選択の自由と移動の自由、そして結婚の自由を与えた」（宮野、2014、p.141）。この変化は人びとに「何にでもなれる」という自由をもたらした一方で人びとから居場所を奪い、自分の力で自己アイデンティティを作り上げる義務

を課した（宮野、2014；山田、2019）。そんな中、当時の人びとが自己アイデンティティの確立を求めた結果「将来にわたってお互いに存在論的に承認し合う相手であり、親密性や恋愛感情、性的満足といった情緒的満足をも獲得し合う」行為として「恋愛結婚」が取り入れられたという見解もある（山田、2019、p.78）。

そんな時代に「恋愛結婚論」の普及に一役買った1人として『女学雑誌』の編集人、巖本善治が挙げられる。巖本は夫婦間の自由と平等は相互の自由意志に基づく恋愛があって初めて生じるものだと主張し、当時の「家のための結婚」を強く批判した（宮野、2016）。彼は「夫婦とその子ども、および父系の親族という血縁で結ばれた限られた空間」（加藤、2004、p.49）である家庭（ホーム）の重要性を説き、その中心となる夫婦が「赤の他人である相手を自分と同じくらいに大切にし、対等な人間同士として向かい合う」ためには「恋愛」が不可欠だと主張した（宮野、2016、p.184）。また、「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」（『学問のすゝめ』、1870）の一文で有名な福沢諭吉も日本の近代化を志して一夫一婦制を推奨し（加藤、2004；菅野、2001）、西洋文明に傾倒していた初代文部大臣の森有礼に至っては『妻妾論』なる論文の中で「伝統的な『女性が家に入る』という行為、そのような結婚観」を強く非難した（菊池、1981、p.50）。

このように結婚制度の改革を求める声が多く挙げられる中、明治13年（1880年）に妾は廃止され、明治31年（1898年）には「一夫一婦制」を採用した明治民法が施行された（加藤、2004）。キリスト教に影響を受けていた知識人たちは男女の肉体的つながりを重視するそれまでの日本的「色恋」を蔑視し、精神的つながりに重きを置く西洋的「恋愛」を崇拝するようになった。結果、「婚前交渉が公認されていた日本で、処女が崇拝や尊重の対象と認知されるように（なり）」（菅野、2001、p.44）、「好きな人と恋愛の果てに結婚し、結婚後にセックスをして子どもを授かる」という恋愛・結婚・性が三位一体となったロマンティック・ラブ・イデオロギーが日本でも確立された。

ここで注意すべきは明治知識人が掲げた一夫一婦制ないし恋愛結婚論の普及によって目指されたのは完全なる男女平等ではなく、理想的な家庭を作るための女性教育であり、彼らの訴えの土台には「賢母論」が根付いていた点にある（加藤、2004）。一見払拭されたかのように見えた一夫多妻の体制は戦後まで続き、女性の立場が男性と対等になることは叶わなかった（山田、2019）。さらに明治期は恋愛が高尚なものとして謳われはじめたに過ぎず、本当の意味で「空前絶後の恋愛論ブーム」が到来したのは大正期だと言われている（菅野、2001、p.22）。

大正期、恋愛論ブームの火付け役となったのは厨川白村の『近代の恋愛観』である。厨川は恋愛至上主義者の一人で「恋愛」がない夫婦は夫の稼ぎと引き換えに妻がセックスと家事を提供する奴隷関係にあるとし、反対に恋愛結婚した夫婦の間には「賃金労働も家事労働も優劣はなく、愛し合う二人が各自の適性に応じて分担するのだから、そこには強制も従属関係も存在しない」とした（菅野、2001、p.161）。この厨川の主張からも読み取れるように当時の知識人たちが「恋愛」に関する議論を通して求めたのは恋愛の自由とそれによる結婚の自由だった。ところが、大正期に多くの人びとが恋愛論を語った末にたどり着いたのは「多くの『べき論』の氾濫」と「恋愛は一生に一度であるはずだとか、破綻するような恋愛は『本物』ではないとか、本人の努力がたりない」といった「強迫観念」だった（菅野、2001、p.218）。つまり、現代にも依然として蔓延している「恋愛は誰にでもできる」という恋愛至上主義は明治～大正期の知識人たちの訴えから始まったと推測できる。

なお、一部の知識人の訴えも虚しく当事者の自由意志に基づく恋愛結婚がすぐ一般化することはなかった。日本では引き続き「イエの継承を第一の目的」とした取り決め婚が腰を据え（山田、2019、p.95）、現代のように完全に自由な配偶者選択による恋愛結婚が普及したのは戦後のことだった（桶川、2007）。大正期の見合い結婚は「①当人同士が十分に接触して互いの『人格』を理解し、それに基づき②当人たちの意思を十分尊重して最終決定を下す、という方向へと変化」し、広範な社会移動により結婚相手の選択肢が広がってはいたものの（大塚、2003、p.9）、若者たちは育ててくれた親への孝行心と自身の恋愛感情の間で揺れ動いた。当時の「讀賣新聞」の『身の上相談欄』に寄せられた投稿を分析した桑原（2017）は「当事者間で決めたとしても親への配慮を示すことが、親だけの決定でも当事者の関係性に配慮するような主体のあり方が、理想だとされていた」（p.133）ことを明らかにしている。

当時は愛に基づく結婚を理想に掲げていた『主婦の友』でさえ当人同士だけで結婚を決める「自由結婚」を推奨することはなかった（大塚、2003）。『主婦の友』を分析した大塚によると、この時代に人が「自由結婚」するには「男女交際に対する国家的・社会的な抑圧」（p.3）が強く、女性の純潔規範による自由交際の制限、広範囲な社会移動による結婚不履行や結婚詐欺の多発、未発達な医療による伝染病の危険性などの観点から当人たちだけで決める自由結婚はリスクが高すぎるとされ、保護者による一定の介入が続けられたという。この形態は昭和期に入っても変わることなく、世間は「衝撃的な恋愛を

批判し、恋愛には理性が必要であることを強調する声や、そうした理性的判断のためには両親の相談・承認を必要とする声」を挙げ続け、「監督者のもとでなされる男女交際」が理想的な関係として掲げられた（桶川、2007、p.99）。このように、明治期から戦前にかけての日本では一部の知識人が自由な恋愛結婚の高尚性を説く一方で庶民的な親と子はお互いの顔色をうかがい合いながら結婚相手の選定を行っていた。

戦後になってようやくイエ制度の象徴であった明治民法が改正され、結婚相手を選ぶ際の親や地域社会の影響力は徐々に弱まり、映画やテレビドラマの普及、さらに当時の皇太子殿下と皇后陛下の周りの反対を押し切った結婚がきっかけとなって「恋愛結婚」は一般市民の間でも普及することとなった（山田、2019）。この頃から徐々に「見合い」のあり方も変化し、交際を始めたあとでも交際を取り止めることが許されるようになり、「たとえ見合い結婚でも『自分が選んだ相手と結婚したんだ』」と考える人の割合が高くなった（山田、2019、p.108）。

徐々に見合い結婚と恋愛結婚の境目が曖昧になる中、1960年代後半に「恋愛結婚」が「見合い結婚」の割合を上回った（国立社会保障・人口問題研究所、2015）。この頃には戦前まで続いた一夫多妻の慣習も衰退し、日本でも「好きな人と結婚する」という考えが定着し、恋愛と結婚の強い結びつきが生じた。当時はサラリーマンが急増し、多くの若者が都会へ移動して地元とのつながりが希薄化し始めた時期だったため（牛窪、2015）、結婚の主体は地元で執り行われていた「見合い」から仕事を通じて相手と知り合う「縁縁結婚」へと移行していった（岩澤、2013）。仕事を通じての出会いは、交際前に互いの性格やおおよその収入を把握できたことから交際後に後悔することも少なく、人びとは順調に関係を重ねることができた（山田、2019）。なお、当時の人は「付きあったら結婚するのが当然」（山田、2019、p.119）という認識を強く持っていたことから現代のように「性格が合わない」といった理由だけで別れることは世間的に許されなかった。また、「恋愛」の先に「結婚」があると想定されていたため結婚相手としてふさわしい相手に抱く感情こそが恋愛感情だと考えられ（谷本、2008）、「良い恋愛」は最終地点に「結婚」というゴールが定められている恋愛に限定されていた。

現代になると、この価値観も弱体化して結婚に結びつかない交際行動も若者の間では「恋愛」として認識されるようになってきている（大森、2014）。ただ、結婚に結びつかない恋愛は受容されるようになって「恋愛」と「結婚」の結びつきは依然として強いままである。谷本・渡邊（2016）によると、現代は「恋愛したら結婚しなければならない」（p.67）

というプレッシャーが弱まっている一方で「恋愛感情のない結婚は正しくないもの」(p.66)という新たな規範が根付いているという。つまり、現代になってようやく明治期の知識人たちが主張していた「恋愛ありきの結婚」が人びとの間で普遍的価値観として根付くことになったのである。

ちなみに「結婚に恋愛感情は不可欠である」という考えは20～30代の約75%が賛同しており、近年は見合い結婚でさえも恋愛感情が不可欠だと考えられている(小澤・山田、2010; 小林・大崎・川端・渡邊、2017)。首都圏に暮らす未婚女性にインタビュー調査を行った府中(2016)は、互いに愛情を持った相手との結婚を求める言説や生涯共に過ごしたいと思える相手との結婚を望む声を多く取り上げて恋愛感情の無い結婚には否定的な考えを持つ人が多いと示した。府中は「インタビュー協力者の語りからは、恋愛感情に基づく結婚が明確に想定されている。ここでの恋愛は、一生続くような恋愛が理想とされている」(p.48)とし、現代の日本で人びとが結婚において恋愛感情を重要視している実態を明らかにしている。

以上の先行研究概観から今や当たり前となった「恋愛結婚」も今の形に落ち着くまでに長い歴史を経てきたことが分かる。現代の日本の恋愛市場はすっかり自由化しており、身分に縛られない恋愛を謳歌することができるため、「好きな人と結婚する」という想いを胸に交際相手を探す人も少なくないだろう。しかし、「好きな人と結婚する」ためには好きな人と出会う必要がある。その「出会い」が時代背景の変化とともに大きな課題となっている。

2.3. 「出会いの経路」の縮小

かつて皆婚社会にあった日本の婚姻率を支えていたのは「見合い制度や職場の緊密な人間関係といった高度経済成長期型マッチメイキングシステム」だった(岩澤、2013、p.4)。当時は交際経験がなくても一定の年齢になれば周囲の大人が自分に見合う結婚相手を紹介してくれる、もしくは自分と同じ職場で働く異性との「自然な出会い」を通して結婚できるシステムが確立していた(岩澤、2010; 岩澤・三田、2005; 国立社会保障・人口問題研究所、2015)。よく使われていた「腰掛けOL」といったことばからも会社が集団お見合いのような場所を兼ねていたことがうかがえる。当時は性別役割分業の認識が今より強く、結婚が決まれば女性は退職して家事育児に励み、男性は終身雇用・年功序列制度の下で家族を養うことが期待された。なお、見合いや職場

で交際相手との出会いが無くても「未婚の男女が全国的にあふれ(中略)若者たちは、だいたいまれなく組織化されていた」(山田、2019、p.117)ことから異性との出会いに困ることは今と比べて少なかった。当時は正規雇用率の割合も高く、結婚した後の安定した生活を容易に想像できたことも人びとの交際を後押ししたと考えられる。さらに同じ組織内で出会った相手なら相手の性格を交際前の段階で見極めることができたため、性格の不一致等で破局するといったことも滅多に起きなかったのだろう。

しかし、1960年代には恋愛結婚の割合が見合い結婚の割合を上回り、バブル崩壊後は上の世代が下の世代の結婚の面倒を見ることは「個人の自由の侵害」(加藤、2004、p.24)だと自粛されるようになった。終身雇用制度の崩壊や女性の社会進出から性別役割分業意識も弱まり、非正規雇用者増加や転職率の上昇も伴って社内で結婚を意識した親密な関係を築く人の数は減少し、マッチメイキングシステムは機能しなくなった。岩澤・三田(2005)は「1970年代以降の初婚率の低下は、ほぼ5割が見合い結婚の減少によって、そして4割近くが職縁結婚の減少によって説明すること(ができる)」(p.26)としている。このような背景の下、現代未婚者男女の多くが出会いの経路の縮小によって「(異性との)出会いがない」ことが原因で交際相手ができないと主張する結果となっている(内閣府、2014)。

2.4. 「出会いの経路」にたどり着く人びと

上述のとおり、現代の日本では交際につながる出会いの経路が以前と比べて狭まっている。では、そんな現代で、どのような場所でどんな人たちが交際相手と巡り会えているのだろうか。2015年に実施された『第15回出生動向基本調査』(国立社会保障・人口問題研究所)によると未婚者男女で異性の交際相手(婚約者、異性の恋人・友人)がいると回答した人は上から順に「学校で」(男性27.7%、女性23.7%)、「友人・兄弟姉妹を通じて」(男性20.6%、女性20.9%)、「職場や仕事で」(男性18.6%、女性21.5%)がきっかけで相手と出会ったと回答している(図表2-1参照)。このことは、多くの未婚者がこれら3つの場のいずれかで異性の交際相手と出会っていることを意味する。

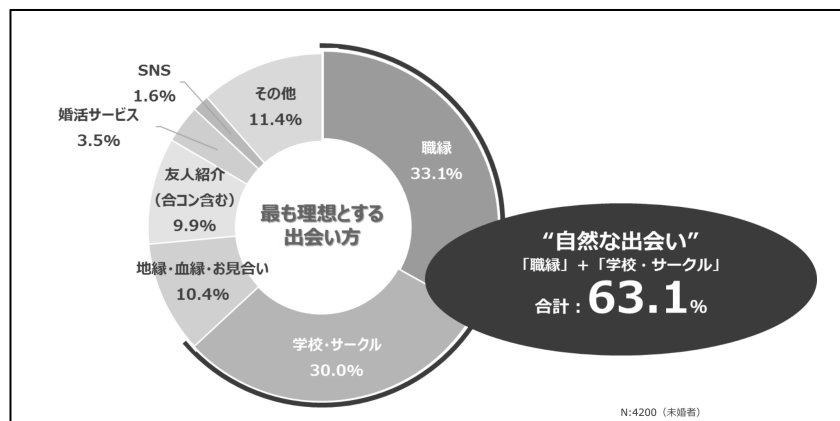
近年ではマッチングアプリや街コンなど企業サービスを利用して自律的に交際相手と出会うことも可能だが、未だに多くの人々が「職縁」や「学校・サークル」など日常の中で交際相手と出会う、いわゆる「自然な出会い」を理想としている(リクルートブライダル総研2017、図表2-2参照)。つまり、多くの日本人にとっては自身が所属する組織内で

の異性と出会うことが一種の「あたりまえ」になっているのである。

総数 (客体数)		職場や 仕事で	友人・ 兄弟姉妹 を通じて	学校で	街なかや 旅先で	サークル クラブ 習いごと で	アルバイト で	幼なじみ 隣人	見合いで	結婚相談 所で	その他	不詳
未婚 男性	100.0% (735)	18.5%	20.7	27.8	5.0	6.3	5.4	2.6	0.7	0.4	5.2	7.5
未婚 女性	100.0% (975)	21.5	20.9	23.7	3.5	7.2	6.7	1.8	0.4	0.5	6.3	7.5

図表 2-1 未婚者が現在の交際相手と出会ったきっかけの構成 (2015 年)

国立社会保障・人口問題研究所 (2015). 「第 15 回出生動向基本調査 (結婚と出産に関する全国調査)」を元に作成.



図表 2-2 最も理想とする出会い方 (リクルートブライダル総研、2017)

出典：リクルートブライダル総研 (2017). 『『自然な出会い』は本当に幸せになれるのか -恋愛困難時代を乗り越える『自律的出会い』の提言-』.

そんな中、中村・佐藤 (2010) は 20 代未婚者男女を対象に出会いの経路にたどり着く人はどのような特徴を有するか調査を行っている。その結果、①男性についてのみ収入が高い人ほど恋人がおり、男女ともに非正規雇用の人には恋人がいない傾向にあること、②男性についてのみ「職場内に独身の異性が多い」と回答した人の方が「職場内に独身の異性がほとんどいない」と回答した人より恋人がいる傾向にあること、そして③男性についてのみ「(同性異性問わず) 友人つきあい」を定期的に行っている人の方が「ほとんどしない」人よりも恋人がいる傾向にあったことが明らかとなった。最後の友人つきあいに関してはリクルートブライダル総研 (2020) の調査結果でも「恋人がいる人は恋人

がない人よりも『同性の友人』が 1.68 倍、『異性の友人』が 1.8 倍、『インターネットのみでつながっている友人（同性異性問わない）』が 1.9 倍と友人の数が多」（p.8）となっている。このことに関して中村・佐藤（2010）は同性異性関係なく友人と交流することは恋愛にも求められる「他者とのコミュニケーション能力」の向上に繋がるのではないかと示唆している。また、「友人・兄弟姉妹を通じて」交際相手と出会っている人が増加していること（国立社会保障・人口問題研究所、2015）も考慮すれば、恋愛を抜きにした他者との交流によって出会いの経路を拡張させることが可能だと考えられる。

これらの調査から分かることは、とりわけ男性においては経済的余裕があり、職場内で異性との関わりが多く、友人つきあいがあれば恋人と出会える可能性が高まる一方、そうでなければ恋人との出会いの経路は非常に限られるということである。現代の日本は非正規雇用率ないし転職率も上昇傾向にあり、職場での出会いも減少している中で、日常の中で交際につながる出会いに遭遇する可能性が急激に低下していると予測できる。なお、出会いの経路が狭いことを見越して積極的に行動を起こしてまで恋人を求める人は多くない。西村（2014）によると恋人がいない且つ欲しいと思っても約半数の人は恋人と出会うための行動をしていないという。つまり、出会いの経路縮小が進む現代でも「自然な出会い」を待ちわびて積極的に恋人候補を探そうとする人はおらず、「(自然な) 出会いの場所がない」と主張する若者が多いのが日本の実態であることが分かる。

2.5. 「恋愛」の嗜好品化と多様化

恋愛の自由化が進む現代では「そもそも恋愛市場に参加しない」という選択肢があり、若者の間で「恋愛」はあってもなくてもよい「嗜好品」になっていると牛窪（2015）は主張する。事実、内閣府（2014）の調査では 20～30 代男女の約 4 割が恋人を不要だと回答しており、その内の約半数は「恋愛が面倒」、「自分の趣味に力を入れたい」という。恋人がいることで個人の自由な時間が奪われることを恐れ、恋愛によって生じる嫉妬や関係不安といったネガティブな感情に嫌悪感を抱く若者もいる（立脇、2005；西村、2016）。恋愛しない若者に焦点を当てて調査している高坂（2011）によれば、青年が恋人を求めない理由として「恋愛による負担の回避」、「恋愛に対する自信のなさ」、「充実した現実生活」、「恋愛の意義の分からなさ」、「過去の恋愛のひきずり」、「楽観的恋愛予期」の 6 つが挙げられるという。

長期雇用や年功序列のシステムが弱体化し、「就職できないかもしれない、将来、失業するかもしれない」という不安を抱く人が増えている中（『日本労働研究雑誌』編集委員会、2011）、「嗜好品」と化した恋愛に多くの時間を費やすのは惜しいと考える人が増えている。将来に強い希望を持てる若者の数も減少傾向にある中（久木元、2011）、時間やお金を費やしてもすべての恋愛が成就する保証はないことから、リスクを考慮して恋愛そのものを回避する人が増えているのではないだろうか。2008年から2009年にかけて流行した「草食（系）男子」（深澤、2009；森岡、2008）という言葉にも表れるように、欲しいものがすぐ手に入る世の中で時間と労力を要すると考えられる「恋愛」は「したい人だけがする」という方向に進んでいるのかもしれない。

また、人びとの「恋愛」の捉え方はさまざまな方向に広がりを見せており、「恋愛」の対象として、キャバクラやメイドカフェ、アイドルやタレント、スポーツ選手、アニメやゲームのキャラクターの名を挙げる人も少なくない（山田、2019）。例えば、毎日新聞2020年4月17日の記事には仮想アイドルの「初音ミク」との結婚式を執り行い、自分と初音ミクは夫婦関係にあるとする日本人男性のことが書かれている。記事によると、幼い頃からアニメやゲームが好きだった男性は職場で受けた同僚女性によるいじめから自殺を考えていた際に初音ミクの曲と出会い、彼女の歌のおかげで社会復帰できるようになったという。この男性は2018年3月に秋葉原のベンチャー企業 Gatebox（ゲートボックス）によって開発されたキャラクター召喚装置を購入して以来、機器の中に立体ホログラムで映し出された初音ミクとの「共同生活」をしている（図2-1参照）。ここに映し出される初音ミクにはAI機能が搭載されており、「大好き」と伝えると「そんな、照れるよ」と顔を赤らめて返すという。このことに関して男性は『『大好きなミクさんと一緒に生活している』と心が躍った』（p.3）と述べている。

このように恋愛のあり方は変遷のときを迎えており、恋愛を求める人、求めない人、恋愛対象が日常で関わりのある相手である人、そうでない人、など多方面に広がりを見せている。そんな現代の日本で人びとの恋愛に焦点を当てた研究は増えてはいるものの、その数は限られており、中でも関係構築の土台となるコミュニケーションの観点から行われた調査は非常に少ない。現代のように個々人の恋愛観が多様化している中、相手ありきの恋愛で関係が構築されるプロセスが着目されないのは大きな課題である。近年、「どのように声をかけてよいかわからない」、「恋愛交際の進め方がわからない」など悩みを抱く人がいることが内閣府（2014）の調べで示されていることから日本人男女の恋愛コミュニケーション

プロセスを探究することは喫緊の課題だと考えられる。

図 2-1 ゲートボックスに召喚された初音ミクに話しかける近藤顕彦さん



出典：『人工機能が変わる 恋愛も人の心も AI と『結婚』した男性』2020年4月17日毎日新聞デジタル。

2.6. 人間関係とコミュニケーション

「自然な出会い」で出会った場合でも、自立的に出会いを求めて行動した末に出会った場合でも、二人の間に「私たちは付き合っている」という共通認識が生まれない限り二人の関係が「付き合う関係」にならないのは言うまでもない。このことは二人が「私たちは付き合っている」という認識を共有するに至るまでのプロセスが必ずあることを意味し、そのプロセスの中心概念になるのが「コミュニケーション」であると考えられる。

交際につながる経路が見合いや職縁といった社会的システムによって保証されていた頃の日本では特定の相手と「付き合う関係」に至るまでのコミュニケーションプロセスを強く意識しなくとも二人の排他的関係が成立していた。インターネットを通じて世界中の人と瞬時に繋がれる現代と比べ、日常での出会いと言えば職場くらいしかなかった当時は「会社の隣に座った人が運命の人」だと考えることも日常茶飯事だった。しかし、上述したように「高度成長期型マッチメイキングシステム」の機能が停止し、恋愛市場の完全自由化を突如言い渡された現代人の多くは自由を持て余し、身動きが取れなくなってしまっている。「婚活」ということばを山田と共に世に送り出した白河はこのことについて「日本人は、ずっと恋愛下手だったのに、それに気づかないまま恋愛のオープン市場化をしてしまって、そのツケを、今、支払わされている」（山田・白河、2008、p.42）

と言及している。つまり、現代多くの未婚者が言う「(異性に)どのように声をかけたらよいかわからない」、「恋愛交際の進め方がわからない」といった悩みは社会的背景の変遷によって浮き彫りになった問題ではあるものの、その原因の根本はずっと日本社会の中にあつたと考えられる。そして、恋人が欲しいと思っても「自然な出会い」に至らない場合は自ら出会いの経路を開拓した上で特定の相手とコミュニケーションを重ねて恋人関係を構築する働きかけが求められている。

多くの人は「コミュニケーション」ということばを耳にすると「親子間コミュニケーション」、「夫婦間コミュニケーション」、「教員・学生間のコミュニケーション」と、既存の人間関係の中で発生するコミュニケーションを思い浮かべる傾向にある。しかし、Duncan (1967) の *We do not relate and talk, but relate in talk* (私たちは関係を持つから交流するのではなく、交流の中で関係が生じる) (p.249) という主張にあるように人間関係そのものが言語・非言語のシンボルを駆使した人間同士の相互作用によって創られる「コミュニケーションの産物」であることを忘れてはならない。Duncan の主張は人間関係について調査する際には「人間関係があるから人はコミュニケーションをする」という視点から「コミュニケーションがあるから人は人間関係を構築・維持できる」という視点に移動させることも時には必要であることを示唆する。

私たち人間は生まれたときから自身の両親と親子関係にあり、その後死ぬまでの間に兄弟姉妹、親戚、知人、友人、同僚、恋人、配偶者と多様な人間関係を営んでいく。その中には長期間続くものもあれば短期間であっけなく終焉してしまうものもある。ただ、すべての人間関係は二人の人間が互いにコミュニケーションし合うことで作られ、維持され、ときには終焉するという点では同じである (Cappella, 1988)。つまり、人間社会の中で生じる人間関係はコミュニケーション無しには成立しないものであり、人間関係を研究する上でコミュニケーションの観点は不可欠である。

ところが既存の恋愛研究の多くは恋愛にまつわる現象(恋愛感情や恋愛関係の生起・維持・終焉など)の「結果」に焦点を置くばかりで、それらの現象が発生する「過程」の議論が抜け落ちている。国語辞典の定義(2.1.)でさえも「恋愛」が人と人との間に築かれる関係という視点が欠如している始末である。これは、「恋愛は誰にでもできる」という価値観が要因になっているのではないだろうか。これまでは過程を意識せずとも「誰でも恋愛できる」と思える環境が整っていたため「恋愛の仕方が分からない」と悩む人は多くなかった。しかし、状況が変化した現代では「恋愛関係構築のプロセス」にまつわる悩みが生じている。このこと

を踏まえれば、「付き合う関係」構築の過程に焦点を当てることは現代の日本人の悩みの根本を探る手助けになると考えられる。つまり、特定の相手との間に生じる感情や関係は自然の産物ではなく人と人がコミュニケーションを重ねた結果構築されるものであるという視点から「付き合う関係」が成立するまでの「コミュニケーションプロセス」に焦点を当てることには価値があると主張できる。

2.7. 「付き合う」ための「告白」

これまで「付き合う関係」が成立するまでの過程に関して唯一頻繁に取り上げられてきたトピックが「告白」である。「告白」というステップを踏まずに交際を始めるカップルもいるだろうが、山田(1991)の調査で参加者の過半数が「相手に告白され、自分の中で好きだという気持ちがあはつきりした時」、「告白し、相手から好きだという返事もらった時」に相手を「恋人」と意識するようになったと回答していることから、告白が多くの日本人にとって関係の大きな転換をもたらす存在であることがわかる。日本人大学生を対象にした友池(2017)の調査でも回答者の約9割が恋愛関係を始めるために告白は欠かせないと回答しており、その理由として「告白がないと相手の気持ちが分からない」、「境界線として」を挙げていることから告白というイベントを経ることによって恋人関係を他の関係と一線を画するものとして見ていることが読み取れる。

今ほど男女交際が盛んでなかった高度経済成長期以前の日本では男女が理由もなく会えば「恋愛」だと認識されていたことから「告白」は今ほど必要なかったと山田(1991)は言う。しかし、恋愛感情を抜きにした男女交流が盛んとなった現代では何を「恋愛」とするか非常に曖昧になっているため(山田、1991)、特定の相手と恋人関係になりたいと思えば「あなたは私にとって特別な存在です」、「私はあなたと付き合いたい」という明確な意思を伝達することが求められる(関野、2012; 山田、2019)。つまり、友人と恋人の曖昧になった境界線をはっきりさせるために生まれたのが現代の日本で恋愛の規範的行動の一つとなっている「告白」なのである。

栗林(2002)は恋愛における「告白」を「恋愛関係の形成を目的として、特定の相手に自分の好意を伝達する行為」(p.11)と定義しており、大森(2014)は質的調査を通して日本の若者たちの間で「告白」は「曖昧な関係を明確な関係にするための『確認』や『宣言』」であり、「あくまでも『付き合う』ことを確認するための行動として遂行される」(p.115)と言う。日本人の「付き合う関係」(*tsukiau relationships*)に関して質的調査を行った Farrer, Tsuchiya, and Bagrowicz

(2008)も日本人が「告白」を実行するのは告白する本人が相手からの好意を察知して交際を確信したときだと示し、告白の成功率を高める要因を調査した栗林(2004)も「成功者の告白は、告白による『無関係』から『恋愛関係』へと関係の一変を図るというよりも、二者が既に形成している関係を『恋愛関係』へと昇華・明確化されるために行われると考えられる」(p.80)と結論づけている。これらの先行研究から示唆されることは特定の相手と「付き合う」ために「告白」は必要だが、そもそも「告白」に至っている時点で両者の間に「私はこの人と付き合いたいし、この人も私と付き合いたいと思っている」という認識が共有されている可能性が高いということである。

栗林(2004)は高校生・大学生を対象に告白経験とその状況(告白までの期間、告白時間、告白場所、告白方法、告白内容、告白の受容可能性、告白時点での両者の恋愛感情の強さ)、そして告白の結果を調査し、失敗者と成功者の比較を行っている。結果、成功者の多くは失敗者と比較して(1)知り合って3ヶ月以内に告白しており、(2)告白する前から二人きりででかけるなど「二人きりになる交際行動」を経験しており、(3)告白を相手が受け入れる可能性を高く認知した上で、(4)夜、(5)「(恋人として)つき合ってください」とストレートに交際の申込みを伝えていたことを明らかにしている。また、告白のセリフに着目して、どのような伝達方法が交際の申し込みとして効果的か調査を行っている研究もあり(樋口・磯部・戸塚・深田、2001)、「好きです。付き合ってください」や「ずっと好きでした。付き合ってください」といった好意をはっきり伝える「単純型」が他の「懇願型」(「一生のお願いだから付き合ってください」、「俺(私)じゃだめ?」など)や「理屈型」(「〇〇さん(君)と話をするだけで幸せになる(の)。付き合ってください」、「〇〇さん(君)の笑ったところが好き。付き合ってください」など)と比べて関係の進展にもっとも効果的であることが示されている。樋口他はこの結果に対して「余計なことを言わないシンプルでストレートな告白は、真実味があり、相手に自分の好意がもっとも伝わりやすいということが考えられる」(p.64)と結論づけている。これらの調査から言えることは日本人の間で「告白」が実施される際には一定の「型」のような決まりごとが定められており、多くの人々がそれに従うということである。

2.8. 「恋愛」にまつわる決まりごと

一般的に人は人間関係を構築する際、相手の予想に反した行動をなるべく避け、規範に則った行動を心がける。その背景には、規範に反した行動を選択して相手に不信感を与えることを回避したいという人間の心理が働いている。メディアなどで取り扱われる恋愛アドバイスやテクニックに人びとの関心が寄せられるのも恋愛という状況下で多く

の人が間違っただ行動を選択したくないと考えていることの表れだろう。注意すべきは、特定の文化内で共有される「恋愛の当たり前」は社会的に作り上げられたものであり、その内容は文化によって大きく異なるという点である (Metts, 2006)。例えば、上記に示した「告白」は『『私たちは付き合っている』という共通認識を持つために『告白』は不可欠』という価値観が日本人の間で暗黙の了解的に共有されていることを意味するが、この決まりごとは少なくとも欧米圏では見られない。なお、規範は国ごとに変わるだけでなく、世代や性別、地域によっても変化する。だからこそ人はメディアや周囲の人間の情報に耳を傾け、自分が所属する文化の「当たり前」を探り、自分や他者のコミュニケーションが適切かどうか判断しつつ、他者の期待を裏切らない言動を心がけるのだろう。

とりわけ日本では周囲の環境に自分を合わせるのが理想のコミュニケーションスタイルとされ (Tezuka, 1992)、互いの表面的な言動・態度に「遠慮」気味にほのめかされた意味をも「察する」コミュニケーションスタイルを持つため (Ishii, 1984)、場の空気を読む傾向がことさら強いと考えられる。周囲に合わせる傾向は日本の恋愛文化にも表れており、例えば、日本特有の文化である「合コン」には多くのルールが存在し、合コンそのものが規範化された場であることが以下の引用からうかがえる。

合コン時代の男女は、出逢いの場を洗練することに必死だ。まずは丁寧に、バランスよくメンバーを選定する。いやらしい感じがするのはいやだから、友だちを紹介しあう飲み会ってことにすればいい。がつがつしているわけじゃないから、その場がいい雰囲気になるよう努力する。気に入った人がいても積極的すぎると和を乱すし、わかりやすく近づいたのではひかれてしまう。(中略) 連絡先を聞かれ、社交的なメールが送られ、返事をし、でもふたりで会う気があるのかどうかも見分けにくくて、そのうちに次の合コンの話がきて、携帯の登録件数ばかりが膨らんでいく (北村・阿部、2007、p.78)。

上記の北村・阿部の考察から男女が「合コン」という場で暗黙のルールに従って自分の役割を把握して演技する合コンには一定の規範があることが見て取れる。近年、出会いの場としてビジネスが成立している街コンや相席屋、マッチングアプリでも参加する人は「男」もしくは「女」の二役に分類され、自分のやるべきことをこなしていくことが期待されている。阪井 (2012) は「一人の相手との安定した長期的な関係よりも“モテる”

ことに価値を置く現代の“モテ”至上主義」(p.67)の現代社会では相手の期待に合った言動を選択できる人が「恋愛上手」と認識される可能性が高いと言う。事実、男女平等が謳われている現代でも「女らしい女」や「男らしい男」という枠にハマった男女が恋愛という状況では理想の恋人として認識される傾向にあることが山田(2016)の調査でも示唆されている。以前よりも個人の恋愛が上手くいくかどうかは本人の能力次第となっているからこそ、相手のことを深く知らない初対面の場においては規範に頼らざるを得ない状況になっている。

一般的にメディアが伝える情報や他者の言動を恋愛のお手本として参考にすることはコミュニケーションを円滑に進めるという点でポジティブに捉えられる。特に初対面の場では互いのことを深く知らないため規範に則った言動を選択することで相互に不快感を与えることを回避することができる。一方で、同じ文化に所属する全ての人が暗黙の了解的規範に従って行動すれば恋愛がマニュアル化してしまうリスクも挙げられる。恋愛という状況で「しなくてはいけないこと」、「してはいけないこと」が増えると自らの選択の余地が残されていないと感じ、息苦しさを覚える危険性がある。また、規範に頼りすぎると他者が予想に反した行動を取った際に対処しきれない可能性も生じてしまう。

西洋ではこのような恋愛のマニュアル化について探索する研究が盛んに行われており、「デーティングスクリプト(dating script;デート状況で予測される一連の行動の流れ)」の存在を可視化する研究を通してマニュアル化されたデートのあり方を問題視している(Alksnis, Desmarais, & Wood, 1996; Eaton & Rose, 2011; Lever, Frederick, & Hertz, 2015; Rose & Frieze, 1993; Serewicz & Gale, 2008など)。これらの研究ではデート中の性役割(gender role)に焦点が置かれており、現代までに構築・再構築を繰り返してきた伝統的性役割のあり方に関して議論が繰り返されている。過去35年分の学術論文をレビューしたEaton and Rose(2011)によれば、男性は能動的な役割(デートの誘い、計画、支払い、性行為のきっかけ作りなど)を、女性は受動的な役割(自分からは意見を出さず相手の判断に賛否を述べる、コミュニケーションの促進、性行為の制御など)を担うデーティングスクリプト(dating script)が現代でも多くの人の中で「理想的なデート」だと考えられているという。

ここで疑問となるのは日本人の間で共有されている「恋愛スクリプト」はどのような特徴を持つのかである。コミュニケーションのあり方は文化によって異なるため、日本人がどのような規範に則って行動しているのか調査することが求められる。告白を経て

恋人関係が築かれることは多くの先行研究で示されているが、そこに至るまでの二人の交流に関してはほとんど明らかにされていない。現代恋愛コミュニケーションプロセスで悩みを抱えている人が多いことが示されていることから日本人の間で、どのような交際プロセスがあるのか調査することは目下の課題であると言えるだろう。

2.9. 先行研究まとめ

本章では、これまで文学、心理学、社会学を中心に進められてきた国内の恋愛研究を概観してきた。今回、既存の研究から（１）明治期、「恋愛」ということばと共に西洋的恋愛観が日本に取り入れられたことによって恋愛結婚イデオロギーおよび恋愛至上主義が普及したこと、（２）時代背景の移り変わりに伴って結婚と恋愛の結びつきが強まったり弱まったりする中、現代では「結婚に恋愛感情は不可欠」とする認識が広まっていること、（３）見合いや職縁といった「自然な出会い」の減少で「（異性との）出会いがない」と悩む若者が増えていること、（４）出会いの経路が縮小する中で男性を中心に経済的余裕があり、職場内外で対人関係が豊富な人がそうでない人よりも異性と出会う可能性が高いこと、（５）現代の若者にとって恋愛は「嗜好品」で、その形は多様な方面に広がって複雑化していることが明らかとなった。

また、本論文はコミュニケーション学の観点から人間関係を「コミュニケーションの副産物」と捉え、「恋愛のプロセスが分からない」という未婚者の悩みから「出会い」～「付き合う」までのコミュニケーションプロセスに焦点を当てることに意義を見出した。さらに、恋愛コミュニケーションプロセスに関して唯一取り上げられてきた「告白」にまつわる先行研究から「告白」は日本人にとって交際プロセスの中の一種の「型」であることを示唆した。最後に、文化特有の恋愛規範に目を向けて欧米で盛んに取り上げられている「デーティングスクリプト」を例に挙げ、日本で共有される規範にも目を向ける必要がある旨を論じた。

以上、本章の先行研究概観から「恋愛」という概念は時代の流れに従って、そのあり方を大きく変換させてきたことが示された。一方で二人の男女が「付き合う関係」を構築するまでの過程に焦点を向けた際、「告白」という一点のコミュニケーション行動を除いて日本人男女がどのように関わり合っているかは明らかになっていないという不足点も明らかとなった。

第3章 本研究の視点

3.1. 問いの設定

近年、「若者の恋愛離れが進んでいる」という言説が当たり前のように使われているが、この言説は若者たちの実態を的確に表していると言えるだろうか。日本人の結婚・恋愛に関する動向を5年おきに調査している国立社会保障・人口問題研究所のデータでは2015年の時点で交際相手をもたず、かつ交際を望んでいない18～34歳未婚者は全体の3割程度に留まっている。つまり、未婚者の約7割は交際している異性がいる、もしくはいなくても交際を望んでいることを意味する。同時に交際相手がいない未婚者の多くは「そもそも出会いの場所がない」、「どのように声をかけてよいかわからない」、「恋愛交際の進め方がわからない」といった悩みを抱えていることから若者たちの恋愛の実態は想像以上に複雑であることが読み取れる（内閣府、2014）。このような実態を度外視し、異性の交際相手がいない未婚者の割合の変化だけを見て「若者の恋愛離れが進んでいる」という結論に至るのは非常に短絡的ではないだろうか。「若者の恋愛離れ」の背景を探ることも重要だが、まずは大森（2014）が指摘するように若者たちが「恋愛」をどのように認識し、その上でどのように行動しているのか調査することが不可欠となる。

現代は「恋愛したら結婚しなければならない」というプレッシャーの減退と恋愛市場の自由化によって身分に縛られることなく好きな相手と恋愛することが可能になった。一方、交際を求める多くの人々が競争市場の中で戦わなければならない状況が生じており、以前のように周囲の大人が出会いの経路を提供してくれることも期待できないことから、一人ひとりのコミュニケーション能力が問われるようになってきている。このような恋愛のあり方の推移によって交際を求める人びとが「（異性に）どのように声をかけたらよいかわからない」、「恋愛交際の進め方がわからない」といった悩みを抱えていることは着目すべき課題であろう。

問題は既存研究の多くが恋愛にまつわる現象の「結果」ばかり取り上げて恋愛関係が生じる「過程」に目を向けた研究が少ないという点にある。上述したように人間関係を二人の人間が相互にコミュニケーションを重ねた結果生じると捉えるならば「私たちは付き合っている」という共通認識が二人の間で構築されるまでの過程についての議論は不可欠である。そんな中、恋愛プロセスで唯一焦点が置かれてきたのは「告白」だった。

二人の関係を大きく変えるきっかけとなる「告白」が重要概念であることは言うまでもないが、その段階に至るまでの二者間のコミュニケーションプロセスに注目することで新たな視点が得られると期待される。

本論文は（１）日本人の恋愛行動をコミュニケーション学の観点から探り、（２）日本のコミュニケーションの実態を深掘りすることを目的としている。（１）に関してはコミュニケーションそのものを「動きのあるプロセス」だと捉え、その中で構築または共有されるシンボルの「意味」に着目するコミュニケーション学の視点から日本人の恋愛、中でも二人の男女が出会ってから「私たちは付き合っている」という共通認識が構築されるまでの過程に目を向けることで恋愛研究の発展に貢献できる。（２）に関しては相互作用の中で生じる意味の構築・共有は文化の影響を強く受けるという観点から相互作用の連続となるコミュニケーションプロセスに着目することで日本人の人間関係構築に関する態度や認識をあぶり出すことができる。

また、実学志向的コミュニケーション研究は人びとの悩みに示唆を与えることを目的とするが、本論文はその一手手前、「現代の日本人男女の交際の実態を明らかにすること」を一番の目標と定める。特に二人の男女が「自然に」出会い、「結婚を前提に」付き合いが始まるという流れが衰退した現代で、人びとがどのようにして交際相手と出会い、どのようなコミュニケーションプロセスを経て「付き合う関係」を構築しているのかを探ることで今後の恋愛研究の可能性を広げる第一歩となることを期待したい。これらのことを踏まえて本論文では以下の問いを設定し、研究を進める。

問い：現代の日本人男女はどのようにして交際相手と出会い、「付き合う関係」を構築するのか。

今回鍵となるのは「出会い」と「付き合う関係」であり、出会いの経路が以前より限定的になった現代で人びとが何をきっかけに交際相手と出会うのか、さらにそこからどのような相互コミュニケーションを経て「私たちは付き合っている」という共通認識を構築しているのか探ることで今後の恋愛コミュニケーション研究の指標を示したい。

3.2. 参考とする人間関係構築理論・モデル

恋愛コミュニケーション研究がこれまで進められてこなかった日本と比べて西洋では長年にわたって多角的に検討されてきている。西洋では理論的研究もすでに構築されており、対人関係構築にまつわる理論およびモデルも多数挙げられることから新たに調査する際には複数の理論の知見を援用して、独自の問題を提起して研究を立案することが望ましいとされる。今回、「日本的恋愛コミュニケーション」の探索を一番の目的とする本論文では日本で提唱された理論やモデルを援用することが理想的であるが、西洋の恋愛研究で用いられることが多い理論にも多くの示唆が見られると考えられる。

(1) 社会的交換理論 (Social Exchange Theory)

西洋の恋愛研究で幾度と引用されるのは経済学者 Homans(1958)によって提唱され、社会学者の Thibaut and Kelley (1959) によって理論化された社会的交換理論である。この理論は人が他者と交流する中で相手との「関係によって得られる利益」と「関係を維持させることにかかるコスト」を頭の中で計算して関係を続けるか否か決めるという人間心理を説いている。Thibaut and Kelley は相互作用から生じる「利益」と「コスト」の計算心理を「利益 (reward) - コスト (cost) = 成果 (outcome)」という数式で示し、人は成果が正になれば関係を発展させ、負になれば相手との関係を断つと論じている。私たち人間は相互作用で生じる利益を最大限に高め、コストを最小限に抑えようと動機づけられていることから特定の相手との関係から算出される対人的成果 (relational outcome) が高ければ高いほど相手との関係に従事する動機を見出すという。

二人によれば、人が関係の魅力度を計算するときに使われる尺度は2つあるという。1つは個人の過去の経験がベースとなる「比較水準」(comparison level ; CL) で、人は過去の経験を基に自分がもらうに値する利益水準を定めるといふ。例えば、過去の恋人と比べて今の恋人が「多くの時間を費やしてくれない」と感じた場合、それは比較水準によって計算されたと考えられる。もう一方の基準は代替価値がベースとなる「代替選択肢の比較水準」(comparison level of alternatives ; CLalt) で、代替関係で生じる対人的成果が現在の関係で生じるそれより上回ると感じた場合、人は今ある関係を絶って代替関係に乗り換えるという。例えば、交際中の相手より魅力的だと感じる相手と出会い、今の恋人と別れて新しい相手と関係を結んだほうが得るものが大きいと感じた場合、そ

これは代替選択肢の比較水準によって計算されたと考えられる。反対に今ある関係が代替関係より利益水準が高いと感じた場合、その関係に対するコミットメントが強まるという。つまり、いかなる対人関係でも両者の認識が以下のようにになっていることが一番理想的だと考えられる。

成果 (Outcome) > 代替選択肢の比較水準 (CLalt) > 比較水準 (CL)

(Griffin, 2012, p.119)

この理論を基に日本人が恋愛の中で生じる利益とコストについてどのように認識しているか調査を行った友池 (2017) は、参加者の多くが「親密感」、「情熱」、「純粋な喜び」、「支え」を恋愛関係（「付き合う関係」）から得られる利益として捉え、「拘束感」、「関係不安」、「経済的負担」、「自己喪失」を恋愛関係の中で生じるコストとして捉えていた旨を示している。一方で、同研究は「自分の利益ばかり考えると、深い人間関係が築けなくなる危険性に繋がる」(p.42) といった一部参加者の考えを共有した上で必ずしも全員が恋愛の価値を利益とコストだけで判断しているわけではないことも明らかにしている。このことに関しては Wood (1998) も倫理的観点から「社会的交換理論の焦点は自分自身の利益と結果であり、この観点からでは人間関係の中心となる思いやりや利他性、公平性といった倫理的問題の説明ができない」(p.122、筆者訳) と批判している。とりわけ相手との関係を重んじ、他者志向を持つ日本人にとって人間関係を利益やコストで捉えることは倫理に反すると感じられる可能性がある。

(2) 社会的浸透理論 (Social Penetration Theory)

心理学者 Altman and Taylor (1973) は社会的交換理論を基にした社会的浸透理論で対人関係の親密度の高まりに焦点を当てている。二人によれば、人は初対面の相手とは当たり障りない表面的な会話に留めるが、相互に自己開示を重ねることで段階的に関係が発展し、自分の幅広く深い部分を相手に見せるようになるという。彼らはタマネギを人の個人情報に見立て、基本的情報は誰でも容易にアクセスできるタマネギの表面部分であるのに対し、より私的な部分は何層も皮を剥かないと表面に顔を出さないタマネギの中心部だと説明している。つまり、年齢、出身、職業といった表面的情報は比較的簡単に共有される一方で価値観、深い感情、過去のトラウマなどの深層的情報は非常に脆く、

ゆえに外部に晒されることは比較的少ないことを意味する。そんな中、人は相互に自己開示を重ね、自分を開き、同時に相手のことを幅広く、深く知ることによって親密感を覚える。なお、自己開示は返報性を伴うため、一方が自分のことを話せば他方も同じように自分を開くと考えられている。恋愛状況に当てはめて考えると、二人が出会い、互いに魅力を感じた場合、その二人は自己開示に努める。最初は名前や出身、仕事などの表面的情報を交換して相互を知ろうとするが、関係が深まれば自己開示の内容に広がりや深さが見られるようになり、二者間の親密性は高まると考えられる。

(3) ナップの階段モデル (Staircase Model)

コミュニケーション学者の Knapp は社会的浸透理論の基本原則に基づいた階段モデルを提唱している (Knapp, 1978; 1984; 2011)。当モデルは人間関係が発展・維持・崩壊していく様子を簡易的に図式化したものであり、二人の関係が変化していく様子が階段を上り下りするかのように見えることからこの名前がつけられている (図 3-1 参照)。本論文では関係発展段階に焦点を定めるため、当モデルの関係発展段階 (開始→実験→強化→結合→結束: 各段階の特徴は表 3-1 参照) のみを参照する。

このモデルは主に異性間 (mixed-gender pairs) の関係、中でも当事者たちが積極的に関係構築に貢献した場合を想定しており、いかなる対人関係も二者間を取り囲む社会的相互作用 (周囲の友人、同僚、親戚など) を度外視することはできないことを承知の上で二者間の相互作用的交流のみに焦点を当てている (Knapp & Vangelisti, 2009)。なお、Knapp は場合によっては特定の段階を飛ばして発展する関係も存在することを認めつつ、多くの人間関係が体系的且つ順序立てて進んでいくとしている。

Knapp の階段モデルは二人が婚約および結婚するまでを含む。今回調査する日本人の恋愛に関して焦点を当てるのはあくまで「出会い」から「付き合い関係」の構築までであり、「出会い」は階段モデルの「開始」段階、「付き合い」はおおよそ「強化」と「統合」の間の破線部分 (表 3-1) に値すると予測できることから本研究では「開始」～「強化／統合」の部分で見られる日本人の恋愛における具体的なコミュニケーション行動を探ることとする。

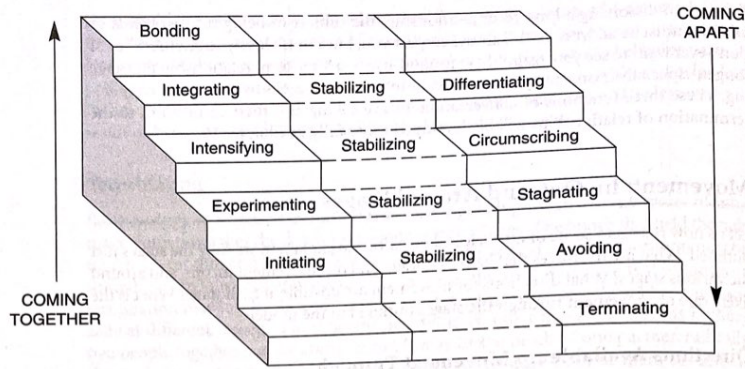


図 3-1 Knapp の階段モデル

出典 : Knapp, M. L., & Vangelisti, Al. L. (2009). *Interpersonal communication and human relationships* (6th ed). Boston: Ally & Bacon.

表 3-1 Knapp の階段モデル 発展段階

段階	特徴
Initiating (開始)	二人が交わる瞬間。特定の状況で相手の存在を認識した際、過去の交流や周囲の評価を基に相手の魅力を判断し、相手が交流できる状態にあるか確認した上で適切な言葉を選んで接触する。この段階では互いに好印象を与える努力を試みる。
Experimenting (実験)	相互の未知 (unknown) を探り合う段階。名前、職業、趣味など比較的表面的な情報を打ち明け合い、共通点を見つけようとする。互いのことをより深く知ろうと多くの時間がこの段階に費やされるが、多くの関係がこの先に進むことはない。この段階での人間関係は比較的浅く、二者間のコミットメントも非常に弱い。
Intensifying (強化)	双方の密接度が増し、積極的に関わり合うようになる段階。信頼を強めた二人のコミュニケーションは内面的なものへと変わり、全てを言語化しなくても何を言わんとしているのか分かるようになる。ニックネームで呼び合い、秘密を打ち明け、「私たち」という言葉を使い、二人だけが分かる表現 (例: いつものお店) を用いるようになる。
Integrating (統合)	周囲の人間が二人の関係を認め、二人で一組と捉えるようになる段階。高コンテクストなコミュニケーションでも意思疎通が可能となるため、相手の考えていることを聞かなくても分かるようになる。
Bonding (結束)	婚約や結婚を通して、二人の関係が正式に結ばれたことを社会に伝える段階。責任や約束に関する活動が活発となっていく。

Knapp, M. L., & Vangelisti, Al. L. (2009). *Interpersonal communication and human relationships* (6th ed). Boston: Ally & Bacon. を元に作成.

本論文の調査目的は上に示した理論・モデルの検証ではなく、これらの理論・モデルでは説明できない可能性のある「日本的コミュニケーション」の実態を探ることである。

「これらの理論・モデルでは日本『特有』と言われているコミュニケーションの特徴を十分に説明することはできないかもしれない」という前提の下、これまで日本人のコミュニケーション行動を説明したり、予測したりするのに使われてきた「欧米産」の理論や概念、あるいは研究法から今回の研究結果のどの部分が説明、あるいは予測が可能で、そしてどの部分が「逸脱」しているかを明らかにすることによって「日本的コミュニケーション理論」の構築に少しでも近づくことが期待できる。

第4章 一次調査

4.1. 調査対象者と調査方法

一次調査では現代の日本人男女が交際相手とどのようにして出会い、「付き合う関係」に至るのか調査するため半構造型インタビューを個人面談方式で実施した。調査対象者の選択基準は（１）20～30代の社会人であること、（２）2年以内に交際経験（「付き合う」関係に至った経験）があること、（３）異性愛者であること、の3点とした。

本調査対象者を社会人にした理由は既存の恋愛研究は大学生を対象にしたものがほとんどで社会人の恋愛に焦点を当てたものが少ないからである。2019年の平均初婚年齢は男性31.2歳、女性29.6歳で（厚生労働省、2019）、1975年の男性27.0歳、女性24.7歳（内閣府、2007）から大幅な上昇が見られる。この結果から学校を卒業した後も恋愛を経験する機会が多いと予想され、社会人の恋愛も視野に入れるべきだと考えた。また、家と会社の往復で「出会いがない」と悩むのは出会いの機会が多い学生より社会人だということを踏まえて社会人の恋愛に着目した。また、2年以内の恋愛経験を持つ人に限定した理由は日々情報・通信技術の発達により人びとのコミュニケーションの選択が変化していることから比較的最新の情報を得るためである。最後に異性愛者に限定したのは冒頭で述べたように多様なセクシュアリティが存在することを承知の上で1回の研究ですべてを扱うことは難しいと判断したためである。

インタビューという質的調査を用いたのは、探索的調査を進めるにあたって既存の知見に頼ることは賢明な選択ではなく、これまで当たり前とされてきた理論に異議を唱え、「現代」の「日本人」に合った理論的方向性を定める必要があると考えたためである。「新しい文脈や視野に対応するには、既存の理論モデルから設問・仮説を導き、実証的データと比較する演繹的方法では対応しきれない」ことから「実証的データから新たに理論を作る帰納的な研究の戦略が必要となる」（SLAA研究会、2013、p.1）。

ときに帰納的研究はサンプルの少なさから客観性に欠けると批判されることもあるが、解釈主義的側面が強い帰納的研究の目的は実証主義的な演繹的研究のように「たったひとつの客観的事実をあぶり出すこと」でなく、「人と人とのコミュニケーションの蓄積によって構築と再構築が繰り返される社会的現実の実態を深掘りすること」であるため、一つひとつのサンプルを深く追究して深い意味を見出すことはむしろ欠かせない過程と

なる (Lindlof & Taylor, 2018 ; 大谷、2017)。また、結果・成果志向 (product-oriented) ではなく過程志向 (process-oriented) の質的調査 (帰納的方法) を用いることは「具体的状況・過程の記述」(p.92) が得られることを意味し (大谷、2019)、今回示唆された課題である『『出会い』から『付き合い』に至るまでの過程』を探るには最適だと考えた。

4.2. 調査手続き

本調査ではスノーボールサンプリングを採択し、筆者の知人をインタビューした後、彼(女)らに知人を紹介してもらう形で調査を進めた。今回スノーボールサンプリングを採択したのは「自身の恋愛経験」といった非常に私的な内容について語ってもらう上で何らかのつながりがある調査者が相手である方が気楽に話せると判断したからである。インタビューは物理的距離のある2人を除いて静かなカフェ等で実施した。距離的問題で対面インタビューが実施できなかった2人にはLINEを利用して通話インタビューを行った。インタビューの実施期間は2019年8月24日から2019年9月11日で、所要時間は1人あたり約60~90分(平均68分)であった。

表 4-1 参加者一覧

	性	年	職業	出会い
A	女	25	会社員／観光	紹介
B	女	26	休職中	紹介
D	女	27	看護師	居酒屋
E	女	24	ホテルコンシェルジュ	紹介
F	女	32	会社員／事務	アプリ
G	男	26	会社員／建設	飲み会
H	男	26	会社員／卸売	街コン
I	男	29	看護師	街なか
J	女	27	薬剤師	アプリ
K	男	28	高校教員	大学院
L	男	25	大学職員	紹介
M	男	28	会社員／医療機器	学校
N	男	28	会社員／メーカー	合コン

最終的なインタビュー実施人数は15名（男性8名、女性7名）で、平均年齢は27歳であった。内容はすべて参加者承諾の上、ICレコーダーによる記録を行った。インタビュー実施の結果、2年以内に交際経験がなかったCとOの分析は本調査から除外することにした（分析対象となる参加者一覧は表4-1参照）。

インタビューの中で尋ねた主な質問項目は、以下のとおりである。なお、()内に記す内容は質問の詳細や具体例である。ただし半構造型インタビューであるため相手の返答に合わせて質問の順番や内容を変動させることもあった。

- 相手との出会い（知り合ったきっかけ）
- 実際に会うまでのコミュニケーション（出会いが紹介などの場合）
- 実際に会ったときのコミュニケーション（話の内容や印象）
- 実際に会ってからのコミュニケーション（メッセージのやり取り、デート）
- 恋愛感情を抱き始めたきっかけ・理由
- 関係が「付き合う関係」に変わった瞬間のコミュニケーション（「告白」の有無）
- 付き合う前後でのコミュニケーションの変化（話の内容、会う頻度）
- 身体接触に関して（手を握る、キス、セックスなど）

4.3. データの分析方法

本調査では大谷（2008；2011）によって提案された質的データ分析手法 SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて分析を進めた。SCATとはインタビューデータをすべて文字化した後、「マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、それぞれに、〈1〉データの中の着目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句、〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく4ステップのコーディングと、〈4〉のテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きからなる分析手法」（大谷、2011、p.155）である（SCATのフォームは図4-1参照）。「比較的小規模の質的データにも有効」且つ「明示的で定式的な手続きを有するため、初学者にも着手しやすい」（大谷、2011、p.155）ことから今回採用に至った。

番号	発話者	テ ク ス ト	<1> テクス ト中の注目 すべき語句	<2> テクス ト中の語句 の言い換え	<3> 左を説明す るようなテキ スト外の概念	<4> テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を 考慮して)	<5> 疑問・課 題
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
番号	発話者	テ ク ス ト	<1> テクス ト中の注目 すべき語句	<2> テクス ト中の語句 の言い換え	<3> 左を説明す るようなテキ スト外の概念	<4> テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を 考慮して)	<5> 疑問・課 題
ストーリー ライン (現 時点と言え ること)							
理論記述							
さらに追究 すべき点・ 課題							

図 4-1 SCAT のフォーム

出典：大谷尚 (2008). 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案-着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き-」『名古屋学大学院教育発達科学研究科紀要』(教育科学) 54(2), 27-44.

SCAT を提唱した大谷 (2017) によれば、質的調査は以下のような特徴を有しているという (p.654)。

- ① 仮説検証を目的としない。
- ② 実験的研究状況を設定しない。
- ③ インタビューや観察から言語データを作成する。
- ④ 言語データを分析する。
- ⑤ データ以外の得られる資料も統合して検討する。
- ⑥ 研究者の主体的解釈を積極的に活用する。
- ⑦ 研究対象の有する具体性や個別性を通して一般性や普遍性を追求する。
- ⑧ 心理・社会・文化的な文脈を考慮してデータを分析する。
- ⑨ そうして現象に内在・潜在する意味を見出して理論化する。

この大谷の主張を念頭に置き、まずはテキスト (インタビュー逐語録) に何度も目を通して先行研究や本調査の問いと結びつくと思われる言葉を抜き出し、「<1>データの中の着目すべき語句」に記入していった。大谷 (2008 ; 2011) によれば <1> の作業では

「テキストの背景、テキストの奥の隠れた意味を読み出すつもりで、また、テキストに潜む内的現実、内的過程、内的構造を読み解くつもりで読む」(p.158) ことが求められ、そうすることで分析者はデータ中の着目すべき点を明確に示すことを避けられなくなるという。今回は二人が「付き合う」に至るまでのコミュニケーションプロセスに焦点を当てていることから二人の関係構築に関わる情報（二者間のコミュニケーション行動や二人を取り巻く文脈など）に焦点を当てて語句の抽出を行った。表 4-2 は参加者の語りの分析結果の一部例である。

表 4-2 SCAT 分析「〈1〉注目すべき語句」の抽出例

発話者	テキスト (M の語り)	〈1〉テキスト中の注目すべき語句
聞き手	今の彼女さんとお付き合いされてどれくらいになるんですか？	
M	10月で1年なんで、今11ヶ月ぐらいですね。	11ヶ月ぐらい
聞き手	で、お知り合いになったのは？	
M	学生時代。	学生時代
聞き手	学生時代ですよ、大学？	
M	いや、あのね、専門学校に2年と大学に2年行ってるんよ。	専門学校に2年と 大学に2年
聞き手	Mさんが？	
M	そう、俺が。で、俺大学2年しか行ってないけど、その専門学校の時の同級生。	専門学校の時の 同級生
聞き手	何の専門学校だったんですか？	
M	これも難しいんだけど、俺はその大学に編入学って聞いたことあるかもしれんけど、その編入するためのコースっていうところにその学校に通って、向こうは普通に専門学校で学んで、色々学んで、就職するっていうコースに通ってた。だからなんのっていうよりいろいろやってる専門学校。	編入学するための コース、就職する っていうコース
聞き手	そこで、1年生の時からお知り合いだったんですか？	
M	そうね。1年の時から知り合いやったね。	1年の時から
聞き手	授業が一緒とか？	
M	いや、全然そのコースが全く別だから、授業は一緒じゃないんだけど、共通の知人とかが、いたから、その学校内で。そこで知り合ったみたいな感じ。	コースが全く別、 共通の知人、学校 内

聞き手	じゃあ共通の知り合いとかの、どういう？集まりとかですか？	
M	えっと、自分が仲良かった友だちが野球部に入ってて、その学校の。で、野球部のマネージャーをしてた、今の彼女が。	友だちが野球部、マネージャー
M	で、まあそんなに遊んだりしてなかったけど、ちょっと学校内でしゃべったりとかしてた感じかな。です。	学校内でしゃべったり
聞き手	第一印象とか覚えてらっしゃいます？	
M	第一印象は、その時は全然何とも思ってなくて、むしろ今の彼女の友だちだった子に、外見だけはめっちゃタイプな人がいたから。	今の彼女の友だち、外見だけはめっちゃタイプな人
聞き手	じゃあ最初はもう「知り合いの一人」っていう感じで？	
M	別にその（当時好きだった）人とどうこう何もなかったんだけど、まあ、ただの「気にも留めない仲良くなった友だち」みたいな感じ、最初は。	ただの「気にも留めない仲良くなった友だち」
M	本当になんでもない、「友だちの一人」。	なんでもない、「友だちの一人」
聞き手	学校の外で会ったりはあったんですか？	
M	たまーに。いきなり二人とかはなかったけど、最初は、そうね、お互いの友だちの家に行って飲んだりとか、外で飲み会したりとか、ってのはあったかな、最初から。	いきなり二人とかはなかった、お互いの友だちの家、外で
聞き手	じゃあ、最初に好意を持たれたのは、Mさん？	
M	えっと、在学中は何もなくて。好きになったのは卒業してからなんよ、お互いが。社会人になってから。	好きになったのは卒業してから、社会人になって
聞き手	社会人になってからってことは、Mさんは大学を出たあとでってことですか？	
M	そう。それもこの前なんか話して俺勘違いしてたんだけど、多分お互い社会人になってから。だから向こうは2年でもう卒業して、20歳から働き始めてて、で、俺はそこ卒業した後に2年間また大学通ってから、23の年で働き始めたから、浪人もしてるからね。多分お互い23の年と20歳の歳ぐらいかな。感情を持ち始めたのは。	感情を持ち始めた
聞き手	それまでも連絡は取り続けてはいたんですか？	

M	取ってた。たまーにだったりとか。何かよく連絡を取ってる時期もあれば、ちょっとこう半年、半年は長いかな？少し連絡を取らなかつたりっていう期間はありつつ、細々と連絡は取ってた。「普通の友だち」。それもね。	細々と連絡、 「普通の友だち」
聞き手	連絡のツールは、もう LINE ですかね？その頃は	
M	LINE と、電話？	LINE, 電話
聞き手	そういう時ってどういったお話されてたんですか？	
M	何かお互いそれぞれ恋人がいた時期とかももちろんあったから、そういう話したりとか、後は仕事の話とかが多かったかな。向こうの仕事の話、向こうが先にその社会人2年間してるから、俺が色々、社会人の先輩として、向こうに聞いたりとかって仕事の話が多かったかな。	恋人がいた時期、 仕事の話、社会人の先輩、聞いたり
聞き手	じゃあ何をきっかけにこう感情みたいなものは？	
M	その在学の時は、真面目な話みたいなほとんどしたことなかったから、まあ飲んで馬鹿話したりとか、まあ向こう一滴も飲まないんだけどほぼ。真面目な話はしなかったけど、その社会人になって、仕事の話とかをよくするようになって、今まで知らなかった側面、っていうか尊敬できる部分、仕事に対してとか人としてみたいなのところが好きになって、そういうところを知っていくうちに、俺が好きになった。	在学の時、馬鹿話、 社会人、仕事の話、 今まで知らなかった側面、尊敬、人として
聞き手	もうずっと（お相手は）ブライダルのお仕事ですよね？	
M	そう、ブライダルで同じ会社でドレスコーディネートしてる。	ブライダル、ドレスコーディネート
聞き手	じゃあ専門学校もそういった類の？ではなくて？	
M	なんかもう本当に、普通の基礎マナーとかだったり普通の勉強だったりもしてたし、けどその進路は人それぞれ違う業界だから。たぶん、彼女だけかな、今までも、ブライダルに行ったのは（彼女）だけって聞いたよ。彼女だけって聞いている、その学校からは。	基礎マナー、進路、 人それぞれ違う業界
聞き手	じゃあ、「いいな」って感じ始めたのは、社会に出てどれぐらい経ってからとか？	
M	それが、でももう、すぐかな。俺が働き出して。こっちに配属になって、だから、23(歳)の夏秋ぐらいかな。7,8,9,10(月)とか、そこらへんかな、多分。	23の夏秋
聞き手	意識し始めた時っていうのは二人で会ったりとかもあったんですか？	

M	してた。向こうが広島で、その時。で、俺福岡で、俺が広島に遊びに行ったりしてた。	広島, 遊びに行ったり
聞き手	それはもう感情を抱く前からってことですか？	
M	同じタイミングぐらいかな。好きになったから会いたくなって会いに行ったのかな、多分。でも2回か3回かぐらいしか行ってないけどね、行くのは。同じタイミングぐらいやった。	好きになったから会いたくなって会いに行った
聞き手	その時点でMさんの気持ちっていうものは伝えてたんですか？	
M	伝えた、1回。振られた。	伝えた, 振られた
聞き手	どういう風に伝えられたんですか？	
M	いや、普通に、家にいる時に。何て言ったっけなあ？多分「そういう側面を知って好きになりました」という風な形で普通に気持ちを伝えた感じ。	家, 「そういう側面を知って好きになりました」, 気持ちを伝えた
聞き手	そしたら向こうは？	
M	なんか、そのときにすぐだったか、その後だったか忘れたけど、なんか「真剣味が足りん」と言われて振られた。	「真剣味が足りん」
聞き手	真剣味が足りん？	
M	なんか気持ちがこもってなかったんだろね、わかんないけど。俺は込めてたつもりだったけど、真剣味が足りないみたいなので振られたね。	俺は込めてたつもり
聞き手	で、振られた後は、どう？	
M	(振られた後)は、普通に向こうも恋人いたりとか、俺も別で恋人いたりとかだけど、まあ連絡とかは取ってた、ちょこちょこ。(相手のところに)行くとかはなかったけど、その後。かな。	恋人, 連絡とかは取ってた, 行くとかはなかった
聞き手	で、その後また、その後発展したっていうのはまたMさんが、気持ちが戻ったっていう感じですか？	
M	そうそうそう。おとしの9月ぐらいに向こうがこっちに、福岡に戻ってきたから、それでまたちょこちょこ会うようになってって感じかな。	福岡に戻ってきた, ちょこちょこ会うようになって
聞き手	そういう会う時っていうのはどういったところで会われてたんですか？	

M	普通にご飯食べに行ったりしてた。外で。その時も別に「昔好きだった人」で、その時とかもまあお互い別で（恋人が）いたりいなかったり。まあ（恋人）いる時も正直会ってたけど、別に何もなくて、「ただの昔からの友だち」として普通に会ってただけだから、何もなかったけど、って感じ。	ご飯、いる時も正直会ってた、「ただの昔からの友だち」
聞き手	どの辺りから意識し始めたんですか？	
M	で、その一昨年9月に帰ってきて、ちょこちょこ会うようになって、で、お互いその、その時の（恋）人とうまくいってない、あるあるだけど、うまくいってなくて、で、まあ、そうね、ちょうど、ちょうどって言ったら変だけど、お互いそのときの人と別れたタイミングが重なったから、まあ、そういうことになったけど。	別れたタイミングが重なった、そういうことになった
聞き手	前の方とお別れする時はMさんは気持ちはもう、ちょっとは？	
M	うーん、どうかな？かぶってたのかな？いやでもお互い多分決まってる、もう別れるっていうのは、決まってる段階で、うーん、まあちょっと気持ちの面で被ってたことはあったかもしれないね、もしかしたら。交際としては被ってないけど。若干はあったかもしれない。先に「別れる」がもちろん先にあったけど、まあその後すぐに（気持ちは）あったかもしれないね。	気持ちの面で被ってたことはあったかも、交際としては被ってない、「別れる」がもちろん先
聞き手	じゃあその「別れる」タイミングの後、それは、何て言うんですかね、言葉みたいなのはMさんの方からあったんですか？	
M	向こうにちょっとあったんよ。で、たぶんそれを異性で知ってるのって俺だけなんよ、多分。これも多分だけど、深く聞いてないけど。で、その、何て言うの、想いを抱えながら生きていくの、一人で生きていくのって多分相当辛いと思うし、まあかっこつけるわけじゃないけど、そこで俺が知っていることによって、まあ少しでも、この先の人生お互い支え合ってるじゃないけど、生きていければいいなと思ったし、それができるのは自分しかいないなと思ったから、じゃあまあ「色々含めて、もう1回ちょっと考えてくれん？」っていうような感じで伝えた。	異性で知ってるのって俺だけ、想いを抱えながら生きていく、相当辛い、人生お互い支え合ってる、自分しかいない、「もう1回ちょっと考えてくれん？」
聞き手	そしたら、（彼女）さんも？	
M	うん、その場で。めっちゃ焦らされたけど。焦らされたけど、「まあいいよ」って言ってくれた感じかな？	焦らされた、「まあいいよ」

〈1〉の抽出作業が完了した後は大谷（2008、p.158）の分析手法に従って〈2〉に「〈1〉に書き出した部分の意味を表すような別の語」を、〈3〉に「〈2〉に記入した語をこのデータの文脈で説明できるような語」を、〈4〉には〈1〉から〈3〉までを良く読み、分析者自身が導き出した「新たな構成概念」をそれぞれ記入していった。

大谷（2008、pp.31-32）によれば〈2〉～〈4〉の作業は分析者に以下のような効果をもたらすという。まず、〈2〉で参加者の語りの言い換えを考えることによって分析者は「着目した個別的な事象を一般化すること、あるいは一般的な概念で記述することを検討すること」になり、〈3〉でテキスト外の内容を考えることは「〈2〉に記入した語の背景、条件、原因、結果、影響、比較、特性、次元、変化…等を検討」することとなり、〈4〉でテーマとなる語を抽出することは「テーマ」を浮上させることとなる。つまり、SCAT 分析とは、参加者の語りの抽象度を徐々に挙げていき、最終的に抽象概念となるテーマを抽出することができる分析手法になっている。表 4-3 は分析の続きである。

表 4-3 SCAT 分析結果一部、分析過程

〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容	〈4〉テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）
1年弱の交際期間	中長期的関係	交際中
専門学校時代の出会い	コミュニティ内での出会い	自然な出会い、共通コミュニティ
大学への編入学	専門学校での出会い	自然な出会い
旧友	長い付き合い	長年の交友期間
進路希望に沿ったコース選択	異なるコース選択、接触機会のない関係	多様なコース、関わりのない状況
新入生時からの付き合い	同学年	同級生
進路希望の相違、授業外での出会い	コミュニティの共有、接触機会の生起	偶発的な出会い、第三者を通して成立した「縁」

知人を通じての出会い	「学校」という コミュニティ内での出会い	大きな枠組みの コミュニティ
表面的な交流	一定の距離感	限定的交流
第三者への恋心	外見的魅力による恋	容姿判断での恋
大衆の中の一人	友人以上でも 以下でもない関係	交友関係の成立
単なる友人	恋愛対象外からのスタート	恋愛対象外
複数人での交流	単純接触機会, 友人としての交流期間	接触機会の蓄積, 交友関係維持
卒業後に芽生えた恋心	環境変化, 認識変化	恋愛感情の生起
恋愛感情の生起	認識の変化, 意識の芽生え	恋愛感情の生起
卒業後の継続的やり取り, 友人関係の継続	単純接触機会の減少, 能動的やり取り	単純接触の減少, 友人としての関係維持
メッセージや通話での やり取り	多様なコミュニケーション チャンネル	コミュニケーションツール の活用
相互の恋バナ, 近況報告, 仕 事に関するアドバイス要請	多岐にわたる情報開示, 社会人としての経験差	自己開示による親密化
環境変化に伴ったトピック 選択の変化, 相互の新たな 面の発見, 敬意の生起	二人を取り巻く環境の変化, 相手への関心向上, 敬意の念と恋愛感情	環境変化に伴った話題選択 の変化, 敬意の念, 恋愛感情 の生起
ドレスコーディネーター	サービス業	サービス業
就職を目標とした学業	実践的内容基礎	社会で必要な知識の取得
就職直後	恋愛感情	恋愛感情の生起

相手宅訪問, 長距離	時間・金銭的成本	アプローチにかかるコスト負担, 物理的距離
恋愛感情による家訪問	積極的行動, 2人きりの空間	能動的行動, プライベートな空間でのコミュニケーション
告白, 失恋	関係進展失敗	友だち止まり
相手宅での告白, 好意の伝達	理由を伴った告白, 友人関係脱却の試み	告白による関係変化の試み
誠実性の不足の主張	伝え方の問題, 気持ちが 変化する可能性	コミュニケーションノイズの発生, 気持ちの伝達失敗
誠実な気持ちの主張	相互の認識齟齬, 精一杯の告白	認識のズレ
失恋後の恋愛, やり取りの継続	第三者との恋愛関係, 距離感の調整, CMC コミュニケーション	恋愛経験, コミュニケーションチャンネルの限定, 距離感調整
物理的距離の消滅, 交流の再開	単純接触機会の増加, FtF コミュニケーション	状況変化をきっかけとしたコミュニケーションチャンネルの拡張, 単純接触機会の増加
個人的食事, 友人関係の保持	恋愛を抜きにした 親密的関係維持	親密な交友関係の維持
シングル期の一致, 関係成立	相互の恋愛ステータス, 恋愛関係の構築	恋愛ステータス変化, 関係構築判断, 恋愛関係の成立
破局前の恋愛感情生起	恋愛感情の移行	相互の恋愛感情の一致

重い過去, 異性での唯一の理解者, 支えたい願望, 二度目の告白	築き上げてきた信頼関係, 長期的関係の賜物, 唯一無二の存在	強固な絆, 長期的コミュニケーションの産物, 代替不可の関係
躊躇後の承諾	関係が変わることへの躊躇い, 恋人関係の成立	関係変化への不安, 「恋人」へのステップアップ

ここまで記入が完了したら次は〈4〉のコードを全て用いてストーリーラインを作る。SCAT のストーリーラインとは「データに記述されている出来事に潜在する意味や意義を、主に〈4〉に記述したテーマを紡ぎ合わせて書き表したもの」（大谷、2008、p.32）である。〈4〉のコードを「意味のつながりをもたせて、一筆書きのように一筋につないだもの」（大谷、2011、p.159）であるストーリーラインを作成することで分析者は〈4〉で挙げられたテーマ同士の相互の関係性を検討することとなる。表 4-4 は上記分析から作られたストーリーラインである。ストーリーラインの中で下線が引かれているワードは〈4〉で導き出された「テーマ」であるがスペースの都合上、上記の表では示されていないものも含んでいる（参加者全員のストーリーラインは付録参照）。

表 4-4 SCAT 分析結果一部、ストーリーライン

M は共通コミュニティという自然な出会いを通して知り合った相手と長年の交友期間を経て交際中である。M が通っていた学校は多様なコースを保持し、同級生だった相手とは関わりのない状況にあったが、「学校」という大きな枠組みのコミュニティの中で第三者を通じて成立した「縁」という偶発的な出会いによって知り合った。

在学中は限定的交流に留まり、交友関係の成立が果たされていたために M は相手を恋愛対象外としており、別の人に容姿判断での恋をしていたという。二人は接触機会の蓄積は重ねたものの交友関係維持のまま卒業を迎えた。卒業をきっかけに生活環境の相違によるすれ違いが生じ、単純接触の減少が見られたもののコミュニケーションツールの活用によって「友人」としての関係維持が続けられ、自己開示による親密化が図られた。

就職後、環境変化に伴った話題選択の変化によって M の中に社会で必要な知識の取得を経てサービス業に就いていた相手に対して敬意の念が生じ、恋愛感情の生起につながった。この頃、物理的距離があり、FtF コミュニケーション状況を作り出す困難性が高かったが、M はアプローチに掛けるコスト負担を惜しまず能動的行動を見せた。

相手の家というプライベートな空間でのコミュニケーションの中で交際前のスキンシップというパーソナルスペースの調整による好意伝達も行った。このとき M は告白による関係変化の試みを行ったが、認識のズレというコミュニケーションノイズの発生のため気持ちの伝達失敗に終わり、関係は友だち止まりとなってしまった。

これを機にコミュニケーションチャネルの限定という距離感調整が行われ、各々恋愛経験を積むに至った。しかし、状況変化をきっかけとしたコミュニケーションチャネルの拡張により再び単純接触機会の増加が見られ、親密な交友関係の維持が見られた。当時、恋人がいたためスキンシップ回避による恋人との区別化が図られていたが、互いに恋人と別れるという恋愛ステータスの変化に伴って関係構築判断が下され、相互の恋愛感情の一致により恋愛関係の成立が果たされた。当時、相手は関係変化への不安を見せつつも「恋人」へのステップアップに同意した。このとき、「人生の伴侶」としての交際申し込みをした M に対して相手は将来的関係への展望生起を強く覚えたという。長期的コミュニケーションの産物として生じた強固な絆によって無意識の内に代替不可な関係が成立していた。

このようにストーリーラインの作成が完了したら最後に理論記述を行う。大谷(2011)によれば「(ストーリーラインは) データの深層の意味を再文脈化した、複合的で構造的な記述になっているので、ストーリーラインを断片化することで、理論記述が行える」(p.159) という。この理論記述を行うことで分析者はテキスト(逐語録)に込められた意味を示すこととなる。なお、大谷は「ここでの理論とは、普遍的で一般的に通用する原理のようなものではなく、『このデータから言えること』である」ことを示している。ゆえに下の表 4-5 に示す理論構築もあくまで「本調査 M の語りから言えること」だと捉える必要がある。

表 4-5 SCAT 分析結果一部、理論構築

- 共通コミュニティでの出会いは「自然な出会い」に位置づけられる。
- 普段関わりのない相手でも第三者を通じて「偶発的」に出会うことがある。
- 一定のコミュニティ内で知り合った場合、交流を通じて交友関係が構築される。
- 相手を「友人」と認識した場合、恋愛対象外だと捉えることがある。
- 生活環境の変化に伴って交流のすれ違いが生じることがある。

- すれ違いの結果、単純接触機会が減少する。しかし、コミュニケーションツールを活用することで「友人関係」の維持が可能となる。
- 自己開示を通して関係の親密化が進む。
- 環境変化に伴って二者間の話題が変化する。
- 相手に対する敬意の念が恋愛感情を生じさせることがある。
- 物理的距離がある場合、FtF コミュニケーションの状況を作り出すのは困難になる。
- 好意がある場合、アプローチに掛けるコスト負担を惜しまないことがある。
- 関係構築には能動的行動が求められる。
- プライベートな空間でコミュニケーションが実践されることがある。
- スキンシップなどパーソナルスペースの調整を通して好意を伝達することがある。
- 告白しても認識のズレというコミュニケーションノイズによって関係が成立しないことがある。
- 気持ちの伝達に失敗した場合、関係は友だち止まりとなる。
- 失恋したことでコミュニケーションチャネルの再調整が行われ、意図的に相手と距離を置くことがある。
- 状況の変化を機に一度縮小したコミュニケーションチャネルが再び拡張することがある。
- 単純接触機会の増加に伴って親密な交友関係が維持されることがある。
- 相互の恋人の有無を基に関係構築すべきか否か判断されることがある。
- 相互の恋愛感情が一致した場合、恋愛関係が成立することがある。
- 交友関係が長い場合、恋愛関係への変化に不安を覚えることがある。
- 強固な絆がある関係は代替不可なものであると考えられる。

このように SCAT 手法を用いて計 13 人分の分析を行い、全員分の理論構築が完了したところで全ての理論構築を比較し、先行研究の内容と照らし合わせつつ参加者同士の類似点と相違点をまとめていった。このとき、改めて本論文の目的である男女が出会ってから付き合うまでのコミュニケーションプロセスに焦点を当てて考察を進めていった。

4.4. 結果と考察

4.4.1. 「出会い」に基づいた恋愛コミュニケーションプロセスの分類

まず、本調査一番の目的であった「出会い」から「付き合う」までのプロセスに焦点を当ててデータ分析を進めたところ、出会いの経路が縮小傾向にある現代で本調査参加者は学校や街なか、街コンや合コン、マッチングアプリ、紹介などさまざまな方法で交際相手と出会っていたことが明らかとなった。その中でも類似する出会い方をした参加者同士のコミュニケーションプロセスには多くの共通項が見られた。そこで筆者は参加者を「交際相手との出会い」に基づいて分類し、学校や職場といったコミュニティの中で交際相手と自然な出会いを果たした M と K を「自然型」、街なかや店などたまたま同じ空間にいた相手と交際に至った D・G・I を「偶発型」、街コン・合コンなどグループ交際がきっかけで交際相手とめぐり合った H と N を「グループ交際型」、マッチングアプリを通じて交際相手と知り合った F と J を「マッチング型」、そして知人や友人に仲介を頼んで交際相手を紹介してもらった A・B・E・L を「仲介依頼型」とした（表 4-6 参照）。

表 4-6 型の分類

型	出会いの場所	本調査の参加者
(1) 自然型	学校や職場	M・K
(2) 偶発型	街なか	D・G・I
(3) グループ交際型	街コンや合コン	H・N
(4) マッチング型	マッチングアプリ	F・J
(5) 仲介依頼型	知人・友人を通じて	A・B・E・L

分類が完了した後は各型に該当する参加者のストーリーラインと理論構築両方に目を通して大まかな関係進展の段階分けを行った。そして、段階分けが済んだ後は各段階の内容を一言で説明するラベリングを付した。例えば下記に示す(1)「自然型」の場合、第1段階は「二人が学校内で出会う」という特徴から「出会い」とラベリングした。

① 自然型（学校や職場での出会い）

最初に取り上げる型は「自然型」である。学校や職場などのコミュニティで「自然な」出会いを通して知り合った相手と交際に至るという特徴から「自然型」とした。本調査では現恋人と大学院で知り合った K（28 歳、高校教員、男性）と専門学校時代に知り合った M（28 歳、会社員、男性）がこの型に当てはまる。表 4-8 は交際に至るまでのプロセスを M の語りを例として用いて示している。

表 4-7 「自然型」モデル（M の場合）

段階	内容例（M の語り）
出会い	「授業は一緒じゃないんだけど、共通の知人とかが、いたから、その学校内で。そこで知り合った」
単純接触	「そんなに遊んだりしてなかったけど、ちょっと学校内でしゃべったりとかしてた」、「『ただの気にも留めない仲良くなった友だち』みたいな感じ」
親密化	「少し連絡を取らなかつたりっていう期間はありつつ、細々と連絡は取ってた」、「社会人になって、仕事の話とかをよくするようになって、今まで知らなかった側面、っていうか尊敬できる部分、仕事に対してとか人としてみたいところが好きになって、そういうところを知っていくうちに、俺が好きになった」
付き合い	「お互いそのときの（恋）人と別れたタイミングが重なったから、まあ、そういう（付き合う）ことになった」、「この先の人生お互い支え合ってるじゃないけど、生きていければいいなと思ったし、それができるのは自分しかいないなと思ったから、『じゃあまあ色々含めて、もう 1 回ちょっと考えてくれん？』っていうような感じで伝えた」、「『結婚前提に』とかいう言葉はその時は、告白する時は言ってないけど、そのつもりで言った」

「自然型」は進学や就職がきっかけで所属したコミュニティの中で知り合った相手と日々の交流を通して親密的関係を築いていき、最終的に交際に至るという特徴を持つ。つまり、一目惚れでもしない限り「出会い」の段階で交際が意識されることはほとんど

ない。本調査では K も M も相手と学校で知り合っていたが、職場や社会人サークルなどの出会いもこの「自然型」に当てはまるであろう。知り合った二人は共通コミュニティで日常的に顔を合わせる「単純接触」の段階（第2段階）を経て、グループ全体の交流から1対1のコミュニケーションがメインとなる「親密化」の段階（第3段階）に移行する。第2段階では互いに好意的印象を抱いていても相手を「ただの友だちの一人」と認識していれば交際は意識されないが、第3段階に入って相手の知らない側面を知り、親密な交流を重ねていく中で相互に特別な感情が生じた場合、交際が意識されるようになる。一方（もしくは双方）が恋愛感情を抱いて交際を希望する場合、「告白」を介して「付き合い」の段階（第4段階）に移行し、二人の交際が始まる。

「自然型」の場合、「告白」を相手から受け入れられなくても友人として関係を保てる可能性が示唆された。例えば M の場合、一度相手から告白を拒否されたが、交友関係を続けた末に再度告白して交際に至っている。また、「自然型」は「付き合い関係」に至る前段階で互いのことを知る期間が設けられていることから交際開始時には長期的な関係を希望する考えがあったことも示唆された。この傾向は高度成長期以前に同じコミュニティ内で相手の性格などを知ることと近いと考えられる。

第2段階では表面的やり取りが多い一方、第3、4段階と関係が親密的になるにつれ、相互の自己開示の幅・深さ広がる点は社会的浸透理論と一致が見られた。加えて段階の名前は異なるものの自己開示と親密度が比例して高まっていく流れは Knapp のモデルとも近いことが確認された。

② 偶発型（街なかでの出会い）

次に取り上げる型は「偶発型」である。街なかや店など「たまたま」同じ空間にいて親しくなった相手と交流を通じて付き合いという特徴から「偶発型」とした。本調査では居酒屋で隣のテーブルに座っていた相手と交際に至った D（27歳、女性、看護師）、恋人と飲み会で知り合った G（26歳、男性、会社員）、街なかでナンパした女性と交際経験を持つ I（29歳、男性、看護師）がこの型に当てはまる。表 4-8 は交際に至るまでのプロセスを D の語りを例として用いて示している。

表 4-8 「偶発型」モデル (D の場合)

段階	内容例 (D の語り)
出会い	<p>「(出会いは) 居酒屋」、「私のテーブルがあって、その人のテーブルが(隣に) あって、で、私はこっちで 4 人で友だちと飲んでて、こっち(相手) はこっちで仲間で飲んでて、そこで私が友だちの誕生日のお祝いをしてて、一緒に、店員さんがケーキで出してきた『おめでとう』って言ってきたタイミングで『おめでとう』って言ってきて、そこでみんなでばーっとなったのがきっかけですね」</p>
限定的交流	<p>「インスタ交換したけどそれでお互い連絡を取ったわけじゃなくて、1 か月後にポツと話を、インスタ内で会話をしてくれて、それでちょこっと話すようになって、『じゃあちょっとご飯行きましょう』ってなって」、「インスタの中で会話をして」、「最初会った時は、何してるかもそもそもわからないし、年齢も正直わからないし。なんかこう怪しい人から話しかけられたし、『怪しいかな』って思った」</p>
親密化	<p>「これからの進路について悩みがあって、なんか知らないけどその人にぼって言ったんですよね。したら、向こうも経験豊富だから(中略)いろいろ相談に乗ってくれた、乗ってくれて、結構あるかな、そっから 2~3 回ご飯行くようになった」、「二人でまたご飯行って、また家行った」、「『人として尊敬できる人』みたいな感じ」、「出会った時から話を親身に聞いてくれてそこで私の中のモヤモヤが、結構晴れたというか、仕事の面でも、すごく解決できてて、すごく感謝してて」</p>
付き合い	<p>「好きとかいう表現じゃなくて『俺と一緒におらん?』みたいな感じで言われた。(中略)『わからんけど、これから先は正直わからんけど、一緒にいたい』みたいな。『支えてほしい』みたいな感じで言われて、『あ、なるほど』と思って、『じゃあよろしくお願いします』みたいな感じで、そこで付き合い始めた」、「私自分のことしか考えてなかったけど、『付き合ってる相手の事も考えないとな』って」</p>

「偶発型」は「出会い」の段階(第1段階)で相手との出会いを予期していない二人がたまたま同じ場に居合わせたことで関係を構築していくという特徴を持つ。互いの情報を一切持ち合わせていない二人は警戒心を抱きながらも「限定的交流」の段階(第2段

階)で表面的会話を重ね、相互の自己開示の蓄積を経て「親密化」の段階(第3段階)に移行していく。その後は「自然型」同様、相互に好意を抱いていることが示された場合、告白を通して「付き合い」の段階(第4段階)に入っていく。

「偶発型」も相互の自己開示の増加によって親密度が高まっていく点では「自然型」と同様だが、同じコミュニティに所属しているわけではないため、どちらか一方が行動を起こさなければ「出会い」は成立しない。Dは相手からのアプローチがきっかけで、Gは「野球好き」という共通の話題を通じて、Iは「可愛い子がおったから『よっ』みたいな感じで」と相手をナンパしたことで「出会い」が成立したと各々語っていた。出会った後もコミュニティ内での交流は期待できないことから相互に働きかけ合って第2～3段階での交流を活性化させる必要があり、「自然型」より相互の自発的行動が求められることが示唆された。なお、本調査の参加者たちはLINE上のメッセージのやり取りや通話を活用して相互にコンタクトを取っていたという。

また「同じコミュニティに所属している人」という点で安心感が得られる「自然型」と異なり、互いの素性が分からない「偶発型」では互いに警戒心が生じ、「自然型」より慎重な関係展開が繰り返されていた。とりわけ初期段階のコミュニケーションチャンネルはSNSといった非対面のそれに限定され、交流を重ねて信頼が高まったところで初めて対面でのやり取りも繰り返されるようになっていた。

「偶発型」に分類された人は「出会い」から「付き合い」までの期間が比較的短かったことから交際開始後に互いの理解度を深めようとする姿勢が見られた。例えば、恋人と知り合う前から海外渡航が決まっていたDは相手に相談して今後の関係のあり方を話し合い、Gは交際開始をきっかけに相手が甘えた態度を取ってくれるようになったと語り、ナンパした相手と交際したIは相手との価値観の不一致で破局したという。すなわち、交際前には知り得なかった相手の姿を「付き合い関係」という親密的な関係に以降したことによって見られるようになったと考えられる。

③ グループ交際型(街コンや合コンでの出会い)

出会いが街コンや合コンなどのグループ交際であるものを「グループ交際型」とした。自ら出会いの経路を求めて街コンを利用したり、友人に合コンを組んでもらったりして相手と出会い、その後交流を通じて付き合いパターンである。本調査では恋人と街コン

で知り合った H (26 歳、男性、会社員) と合コンで知り合った N (28 歳、男性、会社員) がこの型に当てはまる。出会いから交際に至るまでのプロセスを N の語りを例に下の表 4-9 に示す。

表 4-9 「グループ交際型」モデル (N の場合)

段階	内容例 (N の語り)
経路探求	「当時めっちゃ合コンしてる時期があって、(同僚 1) の順番の時に、開いた合コンでなんか、そのときね」
出会い	「(同僚 1) は(彼女)と同級生だからね。中学校かな、中学校かなんかの同級生で、それで開いて、会ったのが一番最初」
全体的交流	「その合コンが、飲み会、今までの飲み会で、飲み会よ、合コンじゃなくて飲み会というものも含めて、一番楽しかったんよ」、「(合コンの後)、俺・(同僚 2)・(彼女)で 2 回目飲み行った」
個人的交流	「『夜飯一人で食うのもなあ』みたいに思ったタイミングがあって、その時に(彼女)を呼んだんじゃない? 電話で。『元気? 暇やろ? 飯行こうや』って言って」、「『多分仲良くなれる人なんだろうな』ぐらいの感じでしかなかった」
親密化	「TAO 見て、熊本多分行って、糸島もその後行った」、「(彼女が) 動画を作ることになって、うち(N の家)で結構編集作業とかしてた」、「うちに 1 回泊まった」、「朝起きたタイミングで、俺も何を思ったかわかんないけど、一回ぎゅって抱きしめてみた」
付き合い	「(相手から)『N 君がそういう(付き合ってもないのにハグをする)人なんであればもうやめて』(と言われた)」、「『どうしようかな』と思ったけど、面白い人だし、その時もう 4~5 年ぐらい彼女もいなかったし、まあ付き合ってみようかなっていうのがあって」、「付き合う時点で『好き好き大好きです』は絶対ない。まあ『なんか楽しそうだしいいかな』ぐらいね。正直に言うとね。そんな感じ。あと俺もぎゅっとしてしまった手前『それでなんかね』って思ったのも、正直多分(ある)」

「グループ交際型」は日々の生活の中でたどり着ける出会いの経路に限界を感じ、交際相手と出会うことを目的とした「(出会いの) 経路探求」を行うところからプロセスが始まる。ここではまだ二人が出会っていないことから第0段階とする。なお、「グループ交際型」で出会いの経路を探求するオプションには企業が企画・開催する「街コン」への参加と友人への「合コン」開催依頼の2つが挙げられる。第1段階の「出会い」では、「結婚相手を見つけたい」、「同世代の恋人が欲しい」、「自分と同じ趣味を持つ人と出会いたい」など、自分の目的に適した「出会い」の場に足を運んで相手と出会う。グループ交際型では、グループ対グループの「全体的交流」の段階(第2段階)から二人の関係が始まる。この段階では先行研究でも示されているように全体の空気を盛り上げるのが一番の目的となるが、同時にライバルである他の同性との差を異性にアピールすることも求められる。そこで相互に興味を持った者同士が「個人的交流」の段階(第3段階)に移行して初めて1対1のやり取りが生じる。その後、交流を重ねるにつれて「親密化」の段階(第4段階)に入れば、より親密な行動(宿泊やハグ)が増え、「告白」を通じて「付き合い」の段階(第5段階)に移行していく。

第3段階の「個人的交流」でNは相手を恋人候補ではなく、「一人の友人」と認識して誘ったと語っていたが、交際相手と街コンで知り合ったHは「やっぱね、25〜6(歳)の男女が二人で遊ぶってそういうことじゃん?しかも街コンで出会った女の人やけんさ」と、「街コンで出会った異性と二人だけで会う」という行為に特別な意味を見出していた。なお、「グループ交際型」で知り合う人は出会いの目的そのものが「交際」であるため、相互関心が十分高まれば相手に強い恋愛感情を抱いていなくても「この人と付き合ってみようかな」と興味本位で「交際」に至ることも示唆された。そのため、「付き合う関係」になっても最初はお試し交際感覚で相互に様子をうかがい、徐々に恋人として相手を見るようになったという意見が見受けられた。

④ マッチング型 (マッチングアプリでの出会い)

アプリ上で知り合った相手と交流を重ね、付き合いに至るものを「マッチング型」とした。同じ経路探求の末に関係が構築される「グループ交際型」との違いは第1段階の「出会い」から二者間の個人的関係が構築される点にあり、本調査では恋人とアプリで知り合ったF(32歳、女性、会社員)とJ(27歳、女性、薬剤師)をこの型に分類した。

表 4-10 は交際に至るまでのプロセスを F の語りを例として用いて示している。

表 4-10 「マッチング型」モデル (F の場合)

段階	内容例 (F の語り)
経路探求	「(出会いは) アプリ」
認知	「アプリってさ、写真か数字かなって思っと思って、私。それしか選びようがないやん？性格とか全くわからんし。で、まあ (交際相手は) 写真見てさわやかやし、いいなと思ったし、年齢もちょうどいいなって思ったし、身長もいいなって思ったし」
探り	「すぐメッセージ来たと思う」、「なんかメッセージやり取りしとって、結構雑な人とかいきなりタメ口の人とかもおるやん？なんか私そういう人 (は) 嫌で。で、結構ちゃんと敬語やし、それもいいなと思って」、「どんどん (メッセージが) 長文になってる」
お試し	「3月の多分中旬ぐらいからやり取りして、で、『会おっか』ってなったんかな」、「ランチ行った」、「ちょっと (印象) 落ちたけど、でも『写真通りやな』みたいな感じ」
親密化	「その後も毎日 LINE やりとりしてて」、「お互い土日休みだったから、その後毎週会ってた」、「めっちゃ計画立ててくれて」、「海の中道？お花が綺麗。見たかったけん私が、『見たい』って言ったら連れてってくれたりとか」、「ずっとデートみたいな感じだった。呼子にイカ食べに行ったりとか」、「『何でこの人告白してこないんだろう』って思った」
付き合い	「恋バナをちょっとしたら、『話したいことがあるけん明日会える？』みたいな。『わかった』って言って。もうだから、お互いなんかもう何を話すっていうのも分かってるし、だからもうオッケー前提で会うみたいな」、「『すぐじゃないけど、すぐの結婚とかじゃないけど、結婚を視野に入れて付き合おう』みたいな」、「手繋いだりとか恋人らしいことを一切してこなかったから、それが変わったかなっていう感じ」、「向こうがどんどん私のことを好きになるっていうのがわかった」

「マッチング型」は「グループ交際型」と同様に「異性との出会い」を求めて行動する「経路探求」の段階 (第 0 段階) からプロセスが始まるが、使われるツールはマッチング

アプリである。アプリによっては年齢や職業といった基本情報に加え、家族構成、年収、身長や体型といった非常に個人的な情報までプロフィールに記載される。利用者はこの情報を基に自分の理想に近い交際相手を探すことができる。一方で、F の語りにもあるように写真や数字など表面的情報に限定されるため交流前から一定のバイアスが生じてしまう可能性も考えられる。なお、マッチングに関して多くのアプリが「いいね」を送り合うシステムを採用している。これは、検索画面上で交流してみたいと思う相手に「いいね」を送り、相手からも「いいね」や「ありがとう」が返ってきたらマッチング成立となり、メッセージ交換が可能となるシステムである。この「いいね」を送り合う段階は「認知」の段階（第1段階）で、プロフィールの写真と登録された情報から互いに認知することとなる。その後、アプリ内でメッセージ交換をして相性を見極める「探り」の段階（第2段階）に移行するが、F の語りでは相手の礼儀正しさも重視されることが示唆された。日本人のマッチングアプリ事情について調査した Farrer and Gavin (2009) によると、対面と比べて情報量が少なくなるマッチングアプリでは敬語を適切に使えているかなど「相手の礼儀正しさ」も判断基準に大きく関わるといふ。この段階で双方が実際に会って交流してみたいと感じた場合、次の「お試し」の段階（第3段階）で2人は初めて対面することとなる。このとき実際に会った上で交流の継続を希望する気持ちが二人の中に生じた場合、「親密化」の段階（第4段階）に移行し、交際を意識した「デート」が重ねられるようになる。その後、交際が強く意識されたところで「告白」が実行され、「付き合い」の段階に移行していく（第5段階）。

既出の型（「自然型」、「偶発型」、「グループ交際型」）では対面での交流を経て相互の印象形成が行われていたのに対し、「マッチング型」では一定の印象形成が行われた後に初対面が果たされていた。すなわち、対面前の「認知」の段階では登録データとアプリ内で交わされるメッセージのみで相互の印象が決まることを意味する。データに関しては本人が記入・編集するため自分を良く見せようと情報を捏造したり誇張したりすることもできる。そのため、初対面の場で行われるのはアプリ上のやりとりを通じて作られた印象と対面時の印象の照合であり、自分の中で構築されたイメージと全く異なる見えないし性格の人が現れたら不安な気持ちになることもあり得る。また、参加者の語りからメッセージのやり取りした相手であっても「お試し」の段階では初対面であることに変わりはなく、比較的表面的で建前のコミュニケーションが取られることも示された。なお、「お試し」の段階で相性の不一致が見られれば2回目以降、同じ相手と会うことは

ないことが以下の F の語りから見て取れる。

（会うのは）1回こっきりの人が結構多い。本当私今年になってアプリを始めたんだけど、めっちゃ詰めて会ってて、1回こっきりの人が多いかな。2～3回遊んだ人は数人、本当に。「難しいな」と思う。「本当に難しいな」と思って。お互い「いいな」と思って「いいね」して、メッセージ重ねて、メッセージ重ねても会わない人とかもいっぱいいるのに、メッセージ重ねて「この人だ」と思って会って、でも「やっぱ違うな」ってなるから。

登録者数が膨大なマッチングアプリだからこそ日頃出会えないような人とも出会うことが可能となる一方、「付き合い」に至るまでの道のりは容易ではないことがわかる。また、「グループ交際型」同様、交際を目的に出会った二人は常に「付き合い」を最終ゴールとして交流を図る。「認知」の段階から「この人と付き合ったらどんな感じなんだろう」と考えながら関係を構築していくため、先行研究で取り上げた *relationshopping* のように相手を値踏みするような感覚に陥ることもあるだろう。交際を念頭に置いて知り合った二人はゴールが明確であることから相互に強い恋愛感情を抱いていなくても「付き合い」に至る可能性も示唆された。なお、F も J も価値観の不一致から相手とは破局しているという。このことから「マッチング型」では「付き合う関係」に至っても深い相互関係が完成していないため、お試し感覚で本当に恋人としてやっていけるのか関係が続けられると考えられる。

⑤ 仲介依頼型（知人・友人を通じての出会い）

最後は、自ら出会いの経路を求めて第三者に仲介を依頼し、知り合った相手と最終的に付き合うという特徴から「仲介依頼型」とした。本調査では恋人を友人に紹介してもらった A（25 歳、女性、会社員）、元同僚に紹介してもらった B（26 歳、女性、休職中）、上司に紹介してもらった E（24 歳、女性、ホテルコンシェルジュ）、そして同じく上司に紹介してもらった L（25 歳、男性、大学職員）がこの型に当てはまる。表 4-11 は交際に至るまでのプロセスを A の語りを例として用いて示している。

表 4-11 「仲介依頼型」モデル (A の場合)

段階	内容例 (A の語り)
経路探求	<p>「(出会いは) 友だちの紹介」、「(紹介者は) ほぼほぼ毎日のように LINE しとる友だちなんよ。だからだいたい向こうの好みも私の好みもわかるし、(中略) ヨーロッパとかも一緒に行った友だちだから、なんとなくこう感覚は、わかる子」</p>
認知	<p>「『とりあえずご飯行き』って言われて、LINE 教えられ」、「その時はお店の場所とかそういう話しかしてなくて、そんな話してない」</p>
お試し	<p>「(初めて会った日の) 帰る時に『じゃあまた次もよければご飯行こう』って」、「LINE は『じゃあまた行けそうな日があったら連絡する』で終わってる」</p>
親密化	<p>「2 回目行って、次熊本までドライブ行って」、「桜見ようってなったけど桜全然、開花日が遅れ、全然 (咲いて) なく、でもその近くのごはん屋さんに行き、何か友だちが美味しいって言ってたソフトクリーム屋さんがたまたまその辺であったから『じゃあそこ行こう』ってなって、何だっけ、なんか滝みたいなところあるじゃん。裏に入れる滝。そこになんかいつもないけど夜にライトアップされるみたいな滝に行き、帰った」</p>
付き合い	<p>「『ちょっとさ、真剣な話していい?』みたいな。『どうぞ (笑い)』って感じ」、「なんかあんまり『好き』っていう感情がなかったと言うか。なかったけど、本当に『ここが嫌だな』って思うところがなかったから」、「どうなんだろうって思ってたけど。まあそれこそなんか『次の人と結婚しよう』というのは思わなかったから。そしたらさ、踏み出せないじゃん、いろんな条件があったら。だからまあ『ダメだったらダメでいっか』って」</p>

「仲介依頼型」も「経路探求」からプロセスが始まる点は「グループ交際型」や「マッチング型」と同様だが、自ら出会いの場に出向くのではなく、仲介者に仲介を依頼して出会いを求める (第 0 段階)。依頼が通れば仲介者によって出会いが提供され、相手とのつながりが出来て「認知」の段階 (第 1 段階) に至る。その後、紹介者から促進を受けつつ二人は「お試し」の段階 (第 2 段階) で対面交流を行う。この頃から LINE といった

非対面コミュニケーションに加えて対面コミュニケーションが取り入れられ、徐々に「親密化」の段階（第3段階）に移行していく。この段階で相互に相性の一致が見られ、今後の関係に可能性を見いだせた場合「告白」が実行され、「付き合い」の段階に至る（第4段階）。

この型の最大のメリットは仲介者から事前に相手の情報を入手することができる点にある。先の「マッチング型」とは異なり、紹介者の保証付きで相手に関する情報の信憑性は一気に高まる。なお、A、B、Eに関してはLINEを通じて相手と最初の連絡を取っていたが、上司の紹介で恋人と知り合ったLは互いの上司含んだ4人での会食で相手と初対面を果たしていた。また、「お試し」の段階で相手と交流を開始する際、「グループ交際型」や「マッチング型」とは異なり、紹介してくれた人の面子を意識することから比較的建前的なコミュニケーションになりがちであることが示された。さらに以下のLの語りにも見られるように「付き合い」の段階に至るまでの間、相互の相性が一番重要視されることが示唆された。

（相手が）一緒に楽しんどったら楽しんでくれるって思えた。（中略）当時の自分の恋愛観は「好きな人と付き合う」っていうよりは「お互いになんか癒し合えればいいな」っていう風なのがあったけん。その時はね。それで、好きになった。「どこが好き」、「あそこが好き」とかはなかった全然。別に外見もタイプじゃない。

この語りから読み取れるように、「仲介依頼型」では「グループ交際型」や「マッチング型」同様、交際が最終ゴールとして定められているため、互いに相手との交流に問題がないと感じられれば強い恋愛感情がなくても交際に至ることがあると考えられる。

今回、分析を進める中で参加者の交際相手との出会いに基づいてコミュニケーションプロセスを「自然型」、「偶発型」、「グループ交際型」、「マッチング型」、「仲介依頼型」の5つに分類し、その上で各型に見られるコミュニケーションプロセスを探索していった。このように出会いに基づいてさまざまな型に分類できることは新たな知見だと考えられ、現代の日本で恋人が欲しいと感じた際には自分の状況に見合った型を選択する必要があることを示唆していると捉えることができる。

4.4.2. 「偶発的出会い」と「自律的出会い」

今回、「交際相手との出会い」に基づいて分析を進めた結果、5つの異なる型とそれに伴うコミュニケーションプロセスが示し出された。この結果は本調査から導き出された新たな知見だと捉えることができる一方、上の紹介では各型のプロセスを述べただけに過ぎず、それぞれどういった特徴があるのか掴みきれない。そこで筆者は上記に挙げた型の特徴をそれぞれ比較し、各型の間に見られる類似点および相違点を割り出していく。すると、5つの型は(1)交際を目的とせず出向いた先での出会いが交際に発展した「偶発的」なもの(「自然型」、「偶発型」)と(2)最初から交際を目的に出会いの経路を探求する「自律的」なもの(「グループ交際型」、「マッチング型」、「仲介依頼型」)のどちらかに分類できることが示唆された。

このことは、見合いや職縁といった受け身的な出会いが主流だった日本の交際事情に自発的な出会いが取り込まれるようになったことを意味し、出会いの経路が縮小する中で生じた傾向だと言えよう。物事の生起に対し、自分たちが主体となって「なす・する」と考える西洋と比べて、物事が自ら特定の状態に「なる」と捉える日本人(Okabe, 1983)には「交際相手との出会い」も「気づけば生じていたもの」であり、自ら求めるものではなかった。しかし、本調査では自ら行動して出会いを「作る」という人びとの主体的行動が見受けられた。つまり、昨今では、見合いや職縁などの「なる型」の出会いだけでなく街コン、合コン、アプリ、紹介など「なす型」の出会いも増えていることが読み取れる。今回は、それぞれの出会いの特徴から「なる形」に分類される出会いを「偶発的出会い」、「なす型」に分類される出会いを「自律的出会い」とラベリングし、コミュニケーションの観点でどのような違いが見られるのか考察を進めた(表4-12参照)。

まず、2つの出会いの最大の違いは、プロセスの始まりが『「出会いの経路」の探求』であるかどうかである(1)。「偶発的出会い」では自身の所属コミュニティやたまたま出向いた先での出会いが結果的に交際につながることから本人が交際を目的とした経路の探求を行ったわけではないことがわかる。反対に、「自律的出会い」では出会いの経路が縮小傾向にある現代で「恋人は欲しいけれど日々の生活の中で異性との出会いがない」、「このまま毎日同じように過ごしていても恋人になり得る人との出会いは見込めない」と感じた人たちが自律的に行動して出会いの経路を開拓していったことがわかる。その内の一つの方法として、自ら出会いの経路を探求して多くの人と関わることで交際相手

候補と出会う可能性を高めることが挙げられる。例えば、友人に仲介依頼した A は紹介を受ける前の段階で紹介者に恋愛をしたい旨を伝えていた。

表 4-12 「偶発的出会い」と「自律的出会い」の特徴

	偶発的出会い (自然型・偶発型)	自律的出会い (グループ交際型・ マッチング型・仲介依頼型)
(1) 経路探求	不要	必要
(2) ツール活用	なし	あり
(3) 印象形成	日々のコミュニケーション	相互の値踏み
(4) 他の異性交際	特になし	複数の相手と同時進行
(5) 進展速度	比較的遅い	比較的早い
(6) 交際前の関係	友人・知人など	ラベリング困難
(7) 告白の役割	イベント的：恋愛感情重視	儀礼的：関係の承認
(8) 告白成立時	関係の基盤あり	お試し交際
(9) 告白不成立時	元の関係に戻る可能性あり	完全な離縁

次に「偶発的出会い」ではコミュニティに所属したり特定の場に出向いたりした結果相手と出会うのに対し、「自律的出会い」では街コンや合コン、マッチングアプリ、知人・友人といった「ツール」が使われる(2)。なお、どのツールを選択するかによってその後のコミュニケーション内容にも変化が見られたことから自分が置かれた状況や自分の性格に合ったツールを選択する必要があると考えられる。例えば、今回分析からは除外した O (26歳、男性、会社員) は同性の友人から「女の子を紹介して」と頼まれて「恋のキューピッド役」を引き受けることが多々あると語っていた。以下に O の語りの一部を抜粋して示す。

基本的には友だちと一緒に街コンとかは合コンとかはよく、やったりするけど、どっちかって言ったら俺が彼女欲しいとかいうよりも、友だちに彼女を作るみたいな感じのことをよくやってるかな。

こいつは、こういうところを、なんかこういうところがいいポイント、アピールポイントみたいなどころがあるけん、そこをもっと弄ったり、深掘りしてあげて、で、いいところ（を）、なんか、相手（の女性）に伝えようかな、みたいな感じ。

〇〇（友人）って全然喋らんけど、仲良くなったりすると、まあ何か面白いことがどんどん言えるようになるんよ。（中略）〇〇（友人）の場合だと、逆にいじってあげる。と、あいつが自然と言葉発するようになってくるんよ。そこでなんか「こいつ普通に喋れる面白いやつなんだな」って思ってくれたら一番ベストかなっていう。

この〇のように出会いの経路を提供してくれる上にアプローチも手助けしてくれる友人は出会いの経路を求める人にとって大変ありがたい存在となるだろう。実際に〇は街コンで恋人と知り合ったHの恋愛もサポートしており、H自身「あいつ（〇の存在）でかいよ。あいつおらんやったら（いなかったら）だめやね」と発言していた。

また、「偶発的出会い」では出会いの段階で当事者が交際を意識していないことから日々の何気ないコミュニケーションを経て印象形成が行われるのに対し、「自律的出会い」では「付き合うこと」が最終的な目標として定められていることから「この人は私が求める理想の恋人像にどれだけ当てはまるだろうか」といった考えを持って相手と接し、互いに値踏みするかのように情報を探り合うようになることも示唆された(3)。例えば、出会う前の段階で相手の情報が閲覧できるマッチングアプリでは、登録された情報（容姿・職業・年収など）を基に会員同士が相互の魅力を判断する。利用者はマッチングが成立する確率を高めるために自分を良く見せようとプロフィール内容に気を配り、自分が思い描く「理想の恋人像」に少しでも近い人を求めて検索をかけていくだろう。

さらに「偶発的出会い」では本人が交際を求める場合を除いて交際を目的とした異性交流は限定される一方で、「自律的出会い」では自分に合う相手を探すために複数の異性と同時進行で交際を意識した交流が執り行われていた(4)。例えば、恋人との出会いが合コンだったNは「当時めっちゃ合コンしてる時期があって」と語り、恋人と出会った当初は交際を意識した女性数人と個別でご飯に行くことがあったと言っていた。紹介で恋人と知り合ったAも「同時進行で違う人にも会いよったんよ。それも友だちの紹介で。でもなんかその人とは本当に話が進まないっていうか、なんか自分が思っていない返答が返ってきたりとか。それもあって（今の恋人に対して）すごく話しやすい印象がついた

かな」と、他の異性との交流と比較した上で交際相手に対する確固たる印象が形成されたと語っていた。

続いて出会いの段階で交際を目的にはしていない「偶発的出会い」では「付き合い」の段階に至るまでに比較的長い時間を要するのに対し、最初から交際を意識する「自律的出会い」では関係の進展が比較的早いという特徴が見られた(5)。「付き合う関係」とは異なるが、リクルートブライダル総研による『自律的出会いの提言』でも『自律的な出会い』は理想との合致度が多く、項目でほかの出会い方より高く、結婚までの期間が短い(p.18)と示されており、「排他的関係を結ぶ」という二者間の共通目的が関係発展を促進させると考えられる。だからこそ「マッチング型」の例でFが述べているようにデートを何度も重ねている相手(男性)が交際を志願しなければ「何でこの人告白してこないだろう」という疑問が生じることがある。

なお、プロセスの中で「付き合い」の段階に至れば出会い方に関係なく二人は「恋人」という関係になるが、「付き合い」に至るまでの関係の認識については違いが見られた。「偶発的出会い」では交際前の相手との関係を「友人関係」、「先輩・後輩関係」、「同僚」、「知人」など容易にラベリングできるのに対し、「自律的出会い」では二人の関係に名前を付けることは比較的難しくなる(6)。例えば、紹介で恋人とは知り合ったAは交際前の経験を振り返って「いつものライトアップだからテレビクルーが来てて、なんか『取材いいですか?』みたいな時がちょっと一番気まずい。付き合ってもないし、友だちでもないしみたいな」と語り、街コンで恋人と出会ったHも「今まで(付き合い前まで)はやっぱ友人でもないかな知人?なんだろう?」と疑問を呈していた。その後、Hは、ゲーム『実況パワフルプロ野球』に出てくる「彼女候補」という言葉を用いて付き合い前の関係はそれに当たるのではないかと語っていた。

また、先行研究でも示したように日本で男女が「付き合う関係」を構築するためには「告白」が大きな役割を持つ。本調査でも参加者は全員「告白」を経て「付き合う関係」に至っていた。しかし、この「告白」に付与される意味も出会い方によって異なった(7)。

「偶発的出会い」では、すでに構築された関係(友人関係、同僚関係、先輩・後輩関係、知人関係など)から「恋人」へ方向転換させることを目的に実施されることから「告白」は「イベント的」要素を有する一方、「自律的出会い」では初めから交際目的であることから「告白」は「儀礼的」なものに過ぎず、二者間の中で結ばれる目に見えない契約に判を押すような感覚で行われることが示唆された。

加えて「付き合う関係」に至った場合「偶発的出会い」で知り合った二人は既存の関係が土台となって交際開始後に大きな認識のズレが生じる可能性が低いいため長期的関係が期待されるのに対し、「自律的出会い」で知り合った二人は互いに知らないことが大部分を占めることから「一旦恋人になって様子を見ましょう」という認識が強くなる（8）。これは各型の説明部分でも示したように交際開始時には恋愛感情より相性の良さが重視されるという点が大きく影響しており、見合い結婚が中心だった時代の『恋愛』は結婚してからすればよい」と近いものを感じる。ただ、性格が合わないと思っても簡単に別れられなかった昔の見合い結婚と比べて現代では「付き合ってみたら相性が悪かった」という理由で別れても非難を浴びることはない。だから「とりあえず付き合ってみよう」という考えが生じるのではないだろうか。

最後の違いは告白が成立しなかった場合に関するものである。一方が告白し、他方が告白を断った場合でも「偶発的出会い」の二人は同じコミュニティに所属している限り友人関係や同僚関係を続けていくことが選択肢の一つとして挙げられる。しかし、「自律的出会い」で知り合った二人は「付き合う」という共通目標を見失ったことになることから出会う前の状態に逆戻りし、関わりのなかった赤の他人に戻る（9）。そもそも「自律的出会い」では一方もしくは双方が相手との交際に関心を抱いていない場合、当初の目的が失われることとなり、「告白」にすら至らない可能性が高い。マッチングアプリで相性が合わないと感じたら2回以上会うことがないと語っていたFの語りからもその様子がうかがえる。

4.4.3. 時代背景に伴った「出会い」の変遷

本論文の冒頭で、交際につながる出会いの経路が縮小していることから「(異性との)出会いがない」と悩む未婚者が増えているという課題を取り上げた。本調査では出会いの経路の縮小に合わせて自ら行動し、出会いの経路を探求する人びとの動きが見られた。この自発的行動によって生じる「自律的出会い」は今後の日本人の恋愛に大きく関わる概念だと考えられる。

この新しい出会いのあり方に関して、リクルートブライダル総研（2017）は『『自然な出会い』は本当に幸せになれるのか～恋愛困難時代を乗り越える『自律的出会い』の提言～』と題した提言書で以下のように主張している（p.2）。

昨今、「自然な出会いがいい」という話を多くの未婚者から聞く。自分の置かれた環境下で、日常的に生活をしながら、理想の人と出会い交際に発展していく。つまり、あえて出会おうと行動するのではなく、自然な流れで出会うということである。しかし、本当に大切なことは「誰と出会うか」である。にもかかわらず「どこで出会うか」にこだわりすぎていて、大きな機会を逃しているように思う。

この人びとが持つ「どこで出会うか」へのこだわりは、「恋愛は誰にでもできる」という恋愛至上主義的イデオロギーによってもたらされているのではないだろうか。例えば、英語の *fall in love* を訳した「恋に落ちる」といった表現から「恋愛」は「気づいたときには始まっているもの」という感覚が人びとの中に根付いていることがわかる。そんな「自然に生じるもの」と捉えられている恋愛に対して自ら動いて求めていくことに抵抗を感じる人は少なくない。2017年にリクルートブライダル総研が行った調査では、「出会ったきっかけを親や友人に堂々と言えたか」という問いに対して出会いのきっかけが「学校・サークル」であった人の75%が「はい」と回答している一方で、「婚活サービス」がきっかけで相手と知り合った人は27.5%しか「はい」と回答していない。このように恋愛至上主義イデオロギーが未だ強い力を持つ現代で、「自律的出会い」は「真正な恋愛」と結びつかないと認識される可能性が高い。

一方で、リクルートブライダル総研が2019年に実施したアンケート結果を見ると婚活サービスの利用経験割合は2017年の15.6%から23.5%と大幅に上昇しており、人びとの交際に対する自発的行動に対する抵抗が徐々に弱まっていることがわかる。イエとイエの繋がりが最重視され、見合い結婚が主流だった時代から日常の中で出会う相手と「恋に落ちて」交際を重ねて結婚していた時代を経て、今後は交際を求める人同士が自ら行動して交際相手を探し求める「自律的出会い」が普及していくと考えられる。つまり、現代の日本は交際につながる出会いの形が変遷の時を迎えていると言えるだろう。以上のことから、今後日本で恋愛コミュニケーションについて調査を行う際には「二人の出会いのきっかけが何だったのか」に着目することが求められると結論づけられる。

出会いの経路に関しては以下のとおり、テクテク株式会社(2019)が図式化しているように数多くのサービスが提供されており、自分の状況や性格、求めるものに合わせて選ぶことが可能となっている(p.70 図4-2、表4-13 参照)。

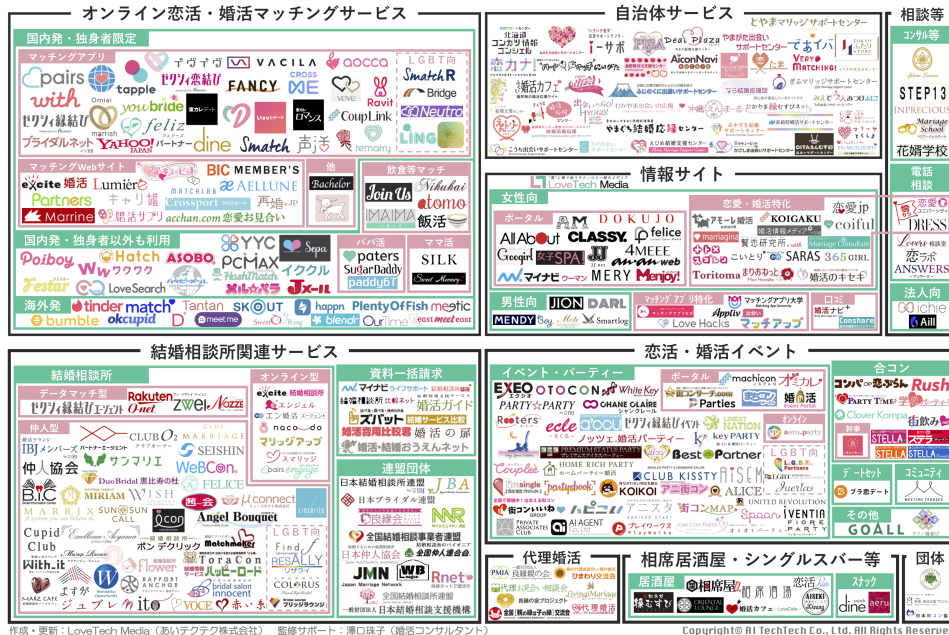


図 4-2 出会い支援サービス

出典：テクテック株式会社 (2019). 「LoveTechMedia」『出会い支援サービス カカオマップ 2019』 <https://lovetech-media.com/lovetechlifelab/deaicaosmap/> (2020年9月4日最終閲覧)。

表 4-13 カオスマップ大分類情報

オンライン恋活・婚活 マッチングサービス	インターネットを通じて出会いを提供するサービス (左上)
結婚相談所関連サービス	結婚相談所形態のサービス (左下)
自治体サービス	地方自治体が提供するサービス。ここでは各都道府県営の ものを掲載 (右上)
情報サイト	出会い支援につながるようなメディア等の情報サイトサ ービス (右真ん中)
恋活・婚活イベント	主にオフラインのイベントやパーティーサービス (右下)
代理婚活	主に親御さんによる代理婚活支援サービス (真ん中下)
相席居酒屋 シングルスバー等	婚活や恋活目的の人に、飲食しながらのマッチング機会を 提供する店舗サービス等 (右下)
相談等	直接のマッチングではなく、恋愛や婚活についての相談に 応じるサービス (右上)

参照：同上

また、参加者の語りからも見られたように自分の身の回りの人に相談し、かつての見合いに近い「出会い」を提供してもらうことも一つの手段になっている。とりわけ恋愛の嗜好品化ないし多様化が進む現代では恋愛に何を求めるかが人によって異なると考えられ、多くの人のニーズを満たすコンテンツが今後も作られていくと予想される。

4.4.4. 関係初期の不確実性減少行動

不確実性減少理論（Uncertainty Reduction Theory）を提唱している Berger and Calabrese（1975）は、人は未知の他者と出会った際、相手に関する不確実性を少しでも抑えて予測可能性を高めようとする傾向にあると主張する。なぜなら、それまで関わりのなかった相手というのは不確実性の塊であり、相手の行動が予測できないことは大変居心地が悪いからである。長期的な「付き合う関係」を築こうと思うならば尚一層相手のことを深く知っておきたいと思う人がほとんどであろう。

見合い結婚が主流だった頃は仲人から相手の顔写真と共に家柄や趣味などが書かれた釣書を受け取ることができた。職縁結婚が主流だった頃は仕事を通じて相手の雰囲気やコミュニケーションスタイル、おおよその収入を把握することが可能だった。一方で、見合いや職縁の文化が衰退した現代では事前に相手の情報を得ることは難しい。では、現代を生きる本調査の参加者たちはどのようにして相手の情報を収集したのだろうか。この疑問に対する答えを探るべく、各型の人びとの不確実性減少行動に着目してプロセスを見返してみた。

まず「自然型」の場合、同じコミュニティに所属していることから職縁で出会うのと同様にコミュニティ内で相手の様子を観察し、交流する機会があれば直接相手と会話を交わすことで互いの情報を得ることができる。例えば、社会人になった後に通い始めた大学院で恋人と出会った K は授業準備の一環で相手の女性と共同作業することになり、それがきっかけで交流を重ねるようになったという。専門学校時代に恋人と知り合った M も初めの頃は共通の友人を交えての交流を通じて相手のことを知っていったという。そもそも同じコミュニティに所属しているという時点で相手との間に何らかの共通点があり、交流を始める段階で他の型より不確実性が低くなると考えられる。

次に「偶発型」の場合、たまたま同じ空間にいただけで相手の素性は全く分からない状況にあるため、まずは相手の様子を客観的に観察することから始められる。例えば、

恋人との出会いはナンパだったと語った I は街なかで相手の女性を見かけた際「はい、かわいい！はいかわいい人通った今！」と咄嗟に判断し、声を掛けたという。この場合、相手を見て得られる情報は容姿のみのため、そこを判断基準に関係を築きたいか否かの判断が下される。共通のコミュニティを持たない二人は自発的に交流の場を作ることが求められるが、本調査参加者の多くは LINE や Instagram といった SNS を通して相手との交流を重ね、その後改めて対面で会い、徐々に相互に対する恋愛感情を構築していたことが示唆された。

「グループ交際型」では第 0 段階である「経路探求」で自分が求める交際相手の特徴を絞ったり、交流の場にどのような人が来るのか予想したりすることが出来る。例えば、「趣味コン」と呼ばれる類の街コンに行けば自分と同じ趣味を持つ相手と出会うことができ、「ぽっちゃり女子」、「高身長男子」と題された街コンに参加すれば自分好みの体型の相手と出会うことも可能となる。「20 代限定」、「30 代限定」と年齢で区別されている街コンもあり、自分がどんな相手と出会いたいかで参加するイベントを選択することができる。合コンの場合は幹事である男女二人が参加メンバーを集めるため、どのような人が参加するのか事前に尋ねることが出来る。例えば、恋のキューピッド役を担う機会が多いという O は合コンのセッティング依頼を受ける際、そのセッティングを依頼した男性と仲良くなれそうだと思う女性に女性側の幹事を頼むという。どの女性に幹事を依頼すれば良いのか慎重に吟味することで「この子だったら多分女の子呼んでくれるし、あとは変な子も来んやろうな」と信頼を寄せることができるという。加えて O は全員が集まった際には全体での交流を促して、参加者同士の不確実性減少を図ると語っていた。なお、参加者たちは互いの言動を観察して相手の魅力度を測ると考えられる。

「マッチング型」では第 0 段階の「経路探求」と第 1 段階の「認知」の際にアプリ上に登録されている情報を元に相手がどのような人なのか判断を下す。日本で一番利用者数が多い Pairs (ペアーズ) のプロフィールを参考に見てみると、掲載情報は、写真と自由記述式の自己紹介文に加えて身長、体型、血液型、居住地、出身地、職種、学歴、年収、喫煙・禁煙、家族構成、同居人の有無、国籍、話せる言語、結婚歴、子どもの有無、結婚に対する意思、子供が欲しいか、出会うまでの希望(「マッチング後にまずは会いたい」、「気が合えば会いたい」、「メッセージを重ねてから会いたい」、「選択なし」から選択)、初回デート費用(「男性が全てを払う」、「男性が多めに払う」、「割り勘」、「持っている方が払う」、「相手と相談して決める」、「選択なし」から選択)など、多岐にわたる。各情報

は未記入・未選択でもアプリを利用できるが、ある程度の情報を記載しておかなければ相手から警戒されてしまう。実際に恋人とマッチングアプリを通じて知り合ったF・Jも相手のプロフィールの顔写真や情報を見て交流することを判断していた。とりわけJに関しては、交際相手に求める職業を「医者」に限定していた中で職業欄に「医者」と記載されている相手から「いいね」が送られてきてマッチングが成立したという。このことからマッチングアプリでは一覧化された相手の情報に目を通し、表面的情報ではあるが相手のことを知って不確実性を下げることができると考えられる。ただし、先にも述べたようにここに登録されている内容は登録者本人が自由に編集することができるため、自分をよく見せようと情報を改竄している可能性があることを考慮しなければならない。なお、マッチングが完了したあとはメッセージを通じて個人的なやり取りが始まるため、プロフィールを元にした会話から相互の情報交換を通じて、より深い自己開示が可能となると予想される。

最後に「仲介依頼型」の場合、見合いと同じように紹介してくれた仲介者から相手がどのような人なのか聞き出すことが可能となる。ただ、仲介を依頼する相手との関係によっては自分が求めたタイプの相手と出会えない可能性がある。本調査参加者の場合、大学時代の親しい友人に仲介を依頼したAや職場の親しい先輩に相手を紹介してもらったEの場合、事前に自分の好みを紹介者と共有していたことから相性のよい相手を紹介してもらうことが可能となり、スムーズに「付き合う関係」に至っていた。一方で、そこまで親しくない元同僚に紹介を受けたBは相手との相性も分からないまま交際に至り、交際開始後に相手が婚約していたことが発覚したという。このように他者に仲介を依頼する場合、信頼のおける相手に頼むことも鍵となることが示唆された。紹介後も仲介者と親しい関係であれば、相手との関係を相談することもできる。つまり、仲介者は大変大きな役割を担っており、不確実性減少にも一役買っていると考えられる。

これら5つの型における参加者たちの不確実性減少行動を見て分かることは、出会いが「偶発的出会い」の場合、相手と同じ空間に身をおいて相手の行動を観察したり実際に交流したりして情報を得るのに対し、「自律的出会い」では事前に相手の情報を入手し、不確実性を下げる行動が早めに取りられる点である。この結果から人は相手との出会いによって無意識にどういった情報収集が適切なのか読み取って行動していると考えられる。換言すれば「付き合う」ことを目的としていない「偶発的出会い」では互いに日々の交流によって不確実性が減少されていくが、「付き合う」ことを第一目的としている「自律的

出会い」では事前に情報を通して相手との相性を図ったりすることが求められると言えるだろう。

4.4.5. 「付き合う関係」構築後のコミュニケーション

上記で示したように出会いの型によって付き合う関係に至るまでのプロセスは異なり、「付き合う関係」に至った際にも「付き合う」ことに対する意味付けに変化が見られた。ただ、一度関係が安定してくると、その後のコミュニケーションのあり方はどの出会いでも一貫性が見られた。本調査の一番の目的は「付き合う関係」に至るまでのプロセスの探索であったが、日本人の恋愛コミュニケーションについてより深く理解するために付き合う関係に至った二人のコミュニケーション行動の変化例もまとめることとした。交際開始後のコミュニケーションの変化は下の表 4-14 に示すとおりである。表右手に示している例は参加者の語りの一部を抜粋したものである。

表 4-14 交際開始後の変化

カテゴリー	例
(1) 共行動の多様化	「僕の先輩がお笑い芸人なんで、そのライブ見に行ったりとか。お笑いの趣味も結構合うんで、それで一緒に」(G)、「この前花火大会行った。それはすごいでかいイベントやったよ、私的には」(H)、「遊びに行くこともあれば、向こうが歯医者に行くから一緒に行くとか」(K)
(2) 日常的な CMC コミュニケーション	「LINE は結構マメには。マメってわけではないけど、連絡はほぼ毎日なるようになって」(D)、「(LINE は毎日) 往復 2～3 通ぐらい」(F)、「結構会えない時期とかあるじゃないですか、やっぱり忙しくて。その時はもう電話を週末にかけたりとか」(G)、「毎日朝晩 LINE だったりとか、電話できるタイミングは電話したりはしてる」(M)

<p>(3) 定期的な FtF コミュニケーション</p>	<p>「もうなんか『何もしなければ、まあ会うよね』みたいな」(A)、 「会う回数も増えた」(D)、「会える時は会う感じですよ。ね。 お互いの予定がなくて」(G)</p>
<p>(4) 双方の家訪問</p>	<p>「『泊まっていいやろう?』っていう、『その気やろ?』みたいな」(A)、「お互いの家に行くことが増えた、8割9割(彼女)がウチに来ることが増えました」(N)</p>
<p>(5) 性的行為 (手をつなぐ、 キス、セックス)</p>	<p>「普通にスキンシップはするし、朝起きたらおはよう〜ってするし、キスとかはめっちゃする」(D)、「(告白の後に)手握りました、家で」(E)、「付き合ったその週ぐらいに『そういうこと(セックス)したい』みたいな」(F)、「うち泊まりきてそんな雰囲気になるやん?そんな感じかな」(K)</p>
<p>(6) 高コンテキスト コミュニケーション</p>	<p>「お互いがこう嫌と思うようなポイントっていうのはだんだん分かってきたかな」(K)、「『こういう時はこう考えるんだろうな』とか、『こういう時はこうかな』みたいなのを、多分意識してないけど、潜在的に判断してるのかな」(M)</p>
<p>(7) タメ口</p>	<p>「お酒を飲んだ時から敬語やめようってなって、で向こうも『○○ちゃんと呼ぶし』ってなって」(E)、「少しずつね。初めは結構敬語使いよったけど」(K)</p>
<p>(8) 恋愛ライフ バランス</p>	<p>「全然友だちとの予定もガンガン入れる」(E)、「俺も自分で予定入れるし向こうも自分で予定入れるから暇な時に会う」(H)、「毎日一緒にいたいとかも思ってたけど、社会人って無理じゃないですか」(J)</p>
<p>(9) 異性交流の制限</p>	<p>「『彼氏ができたけんもう連絡取れません』って連絡送った」(J)、「女性と二人で飲みに行くとかせんくなる」(K)、「極力やっぱ(異性と)二人とかで会うのは、避けるようにはしてるけど。相手がどんな人であろうと」(M)、「(他の異性)向こうから連絡が来たタイミングで、『もう彼女できたから二人では会えないです』と。『ただの友だちとしてとかみんなでご飯とかは行けるけど』みたいな話は全員にした」(N)</p>

(10) 執着心

「振られることがちょっと怖くなった」(I)、「(自分が)寂しがり屋で耐えきれなかった」(J)

最初の変化は「共行動の多様化」である。「付き合う関係」にある二人は日常の多様なアクティビティを共有し、一緒にいる時間が増えることが示唆された。本調査では、互いの趣味を共有したり、花火大会などのイベントと一緒に参加したり、相手の歯医者と一緒にについていくといった回答も見られた。

2つ目の変化は「日常的な CMC コミュニケーション」である。交際前もメッセージのやり取りは交わされていたが、交際開始を機に毎日のメッセージが暗黙の了解的に交わされるようになったという意見が多く寄せられた。恋人から返事が来ず、不安な気持ちから喧嘩してしまったというエピソードも挙げられた。ここから、日々のやり取りが関係を持続させる役割を担っていることが示唆された。

3つ目の変化は「定期的な FtF (対面) コミュニケーション」である。「自然型」以外の方法で知り合った二人はコミュニティを共有していないことから交際前は毎回約束を取り付けなければ次いつ会えるか分からない状況にあった。しかし、「付き合う関係」に至った場合、定期的（週に1回～月に1回程度）に会うことが二者間で規範となることが示された。なお、付き合っている二人は何か目的を持って会うとは限らず「会うこと」そのものが目的となっている場合が多いことも示唆された。

4つ目の変化は「相互の家訪問」である。とりわけ社会人になると一人暮らしをしている人の割合も高くなることから二人きりになれる空間を求めて相互の家を行き来するようになる。上の定期的に会う目的と同様に何をやるわけでもなく二人空間を共有して一緒に過ごすことに焦点を置くカップルも少なくなかった。

5つ目の変化は「性的行為」である。大森（2014）が「『付き合う』という契約関係には、性的関係を持つことに対する了解が含まれている」（p. 115）と示しているように、二者間で「私たちは付き合っている」という認識が共有されれば、それはハグやキス、セックスといった性的行為に対する暗黙的了解として二者間で認識される可能性が高い。そのため、付き合う関係になった後は例に挙げた K が言うように「そういう雰囲気」になり、性的関係を結ぶことになること考えられる。

6つ目の変化は「高コンテクストコミュニケーション」である。これは Knapp 階段モデル「統合」の段階で示されている「相手の考えていることを聞かなくても分かるよう

になる」に一致するが、「付き合う関係」にある者同士は上に挙げたように多くの時間を共有するため互いが思ったことをすべて口にしなくても徐々に相手の言いたいことが分かるようになると考えられる。この変化に関しては、恋人として相手のことばや気持ちを理解しようと注意を払っていると捉えることもできる。

7つ目の変化は「タメ口」である。これは敬語がある日本文化特有のもので、敬語からタメ口に移行させることで親密感を示し、コミュニケーションスタイルひとつで相手との距離感を調整することが可能となる。この変化に関しては一般的に敬語を使う傾向にある年下側にのみ見られる変化だと考えられる。

8つ目は「恋愛ライフバランス」である。この「恋愛ライフバランス」という言葉は「ワークライフバランス」を参考に筆者が考えた造語で恋人にかかる時間と仕事や友人・家族などの時間とのバランスを意味する。社会人として仕事を全うすることはもちろん、友人との時間もしっかりと取りつつ、恋愛を楽しむことが大事であることが参加者たちの発言から顕著となった。

9つ目の変化は「異性交流の制限」である。「付き合う」ことは「排他的関係を築くこと」を意味し、交際相手以外の異性との関係に制限をかけることで誠実性を示すことが可能となる。ただし、自分の中で友人として認識している相手とは関係を続けるという意見も挙げられた。

最後の変化は「執着心」である。大森（2014）が「付き合う関係」を「契約関係」と主張することから、交際関係にある二人は互いに一定の権限を持っていると考えられる。このことは下に引用する参加者（N）の発言にも表れている。

（「付き合う」って）お互いのことに口を出す権利を持っている状態だと思うんですよ。（中略）異性の友人がいたとして、俺が（その）友人に「男と遊ぶな」って言う権利ってのは1ミリもないわけよ。でも「付き合ってるんだったら『やめてほしい』って言えます」って思ってるのね。

今回挙げた10の変化はFarrer et al.(2008)が「付き合う関係(*tsukiau relationships*)」で見られるコミュニケーション行動として挙げている「日々の連絡を絶やさない」、「性的関係を持つ」、「相互に甘える」等と一致する。このことから本調査参加者は交際相手との間に「私たちは付き合っている」という共有認識を構築した上で、これらのコミュニ

ケーション行動を「あるべき姿」として選択していたと考えられる。反対に、「私たちは付き合っている」という認識が二人の間で共有されなければ彼（女）たちは上に挙げた行動を選択しない可能性が高い。そのように考えるならば、二人の関係に大きな変化をもたらす「告白」に関する議論なしに日本人の恋愛は語れない。

4.4.6. 儀礼的行為としての「告白」

先行研究から再三「告白」は日本人が「付き合う関係」を構築するうえで大きな役割を担うコミュニケーションのひとつであると述べてきた。本調査でも参加者がさまざまな形で「告白」を経験していたことが明らかとなり、改めて日本人の恋愛コミュニケーションに大きく関わることを確認された。表 4-15 は参加者の語りから示された各々の告白のシチュエーションである。

表 4-15 参加者の告白シチュエーション一覧

	型	告白の状況
A	仲介依頼	友人から紹介してもらった相手と会うのは4回目というときに相手から「付き合ってください」と告白を受ける。この時点では相手のことを深く知らなかったため迷っていた。しかし、告白時に相手から「Aの写真を見て『(Aに) 彼氏いないなら紹介して』と仲介者に言って紹介してもらった」という事実を知り、「誰でもいいから紹介してとかじゃなかったんだ」と嬉しく思い、告白を受諾し、交際が始まった。
B	仲介依頼	同僚から紹介してもらって会うのは4回目というときに相手から「俺は好きだよ。付き合ってください」と告白を受ける。相手に好意は感じていたものの過去の経験から恋愛にトラウマを感じていたため返事を保留。しかし同日、ホテルに連れて行かれ性行為に至る。身体だけの関係が続く中、二人で旅行に行くことになった際に告白を期待したが告白はなかった。状況に不満を感じ相手に話したところ「考えさせて」と言われ音信不通に。不安になっていたところ3日後に連絡が来て「俺は大好きだから付き合ってください。俺でいい？」と尋ねられ「オッケー」と返事して交際が始まった。

D	偶発	居酒屋で知り合い、二人で数回ご飯へ行って親しくなった相手から「ちょっと何か話したいことがあるけん時間作ってもらっていい？」と言われて会うことに。「俺と一緒におらん？」と言われ、最初は理解できなかったが「これから先は正直わからんけど一緒にいたい」、「支えてほしい」という言葉を受けて告白だと気づき、「じゃあよろしくお願ひします」と返事をし、交際が始まった。
E	仲介依頼	上司から紹介してもらって会うのは3回目というときに相手がEに誕生日プレゼントを用意していると言ったことをきっかけに相手宅へ行くことに。そこで「すごい一緒におって楽しいし、Eちゃんも楽しい人だし、自分でもしかして楽しい人なのかな？みたいなのを一緒におると思える」、「好きです、付き合ってください」といった告白を受ける。相手に好意を感じていたことから自身も気持ちを伝えて交際が始まった。
F	マッチング	アプリを通して知り合い、何度もデートをしているにもかかわらず告白してこない相手に疑問を抱く。ある日、電話口で「大事にしなきゃね」と言われ、「明日話したいけどいい？」と約束を持ちかけられる。翌日会ったときに「すぐじゃないけど、すぐの結婚とかじゃないけど、結婚を視野に入れて付き合おう」と結婚を前提とした告白を受け、交際が始まった。
G	偶発	参加した飲み会で知り合って意気投合、LINEで交流を重ねて親しくなった相手と二人で初めて食事をした後に車の中で恋愛の話になり、「付き合おうか」と持ちかけたのに対して相手が「いいの？」と返事したことで交際が始まった。
H	グループ交際	街コンで知り合った相手と二人で会うのは2回目というとき、レンタカーを借りてドライブすることに。相手の女性からバレンタインの手作りアップルパイをもらったことで「これは」と相手の好意を察する。「だらだらするのも悪いな」という気持ちから帰りに「付き合ってくださいませんか？」と告白し、返事を受けて交際が始まった。

I	偶発	ナンパした女性と2回目のデートで性行為に至り「付き合おうか」と投げかけるものの「いいよまだ～」と流される。その後「本命にだけ使ういい店」に相手を招待し、再度告白するが保留にされる。そのとき相手の好意に確信を持ったことから電話で交流を続け、再び別の「本命にだけ使ういい店」で食事をし、その帰りに公園で改めて告白。受け入れの返事を受けて交際が始まった。
J	マッチング	アプリでマッチした相手と会うのは3～4回目というとき花火大会へ一緒に行く予定を立てることに。そのとき、相手の男性から「(二人で)花火大会行くってことは『彼氏』で良くない？」と言われる。正式な告白をしてほしいと感じたため「ちゃんとしてほしいな」と伝えると「じゃあ付き合ってください」と言い直され、電話口で交際が始まった。
K	自然	大学院で知り合った相手と両想いであることを確信し、相手が元恋人と破局したばかりであることを懸念しつつも告白を決意。告白の段階で遠距離恋愛が確定していたことから「本当はこう2ヶ月とか待つのが筋なんだけど、一緒にいられる時間が限られてるから」という理由を添えて告白。相手からも「付き合いたいです」と返事を受けて交際が始まった。
L	仲介依頼	上司から紹介してもらった相手と二人で会うのは3回目というときに行ったドライブデートが想像以上に楽しく、「この人ともっと色々どっか行ってみたい」という気持ちから告白を決意。ホワイトデーのお返しと一緒に「好きです、付き合ってください」とストレートな告白をし、「ありがとうございます、よろしくお願いします」と返事を受けて交際が始まった。
M	自然	専門学校で知り合い親しくなった相手に強い好意を覚え、告白するも「真剣味が足りん」という理由で振られる。その後も友人として関係が続けたところ数年後互いに交際を意識するようになり、「色々含めて、もう1回ちょっと考えてくれん？」と相手の意思を尋ねたところ「まあいいよ」と返事を受けて交際が始まった。

N	グループ交際	合コンで仲良くなった女性と二人で同じベッドに寝ることになった際、深く考えず相手をハグをした。そのことに対し、相手から「N君がそういう（付き合っていないのにハグをする）のできる人なんであればもうやめて」と言われる。少し悩んだ末、相手に強い好奇心を覚えていたため告白を決意。友人の車で相手宅を訪ね、「お付き合いしましょう」と告白。相手は「そう来たかー！」と驚いた様子だったが「はい、お願いします」と返事が続き交際が始まった。
---	--------	--

シチュエーションこそさまざまだが、本調査参加者は全員が「告白」を通じて正式な交際を始めていた。このことは一方が「告白」をし、他方がその告白を受諾することで「私たちは付き合っている」という共通認識が構築されることを意味する。この結果は大森（2014）や Farrer et al.（2008）の調査結果と一致しており、「告白」は大森が主張するように日本人が「付き合い関係」を構築するときに避けて通ることは困難な一種の儀礼的行為と見なすことができる。そのため、例えば、「（告白）OKしてないのに（セックス）しちゃうんだなー」と交際前の性交渉に対して不安を感じていた B も正式な告白を受けて「セフレじゃなくて良かった」という安心感を得たと語っていた。F も「告白」がなければ何度デートを重ねても「付き合っている」とは認識できないことを示唆していた。J も相手のほのめかしに対して「ちゃんとしてほしいな」と形式張った「告白」を催促していた。こういった参加者の語りからも二人の関係を進めるならば「きちんと」告白が実施される必要があり、この二者間のやり取りを経て初めて「付き合い関係」が成立することが見て取れる。

この日本人が「告白」という形式を重視する傾向に関しては Hofstede（1991）が提唱した「不確実性の回避」の次元と結びつきがあると考えられる。「不確実性の回避」とは特定の社会に所属するメンバーの曖昧な状況や未知の状況に脅威を感じる度合いを指し、その度合いが高ければ高いほど不確実な状況に対して不安を抱きやすいとされている。不確実性の回避が強い文化では規則が重視され、所属メンバーは場の空気を読み合い、暗黙の了解に則って周囲の期待通りに行動する特徴があり、日本はこの傾向が強いことが指摘されている（Hofstede, 1991）。つまり日本人は先が読めない状況に不安を覚えることから形式を重んじ、互いに空気を読み合って安定した関係を構築することを好む。その規範に則って行動する姿勢は恋愛において「『告白』を忠実に実行する」という形で現れていると考えられる。

なお、本調査参加者に関しては全員が男性からの告白で交際が始まっていた。中でも相手の女性から「バレンタイン」に「手作り」のお菓子を受け取ったことで相手の好意を読み取った H は「自分が主体として動かなければ」という想いに駆られ告白を実行したと語っていた。また、本調査参加者の女性たちの多くは相手に好意を抱いていても相手が告白を実行してくれるのを待っていた、もしくは告白してくれるように促していた。

以上のことを総括すると少なくとも本調査参加者の間では「男性からの告白を女性が承諾した場合、二人は『付き合う関係』に至る」という規範が暗黙の了解として共有されていたことが分かる。

4.4.7. ターニングポイントへの着目

本調査では Knapp の階段モデルを参考に参加者の「出会い」から「付き合う関係」に至るまでのコミュニケーションプロセスを追っていった。分析の結果、上述したように「付き合う関係」構築のコミュニケーションプロセスは彼（女）らが相手とどのように出会ったかによって変化し、その出会いが「偶発的出会い」か「自律的出会い」かによってコミュニケーションのあり方が大きく異なることが示唆された。

一方で Knapp のモデルを参考に関係変化の「段階」に焦点を置いて分析を進めた結果、どのようなコミュニケーションがきっかけで二人の関係が展開していったのかまで考察することはできなかった。モデルを提唱した Knapp 自身も主張しているが階段モデルは関係発展のプロセスをできるだけ簡略的に説明するために提唱されたものであり、どのようなコミュニケーションが関係構築に貢献しているかまで網羅することは考慮に入られていない (Knapp & Vangelisti, 2011)。そのため、二者間の関係は一連の出来事を通じて発展し、まるで階段を上るかのように親密性が高まっていくように描き出され、その節々に生じる「二者間の相互作用」という要素は周縁化されてしまう傾向にある (Baxter & Bullis, 1986)。本論文では 2.6. で示したように「コミュニケーションがあるから人間関係を構築・維持することができる」と、人間関係を「コミュニケーションの産物」と捉えていることから関係構築の土台となる相互作用にさらなる焦点を当てる必要がある。

今からおよそ 50 年前、配偶者選択に関する研究を進めていた Bolton (1961) は人口統計的変数やパーソナリティ変数を中心とした統計調査が主流であることに疑問を抱き、

二人の中に「結婚」という選択肢が生じるのは特定の社会的状況の中で二人が相互交流を重ねた結果だと考え、二者間の相互作用の結果として生じる「ターニングポイント」に焦点を置くべきだと主張した。Bolton のいう「ターニングポイント」とは関係に変化をもたらす出来事のことであり、人間関係構築のプロセスに着目する上では中心的概念だとされている (Baxter & Bullis, 1986)。Bolton にとって関係の変化とはコミュニケーションに従事する人が自分や相手、または自分たちの関係の定義を更新するに従って生じるもので、定義の更新とは既存のものに情報が追加されるのではなく、常に新しいもの書き換えられたり、新しい単語が用いられたり、視点の変化がもたらされたりすることを指すという。これらのことから「ターニングポイント」とはまさに関係の更新の瞬間を捉えるものであり、この概念を取り入れることで Knapp のモデルを参考とするだけでは見えてこない二者間の交わりに着目することが可能となると考えられる。

Bolton (1961) はターニングポイントによってもたらされる変化は劇的なものである必要はないとし、そもそも劇的な変化をもたらすターニングポイントも連続的な小さなターニングポイントの産物であると説いている。例えば、あるカップルが「自分たちがいつ婚約したかハッキリ述べるのは難しい。婚約については何度も話していて、その度に関係が強まって、気づけば『そこ』に行き着いていた」(p.237) と語っているのに対し Bolton は「二人の婚約は小さなターニングポイントが積み重なった結果生じたものである」と論じている。

Baxter and Bullis (1986) は Bolton の主張を基に 40 組のカップルに個別インタビューを実施し、各参加者のインタビュー時までの関係を振り返ってもらう形でどのような「ターニングポイント」が恋愛関係で見られるのか調査を行った。結果として導き出された 14 のターニングポイント (表 4-16 参照) はポジティブなものもあればネガティブなものもあり、内半分 (Disengagement, Exclusivity, Making Up, Serious Commitment) は二者間のメタコミュニケーションによって導き出されたものだと示唆されている。

この結果から Baxter and Bullis は二人の人間が排他的な関係を築くためには二者間の相互作用的対話が必要不可欠であると主張している。また、参加者に自分たちの関係を振り返ってもらう形で実施されているため記憶バイアスがかかっている可能性が考えられるが、Baxter and Bullis はその記憶がカップルの現在につながっていると主張している。これらの先行研究から二者間の関係変化を追うことで調査時の関係を深掘りでき、ゆえに「ターニングポイント」は人間関係を調査する際に大変有用であると考えられる。

表 4-16 ターニングポイント (Baxter & Bullis, 1986)

I. Get-to-Know Time (互いを知る時間)
A. First Meeting (初対面)
B. Activity Time (アクティビティ共有の時間)
C. First Date (初デート)
II. Quality Time (相手との充実した時間)
A. Quality Time (二人の空間を楽しむ時間)
B. Meet the Family (相互の家族との対面)
C. Getting Away Time (学校や仕事から離れた時間)
III. Physical Separation (物理的距離)
IV. External Competition (競争相手の出現)
A. New Rival (新たなライバル; 魅力的な第三者)
B. Competing Demands (学業や仕事といった恋愛以外の競争相手)
C. Old Rival (昔のライバル; パートナーの元恋人)
V. Reunion (「物理的距離」の後の再会)
VI. Passion (情熱; 身体的・精神的愛情表現)
A. First Sex (初めてのセックス)
B. First Kiss (初めてのキス)
C. "I love you" (初めての"I love you")
D. Whirlwind Phenomenon (つむじ風現象=一目惚れ)
VII. Disengagement (破局)
VIII. Positive Psychic Change (ポジティブな精神的変化)
IX. Exclusivity (排他性)
A. Joint Exclusivity Decision (排他性への同意)
B. Dropping All Rivals (パートナー以外との恋愛関係の排除)
X. Negative Psychic Change (ネガティブな精神的変化)
XI. Making Up (仲直り)
XII. Serious Commitment (真剣な付き合い; 結婚への一歩)
A. Living Together (同棲)
B. Marital Plans (結婚の計画)
XIII. Sacrifice (犠牲)
A. Crisis Help (個人的問題への手助け)
B. Favors or Gift (プレゼント)
XIV. Other (その他)

Baxter, L. A., & Bullis, C. (1986). Turning points in developing romantic relationships. *Human Communication Research*, 12(4), 469-493 を元に作成.

4.4.8. シンボリック相互作用論的アプローチの提案

Bolton (1961) によればターニングポイントという概念は二者間の相互作用によって関係が変化していくという点からシンボリック相互作用論的アプローチを取っているという。そこで二次調査では 1960 年代初頭にアメリカの社会学者 George Herbert Mead によって提唱されたシンボリック相互作用論の観点から恋愛コミュニケーションを探る。Mead の研究内容をまとめた Blumer によると、シンボリック相互作用論とは次の 3 つの前提に立脚するという。

- ① 人間は、ものごとが自分に対して持つ意味にのっとって、そのものごとに対して行為する。
- ② このようなものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生する。
- ③ このような意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処する中で、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりする。

(Blumer, 1986 ; 後藤訳, 1991, p.2)

【第 1 の前提】

第 1 の前提は人が身の回りの事柄に「意味」を付与しながら、自身の解釈に基づいて行動していることを指す。つまり人は刺激 (stimulus) に対してどのように反応するか (response) を刺激に対する自身の解釈 (interpretation) で決めていることを意味する。このことを基に考えれば「恋愛」という抽象的概念 (シンボル) に「結婚につながる」という意味を結びつけた高度経済成長期以前の人たちが相手の家柄や地位を強く意識し、「あってもなくても良い『嗜好品』」(牛窪、2015) と意味づけしている現代の若者たちが恋愛感情を重視するようになったことも説明がつく。

再三取り上げている「告白」についても、第 1 の前提の特徴が現れている。人は好意を寄せる相手が自分に対して好意的な行動を見せた場合、「この人も私のことが好きなんだ。今、想いを告げればきっと付き合える」と意味づけし、その解釈に則って「好きです、付き合ってください」と自分の想いを言語化する。また、想いを告げる「告白」という行為そのものにも「排他的関係になる」という意味づけが行われることで当事者の二人は告

白前の関係と違った関わり方をするようになる。反対に自分と一緒にいるときの相手の表情や態度を見て「つまらなさそうにしている」と解釈すれば「この関係が発展する見込みはない」と意味付けし、交流を断ってしまう可能性もある。このように考えると「恋愛」は互いの言語・非言語のシンボルに意味づけし、それに則って言動を選択する能力を持っている人間だからこそ成立する事象だと言える。

一方で心理学や社会学では多くの人間行動が「人間に作用するいろいろな要因の結果産物」として扱われる（Blumer, 1986；後藤訳、1991、p.3）。すなわち、人間の行動をマクロな視点から捉えようとする心理学・社会学では、刺激、動機、社会的地位、文化的規定、社会的圧力といった外的要因に焦点を当てて人びとの行動を説明しようとする。そういった研究では、交流の中で行われる意味づけ行為が軽視されてしまう傾向にある。無論、人びとの行動に強い影響力を持つ文化などのマクロな視点も重要だが、個々人が「恋愛」という場において経験する相互作用をどのように解釈し、どのような「意味」を付与し、その意味に基づいてどのような行為を行っているのかというミクロな部分に視点を向けることも重要である。

【第2の前提】

第2の前提は人びとが事象に結びつける「意味」は最初から事象に備わっているものでも個人の内部から自然に生じるものでもなく、他者との関わりの中で創られることを意味する。ブルーマーが主張するに「シンボリック作用論では、意味は社会的な産物と考えられる。相互作用する人びとの、定義という活動の中で、またこの活動によって、形成される産物である」という（Blumer, 1986；後藤訳、1991、p.5）。この主張に従えば、同じシンボルでも人によって意味づけの内容が異なることになる。

「恋愛」も同様に、個々人が他者との社会的交流を通して「恋愛」や「付き合う関係」の定義を構築していく。ただし、誰一人として全く同じ相互作用を経験することはないことから、シンボルをどのように解釈するかは個々人の過去の経験や認識で変化する。たとえ同じ時代に生きている人でも周囲環境（家庭環境やよく目にするメディア、周囲の友人など）や状況（10代の初恋か30代の婚活の一環かなど）、過去の経験（恋愛未経験、豊富な恋愛経験、恋愛に対するトラウマ持ちかなど）で、「恋愛」というシンボルに付与される意味合いは大きく異なると考えられる。このことに関しては大森（2019）もインタビュー調査を通して「同じ『付き合う』という行為であっても結婚を前提とする

『恋愛』と、恋愛感情に重きを置いた『恋愛』では、『恋愛』への意味付けが異なる」(p.48)ことを明らかにしている。

Farrer et al. (2008) は、日本人が「付き合う関係 (*tsukiau relationships*)」にある場合、日々の連絡を絶やさない、定期的に会う、性的関係を持つ、甘え合うといった行動を取ると示しているが、この「付き合う関係」というシンボルに対しても人によって異なる意味が見出されるだろう。例えば、『付き合う関係』にある二人は毎日直接会ってコミュニケーションを図るべき」と考える人もいれば『付き合う関係』にある二人でも月に1回程度会えば十分」と考える人がいてもおかしくない。そんな価値観が異なる二人が出会い、交際をはじめようとした場合、「付き合う関係」に付与される意味は二者間で明示的もしくは暗示的に協議されることとなるだろう。

つまり、この前提に従えば「恋愛」という状況で「付き合う関係」にある二人は、それまでにシンボル相互作用的交流を介して自分たちの関係にまつわる意味構築を行ったと予測できる。先行研究ないし一次調査に従って考えるならば、おそらく一方が告白をし、相手がそれを受け入れ、当事者たちは自分たちの関係に「私たちは付き合っている」と意味づけを行ったのだと予測できる。つまり、両者が「告白」を通して意味構築を行った結果「付き合う関係」が生じたと捉えることができる。問題は「告白」以前の交流の中で当事者たちが自分たちの相互交流をどのように解釈し、どのような反応を示しているのかに関しては不明なことが多い点である。「出会い」から「付き合い」に至るまでの間に二人の人間が意味構築・再構築を繰り返して関係を構築しているとするならば、そのプロセスの中で生じる相互作用に注目する意義は十分あると言えるだろう。

【第3の前提】

第3の前提は事象に付与される意味は固定的なものでなく、その都度修正が行われることを意味する。シンボリック相互作用論の中で人の「考え」というものは自分自身との対話 (*inner conversation*) によって成立するものだとされている (Griffin, 2012)。つまり、人は日々の経験を通して自己内対話を繰り返し、自分の中でシンボルに対する意味修正を常に行っているということになる。

「恋愛」ということばが指すものも本来目に見えない抽象的概念で、ことばそのものに固定された意味はない。すなわち、一人ひとりが「恋愛」というシンボルに見出す意味は常に流動的になる。例えば、大森 (2019) が行った調査では全く同じ人でも「恋愛」

への意味づけが年齢を重ねることによって書き換えられることが明らかにされている。このことは人が他者との交流や自身の経験を通して「恋愛」への意味を日々更新していることを示唆する。とりわけ年齢が上がることにより「恋愛」と「結婚」の結びつきが認識の中で強くなる傾向が参加者数人から見られたことを大森(2019)は取り上げている。また別の調査では「交際経験なし」と回答した人より「交際経験あり」と回答した人の方が「恋人が欲しい」と回答する割合が高いことが示されている(内閣府、2014)。このことは実際の交際経験を通じて「付き合い」ことから得られるメリットを見出した人が「付き合い関係」に対する意味修正を行っていることを示唆する。

さらに相互作用を通して意味修正が行われることは先に述べた第2の前提と結びつく。二人が意味構築を繰り返す中で二者間の関係への意味付けが常時更新されていく様子はまさに第3の前提を体現していると言えるだろう。そんな中、第2の前提でも示唆したように「出会い」から「付き合い」までのプロセスで二人の人間がどのように意味交渉を行っているのか明らかにされていないことから、そのあり方を探ることは喫緊の課題だと考えられる。これらのことを踏まえ、二次調査ではシンボリック相互作用論的アプローチを用いたターニングポイントに焦点を当てて調査を進める。

第5章 二次調査

一次調査で参加者たちの「出会い」から「付き合い」に至るまでのコミュニケーションプロセスを分析した結果、出会いの形によってプロセスの内容に変化が見られることが明らかとなった。中でも出会いが「偶発的」なものか「自律的」なものかによって当事者のプロセスに対するアプローチに変化が見られることや、近年「偶発的出会い」の機会減少に伴って「自律的出会い」の需要が高まっていることが示唆された。これらの発見は今後恋愛コミュニケーション研究を進める上で大きな一歩になると考えられる。

一方で、一次調査の結果からは「付き合う関係」がどのようなコミュニケーションによってもたらされたかまでは明らかにできなかった。人間関係が人と人との相互作用の蓄積によって構築されていくと捉えた場合、Bolton (1961) や Baxter and Bullis (1986) が主張するように恋人同士の相互作用に焦点を当てて調査を進めることが求められる。そこで、二次調査では西洋で提唱された「ターニングポイント」を使って「日本人男女の恋愛コミュニケーションプロセス」の探究を試みる。一次調査同様、西洋発祥の概念は「日本『特有』と言われているコミュニケーションの特徴を十分に説明することはできないかもしれない」という前提をもとに調査の参考として示す。

上記のことを踏まえ、本調査では(1)日本人男女の「出会い」～「付き合い」の過程の中に「ターニングポイント」は見出だされるのか、(2)もし見出だされるとすればBaxter and Bullisの挙げている「ターニングポイント」とはどのような違いが見られるのか、といった疑問を根底に置いて調査を進めていく。

5.1. 調査対象者と調査方法

今回、日本人男女の「付き合う関係」構築プロセスの中で一体どのような相互作用が見出だされるのか明らかにするため一次調査とは異なる参加者に半構造型インタビューを個人面談方式で実施した。二次調査では調査対象者の選択基準を①20代以上の社会人であること、②インタビュー実施時に交際中であること(未婚既婚は問わない)、そして③異性愛者であることの3点とした。参加者を社会人ないし異性愛者に絞ったのは一次調査と同様の理由である。一次調査と異なり二次調査で交際中の人限定したのは交際が終焉した関係と継続している関係とでは過去を振り返った際に視点が異なると考えた

ためである。当事者の意味付けが鍵を握るシンボリック相互作用論的アプローチを取る本調査では参加者全員を交際中の者に限定することでカップルごとに詳細は異なるにせよ、交際中の自分たちの関係の軌跡を辿る形で語ってもらえることを期待した。

5.2. 調査手続き

本調査でもスノーボールサンプリングを採択し、筆者の知人をインタビューした後、彼らに知人を紹介してもらう形で調査を進めた。一次調査同様、スノーボールサンプリングを採択した理由は「自身の恋愛経験」といった私的な内容について語ってもらう上で何らかのつながりがある調査者が相手である方が気楽に話せると判断したからである。インタビューは新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から Zoom を使って実施した（1人はカフェでの実施を希望したためカフェで実施した）。インタビューの実施期間は2020年6月3日から2020年9月8日で、所要時間は1人あたり約60～110分（平均74.5分）であった。

実施方法はターニングポイント研究で用いられる **Retrospective Interview Technique**（回顧的面接法；以下 **RIT**）を参考にした。**RIT** とは、各参加者に恋人との出会いからインタビュー時までの間に生じたターニングポイント（二人のコミットメント度合いに変化が生じたと思われる時点）を全て挙げてもらい、それぞれの時点で起こったことをインタビューで詳しく語ってもらう手法である。**RIT** の具体的な手順は以下のとおりである（**RIT** で使われるグラフの例は図 5-1 を参照）。

- ① まず、参加者に恋人と出会ってからインタビュー時点までの「期間」を横軸、二人の「コミットメント度合い」を縦軸に記した表を作成してもらう（図 5-1 参照）。
- ② 参加者に「恋人と初めて会ったとき」と「インタビュー時」のコミットメント度合いをマークしてもらった後、この2地点の間で生じたと思われるターニングポイントをマークしていってもらう。このとき面接者は「二人のコミットメント度合いに変化が生じたと思われる時点に全てマークしてください」と指示する。
- ③ 面接者は各ターニングポイントで何が起きたのか探るためにグラフを参照しながら参加者に質問していく。

- ④ 質問が終われば面接者は参加者に各ターニングポイントを線で結ぶように指示し、その線が何を意味するのか参加者に尋ねていく。
- ⑤ 最後に参加者は数分かけて表を見直し、インタビュー内に話したことで変更したい部分があれば面接官に伝える。

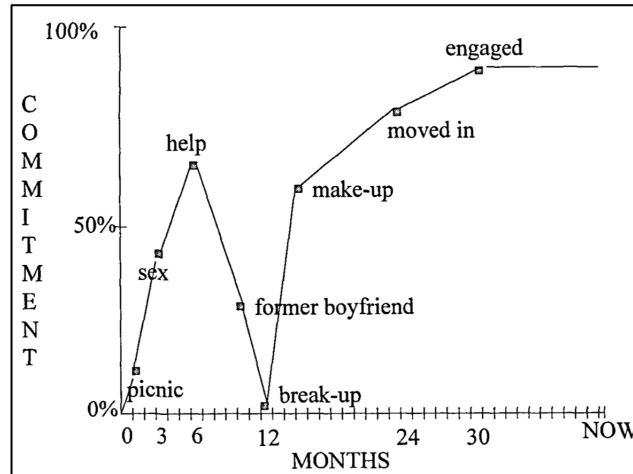


図 5-1 RIT グラフの例 (Baxter & Pitmann, 2001)

出典 : Baxter, L. A., & Pitmann, G. (2001). Communicatively remembering turning points of relational development in heterosexual romantic relationships. *Communication Reports*, 14(1), 1-17.

インタビュー実施の際、カップル双方に調査を実施する場合はカップル同士の回答にバイアスがかからないようにカップルは同じタイミングに別部屋でインタビューに参加し、異なる面接者がインタビューを実施する必要がある。

本調査は上記の RIT の手順を参考にしながら「ターニングポイント」があることを前提にしていなかったため「ターニングポイント」ありきの語りにならないように、参加者には恋人・パートナーと出会ってからインタビュー時に至るまでの過程を自由に語ってもらうこととした。そして、インタビューを進める中で面接者である筆者が参加者の関係の「ターニングポイント」になったと思われる時点を認識した場合、その部分について質問を重ねていくという形でインタビューを遂行した。ターニングポイント調査ではカップル双方にインタビューが実施されることが一般的であるが、今回は 1 組を除いてカップルのどちらか一方に調査を行った。

表 5-1 参加者一覧

	性	年齢	関係状態	職業	出会い
P	女	24	交際中	会計事務	紹介
Q	女	26	婚約中	テクニカルサポート (IT)	オンラインゲーム (ペアデータ)
R	男	34		楽器演奏者	
S	女	27	交際中	グランドスタッフ	合コン
T	女	23	交際中	金融窓口	職場
U	男	28	交際中	生産管理 (工場)	大学
V	女	31	交際中	看護師	アプリ
W	女	35	既婚	保育士	合コン
X	女	32	既婚	主婦	シェアハウス
Y	女	30	交際中	受付	アプリ

最終的なインタビュー実施人数は 10 名（男性 2 名、女性 8 名）で、平均年齢は 29 歳であった（表 5-1 参照）。内容はすべて参加者承諾の上、Zoom の機能を使って録音し、データはすべて逐語録に起こした。

5.3. データの分析方法

本調査の一番の目的は Baxter and Bullis (1986) の調査を参考に「付き合う関係」にある日本人男女が交際相手との出会いからインタビュー時に至るまでの相互作用をどのように認識しているのかを探ることであった。そこで Baxter and Bullis の分析結果を参考にしながら本調査参加者の語りから見えてくる相互作用に焦点を当てて分析した。分析の大まかな流れは (1) 参加者の語りから「二人の関係に変化をもたらした」と考えられるコミュニケーション行動があるか探り、(2) ある場合はその内容をコード化し、(3) 最終的に生成されたコードの中で類似するもの同士をグループ化し、(4) 各グループの中で類似するもの同士でカテゴリーを生成した。例証を含む具体的な分析手順は以下のとおりである。

まず、逐語録に起こした参加者の語りに何度も目を通して「出会いからインタビュー時までの間に二人の関係に変化をもたらしたと考えられるコミュニケーション行動」がないか確認し、該当する部分があれば Excel のデータ上でハイライトした(1)。例えば、

友人からの紹介で恋人と知り合った P が「社会人 2 年目のときに友達の紹介で、ご飯に行ったっていうのが最初のきっかけなんですけど」と語っている部分がある。この部分は「二人が初めて出会い、結果として人間関係が生じた」と解釈できることから二人の関係に変化をもたらしたと判断し、ハイライトした。この作業によって筆者は参加者自身が過去のどの相互作用に焦点を当てて関係を説明しているのかを明らかにすることができた。なぜなら人は自身の人間関係を振り返る際に「このコミュニケーション行動は自分たちの今の関係を語る上では外せない」と考えながら語ると予測できるからである。このことから、「付き合う関係」にある本人が意識して選択した語りの内容にハイライトしていくことで参加者の相互作用への認識を浮き彫りにすることが可能となると考えた。

ハイライトを引き終えたら、その該当部分が何を表しているのかを示す「コード」を付した。「コード」とはハイライトした部分の内容を要約したものである。例えば、先に挙げた P の抜粋部分は二人の出会った瞬間を示すことから「出会い」というコードを付した。下の表 5-2 では参加者の語りから抽出したコードを全て示す。

表 5-2 参加者のコード一覧

P	出会い、再会、グループ交際、紹介者を交えての食事、二人きりの行動、相性の一致、当時の恋人との不安定な関係、好意の暗示・明示的表明、好意の察し、男性の紳士的態度、ストレートな告白、交際の申し込み、元交際相手との決別決意、二度目の告白、告白の受け入れ、交際開始、交際開始後の関係不安、相手の多忙によるすれ違い、連絡の途絶え、周囲の人間への相談、関係不安の増加、相手への共感による我慢、仲直り
Q	出会い、友達申請（ゲーム）、ゲーム上での交流の日常化、相手の容姿の確認、身体的魅力に対する好意形成、ボイスチャットの導入、好意への気付き、連絡先の交換、ビデオ通話の導入、対面を希望する気持ちの浮上、対面希望の暗示と提案、第三者への相談、対面コミュニケーションへの移行、好意的な第一印象形成、身体接触（手を繋ぐ）、好意の表明、（相手からの）告白、交際開始、クオリティタイムの確保、ルールの取り決め、二人の将来に関する話し合い、遠距離期間の相互の訪問、両親への紹介、パートナーの介入による家族の空気の変化、安心感の増幅、相手の両親との対面、パートナーに対する認識の変化、遠距離の終了に対する希望表明、同棲に関する話し合い、同棲、価値観の相違による対立、話し合い、結婚に関する話し合い

R	<p>出会い、友達申請（ゲーム）の承認、ゲーム上での交流、自己開示、相手による関係進展のきっかけづくり、ボイスチャットの導入、容姿含む情報の提示、オンラインコミュニケーション、相手の容姿の確認、身体的魅力に対する好意形成、相手の好意への気付き、自身の好意への気付き、ビデオ通話の導入、オンラインコミュニケーションの日常化、恋愛感情の生起、対面希望と提案、対面コミュニケーションへの移行、告白決意、初対面、初デート、告白、結婚を視野に入れた交際の申し込み、交際開始、遠距離期間の相互の訪問、結婚を視野に入れた交流の累積、同棲に関する話し合い、相手の両親への挨拶、同棲、価値観の相違による対立、異文化への気付き、ルールの取り決め、衝突時の歩み寄り、喧嘩、話し合い、結婚に対する踏ん切りのつかなさ、「結婚」に対する意見交換、パートナーによる説得、結婚の決意、プロポーズ、入籍</p>
S	<p>出会い、少人数での交流、相手コミュニティへの参入、二人だけの行動、親密的感情の生起、相互の自己開示、相手宅への訪問、個人の問題に対する助け、相手の行動に対する好意の生起、添い寝、緊張している自分への気づき、会う口実づくり、日常的なオンラインコミュニケーション、自身の好意への気付き、男性の紳士的態度、ハグ、曖昧な関係に対する不安の生起、第三者への相談、曖昧な関係への決別表意、（相手からの）告白、交際開始、交際開始後の自身の立ち位置の変化、相互の家訪問、スキンシップの増加、セックスレス、関係に関する話し合い、喧嘩、別れの覚悟、関係継続の意思決定、結婚に関する話し合い</p>
T	<p>出会い、少人数での交流、好意的な関係生起、普段と異なる LINE、職場外でのコミュニケーションの定着、相互の相性の良さの認知、個人的交流への進展、好意への気付き、緊張感の浮上、自己開示、関係進展に対する疑念の生起、オンラインコミュニケーションの日常化、ポジティブな期待違反、相手による好意の伝達、関係進展に対する疑念の生起、第三者への相談、相互の印象に関する話、二人きりの行動、関係進展への期待と不安、行動の意図確認、相手による好意の伝達、関係確認、正式な告白、自身の母親との対立、クオリティタイム、関係に関する話し合い、喧嘩、一時的破局、仲直り、喧嘩（2回目）、一時的破局（2回目）、別れの覚悟、第三者の後押し、仲直り、関係に関する話し合い、共有時間の増加、親密度の増加、将来に関する話し合い</p>

U	<p>出会い、グループ飲み会、初めての対話、好意的会話、相互の好意的印象の形成、恋愛相談、当時の恋人との破局、少人数での交流、恋愛感情の生起、連絡先の交換、デートの誘い、デート、自己開示、恋愛感情の高まり、第三者への相談、関係進展の試み、好意のほのめかし、二回目のデートの誘い、デート（二回目）、告白の決意、告白、関係開始、クオリティタイム、タメロへの移行、オンラインコミュニケーションの定着、遠距離、結婚観の相違による破局、その後交際した女性との破局、相手からの復縁依頼、再会、デート、復縁に対する悩み、復縁再依頼、周囲からの後押し、復縁、関係の安定化、将来に関する話</p>
V	<p>出会い、趣味の一致、自己開示、対面を希望する気持ちの浮上、連絡先交換、対面コミュニケーションへの移行、好意の生起、交際への期待の浮上、（相手による）交際の申し込み、交際開始、クオリティタイム、身体接触、喧嘩、価値観の違いによる対立、関係に関する話し合い、歩み寄り、衝突頻度の減少、自身の親への紹介、将来に関する話し合い</p>
W	<p>出会い、趣味の一致、連絡先の交換、定期的なオンラインコミュニケーション、二人きりの行動、好印象の形成、自己開示、告白、好意の把握、交際の意識、性格の一致の認知、交際開始、相互の家訪問、クオリティタイム、プロポーズ、家族への結婚の報告、相互の両親への挨拶、結婚、友人への報告、入籍、両家顔合わせ、結婚後の生活についての話し合い、本音の伝達、交換ノート、出産、スキンシップの低下</p>
X	<p>出会い、オンラインコミュニケーション、事務的連絡、好印象の形成、自己開示、共通点の発見、第三者を通じての情報収集、対面コミュニケーションへの移行、初対面、グループでの交流、相性の一致の認知、相手の好意への気づき、二人きりの行動、相性の一致の確認、自身の好意への気づき、交際の可能性への期待生起、関係の確認、交際開始、結婚を視野に入れた交際の提案、共有時間の増加、同棲、価値観の違いによる対立、価値観のすり合わせ、仲直りの仕方の習得、将来に関する話し合い、夫の留学、結婚の決意、両家顔合わせ、海外での共同生活、帰国後の二人暮らし</p>
Y	<p>出会い、文面上のやりとり、相互の自己開示、進展的会話、称賛、好意の暗示、友人からのひと押し、連絡先の交換、相手に対する好奇心の向上、他の異性との関係変化、通話、対面コミュニケーションへの移行、初対面、交際の意識、デート、認識のズレ、関係に対する気楽さへの気づき、告白、関係開始、クオリティタイム、性的行動、相手の多忙による接触機会の減少</p>

該当部分に全てコードを付した後は上記に挙げたコードの中で概念や意味合いが共通するコードがないか検討し、ある場合はそれらをグループ化してラベリングし、サブカテゴリーを生成した。例えば「ボイスチャットの導入」、「連絡先の交換」、「ビデオ通話の導入」、「対面を希望する気持ちの浮上」、「対面希望の暗示と提案」、「対面コミュニケーションへの移行」、「普段と異なる LINE」、「職場外でのコミュニケーションの定着」、「オンラインコミュニケーションの日常化」、「初対面」という 10 のコードは全て「二人がメッセージを交わす経路（チャンネル）を増やす」という共通点からグループ化し、「コミュニケーションチャンネルの拡張」というサブカテゴリーを生成した。残りのコードも分類しラベリングした結果、25 のサブカテゴリー（ターニングポイント）が生成された。さらに、サブカテゴリーの中でも二者間コミュニケーションによって生じるもの（「相互交流」）、参加者が自身の認識に意味づけすることによって生じるもの（「メタ認識」）、友人や双方の家族との関わりによって生じるもの（「第三者との関わり」）、そして自分たちのコントロール下でない身の回りの変化に伴って生じるもの（「環境の変化」）の 4 カテゴリーに分類し、4 つに分類したものをメインカテゴリーとした上で、内容が「交際前」と「交際開始後」のものがあつたため大きく 2 つに分類した。

5.4. 結果

分析の結果は表 5-3 に示すとおりである。本調査の結果と Baxter and Bullis (1986) の結果（表 4-16 参照）を比較したとき、本調査ではターニングポイントを「交際前」と「交際開始後」に分類している点がオリジナルとの一番の相違となる。先行研究および一次調査では日本人にとって「付き合い関係」は「告白」によって構築されるものだと示唆してきたが、本調査でも「告白・関係の確認」によって生じる境界線を超える前と後では参加者の関係に対する認識が大きく変化していた。下で詳述するが、このことは日本人が交流相手との「間柄」の観点からコミュニケーション行動を選択しているからではないかと考えられる。また、Baxter and Bullis (1986) の調査が実施されてからおよそ四半世紀が経った今、インターネットの普及でコミュニケーションの方法は対面に制限されることがなくなった。その結果、本調査では Baxter and Bullis にはなかった「コミュニケーションチャンネルの拡張」という特徴が表れた。

表 5-3 ターニングポイント一覧

- I. 交際前：「付き合う関係」に至るまで
 - A. 相互交流
 - 1. 出会い
 - 2. 自己開示・情報入手
 - 3. コミュニケーションチャネルの拡張
 - 4. 個人間（二人だけの）交流
 - 5. 救済行動
 - 6. 好意表明
 - 7. 告白／関係の確認
 - B. メタ認識
 - 1. 好意への気付き
 - 2. 男性の紳士的態度
 - 3. 認知的不協和の生起
 - C. 第三者との関わり
 - 1. 第三者への相談
 - 2. （元）恋人との不仲／破局
 - 3. 他の異性との関係変化
- II. 交際開始後：「付き合う関係」に至った後
 - A. 相互交流
 - 1. クオリティタイム
 - 2. 性的行為
 - 3. 関係に関する話し合い
 - 4. 価値観の違いによる対立・破局
 - 5. 仲直り／復縁
 - 6. 将来に関する話し合い
 - 7. プロポーズ／入籍
 - B. 第三者との関わり
 - 1. 双方の家族との関わり
 - 2. 出産
 - C. 環境の変化
 - 1. 仕事などの多忙による交流機会の低下
 - 2. 遠距離の開始・終了
 - 3. 同棲

さらに、上述したように分析を進める中で二者間のコミュニケーション行動だけでなく、個人内コミュニケーションや第三者とのやりとり、さらに環境的影響も二人の関係に変化をもたらす要因として結果に表れた。

【交際前】

A. 相互交流（二者間のコミュニケーションによって生じるターニングポイント）

1つ目の「出会い」は本調査参加者がパートナーと初めて交流したときのことを指し、その内容には一次調査と同様に多様性が見られた。例えば、**Q・R**のカップルの出会いは

（パートナー）との出会いは、「ゲーム友達」がスタートっていうめちゃくちゃ現代っ子っぽい、俺の恋愛観からしても、10年前くらいだったらありえないかなって思うようなスタートだったんだけども（R：男性、34）

というRの語りからもわかるように、情報技術が発達した現代特有の出会いであった。**Q・R**カップル以外の参加者の「出会い」は職場、合コン、マッチングアプリや紹介者を交えた複数人での食事とさまざまであった（参加者の出会いのきっかけは表 5-1 参照）。「出会い」は二人の関係の出発点となることから恋愛コミュニケーションプロセスには欠かせないターニングポイントだと考えられる。なお、本調査参加者の出会いを一次調査で示した出会いの型に分類すると下の表 5-4 に示すとおりとなる。

表 5-4 二次調査参加者「出会い」の分類

自然型	T（職場）、U（大学）
偶発型	Q・R（オンラインゲーム）、X（シェアハウス）
グループ交際型	S、W（合コン）
マッチング型	V、Y（マッチングアプリ）
紹介型	P（友人の紹介）

ここで一番下の欄を「仲介依頼型」ではなく「紹介型」としたのは、P自ら望んで紹介を友人に頼んだのではなく友人が「Pちゃんに会わせたい人がいる」と紹介していたためである。

2つ目の「自己開示・情報入手」は相互に情報を開示し合う、もしくは相手に関する情報を共通の知人といった第三者から入手することを指す。例えば、マッチングアプリを通じて恋人と知り合ったVとYはそれぞれマッチング後のメッセージ交換で相手のことを知っていったと語っていた。二人はメッセージを続ける中で丁寧な長文を返す相手の態度から会ったことがない相手に「マメだな」、「話しやすいな」とポジティブな印象を受けたという。また、入居を予定していたシェアハウスに先に住んでいた男性と交際に至ったXは

入居してから実際に（相手に）会うまでちょっと時間がかかったんですけど、元々夫もシェアハウスの人たちに「自分の知り合いの知り合いだ」みたいな感じで（私を）最初紹介をしてくれたので、周りのシェアハウスの人たちから会ったことない段階から話題として夫のことを聞いていて、同い年だし、夫が大学～社会人ぐらゐまで暮らしていたのが埼玉県で、かつ私の実家がある同じ沿線上のもうちょっと奥の方で高校も私の実家の割と近くだったりして、「共通点が結構あるな」っていうふうに思っていて（X：女性、32）。

と、男性と実際に会う前から別の住人たちに相手のことを聞いた上で自分との共通点を見つけていたと語った。関係初期の段階で自分のことを伝え合ったり第三者から相手の情報を入手したりすることは不確実性を減少させ、相手への親近感を増すという点でターニングポイントだと見なすことができる。なお、「自己開示・情報入手」は一つの大きなターニングポイントというよりも小さなターニングポイントの積み重ねだと考えられ、相手に対する印象が付け足されたり修正されたりすることで二人のその後の関係に影響を及ぼすことが示唆された。

3つ目の「コミュニケーションチャネルの拡張」はインターネットの普及でオンラインコミュニケーションがオフラインのそれと同等もしくはそれ以上に活用される現代特有のターニングポイントである。もし二人の出会いがオフライン（現実世界）ならばLINEや電話といったオンラインコミュニケーションチャネルに關係が拡張され、反対に二人の出会いがマッチングアプリやオンラインゲームといったオンラインであれば「現実の世界で会う」ことで關係がオフラインコミュニケーションチャネルに拡張されることが示唆された。例えば、それまでは対面（オフライン）でのコミュニケーションが主だった

職場の先輩男性と LINE および電話で日常的にやり取りを行うようになった T は

今でも忘れないのが、(毎日の電話が) 当たり前になってたけど私の中では当たり前じゃないっていうか、いつ終わるかわかんないぐらいの気持ちだったので、なんか向こうが「え、今日はせんでいいと？」みたいな感じで来たような記憶はあります (T : 女性、23 歳)。

と、その頃から相手と職場外の個人的関係が始まったと語った。さらに同じオンラインでも異なるメディアを使うことによってオンラインコミュニケーションチャネルという枠の中で関係が拡張されるケースも挙げられた。例えば、オンラインゲーム上で交際相手の Q と出会った R は

(パートナーが)「次ボイスチャットしませんか」って「声を聞いてみる」っていう段階にステップアップしてくれようとしたんだと思うんだけど。で、声を聞いてみたらなんか「可愛らしい声してるなー」っていう印象を受けて。

(パートナー) がなんかね、ゲームと関係ないところでこれからちょっと出かけてこようと思うって時に、テレビ電話を急につないでくれて。だから「動いてる (パートナー) ちゃん初めて見たね」みたいなのもあったと思うよ。で「行ってらっしゃい」とか言って、そこから電話つないで (パートナー) は出かけて、外に行って。ゲーム (と) 関係ない外に行ってるという。

LINE が繋がってから多分、そこからほぼ毎日夜寝る前に電話をするっていうのが。そこから多分、遠距離期間中はほぼ毎日。俺が仕事でなんか海外に行くとかしない限りは。ていう習慣が始まったのかな (R : 男性、34 歳)。

と、チャットからボイスチャット、LINE、ビデオ通話という流れでチャネルを徐々に拡張していった流れを共有してくれた。このように文面上のやり取りから声を通したやり取り、そして顔を見ながらのやり取りと対話時の情報が増えていくことで相手への親密度が高まることが示唆された。さらにマッチングアプリで恋人と知り合った V は

初めてそういうの（アプリ）使うし、ちょっと警戒はしとって、結構長いこと多分そのアプリの中でやり取りをしたんやけど、なんか途中で向こうから「LINE を教えてくれ」と言われて、（関係が進展したのは）その辺からやないかな、多分？「LINE 教えてくれ」と言われて。でも私ちょっと教えるの嫌で。抵抗があって、「ちょっとまだ会ったこともないし、LINE ID を教えるのにはちょっと抵抗があります」って言ったんよね、相手に。で、「そうですよね」ってなって「じゃあもうちょっとこのメッセージの中でやり取り続けましょう」って言って、またいろんな会話をして、「今度会いましょう」っていう約束ができたんよね。約束までできたし、具体的なお店も決まったし。「何が好きですか？」って言われて、確か「鶏の唐揚げです」って言ったら、鶏の唐揚げがあるお店をぶわーってピックアップしてくれて、すごい真面目なね、「ちゃんとマメな人やな」と思って「まあ LINE ID は教えましょう」ということで教えた。多分そこから一歩進んだんやないかな（V：女性、31歳）。

と、相手の男性から LINE ID を訊かれたときに警戒心から一度断ったが、実際に会う約束を交わした段階で教えることに決めたという。この V の語りからも読み取れるようにオンラインから別のオンラインのプラットフォームに移行することに抵抗を覚え、同じオンライン上でも LINE は「一定の親しい相手と交換するもの」と捉えている人がいることも示唆された。

4つ目の「個人間（二人だけの）交流」は二人だけでアクティビティを共有することを指し、主に食事やドライブを含む外出行動がこれに当たる。例えばシェアハウスで交際相手と知り合った X は複数人で登山に行った日に「次は二人だけで登山に行く」という約束を取り付けたことに対して『またどこか二人でも行きたいな』と思っていたので、すごい楽しみでした」（女性、32歳）と語った。実際に二人で出かけた際には「話す時間も、結構日光ぐらいまで行ったので移動とかも長かったんですけど、特段気まずいと思うこともなく、『やっぱり相性いいのかな』っていうふうに感じました」と、相手とのやり取りにポジティブな意味合いを見出していた。また、友人の紹介で恋人と知り合った P は紹介者を交えての交流から二人だけで買い物に行った際に相性の良さに気づき、定期的に相手の男性と食事や飲みに行くようになったと語っていた。一方、マッチングアプリで相手の男性と知り合った V や Y は以下で示すように文面上からは読み取れない雰囲気や見た目の違いに当初は違和感を覚えたという。

会って初めて「やっぱこの人、関西人なんや」っていうのがわかった。喋りで。「初めまして」から。なんか向こう緊張すると結構バーってしゃべるタイプの人で。緊張を自分でごまかすためにやたら喋る人で、その日もちょっと緊張しとったのか、今思ったらね。「よう喋りよったな、あの日は」って思うけん。多分相当向こうもぶわーってしゃべるけん、こっちはそれにちょっとびっくりして。LINE の中ではそんなにこの人がこんなにおしゃべりなもの、めちゃくちゃ関西弁なもの、全然 LINE 上では、やり取り上では気づかんやったけど、やっぱり喋ると関西弁やし圧倒されたね。「おー」ってなった。ちょっとビクビクみたいな感じ (V: 女性、31 歳)。

「え、身長ちっちゃーい。太ーい。誰だ？」って感じ。ちょっとテンション下がった (Y: 女性、30 歳)。

ただ、V も Y も相手と話す中で「楽しい」という自身の感情に気づき、相手に対して改めて好印象を抱いたという。このように複数人の交流から関係が始まった場合は二人だけで行動することに特別な意味が見出され、オンラインで出会った場合は「対面で会う」ということ自体に大きな意味が付与されることが示唆された。また、「個人間 (二人だけの) 交流」も「自己開示・情報入手」と同様に何度も繰り返し行われることで親密度が高まっていくということから小さなターニングポイントであることが示唆され、そんな中でも「初めて」二人で出かけることは大きな意味を持っていることが示された。

5 つ目の「救済行動」は Baxter and Bullis が挙げた Crisis Help に当たるもので個人的問題の手助けをする／してもらうことを指す。本調査では合コンで恋人と知り合った S が知人の結婚式の余興ムービーを相手の家で作成していた際に問題が発生して自分は慌ててしまったが相手が落ち着いて手伝ってくれたことを共有してくれた。S は当時のことを振り返って「自分関係ない作品なのに人のためにこんなに、家も開けてくれて、夜まで付き合ってくれて、こんなミスしたら『じゃあ僕がやるよ』みたいな言ってくれて、人のためにすごいやってくれる人やなーって思ったんだよね」(女性、27 歳) と述べ、相手への好感度が大きく高まったのはそのときだったと語った。

6 つ目の「好意表明」はどちらか一方が暗示的もしくは明示的に相手に好意を示すことを指す。態度で示したり言葉で表現したり方法はさまざまだが、相手が好意を読み取ることで関係が進んだり、親密度が増したりすることが示唆された。例えば友人の紹介

で恋人と知り合った P は

(相手が) 結構好意を持ってきてるのかなっていうのは、結構序盤で、なんかストレートな人で、思ったことを口にするタイプの人なんですよ、包み隠さず。というか、なんか溢れ出てる…溢れ出てるっていう言い方も変だけど。態度とか行動とかに出るタイプの人。ただ、その、私も一応彼氏がいるっていう状況だったから、ちょっと罪悪感を持ちつつも、食事が楽しくて、その飲みに誘ってくれてたから、行ってたんですよ (P: 女性、24 歳)。

と、相手の男性の態度を見て自分への好意を読み取り、それが嬉しかったと語っていた。また、オンラインゲームで Q と知り合った R は

(相手の好意は) 感じ取れたね。結構熱かったんじゃないかな。熱烈なものを頂いてた気がする。実際会ってみても、本人見ても、感情を隠せない子なので文字にも表れてるっていうのが、そのなんかストレートさが惹かれていったすごく大きいポイントでもあるんだけどね。「計算してないな」みたいな感じ。

(パートナー) がこうワンステップワンステップ進展させてくれる (パートナー) のその姿は見えてないけど、その様子を僕が感じ取れるところは「ものすごく僕に好意を抱いてくれてるな」というそこまで感じ取れるぐらい何か温かいものを、ものすごい文字から始まり、その (会話の) ラリーやら何やら感じてたから、それを繰り返すうちに「あ、この子には自分のことをオブラートにも何も包まず話せるな」という距離感になって行って (R: 男性、34 歳)。

と、Q が積極的に R にアプローチしたことで R は Q の好意を読み取り、それに応える形で関係が進展していったという。さらにマッチングアプリで恋人と知り合った Y は

(メッセージの中で)「話しているとすごく気を遣える人なんだなって思います」とか言ってくれたりとかして、向こうが。で、こっちも「私もあなたは聞き上手だなと思いました」というようなことを返して、そんな感じかな。「私 (Y) と話して

いるとなんかすごく落ち着きます」って言ってくれたから、「ありがとうございます」って答えたら向こうが「いつか同じような気持ちに持ってもらえるようになればと思います」みたいな感じで来てたかな（Y：女性、30歳）。

と、相手の男性が好意を言葉に乗せて伝えてくれた旨を語った。なお、好意伝達の際に双方が好意的感情を抱いていれば二人の関係を促進させる源となることが示唆された。一方で本調査では示されなかったが好意を示された相手が関係進展を望んでいなければ、その時点で関係が終焉するという可能性も考えられるだろう。

7つ目の「告白」は一次調査でも取り扱ったように二人が「付き合う関係」に移行することから恋愛コミュニケーションプロセスの中で最も重要なターニングポイントだと考えられる。本調査では同じ項目に「関係の確認」も記載しているが、これは一方が交際を申し込む「告白」とは異なり、一方が「私たちって付き合っているの？」と二人の関係のステータスを確認し、他方がそれを承認することで「付き合う関係」が成立する状況を指す。つまり、告白と同様に二人の関係を「付き合う関係」に移行させる働きを持つことになる。本調査では一次調査同様、親しい仲になっても告白ないし関係の確認を経て「私たちは付き合っている」という共通認識が得られなければ不安を覚えることがあることが示唆された。また、性役割意識に関しては、「告白」の実施は男性から女性へ向けたものが多く、女性側が関係を移行させる際には「関係の確認」という形が取られていた。

B. メタ認識（自分の中で生じる気持ちに意味づけすることで生じるターニングポイント）

1つ目の「好意への気づき」は参加者自身が相手に対する自身の恋愛感情に気付いた点を指す。相手との相互交流を踏まえて自分の感情にラベリングすることで相手に対する認識が変化することからターニングポイントであると定めた。例えば交際相手と関係が深まっていた当初、別の恋人がいたPは

当時付き合ってた彼と一緒にいる時に、本当に良くないんですけど、「あー、楽しくないな」ってふと思う瞬間があったんですよ、毎回、会ってる時に。もうだめじゃないですかその時点で。けど今の彼と一緒にいる時は、なんか「あ、楽しいな」って、常に「楽しいな」って思ってる自分があるのに気づいたのが多分（二人で遊ぶようになって）2週間ぐらい過ぎたところかな。結構もう5～6回ご飯行ったぐらいの

時に「私この人という時は『楽しい』って思ってる」って気づいたのがそれぐらいで、比較するのはよろしくないと思うんですけど、その当時付き合ってた彼と結構比較しちゃってた。ていうのがあって「あの人はこうだけど、この人はこんなことしてくれるんだ」みたいな。「こんなことしてくれるんだ」みたいな。「あの人にはないなあ、そんなところ」とか。結構その当時付き合った彼と比較してしまって、どっちかと言うとこう今の彼が上になってたから「この人と付き合った方が楽しいかもしれないな」っていうのは再会してご飯行きだして2週間経ったぐらいからは思っていましたね。「なんで今の彼と付き合ってるんだろうか」みたいな。「私はこっちの方が楽しいのにな」と思いました（P：女性、24歳）。

と、当時の恋人と相手を比較してしまっている自分に気づき、相手への好意を悟ったと語った。また、オンラインゲームを通してパートナーのRと知り合ったQは

私はもう「好きかも」と思いだしてるから、「好きかも」ってなってるから、「とにかく連絡を取りたい」と思って、LINEを教えてもらって、でLINEしだしたらもうそこからどんどん止まなくなくなって気持ちも。「会いたいな」って思うじゃん。で「会いたいな」って思うから「どうやって会えるかな」っていうのを考えてはいたけど、なかなか切り出すのって難しくて（Q：女性、26歳）。

と、自分の気持ちに「好き」という感情を意味づけしたことで「会いたい」という感情が生起された旨を語っていた。このように自分の中にある感情に目を向けることで「もっと親しくなりたい」という気持ちが掻き立てられることが示唆された。他にもアプリで恋人と知り合ったVは相手と恋愛観を共有する中で共感できる部分が多かった際に相手に好意を感じたと語っていた。具体的には「『高め合う関係』よりも『安らげるところを提供し会える関係』でありたい」という考えが一致したという。このターニングポイントが生じるタイミングはさまざまであったが自分の中で個人内対話に従事し、「私はこの人のことが好きなんだ」と気づく瞬間という点では同じであった。

2つ目の「男性の紳士的態度」は女性参加者数人の語りから抽出されたターニングポイントで、相手の男性が交際前に一切性的行動を取らなかったことに好感を覚えた点を指す。例えば当時恋人がいたPは相手の男性が飲酒状態でも一切触れてこなかったこと

に対して「いいな」と感じたという。その背景として飲酒を理由に理性が保てなくなる人に対して抵抗感を覚えるからだと言っていた。また、合コンで交際相手と知り合った S も同じベッドで一晩寝ても相手の男性が手を出してこなかったことに「貞操ってというのがしっかりしてるんだな」と感じたという。このことから一定の女性にとって男性が交際前に性的行動を制限することは好意的に捉えられることが示唆された。

3つ目の「認知的不協和の生起」は交際前に生じるターニングポイントの中で唯一ネガティブな結果をもたらすものであった。具体的には相手の予期しない言動に対して、どのように意味付けをすればよいか分からなくなる状況を指す。例えば合コンで知り合った男性と友人のような関係を築いていた S は自分が相手にとって「ただの友達の一部」なのか「恋人候補」なのか判断できず悩んだという。とりわけ相手の男性が異性の友人の家に行って手料理を振る舞ってもらったり「ソフレ（添い寝フレンド）が欲しい」と言ったりしていたことで判断がつかなくなったと言っていた。また、職場で恋人と知り合った T は

「好き」ってストレートに言われたわけではなかったんですけど、なんかそういうニュアンスみたいな、匂わせじゃないですけど、そんな感じで言ってきて。でも私はそれを全くもって信じてなくて。私もまだ 18（歳）で向こうが 24（歳）とかだったんで、なんかもう「私遊ばれてるんだろな」って思って。でも私は割と尊敬してたから、なんかそこを崩したくないっていうかこれからも一緒に付き合っても付き合っても一緒に仕事をするわけなんで、それでその自分の仕事に対しても「嫌になったらどうしよう」とは思ってました（T：女性、23 歳）。

と、当時 24 歳だった相手の男性に対して年下の自分は釣り合わないという考えから相手が好意を暗示するような態度を取ってもなお自分の中で葛藤が起きていたようである。さらにマッチングアプリで恋人と知り合った Y はタメ口でやり取りをしていた相手の男性が急に敬語を使い出したことに違和感を覚え、急変した態度にイライラしたと言った。その背景には相手が Y を別の女性と勘違いして敬語になってしまったという事情があったようだが Y は相手が急に話し口調を変えたことで何かやましいことがあるんじゃないかと疑念を抱いたという。このように交際前は関係が不安定なため相手の予期しない態度にどのように意味づけをよいか分からなくなり、結果的にネガティブな意味に捉え

てしまうことが多くなると考えられる。本調査の場合、最終的に交際に至っているため二者間がその後コミュニケーションを図ったことで違和感は解消されたと考えられるが、そうでなければそこで関係が終焉してしまうことも予想される。

C. 第三者との関わり（友人や知人・家族との関わりの中で生じるターニングポイント）

1つ目の「第三者への相談」は第三者である自分の友人や家族に相談することで相手との関係に進展が生じることを指す。例えば大学時代、先輩と交際に至った U は

1 回目のデートから 2 回目のデートの間に、一人の女の先輩に実は相談してて、その先輩から間接的に「(1 回目のデート) めちゃくちゃ楽しかった」みたいな、ちょっとテンション上がる情報は聞いた。そこで 0 と思った可能性がちょっと上がったかなっていう感じはあったね (U: 男性、28 歳)。

と、共通の知り合いである別の先輩に相談したことで自信を得たことが分かる。また、マッチングアプリで知り合った相手と連絡先を交換することを渋っていた Y は友人の「いいんじゃない? その人別に、いいじゃん、連絡先交換してみなよ」というひと押しで連絡先交換に踏み切ったと語っていた。なお、この友人の一声がなければその段階で相手との関係は切れていただろうとも話していた。

2つ目の「(元) 恋人との不仲/破局」は一方が元々付き合っていた相手と関係が悪化するもしくは終焉することを指す。本調査では P が遠距離の恋人と関係を終焉させたことで親密な関係を築いていた相手と交際に至っていた。P に関しては上でも示したように遠距離の相手に別れを告げる前から現在の恋人に好意を寄せており、元恋人に別れを告げる前日に現在の恋人から告白を受けていたことから新しい恋人との関係によって元恋人との関係が終焉に至ったとも考えられる。一次調査の K (男性、28 歳) も大学院で知り合った相手の女性が元恋人と関係を終焉させたことをきっかけに交際に踏み切ったと語っていた。日本では一般的に恋人は一人に絞られるため双方がフリーになることは二人の間に「付き合う」という可能性が浮上させることを意味し、結果的に関係のターニングポイントになると考えた。

3つ目の「他の異性との関係変化」は Baxter and Bullis の *Dropping All Rivals* を参考にしており、交際を目的として会っていた他の異性との交流を断つことを指す。本調

査ではマッチングアプリで恋人と出会った Y が「この人（恋人）と連絡を取り始めたぐらいからはこの人と連絡をするのが楽しいから他の人との連絡はもう疎遠になってた」と、アプリで出会った他の異性との関係の変化について語っていた。一次調査でも自律的出会いでは同時進行で複数の異性と交際を目的とした交流を重ねることが示唆されたが本調査でもその傾向が Y の語りには見られた。このとき、複数の異性との交流から一人の人との交流に焦点の的を絞ることは自分の中で交際したいと思う相手を定めることと同等であると考えられる。

【交際開始後】

A. 相互交流

1 つ目の「クオリティタイム」は Baxter and Bullis の Quality Time を参考にしており、交際開始後に二人だけで過ごす時間を指す。本調査参加者の多くは交際が始まってから休みや仕事終わりに恋人と時間を過ごすようになったと語っていた。また、二人の間に距離がある場合はオンライン機能を使って交流を図ることが示された。一方もしくは双方が一人暮らしをしている場合は互いの家に行き来することも話題に上った。オンラインゲームで互いに知り合った Q と R は遠距離恋愛を続けながら一緒にオンラインゲームをプレイしたり毎日テレビ電話をつなげて互いの近況報告を行ったり 2 ヶ月に 1 回程度互いに東京と福岡を訪ねたりしていたという。また、マッチングアプリを通して相手の男性と知り合った V は

そこはもう「彼氏と彼女」になったけん、お互いの休みの把握とか「次いつ会う？」っていうなんかもう「おはよう」から始まり「おやすみ」が生まれるようになったかな。毎日の、その日常生活の中でのやり取りが生まれるようになったかな。逐一ずっと LINE してるわけじゃないけど、お互い働いてるから。まあでも「今帰ったよー」とかそういう感じ。「今から飲み行ってきます」みたいなそんな感じのやり取りが始まったかなかな。あとは「次いつ会う？」みたいな会話が自然と生まれるようになったのは付き合ってからやね（V：女性、31 歳）。

と、互いが互いの日常に入り込む様子を語った。また、職場で恋人と知り合った T は相手と休日と一緒に過ごす中で「二人でいる時間とかはすごい大切にしてくれてるな」と

感じたという。つまり、二人で時間を過ごす「クオリティタイム」は二人の関係をより親密的なものにさせる働きがあると考えられる。

2つ目の「性的行為」は手をつないだりハグ、キス、セックスに従事したりすることを意味する。大森（2014）の報告にもあったように「告白」を通して「付き合う関係」になることは性的関係を持つことへの合意とも取れるため交際開始後にキスやセックスが行われる可能性は大いにある。なお、性的関係を持つことで相手への親密度が高まる可能性も示唆された。例えば、マッチングアプリを通して恋人と知り合った Y は旅行先で初めてキスした際に「あ、第一関門クリア（した）」と感じたという。このことに関して Y は

自分の中でのその「この人を受け入れられるか」っていう思いが（あった）。やっぱり付き合ってみたらやっぱりそういう（性的）関係になんないかやいけないでしょ？でもそれができるかできないかわかんなかったけど、いざちょっとその場面になってみたら「あ、意外と、まあまあ大丈夫。よし」みたいな（Y：女性、30歳）。

と語った。昨今は「セックスフレンド（セフレ）」、「キスフレンド（キスフレ）」、「添い寝フレンド（ソフレ）」といった言葉があるように、付き合っていない相手との性的関係が以前より普遍的になりつつある一方でモノガミー規範が強い日本では「カップルの性的排他性を守ろうとする意識」（大森、2016、p.141）があり、交際開始後に性的関係を結ぶことによって二人の間で関係に特別な意味が追加されると考えられる。

3つ目の「関係に関する話し合い」は関係維持のために自分たちの関係を客観視して互いに思うところを伝え合うメタコミュニケーションを指す。具体的には「付き合ってもし仕事が忙しいって理由で会わなくなるのはやめよう」（P：女性、24歳）といった「クオリティタイム」に関する話し合いであったり、以下の R の語りに見られるような意見が対立したときの対処法に関する話し合いだったりした。

ぶつかるときは相手を嫌な気持ちにさせて、無言の時間を貫くとかそういう二人の時間をもったいなく使ってしまうことが俺は嫌いだし苦手だから、はじめからもう（パートナー）に事前に伝えてたのは「喧嘩をする時は、もうお互いの思うことを何も隠さないで全部言い合ってお互いが納得するまで、解決するまで話し合うこと

を約束しよう」っていうのを言ってて（R：男性、34歳）。

また、恋人と喧嘩が耐えなかったV（女性、31歳）は

いつも同じような事でバチバチ喧嘩して、喧嘩する度に同じような話し合いしてっていうのがあったけど。もうしんどかったんよ、その期間すごくしんどくて、「もうなんか性格が合っていないのかもしれない」と思ったけど、それを「お互い指摘しあうことももちろん大事やけど、認めることも大事なんやと思う」って私が言ったことがあって。そしたら向こうもその考えに「せやな」ってなってくれて。「やっぱある程度さ、違う人間同士なんやけん、相手にどんだけ伝え続けたって、私は相手を変えることはできんと思うっちゃんね」って。「やけん、ある程度今から長く付き合っていこうと私は思っとるけど、あなたも思うんだったら、ある程度お互いのことを認め合うっていう方の努力をして行こう」っていう話をしたんよね、多分その頃。その辺からだんだんこうちょっとずつ変わってきたかな（V：女性、31歳）。

と、相手と話し合ったことでその後の関係が徐々に良的なものに変化していったと語った。このように二人の間で話し合いを行うことで二人だけのコミュニケーションスタイルが確立されていき、互いに関係を続けていくためにコミュニケーションに従事している姿が見られることから相互依存性が生じていることも読み取れた。

4つ目の「価値観の違いによる対立／破局」は二者間の意見の衝突によって生じる対立および関係の終焉を指す。対立の内容は部屋の片付けや時間の規律意識、金銭感覚といった相互の価値観の違いから結婚のタイミングやセックスレスについてなど二人の関係に大きく関わるものまであった。例えば、マッチングアプリで恋人と知り合ったVは

私がちょいちょいやらかすけんね、それに対してなんかぐちって言われることはあったね。だいたいね、約束しとったのに前の日に遅くまで飲んで朝起きれなかったとか、完全に私が悪いつちゃけどね。時間を有効に使えないことが彼の中では嫌みたいで。「全然昼まで寝たいんだったら『昼まで寝たい』って最初から言っとってもらっていいって。それを褒に『頑張る頑張る大丈夫』って口約束して破られるのが一番好かん（好きじゃない）」って。（V：女性、31歳）。

と、時間の規律意識に関して相手と意見が対立し、約束の時間を過ぎてしまう自分は相手からよく文句を言われていたと振り返った。また、大学で恋人と知り合った U は

25 くらいの時だったかな？彼女がもう「結婚したい」ってすごい言ってて、自分の中ではまだ就職して 1~2 年目とかだったし、正直結婚はまだ全然先のこととと思ってたから、正直今んところまだ結婚考えてない…考えてないというか、彼女が嫌だったわけじゃないけど「結婚自体をまだ考えてない」っていう話をしたんよ。それでも彼女がすごいその時結婚欲がすごかった時期で、なんかそれが耐えられずに「じゃあ別れる」って言って振られた、その時は (U: 男性、28 歳)。

と、恋人と一度関係の終焉を迎えていた旨を語った。このように相互が求めているものにズレが生じ、認識の共有ができない場合は関係が終焉することも示唆された。

5 つ目の「仲直り／復縁」は先に挙げた「価値観の違いによる対立／破局」ないし下に示す「すれ違い」の後に当事者らが関係を修復または改善する点を指す。具体的には話し合いを通じて互いの気持ちを確かめ合い、二人の間に生じていた認識のズレを確認し、その後どのように対処していくか共に考えることが挙げられた。例えば、付き合った直後から相手の仕事量が増えたことで連絡があまり取れなくなったことに不安を覚えていた P は

(連絡がないことに対して) ぐっと我慢してたら、仕事が落ち着いたぐらいの時に (中略)「連絡も全然返してなかったのに全然文句をひとつ言うこともなく、申し訳ないなって思うけどありがとう」みたいなことを言われて、なんか「そういうのを分かってくれる人なんだ」って思って。彼が「私の気持ちを汲み取ってくれるような人で良かったな」ってその時に思って、で、そこからはなるべく信じるように、なんかこう変に女の子の子らしく、よくいる女子？みたいにカリカリせず、心広く受け止めようという気持ちでいるようにしてるんですけど (P: 女性、24 歳)。

と、相手との対話を通じて安心感を得られた上に相手との距離感が大きく縮まったと語った。このように自分たちの関係のあり方を共に探っていき、自分たちに合ったコミュニケーションスタイルを築いていく様子は先の「関係に関する話し合い」と通ずる部分

がある。一方で「仲直り／復縁」はその前に対立やすれ違い等が先行して生じていることが「関係に関する話し合い」との違いだと考えられる。

6つ目の「将来に関する話し合い」は「結婚」を視野に入れた二人が将来に関して話し合いをする点を指す。交際開始時に結婚の意思を伝え合うカップルもいれば、すれ違いを機に将来のことを話し合うカップルもいた。「付き合う関係」の先に「結婚」があるか否かを二人の間で共有することで互いに関係への身の振り方を調整することができることが示唆された。例えば、互いに結婚を意識して交際していたと語った R は

遠距離だけれども、その時間の中で「本当にこの人と結婚していいのか」っていうことを常々考えながら、俺のこういう苦手なところは、料理ができないところは美味しい料理でお腹満たしてくれるし、(パートナー)の苦手な部分は俺がちょっと頑張んなきゃいけないとかそういうバランス感覚を一緒に時間を共有しながら考えて (R: 男性、34 歳)。

と結婚を念頭に相手との関係を見ていたと語った。また、遠距離恋愛が確定したことで相手との関係に不安を覚えた S は将来に関する話し合いを自ら持ち出したと語った。このとき、S は

私も(恋人)も別れるってなったらしんどいけど、(中略) 一つお互いね、離れている間にいい人が現れるかわかんないから、そういうのは自分に鎖かけずというか、「あまり『結婚の話をした』っていうのを重く捉えずに付き合っとう」みたいな話は、私がした (S: 女性、27 歳)。

と、二人の今後について自分の気持ちを相手に伝えたところ「そういうの(結婚)を見据えてお付き合いしていったらな」と返事したため二人の間で「将来をちょっと見据えて付き合う」という認識に至ったという。このとき、付き合っているからと言って二人の関係が結婚に至らないことも考えられるが、初婚平均年齢が約 30 歳である日本では特に 20 代後半～30 代前半にかけて結婚を強く意識する傾向があると考えられる。そんな中、本調査では自分と相手の結婚感や意思の有無を共有しておくことで関係への意味付けが変わってくるということが示唆された。

7つ目の「プロポーズ／入籍」は一方が恋人である相手にプロポーズし、二人が婚約関係になる点を指す。本調査では Q・R カップルが婚約中で、W と X は結婚していた。オンラインゲームで知り合った Q・R のカップルは交際開始当初から「結婚を踏まえた交際」を意識していたようだが、男性である R の踏ん切りがつかなかったようである。そんな中、女性である Q が「(あなたが) もし犯罪者になっても、浮気したとしても、結婚って軽いものじゃないから、それでも私は一緒にいるっていう覚悟を決めたいと思ってるんですけど、どうですか？」と尋ねたところ R が意を決して「結婚して下さい」とプロポーズしたという。このときのことを振り返って R は

「得られる時は得られるけど、ない時は(収入が) 0 の月もあるんだよ」っていうような仕事を俺は何年も続けてきてて。だから俺の想定で「35 には安定した状況になるための今動きをしている」っていう段階だったんだよね。(中略) この状況の時に(パートナー) に「結婚をしたい」っていう思いを打ち明けられて、俺は「正直な話をすると現状の不安ってのはこういう点だ」って(パートナー) に伝えたら(パートナー) は「私の結婚をしたいという、結婚するために大事なポイントは全然そこじゃない」っていう(パートナー) の強い想いを話してくれたから、そこに俺は動かされて、「この子は全然そういうところを見てるわけじゃないんだ」っていうのを気づかせてくれたので、俺は違う意味で安心させてもらって、その気持ちを動かされたその瞬間に俺が「結婚してください」って言った(R: 男性、34 歳)。

と語った。また、交際して数ヶ月で相手の男性からプロポーズを受けた W はあまりの急展開に驚きを隠せなかったがそれまでの相手との関わりを振り返って『『ここでちょっと考えさせて』って言っても多分答えは『結婚しよう』ってなりそうな気がして、で『はい』って言いました』(W: 女性、35 歳) と語った。このように入籍に至った背景は各々異なるが、このターニングポイントを経て「恋人関係」から「夫婦」に関係が変化し、二人の関係に対する意味付けも大きく変化することが考えられる。

B. 第三者との関わり

1つ目の「双方の家族との関わり」は Baxter and Bullis の Meet the Family を参考にしており、交際相手の親族と交流する点を指す。とりわけ結婚を視野に入れた関係に

なると相手の親族との関係は切っても切れないものとなることから双方の家族との関わりは二人の関係にとっても大きなターニングポイントとなる。また、自分の恋人が自身の両親と交流する姿や恋人が恋人自身の家族と接している姿を見ることで相手の新たな一面を発見でき、その後の関係に影響を及ぼすことが示唆された。例えば Q・R カップルの場合、女性である Q の実家に二人で訪れたとき、普段は物静かな父親がとても楽しそうに振る舞っていた様子を見て「(私の) 家にとっても、すごい良い風だな」と二人の関係にますますポジティブな印象を見出し、相手 (R) の家族と関わったときには自分の恋人のことを「とても長男だな」と感じたという。別の参加者の語りからは「交際相手を親に合わせる」というイベント自体が大きな意味を持つことも示唆された。マッチングアプリで恋人と知り合った V は母親に「(恋人を家に) 連れてきなさいよ」と言われていたが相手が「えー、いやいやいや、まだいいわ」と渋っていたという。しかし、ある日、恋人が突然「お母さんに会おうかな」と言ってくれたことで「ちょっとはそういうの(将来のこと) 考えてくれるようになったんかな?」と意識するようになったという。

2つ目の「出産」は家族が増えるという点でこのカテゴリーに分類した。本調査では唯一 W が出産を経験していた。子どもができることで家族のあり方に大きな変化が訪れ、自ずと夫婦間コミュニケーションにも変化が見られることが W の語りから示唆された。その変化は旦那の気遣う姿を見て相手の優しさに気づけたというポジティブなものもあれば子どもが第一優先となったことで相手への愛情表現が減少したというネガティブなものもあった。インタビュー実施時は出産から一年経ったころだったが「夫婦」という関係に「両親」という役割が追加された今、「お母さんとしか見られたくないな」という本音が漏らされた。つまり、子どもが生まれることで互いを「子どもの母親・父親」と認識するようになるという点では大きなターニングポイントとなることが示唆された。

C. 環境の変化 (外部の環境的影響によって生じるターニングポイント)

1つ目の「仕事などの多忙による交流機会の低下」は Baxter and Bullis の **Competing Demands** を参考にしており、仕事の多忙さなどから連絡が取れずにすれ違いが生じる点を指す。本調査では大学で恋人と知り合った U を除いて全員が学校卒業後に交際相手と知り合っていることから仕事をしながら交際してきたことを意味する。そんな中、どちらか一方もしくは双方の仕事が忙しくて二人で会う時間が取れず、関係が疎遠になってしまうことも考えられる。例えば友人に紹介してもらった相手との交際が始まった P は

交際直後の「一番楽しい／ウキウキワクワクの時期」であるにも関わらず仕事の忙しさから相手からの連絡がピタリと止んだことに大きな不安を覚えたという。そんなとき P はメディア等で頻繁に取り上げられる「男性は付き合うまでのみ気持ちが盛り上がる」という言説を思い出して「それまでの気持ちで盛り上がりすぎて、きっと冷めたんだな」（P：女性、24 歳）と咄嗟に判断したという。また、マッチングアプリで相手の男性との交際が始まった Y も相手が忙しくて会う機会が非常に限られていると語っていた。

2 つ目の「遠距離の開始・終了」は仕事の転勤で二人の間に距離が出来てしまったり、反対に相手がいる土地に異動して二人の間の距離がなくなったりする点を指す。本調査では元々遠距離恋愛を続けていたが片方の異動によって同じ土地で生活を始めた者や、反対に相手の就職や進学で遠距離が始まった者がいた。このとき、遠距離恋愛になると近くにいたときと比べて会う頻度が低下するが、オンラインでのやり取りを組み合わせることでコミュニケーションを継続させることが可能となることが示唆された。また、遠距離終了と共に次に挙げる「同棲」が始まることが多いことも示された。

3 つ目の「同棲」はカップルで同じ家に住み始めることを指す。生活を共にすることで仲が深まると同時に相互の価値観の違いが浮き彫りになり喧嘩が増えるといった言説が挙げられた。例えば、

より「好き」っていう、「好きだな」っていう気持ちはあるけど、少しずつ「共に生きていくパートナー」として認識するようになったかな。やっぱり衣食住共にするって。いきなりね、遠距離だったのにいきなりそこに来たから、やっぱり最初は、喧嘩とかも絶えなかったというか…絶えなかったって言ったら悪い印象になるけど、話し合い？喧嘩とか話し合いが多かったかな（Q：女性、26 歳）。

本当に 6 畳ぐらいの部屋に二人で住んでいるので、本当に仕事の時間以外一緒にいたので、その長い時間をより過ごすようになったっていうのは関係が深まったこともあるし、逆に一緒にいすぎて関係が悪くなるというか喧嘩とかもあった時もやっぱりありましたね（X：女性、32 歳）。

などの語りが見られた。このように一緒に住むことで互いの見えなかった部分が見えるようになり、二人の関係にさらに変化が見られることから「同棲」も恋愛コミュニケー

シヨンプロセスの中で一つの大きなターニングポイントになることが示唆された。

上記にまとめたように今回 10 人のインタビューデータを元に恋愛コミュニケーションプロセスの中で生じるターニングポイントを抽出し、それぞれの内容を説明してきた。

5.5. 考察

5.5.1. シンボリック相互作用論的アプローチ

二次調査ではシンボリック相互作用論的アプローチを取るターニングポイントの観点から本調査参加者の恋愛コミュニケーションプロセスに関する分析を行った。その中で参加者は交際相手と出会ってから「付き合う関係」に至るまで、また至ってからも相互の関係を反映する言語やその他の象徴としてのシンボルに対して意味づけないし意味の修正を行いながら、その意味に則って自身の言動に関する判断を下していた。つまり、彼（女）らは相手との相互作用の中に自分なりの解釈を見出して、その解釈に基づいて自身の言動を決めていたのである。例えば、出会いそのものにポジティブな意味づけを行い、その解釈に則って関係発展を決める者が多くいた。例を挙げるとすればオンラインゲームで相手と知り合った R は

（パートナー）は多分そんなにめちゃくちゃ印象は残ってたようではないけど私は、そのゲームの中でのチャット？文字でのチャットと、ジェスチャーが使えるのね。この自分のキャラクターというか、アバターに「笑う」とか「悲しむ」とか、そういうジェスチャーがあるから、それをすごいよく使ってるので感情がすごい伝わってくるし。「なんかとってもコミュニケーションしやすい人だったなあ」と思って、印象にとっても残ってて、でもなんか「フレンドリクエストしてずっと繋がっていたい」ってまでそこまでは思わなかったの、その時は。だから 1 日空いてて。丸 1 日。でも、そこから私がずっとそのゲームの中での会話とか「楽しかったなー」っていうのが残ってるから、「もう 1 回あわよくば一緒にゲームしたい」と思って、自分から一緒にプレイした人を探しに行っ、その中で「あーこの人だったな」って見つけたから、勝手にフレンドリクエストを送って、そうだなあ、そのフレンドリクエ

ストしてから 12~3 時間ぐらい空いて、承認が来て、そこからなんか結構仲良く、一緒に二人だけで狩りに行ったりとか、手伝ってもらったりとか、新しい武器の使い方を教えてもらったりとか、そういうところから始まりました (R: 女性、26 歳)。

と、相手との初めての相互交流に対して「コミュニケーションしやすい人だった」と意味づけし、その意味に則って「フレンドリクエストを送る」という行動を選択していた。なお、この R の行動に対してパートナーである Q は

「一期一会」ぐらいな感覚でやってるそのゲームでの出会いで「楽しかったです。ありがとうございました、また会えたらいいですね」って言ってお別れして、1 日経って、(パートナー) の方から PlayStation®のアカウントっていうものにメッセージが届いて、ゲーム内での名前を見た時に「あれ昨日か一昨日だったかな?一緒にやった人だなあ」と思って文章を読んでみたら「良かったら友達登録をして、また一緒にゲームやってもらえませんか?」っていう風にメッセージを送ってきてくれたから、俺としても初めて一緒にゲームやり取りして、言葉交わしたっていうその時間が楽しかったという印象があって当然拒否する理由もないので「是非また一緒にやりましょう」という返事をして (R: 男性、34 歳)。

という気持ちでフレンドリクエストを承認したという。この二人の交流をシンボリック相互作用論的観点から見ると、R が「昨夜楽しく会話していたからフレンドリクエストを送れば承認してくれるだろう」と期待して行動を起こし、Q がその期待に応える形でフレンドリクエストを承認したことによって、R は自分自身の意味付けの正確性を確認することが可能となっている。

無論、意味づけとその意味に則った言動の選択は「出会い」に限定されるものでなく、今回列挙したターニングポイント全てに共通して言えることである。例えば「自己開示・情報入手」では相手との相互交流を重ねる中で「この人は〇〇な人なんだ (例: 真面目、優しい、私との共通点が多い)」という解釈から「私たちは相性が良い」という意味づけが行われればさらなる関係の発達につながる言動を選択することが示唆された。他にも「コミュニケーションチャネルの拡張」では「この人なら LINE を教えても大丈夫そう」、「この人と直接会ってみたい」という意味付けから拡張が行われたり、反対にチャネル

が拡張されたことで二人の関係が「より親密なもの」として認識されるようになっていたりしていた。なにより「告白／関係の確認」の時点で行われる意味付けは二人の関係を大きく移行させる重要な役割を担っていることが確認された。少なくとも本調査の参加者は「告白／関係の確認」に至る段階で相手との交際を強く意識しており、自分と相手との関係に特別な意味を見出していた。そこに「告白／関係の確認」という相互作用が取り交わされることによって関係に「付き合う関係」という意味が付与され、結果的に「私たちは付き合っている」という共通認識が生じ、二人はその意味に則って「告白／関係の確認」ターニングポイント以降の言動を選択するようしていた。

この意味づけとその意味に則った言動選択は「相互交流」に留まらず「メタ認識」や「第三者との関わり」でも見受けられた。例えば「メタ認識」の「好意への気付き」は正に感情への意味づけであり、その意味づけによって自身の態度や相手の行動に対する認識に変化が見られた。他にも「認知的不協和の生起」では相互作用の中で相手の言動に「なにかおかしい」と意味づけすることで認知的不協和が生じ、生じた違和感の解消につながる言動が取られることが示唆された。例えば合コンで恋人と知り合った S は交際前に相手からハグをされてとても混乱したと語っていた。つまり、S は「ハグや添い寝は付き合っている人とのみすること」という認識と「付き合っていないのにハグされた」という現実との矛盾に「なにかがおかしい」と意味づけし、その違和感を解消するために相手にハグの意図を直接訊くという行動を選択したと考えられる。不協和理論を提言したフェスティンガー (Festinger, 1957 ; 末永訳、1965) は「不協和の存在は、心理学的に不快であるから、この不協和を低減し協和を獲得することを試みるように、人を動機づける」(p.3) と述べている。S も相手に「友達として認識しているのであればハグをやめて」とお願いすることで不協和の原因を解消しようとしていた。一般的にシンボリック相互作用論は二者間の交流によって意味付けが行われることを前提としているが、「認知不協和の生起」に関しては個人の中で意味付けが完結する場合があります、他とは異なる特殊な意味付けが行われていると考えられる。

また、「第三者との関係」の「(元) 恋人との不仲／破局」は結果部分でも触れたように「恋人は一人に限定される」と排他性が尊重される恋愛で「第三者との交際の終焉」は「別の相手との交際可能性の生起」と結びつけることができ、「今、二人は互いにフリーな状態にある。つまり、二人の交際が認められる状況にある」という意味づけから「告白／関係の確認」が実行されるという状況も見受けられた。

このように各ターニングポイントに焦点を当ててみると参加者が恋愛コミュニケーションプロセスの中で相手との相互交流やメタ認識、そして第三者との関わりの中で生じる出来事に随時意味を見出し、その解釈にのっとなって行動していたことが確認できた。このことはシンボリック相互作用論が日本人の恋愛コミュニケーションを探索する上で大変有効であることを示し、二人の表面的交流だけでなく、どうしてそのような言動に至ったのか、その動機や背景を知ることが可能となる。このことを踏まえれば Bolton が主張したように、変数ばかりだけでなく二者間の相互交流の中で付与される意味とその意味に対する当事者の反応にも焦点を当てることが求められると結論づけられるだろう。

5.5.2. 「出会い」への再着目

一次調査同様、「(異性との) 出会いがない」と主張する人が多い現代で本調査参加者はさまざまな場所および形で交際相手との出会いを果たしていた。例えば、「偶発型」に分類した Q・R カップルの出会いは「オンラインゲーム上」と比較的珍しいものだった。一昔前までビデオゲームといえれば一人でプレイしたり学校・近所の友人や家族とプレイしたりする程度に留まっていたが情報技術の発達により今では世界中の人とプレイすることが可能になった。加えて、Q は『『モンスターハンター』っていうあのゲームがそうさせてくれたなっていうのがあって。『知らない人のところに突入して行って、楽しめますよ』っていうゲームの作りがされてて」(Q: 男性、34 歳) と、ゲームそのものが出会いの場になっている旨を示唆していた。

本調査ではマッチングアプリを通しての出会いも人びとの間で浸透し始めていることが示唆された。例えばマッチングアプリで恋人と出会った V が

(私の周りで) 他にもやっぱり (アプリを利用) してて、そこから彼氏ができてとか結婚したって人が結構いて「このツールもアリなのかな?」と思って。最初は反対派やったっちゃん。「ちょっと怖いし」みたいなのが。昔で言ったら「出会い系サイトやん」と思って、ちょっとそれが怖いという印象が強かったんやけど、実際に使用してみたら全然むしろこういう (怖い) ことももしかしたら起こるのかもしれないけど、私はそういうこともなかったし「全然いいツールやん」って思えた。そこで彼氏ができたけんやろうけど (V: 女性、31 歳)。

と言うように、以前は比較的ネガティブな印象を抱かれていたマッチングアプリも徐々に「効率の良い出会い方」として認識され始めているようである。補足をすると近年のマッチングアプリは免許証や保険証といった身分証明書の提出（写真を撮影して送る）を行わないとメッセージのやりとりができないように設定されているものが多い。このように安全が保証されているためアプリに対するネガティブな印象が払拭されつつあると考えられる。国内最大級のマッチングアプリ pairs（ペアーズ）に至っては登録者数が1000万人を超えていることから利用者の幅が広がっていることが見て取れる。

さらに本調査では「紹介型」という新しい型が抽出された。結果でも述べたが、この型は本人が友人に仲介を依頼するのではなく、友人の方から「この人に会ってみたい？」と出会いを持ちかけるものである。これは伝統的な見合いに近いが、結婚を意識しないカジュアルな出会いの提供となる。この「紹介型」のメリットは「仲介依頼型」と同様、紹介者と被紹介者の関係が親密な場合「この二人は性格が合うだろう」という考えの下、出会いが提供される点にある。反対に関係が親密でなければ「性格が合わない相手」を紹介されるリスクが生じることから紹介者と被紹介者の関係が大きなポイントとなる。例えば、友人に紹介を受けて恋人と知り合った P は

（友人が）紹介してくれた理由っていうのを彼に全然話したことがなかったんですけど。その子（紹介者）が「こういうこと言ってたよ」とか言ったことがなかったんですけど、ある日、付き合ってからちょっとぐらい経った時に、その友達が言ってたことと同じような事を言ってたんですよ。私を好きになった理由っていうか。私をいいなって思った理由が「聞き上手」っていうのはポイントとして一個あったみたいで。でもそれだけじゃなかったらしいんですけど。なんか、だからその友達が間違ってたなと思ったなと思いました。友達の紹介って言っても結構すごい親しい友達からの紹介と、とりあえずの友達？そんなに関係が深くない友達からの紹介じゃ、やっぱり全然違うかなっていうのはあります（P：女性、24歳）。

と語っていた。

「出会い」は関係構築の中で最初に生じるターニングポイントである。当たり前だが「出会い」がなければ関係は始まらない。その点はいかなる形の出会いにおいても同じだが、一次調査でも触れたように出会いそのものが「付き合うこと」を意識しているか

否か（「偶発的出会い」か「自律的出会い」か）で各ターニングポイントに見いだされる意味が変化することが二次調査でも見て取れた。具体的には所属コミュニティや出先で出会った相手と関係を構築していく中で徐々に親密度が高まっていく「偶発的出会い」と比べて交際を目的とした「自律的出会い」では「この人と付き合えるだろうか」という考えを念頭に交流が進められることが示唆された。中でもマッチングした段階から相互の査定が始まっている「マッチング型」では

（アプリを利用する）メリットは「時間短縮」。一気にいろんな人と連絡を取れるから自分の家にいる時間も活用できる。街コンとか合コンとか行くと、人数が限られてるから自分の好みの人が中にいなくてお金を払って無駄な時間を過ごすっていうことになるけど、マッチングアプリは最初から自分が「いいな」って思ってる相手としか会話をしなくていいっていう面ではいいと思う（Y：女性、30歳）。

と Y が語っているように交際を強く意識した上で効率的に相手を探すという過程が見て取れる。このことは「出会い」そのものに意味付けし、その意味に則って言動を選択するという点でシンボリック相互作用論ともつながっているとと言える。自律的出会いでは、「出会い」そのものに『『付き合うこと』が目的』と意味が付与され、当事者たちはその意味に則って相手との相性を測ろうとする。相手が自分の求めているものを持っているか確認する質問を投げかけたりデートを重ねて価値観が似ているか否か確認したりするであろう。結果、二人の関係にポジティブな意味付けが行われれば「関係を続けよう」という動機が高まると考えられる。反対に偶発的出会いでは、「出会い」そのものに対しては「単なる同僚／同級生／他の客」という意味が付与されることから相手を恋人候補として判断することはなくなると考えられる。

最後に参加者の「出会い」に関する語りを読み解いていくと「相手と自分の共通点の発見」が関係に対するポジティブな意味づけにつながっていることが示唆された。すなわち、お見合いや高度経済成長期以前の職縁恋愛のように家柄や学歴は強く意識されず、趣味や嗜好の一致が二人の関係発展を促進させていた。例えばシェアハウスの同居人として相手を紹介してもらった X は LINE のアイコンから相手が登山好きだということを知り、自分も登山が好きなことから相手に好意を抱いたと語っていた。また、たまたま参加した合コンで相手の男性と知り合った W は海外に興味があるという共通点で話が

盛り上がったと語っていた。マッチングアプリを利用して相手の男性と知り合った V も「アウトドアが好き」という共通の趣味を通してマッチングしたと答えた。すなわち、趣味・嗜好の一致はその後の二人の相互交流を促進し、二人の関係は親密になると予測できる。先行研究で見たように同じコミュニティに所属している時点で二者間の類似性は高くなると考えられる一方、コミュニティ外での出会いは類似性が保証されていないため「出会い」の段階で確認される必要があると考えられる。

これらのことを総括して考えると、現代の交際につながる出会いは複雑になっており、とりわけコミュニティ外で二人の人間が出会ったところで関係が発展する保証はない。しかし、これだけさまざまな場面に出会いが生じていることから「出会いがない」と言ってしまうのは性急すぎる結論だと考えられる。先行研究から見てきたように以前のように出会いを提供してくれる第三者の存在がいなくなった今、出会いは自ら求めていくものとなっていると考えられる。さらに相手と出会った上で相互に相性を見定めていく必要があると言えるだろう。

5.5.3. 「自己開示・情報入手」と関係発展

「出会い」後、互いの相性を見定めに欠かせないのは「自己開示・情報入手」である。一次調査でも取り上げた不確実性減少理論 (Berger & Calabrese, 1975) によると人は不確実性が高ければ高いほど情報を探ろうとするという。同理論では言語・非言語の量が増えれば不確実性は減少し、不確実性が減少すれば親密度・好意は増し、さらに共通点や共通のコミュニティが増えることも不確実性の減少に貢献することが示されている。また、自己開示は返報性を伴うことから一方が自己開示すれば他方も自己開示することも主張されている (表 5-5、8つの公理参照)。今回もターニングポイント「自己開示・情報入手」で情報を共有し合うことで親密度が高まっていく様子が見て取れた。なお、ここでいう「自己開示」とはお互いにビッグシークレットを打ち明けて親密度を急激に高めるというものではなく、互いのことを徐々に知っていく中で親近感を構築していくものである。とりわけ Berger and Calabrese によって提唱されている公理 6 の「類似性」に関しては本調査でも共通点の多さが関係発展を促したと参加者が語っていた (表 5-5 参照)。

表 5-5 不確実性減少理論 8つの公理

1	言語 コミュニケーション	関係初期に二人の言語コミュニケーションが増えれば不確実性は減少し、不確実性が減少すれば言語コミュニケーションは増えていく (i.e. 最初は互いに口数少なかった二人が徐々に会話の幅を広げていく)。
2	非言語の温かさ	関係初期の段階で交わされる親和的非言語表現 (笑顔やあいづち) が増えれば不確実性は減少し、不確実性の減少は親和的非言語表現の増加を促進する。
3	情報収集	不確実性が高ければ情報収集行動が促進され、不確実性が減少すれば情報収集行動は減退する。
4	親密性	不確実性が高ければ親密性は下がり、不確実性が減少すれば親密性は高まる。
5	返報性	不確実性が高ければ人は自己開示の返報性に従い (i.e. 相手が自己開示した分だけ自分も自己開示するが必要以上の情報共有は行わない)、不確実性が低ければ返報性は意識されない。
6	類似性	二者間の類似性が高ければ不確実性は低くなり、類似性が低ければ不確実性は高くなる。
7	好意	不確実性が高ければ相手に対する好意は低くなり、不確実性が減少すれば相手に対する好意は高まる。
8	共有のネットワーク	共有ネットワーク (例: 相手の家族や友人を知っている) が増えれば不確実性は減少し、共有ネットワークに限りがあれば不確実性は高まる。

Berger, C. R. & Calabrese, R. J. (1975). Some explorations in initial interaction and beyond: Toward a developmental theory of interpersonal communication. *Human Communication Research*, 1, 99-112.を元に作成.

一方で調査結果の内容には Berger and Calabrese が提示している公理と一致しない現象も含まれていた。例えば、公理3の「情報収集」は情報の欠如が情報収集の動機につながると仮定しているが、本調査では不確実性が必ずしも情報収集の動機につながるという点は支持されなかった。この公理3に関しては Kellerman and Rodney (1990) が10の大学の1000人以上の学生を対象に不確実性を減少する動機について研究した際に

「知識がないことよりも知識を欲することが他者との関係初期での情報収集を促進する」(p.71)と示しており、公理3は理論から排除されるべきだと主張している。すなわち、相手の情報が欠如しているがゆえに相手の情報を探ろうとするのではなく、相手に好意を覚えてもっと知りたいと思うがゆえに相手に関する情報を得ようとすると考えの方が自然だというのが Kellerman and Rodney の主張である。本調査でも例えばオンラインゲームを通じてパートナーと知り合った Q が「もっと話してみたい」という自身の感情がコミュニケーションの促進剤になったと語っていたように、不確実減少行動を促進するのは情報の不足ではなく、相手への好奇心だと言えるだろう。

公理4に関しても本調査では相手に関する情報が増えることで親密性が高まる保証はないことが示唆された。本調査の参加者に限定すれば、最終的に交際に至った相手とのコミュニケーションプロセスにまつわる話をしてもらったため自己開示と親密性に正の関係が見いだされたが、相互に自己開示を進めた結果、相性の一致が確認できず、関係がそこで終焉する可能性も考えられる。とりわけ「自律的出会い」では恋人になるかもしれない相手に対して一定の理想を抱いていることから相手の情報を得る中で自分の理想とズレを感じた場合、そこで関係を終えることもあり得る。マッチングアプリの中で自分の理想にぴったりの相手とマッチングしたと思ってもいざ約束を取り付けて実際に会ってみたら思い描いていた相手と全く異なる人が現れて落胆したという経験を持つ人も少なくない。

また、一次調査と同様に本調査でも出会いによって人びとがどのように相手に関する情報を入手するかに変化が見られた。Berger and Calabreseによれば、人は不確実性を減少させる戦略として3つの異なる方法を用いるという。1つ目は「受身的的 (passive)」で、例えば相手が他の人と会話している様子を遠くから観察するといった行動を指す。2つ目は「活動的 (active)」で、第三者に相手のことを尋ねたりして相手と直接関わらず相手の情報を得ることを指す。3つ目は「相互作用的 (interactive)」で、実際に相手と交流して情報を得ることを指す。かつて見合い結婚が盛んだった時代には釣書と相手の写真を事前に見ることで情報を得ることができた。この方法は第三者である仲人や相互の親から情報を得ていたことから「活動的」に分類されると考えられる。対して職縁結婚が盛んだった時代にはコミュニティ内の相手の行動を観察し(「受身的」、同じ社内の人に相手のことを尋ね(「活動的」、実際に相手と交流する中で情報を得る(「相互作用的)」といった行動が取られたであろう。本調査参加者の行動にも上記3つ

のストラテジーが見られたが、その内容は出会いによって変化した。

例えば「自然型」の場合、コミュニティ内で相手の様子を観察することも同じコミュニティの第三者に相談することも実際に相手と話して相互に自己開示を行うことも可能である。だからこそ大学のサークル内で恋人と知り合った U は飲み会で相手を見かけて「美人だな」と印象を抱いたり（受け身的）、同じサークル内の先輩から情報を得たり（活動的）、実際に会話したり（相互作用的）する中で相手に対する印象形成を行っていた。一方で、例えば「マッチング型」の場合、相手のプロフィールを見て情報を得たりマッチングをして実際に会話したりすることは可能だが共通の知り合いがない可能性が高いため第三者から情報を得ることはできなくなる。そもそもマッチングしなければ話して情報交換することもできない状況にある。はたまた第三者の役割が大きい「仲介依頼型」および「紹介型」では相手と出会う前に紹介者と非紹介者の間で一定の情報共有が行われるだろう。

一次調査でも示したように偶発的出会いでは双方の自己開示によって相手にまつわる情報の範囲が徐々に広がって好意が高まるのに対し、最初から交際を意識する自律的出会いでは自身の思い描く恋人に当てはまる相手を探すため、自己開示によって関係が終焉してしまう可能性を帯びていることが示唆された。例えばシェアハウス入居によって恋人と知り合った X は会う前から相手とメッセージ交換したり同居人から話を聞いたりする中で「似ている部分が多いな」と感じ、好意が高まっていったと語っていた一方で、マッチングアプリで交際相手と出会った Y は相手のプロフィールに目を通して『動物が好き』というところと、あと『大学卒業してる』ってところ。あと年齢が同い年。そして本当かどうかわからないけれども年収が良かった。そこも目に付いたよね。で、『タバコ吸わなくてお酒が好き』っていう自分の求めている条件に合ってる人だった」と相手の情報を入手できるマッチングアプリの特徴を利用して自分に合う相手を探していた。このとき X は共通の趣味がなくともシェアハウスでの生活を通して相手と親密な関係を築いていたかもしれないが、Y の場合は相手の趣味や価値観が自分の求める理想条件とマッチしていなければ、二人が話をすることはなかったと予想できる。このように同じ「自己開示・情報入手」でも出会いの目的が異なる「偶発的出会い」と「自律的出会い」ではその意味が変わってくることが示唆された。

5.5.4. 恋愛におけるメディア・コミュニケーションの重要性

総務省（2020）によると、2019年における個人の年齢階層別インターネット利用率は本調査対象者である20歳～39歳で約99%と、ほぼ全員が生活の中でインターネットを利用していることが明らかになっている。情報技術の発展および普及に伴って私たちのコミュニケーションスタイルが大きく変わってきたことは本論文の冒頭でも述べたが、恋愛コミュニケーションプロセスにもその傾向が見て取れた。

まず、インターネットの普及で遠くにいる人や日常の中では出会えないような相手と簡単に関係を持つことができるようになったことが示唆された。本調査参加者の中だけでも互いに東京と福岡にしながらオンラインゲームを通して知り合ったP・Qカップル、マッチングアプリを通して恋人と知り合ったVやY、シェアハウスに引っ越す前からLINEを通じて相手とコンタクトを取ることができたXとインターネットがあったから相手とつながりを持つことができた人が多くいる。一方で、多くの研究が「交際相手と出会ったきっかけ」の参照元としている国立社会保障・人口問題研究所の動向基本調査（2015）には「インターネットで」の項目はない。そこにある選択肢は「職場や仕事で」、「友人・兄弟姉妹を通じて」、「学校で」、「街なかや旅先で」、「サークル・クラブ・習いごとで」、「アルバイトで」、「幼なじみ・隣人」、「見合いで」、「結婚相談所で」、「その他」となっている。近年はマッチングアプリの普及も進んでいるため「インターネットで」の選択肢を増やすことが求められるであろう。

また、出会いがオンラインかオフラインかによって二人の関係構築のプロセスに変化が見られたことも言及に値するだろう。例えば、出会いがオフラインであれば最初から相手の容姿や対面時のコミュニケーションスタイルを直接見ることができるのに対し、出会いがオンラインだった場合、相手の声はもちろん、容姿も分からない可能性がある。例えば出会いがオンラインゲームだったP・Qカップルを例に考えれば最初は画面上に映し出された互いのアバター（自分で作ったキャラクター）しか視覚的情報がなかった。マッチングアプリの場合、自身の顔写真をプロフィールに掲載することもあるが、より多くの人に見てもらうために加工を施している可能性もある。実際アプリを通して恋人と知り合ったYは対面時にプロフィール写真から想像していた相手の容姿と大きくズレがあったことにはがっかりしたと語っていた。

さらに今回ターニングポイントの一つであった「コミュニケーションチャネルの拡張」

は二人が交流するプラットフォームを拡張して親密度を高めるという点で二人の関係に大きな変化をもたらすと示唆された。この「コミュニケーションチャンネル」とは情報を伝え合う経路のことを指し、「見る・聴く・味わう・触る・匂う」といった五感や「対面で／インターネット上で」といったルートを目指す。本調査ではオンライン・オフラインに焦点を当てて考察を進めているが、どちらのルートでコミュニケーションを図るかは五感とも結びつくと考えられる。例えばコミュニケーションの場がオフラインの場合、初めから相手の顔を見て、相手の声を聴き、相手の匂いを知り、時には相手と食事を共有することで味わい、触れ合うこともある。一方、コミュニケーションの場がオンラインでツールがメッセージ交換のみの場合、相手が紡ぎ出す文字を見ただけで相手のメッセージを解釈する必要がある。オフラインと比較すると使える五感が一気に絞られる。このことを踏まえると出会いがオンラインの場合、相手との間に生じる解釈のズレがオフラインでのコミュニケーション時より大きくなると考えられ、より高度なコミュニケーション能力が求められると考えられる。

このことからオンラインで出会った二人が徐々にコミュニケーションチャンネルを拡張させ互いの声や容姿を知り、空間を共有していくにつれて文面上では読み取れなかった双方のコミュニケーションスタイルが見えてくる様子は非常に興味深い。例えば、Q・Rカップルはゲーム上の文字だけのやりとりからゲーム上の声を使ったやりとりに移行し、その後LINEを使ってビデオ通話をしたりして関係が発展していった旨を語っていた。また、マッチングアプリで恋人と知り合ったVは相手に信頼感を抱いたことでLINEのIDを伝えたと言っていた。このことから二者間の親密度とコミュニケーションチャンネルの拡張の度合いは比例し、コミュニケーションチャンネルの拡張は二人の関係進展の促進に大きく貢献すると考えられる。とりわけオンライン上で知り合った二人がオフラインで実際に対面しようとなれば、それこそ大きなターニングポイントとなるだろう。

一方、オフラインで出会った二人はオンラインにコミュニケーションチャンネルを拡張させることで、これまで見えなかった相手の一面が顔を出すことも示唆された。これは交際相手との出会いが職場だったTの語りから導き出された考察だが普段の交流の場が「職場」と公的な場であることから自身の役割を強く意識するのに対し、就業時間外にオンラインで交流することは私的な場となることから「職場の先輩・後輩」という枠の外での交流を意識したと考えられる。これは相手との間柄を強く意識する日本人に特に強く見られる行動の可能性がある。

以上のことからインターネットが普及した現代で恋愛コミュニケーションプロセスを調査する上ではメディア・コミュニケーションの存在も視野に入れる必要があると主張できる。とりわけ情報技術の発達が今後も期待される現代ではインターネットの存在を踏まえた研究を進めていくことが求められるだろう。

5.5.5. 最大のターニングポイントとしての「告白」

本調査で導き出された結果と Baxter and Bullis (1986) の調査結果を見比べたとき、本調査結果では「告白・関係の確認」というターニングポイントによって二人の関係が大きく変化する点が最大の相違点となっていた。先行研究及び一次調査でも「告白」の重要性は説いたが、本調査でも「告白」によって生じる二人の「間柄」の移行が浮き彫りになった。表 5-6 は本調査の参加者の告白ないし関係の確認のシチュエーションをまとめたものである。

表 5-6 参加者の「告白／関係の確認」シチュエーション一覧

P	紹介	数年前に友人から紹介された男性と再会し、二人で会うことが増え、関係が親密になるにしたがって当時遠距離恋愛をしていた恋人との関係に疑問を感じるようになる。恋人との別れを決意したところ、別れを言いに行く前日に親しくなった相手の男性から「一緒にいて楽しいし、もしできたら、今の人と別れて僕と付き合っ欲しい」と告白を受ける。翌日、恋人に別れを告げ、改めて相手の男性から「好きです」と告白を受けて交際が始まった。
Q ・ R	偶発	オンラインゲームで知り合った二人はボイスチャット、LINE、ビデオ通話などで親密度を高めて両想いの状態で初対面を果たす。東京にいた R が福岡にいる Q を訪ね、その日のうちに「付き合っ下さい」と告白し、交際が始まる。R は Q に会う前から「直接会ったフイーリングが今（会う1ヶ月前）感じてるこの感情と間違いがなかったら、どこかのタイミングで俺が帰るまでにもう付き合っ欲しいと告白しよう」と決めていたという。

S	グループ 交際	合コンで知り合っ親しくなっ男性の家に宿泊することになっある日、ベッドで一緒に寝ていたところ後ろからハグをされて驚く。自分たちの関係に疑問を覚えて「ハグとか一緒に寝るとか友達でもできるみたいな（こと）言っただけで今日みたいなこと、ハグとかされてしまうと私多分勘違いしたりするから（あなたが）どうい気持ちでしてるかわかんないけど、それがただの本当に友達としてやってるんだったらやめて欲しい」と伝えたところ「ちょっとその事についてちゃんと話したいから、夜時間をください」と返事を受ける。その日の夜、相手から「僕はSちゃんが好きなんだと思う、付き合ってください」と告白を受ける。驚きつつもOKし、交際が始まった。
T	自然	ふとしたきっかけで職場の先輩とLINEや電話をするようになり、毎日のやり取りが続く中で一緒に花火をすることを約束する。相手に好意を抱いていたが年齢差などを考えて「相手は本気ではない」と自分に言い聞かせていた。花火当日、平静を装いながら過ごしている最中に相手の背中が触れ、「遊ばれる」という考えが浮かぶ。「遊びならやめてほしい」と言うると相手から「好き」と気持ちだけ告げられる。二人の関係について言及はないまま時間は過ぎていき、帰りの車の中で疲れて寝て起きるとホテルの前にいた。「完全に遊ばれたわ」と思いつつ、部屋の中で「本当に遊びならやめてほしい」と念押しすると相手から「付き合いたい、てか付き合おう。自分もその言葉足らずだった」と改めて告白され、交際が始まった。
U	自然	出会った当初から好意を抱いていた大学のサークルの先輩と関わりを持つ中で相手に対する自身の強い恋愛感情に気づき、自分から誘った2回目のデートの帰りに「好きなんで付き合っほしいです」と告白。相手にOKをもらっ交際が始まった。
V	マッチング	マッチングアプリを通して知り合っ男性と二人で食事、映画、カフェなどに出かけ、4回目のデートの帰りに相手から「Vちゃんとおったらすごい楽やし、落ち着くし、素でおれる」と言われ、「っことで付き合っ下さい」と告白され、それを受けて交際が始まった。

W	グループ 交際	たまたま参加した合コンの場で知り合った男性と意気投合して後日二人で遊ぶことに。その後、二人で会うのは2回目というとき相手から「付き合いたいな」、「考えといて」と想いを告げられる。改めて二人で酒蔵開きに出かけた際に「楽しかったら渡そう」と用意していたバレンタインチョコを渡して暗示的に気持ちを伝え、交際が始まった。
X	偶発	入居予定のシェアハウスの住人を共通の知人に紹介してもらい、連絡を取ったり実際に会って話をしたりする中で好意を抱くようになる。複数人もしくは個別で遊んだ後、「ダラダラしたくないな」と感じていたため「これって付き合ってるのかな？」と関係を確認。相手が「そうだと思ってた」と返したことで交際が始まっていたことを認識した。
Y	マッチング	マッチングアプリを通して知り合い、5回デートを繰り返した相手と二人で野球観戦に出かけることに。野球観戦後、食事を終えて、相手の提案で Y の家の近くの神社を散歩することに。「もう（告白して）くるかなー？」と期待したが神社の中で告白を受けることはなかった。その帰り、車の中で相手が「(俺のこと) どう思ってるの？」と尋ねてきたが、聞き方に違和感を覚えて返事を濁すと相手が「これはちょっと違うね。もう言うね」と意を決した様子で「よければ僕とお付き合いして下さい」と告白。それを受けて交際が始まった。

Baxter and Bullis のターニングポイントにも Joint Exclusivity Decision (排他性への同意) はあるものの、それが特別取り上げられることはなく他のターニングポイントと同等に並列されている。このことは西洋人が「恋愛関係 (romantic relationships)」に移行する瞬間をさほど重要視していないことを暗示している。一方で本調査では「告白・関係の確認」を経て「付き合う関係」に移行した二人はそれまでと異なるコミュニケーション行動に従事していたことから「交際前」と「交際開始後」という2つの大きな枠組みを設定した (表 5-3 参照)。

今回、「告白・関係の確認」は二人の「間柄」に大きな変化をもたらし、二人の関係を「付き合う関係」に移行させたという点で他のターニングポイントと比べてより重要な鍵を握っていることが示唆された。「付き合う関係」に移行する前から二人だけで出かけ、定期的に連絡を取り合っていた二人も「告白・関係の確認」を経た二人は暗黙の了解的

に休日と一緒に過ごし、離れていても連絡を取り合い、問題が生じれば話し合いの場を設けて認識の確認を行うことが示された。これらの行動は Farrer et al. (2008) が示す「付き合う関係 (*tsukiau relationship*)」の中で行われる行動と一致していることから「告白・関係の確認」は二人の間に「私たちは『付き合う関係』にある」という共通認識を作り出す大きな役割を担っており、当事者たちはその認識に基づいて相互作用の内容を選択すると捉えることができる。

この認識行動は自分と相手がどのような「間柄」であるかによって態度を変化させる「間人主義」文化を持つ日本人の特徴 (浜口、1982) が表れているのではないだろうか。相手と自分の置かれている立場に関係なく終始一貫した自己を保持しようとする西洋人は2つの独立した個が相互に交流することで関係を築くため二者間の関係を何と呼ぶか気にしない傾向にあるのに対し、相手との間柄が何であるのか明確に把握した上で自身の言動を定める日本人は相手との関係の中に自己を見出すため二者間の関係が何であるのか出来る限り早い段階で定めようとする。間人主義を提唱した浜田によれば、日本人は「自分」を「互いに知り合った自他間で共有される生活空間のなかから、置かれたときどきの状況に応じて、自らの側に配分された部分」(p.142) の中に見出すという。

この価値観を本調査の結果と照らし合わせてみると日本人男女が「告白・関係の確認」を経て「付き合う関係」に移行する前と後に引かれた境界線を強く意識することは相手との「間柄」が「付き合う関係」なのか否かで相互に対する身の振り方が大きく変化するからだと考えられる。このことから「告白／関係の確認」は日本人男女の恋愛コミュニケーションプロセスの中で一番重要となるターニングポイントだと捉えることができ、西洋では見られない特徴であると主張することができる。

5.5.6. 第三者の影響

今回、第三者の存在や言動および関わりが「出会い」、「交際前」、「交際開始後」全ての段階で二人の関係を大きく突き動かす可能性が示唆されたことからターニングポイントのカテゴリーとして「第三者との関わり」を含めた。このことは人間関係が二人の間で完結するものでなく、友人や家族といった第三者の影響を大きく受けることを意味する。つまり、第三者の存在を無視して恋愛コミュニケーションプロセスを語ることは難しいと捉えることができる。

① 「出会い」の段階

「出会い」の段階では「友人とのつながり」がきっかけで恋人と出会ったという語り
が複数見受けられた。具体的には友人の紹介で恋人と知り合った P、中学校時代の友人
に頼まれて開催した合コンで恋人と出会った S、友人が参加していた合コンに顔を出し
たことで恋人と巡り合った W、自分が入居するシェアハウスに既に住んでいた恋人を友
人に紹介してもらった X、が挙げられる。換言すれば、これらの状況はきっかけを作っ
てくれた友人との関係なしには生じ得なかったものである。

過去、内閣府（2014）が実施した調査を見てみると「交際相手との出会いを求めると
したら、どのようなことを行いたいと思いますか」という問いに対して「友人に紹介を
頼む」と回答した人が 62.4%と最も多く、「合コンやパーティに行く」（39.7%）、「職場
の同僚や先輩に紹介を頼む」（34.8%）といった回答が続いたという。この内閣府の調査
結果からも多くの日本人が「周囲の人間や環境に出会いの経路を作ってもらう」ことを
1つの戦略として捉えていることがわかる。アメリカでは近年「オンラインでの出会い」
が「友人の紹介」を超えて最も一般的な出会いになっているのに対し（Rosenfeld, Thomas,
& Hausen, 2019）、日本ではインターネットの普及が進んだ現代でも「友人の紹介」が
強い指示を得ていることは興味深い。本調査の結果は友人の数が多く人の方が少ない人
よりも恋人がいる割合が高いと示した中村・佐藤（2010）の調査結果とも一致しており、
恋人が欲しいと考えた際に交友関係を広げるのも一つの手であると示唆した中村・佐藤
の考察は的を射ていると言えるだろう。

また、マッチングアプリを通して恋人と出会った V は周囲の友人や同僚からアプリで
良い出会いに恵まれたという話を聞いて利用を決めたと語っていた。この傾向に関して
ブライダル総研（2020）は周囲に婚活サービス利用者がいる人はいない人より約 3.8 倍
婚活サービス利用の割合が高くなり、周囲に婚活サービスで恋人ができた人がある人はい
ない人より約 4.2 倍サービス利用の割合が高くなることを調査で示している。今回は
婚活ではなく恋活であったが、マッチングアプリに対して抵抗を感じていた V が周囲の
人の経験を聞いて利用に踏み込んだことから第三者の影響を受けてマッチングアプリに
対するハードルが下がることが示された。このことを踏まえると「交際相手との出会い」
に対する価値観は周囲の人の価値観の影響を受けていると考えることができる。

② 「交際前」の段階

「交際前」の段階では（1）第三者との会話、（2）そのとき付き合っている恋人との

不仲・破局、そして（３）交際を意識した相手が複数人いる場合、その相手を一人に絞って他の異性との関係を切ることが二人の関係発展を促すことが示唆された。

１つ目の関係発展促進はターニングポイント「第三者への相談」によって生じるものである。今回参加者の中で友人の後押しのおかげで連絡先交換に至ったと語っていた者がいた。他にも自分の状況を第三者に説明することで気持ちの整理がついた、友人からの客観的な意見を取り入れることで冷静な判断が下せるようになった、といった内容が見受けられた。中でも相談の相手が交際相手と共通の知人であった場合、双方の性格や状況を把握した上での確かな助言をもらえることも示唆された。

２つ目はターニングポイント「(元)恋人との不仲／破局」によって生じるものである。この傾向は日本人にとって「付き合う関係」が排他性を伴う関係であることを示唆する。特定の相手と「付き合う関係」を構築したいと考えているときに別の相手と「付き合う関係」にある場合、まずはその相手との関係を終焉させることが求められる。なお、その相手との関係を終えることは自ずと新しい関係を構築する可能性を開くことを意味する。本調査では P が元恋人に別れを告げたことで現在の恋人と「付き合う関係」を築くことができたと語る場面があった。近年では「セフレ」、「キスフレ」、「ソフレ」といった相手を複数持つ人も現れているが、「付き合う関係」に限っては引き続き排他性が重視されることも示唆された。

３つ目はターニングポイント「他の異性との関係変化」によって生じるものである。ただし、ここでいう「他の異性」とは「交際」を意識した異性との関係に限定し、友人は含まないものとする。一次調査でも示されたように「自律的出会い」に関しては交際を意識して交流する相手を一人に制限するとは限らず、複数の相手と同時進行でやり取りを行うことがある。一方で特定の相手と親密な関係が構築され、交際が強く意識された場合は交際を意識した他の異性との関係を終焉させるという流れがあることが本調査で示唆された。このことから「自律的出会い」では同時進行の関係構築と「付き合う関係」に至った際の排他性が強く意識されることが見て取れる。

③ 「交際開始後」の段階

「交際開始後」の段階では双方の家族との関わりで相互の親密度が高まることが示唆され、結婚と「イエ」を強く結びつける傾向が弱くなった現代の日本でも恋人の親との関係は二人の関係にも強く影響を及ぼす旨が示された。内閣府（2014）が未婚者の 20～

30代に結婚生活を送る上での不安要素を尋ねた際、男性で約3割、女性で約6割の人が「配偶者の親族とのつきあい」を挙げているように日本では「結婚」を意識する仲であれば互いの家族がそれを認めてくれるか否かは非常に重要なポイントとなる。とりわけ女性にとって相手の親族との関わりは切っても切り離せないものと捉えている（内閣府、2014）ことから相手の親に会う、ないしは自分の親に恋人を会わせることは大きなターニングポイントになると考えられる。

また、自分といるときには見せない相手の一面を見ることができるのも「双方の家族との関わり」をターニングポイントと見なす理由になっていた。同じコミュニティ内での出会いを除き、相手が自分以外の人と関わる時の態度というものは見る機会が限られているものである。とりわけ家族との関わり方を目にすることで相手の新たな一面を発見し、それによって相手に対する印象が書き換えられることがあると考えられるだろう。

5.6. 二次調査まとめ

本調査ではターニングポイントの概念を参考にシンボリック相互作用論的アプローチから参加者が「付き合う関係」を構築するまで、そして構築した後の相互作用について調査を進めた。結果、計25のターニングポイントが参加者の語りから抽出され、中でも「告白／関係の確認」が「付き合う関係」構築の中で重要であることが示された。

なお、今回は二者間の相互作用に焦点を置くシンボリック相互作用論的アプローチを起用したことで一次調査では明らかにならなかった「二人の関係を『付き合う関係』に促したコミュニケーション」の実態を垣間見ることができた。何より参加者自身が自分と相手の相互作用をいかに解釈し、その解釈に則ってどのような言動を選択するのか探索することが可能となった。今後は本調査を通して明らかになった実態をより深く理解するために引き続き調査が進められる必要があるだろう。

第6章 総合考察

本論文では「日本人の恋愛」をコミュニケーション学の観点から探究することで国内の恋愛研究の発展を図りつつ、西洋中心主義の傾向にあるコミュニケーション学の分野で『日本人研究者による日本人を対象とした』対人コミュニケーション理論や概念構築の試み」(中西、2011、p.23)を進めることを目的に調査を進めてきた。中でも日本人の未婚者男女の多くが交際プロセスにまつわる悩みを抱えていることから彼(女)たちの「恋愛コミュニケーションプロセス」の枠組みと問題点を探るべく「現代の日本人男女はどのようにして交際相手と出会い、『付き合う関係』を構築するのか」という問いを立て、その答えにつながる知見を求めて2回に渡るインタビュー調査を実施した。筆者は日本的コミュニケーションを探索するにあたって欧米発祥のモデルや概念のアイデアを拝借し、西洋人を対象として作られたそれらでは説明することができない日本人特有のコミュニケーションの実態を探ってきた。結果、現代の日本人男女の恋愛コミュニケーションプロセスには容易に交際にたどり着くことができない複雑性と西洋の先行研究には見られないコミュニケーション行動が見受けられた。

6.1. 関係の土台を作る「出会い」への着目

まず、出会いの経路が縮小した現代で「(異性と)出会いがない」と悩む人が多い中、本論文の調査ではさまざまな形で交際相手とめぐり合っている男女の姿が捉えられ、出会いの形によってその後のコミュニケーションプロセスに変化が見られることが示唆された。この結果は本論文 1.3.で取り上げたコミュニケーションの動的特徴を表しており、今後恋愛コミュニケーションプロセスの調査を行う際には「二人がどのようにして出会ったのか」という話を抜きに深い知見は得られないという結論が導き出された。

特定の二人のコミュニケーションについて考察するとき、現在の状態を静止画のように切り取って理解しようとしても表面的な解釈しか得ることができない。しかし、二人の関係を映像として認識し、二人の出会い(もしくはそれ以前)まで巻き戻して流れを追えば二人のコミュニケーション行動に関して深い解釈を得ることが可能となる。人間関係とは特定の人びとが特定の場所・状況で出会い、相互に特定のコミュニケーション行動を重ねた結果生じ、発展し、維持されることを考えれば、二者間の相互作用の土台

となる「出会い」は二人の文脈を構成する非常に大事な要素だと言えるだろう。

出会いと言えば日本人は「これもなにかのご縁」というように人との出会いを「縁」ということばを使って表現することが多い。この「縁」とは仏教の開祖、釈迦の教えである「縁起（縁によって起こる）」に由来することばで「あらゆる人や物が相互に関連し合う中で生み出されるもの」を意味する。すなわち、日本人にとって「出会い」とは作為的に作ろうと思って作れるものではなく、さまざまな原因が重なり合った結果「生じるもの」だということになる。この「縁」のようにすべての人や物、現象を「時空を超えて相互に影響し合いながら存在するもの」と捉える傾向にある東洋哲学に対し、西洋哲学は人や物を「独立した『個』として存在するもの」と考える（Miike, 2002）。この哲学背景から西洋では性格や社会ステータスといった個々人の特徴に焦点を当てて調査を進めることが人びとの言動を理解するのに最適だと捉えられる傾向にあるのに対し、あらゆる原因がぶつかり合って状況が生じると考える東洋では「出会い」ひとつ取ってみても、その文脈を生み出す背景に目を向けることが大きな意味を持つと考えられる。

また、東洋哲学の観点で考えるならば出会いの型に合わせてコミュニケーション行動を変えていた参加者の態度は対人関係において文脈を重視する東洋哲学的思考の表れ（Miike, 2002）だと捉えることができないだろうか。日本では二人の「間」に作られた関係から文脈を読み取り、適切なコミュニケーション選択を心がけて場の調和を保とうとする文化がある。そのため、例えば、出会いのきっかけが合コンだった者は初対面の場ではグループ全体の空気を壊さないよう最新の注意を払い、そこから徐々に個人的な関係を築いていた。マッチングアプリで恋人と出会った者は丁寧なメッセージ交換から関係を始め、その後親しくなって初めて連絡先の交換や対面の約束を行っていた。この背景には合コンなのに場の空気を読まずに周囲の人に気まずい思いをさせたり、親しくもないのに最初から馴れ馴れしく話したりしてしまう人は邪険にされてしまうと考える日本人の思考がある。このことから自分の置かれた立場を強く意識する日本人にとって相手とどのように出会ったかが非常に大きな意味を持つと言えるだろう。

本論文の一次調査では5つの出会いの型を示した上で「偶発的出会い」が減少傾向にある現代では「自律的出会い」の需要が高まっているのではないかという推論を立てた。リクルートブライダル総研（2017）が提言しているように出会いの経路が縮小した現代の日本では「どこで会おうか」ではなく「誰と会おうか」に焦点を向けることで経路を自ら拡張させることができるという提案も示したが、現代の日本で自ら進んで出会いを求

める人の割合は決して高くないことを忘れてはならない。恋人がいなくて欲しいと思っている人の半数近くが恋人と出会うための行動を一切していない（西村、2014）というデータを見ると、行動を起こさないまま「（異性との）出会いがない」ことを理由に恋人ができないと悩む人がほとんどであると結論づけることができる。

近年「結婚」に関しては「婚活」ということばが普及したことで結婚相手を自ら探すことは徐々に「普通」になってきており、未婚化対策として国の支援も受けられるようになった。一方で「結婚」につながる保証がない「付き合い関係」となれば未だ個人の問題として片付けられる傾向にある。「恋愛」が「嗜好品」になった現代だからこそ挙げられる「出会いがない」という人びとの悩みを解消する知見の提供を目的に今後はとりわけ「自律的出会い」に焦点を当てて研究を進めることも求められるだろう。

6.2. 「付き合い」までの長い道のり

以前の日本のように見合いや職場、自身の所属コミュニティ内で異性と出会うことが主流であれば二者間の共通項が多いことから比較的スムーズに親密的関係を構築することができると考えられる。しかし、出会いの経路が縮小し、さまざまな価値観を持つ人びとが関わり合う現代の日本で「付き合い関係」を構築するためには「出会いの型」に即したコミュニケーション行動を重ね、相互理解を高め、最終的に「私たちは付き合い関係にある」という共通認識を構築する必要が生じている。すなわち、「出会いの場」にたどり着いた後にも「付き合い関係」を構築するまでには長い道のりがあることを意味し、本論文の調査でもその傾向が顕著となった。

まず、本調査の参加者は自分たちの「出会い」を出発点に相互の関係を認識し、二人の関係に適したコミュニケーション行動を選択して相手との関係を深めていた。とりわけ出会いが「偶発的出会い」か「自律的出会い」かによってコミュニケーション行動の選択に変化が見られ、「自律的出会い」では「偶発的出会い」よりも初めから交際を意識した行動が多く見受けられた。具体的には自分にとって理想的な異性との出会いが見込める場を選択し、出会った後も「私にとってこの人は『付き合い関係』に適しているのだろうか」といった考えを巡らせてコミュニケーションを重ねていた。なお、当初から交際を意識している二人は、相互交流を重ねた末に相性の一致が見込めれば比較的スムーズに交際に至る一方で、片方もしくは双方が交際に対して積極的になれなければ関係は終焉

を迎え、「適当な相手にめぐり合わない」期間が伸びてしまうということも示唆された。

また、二人がどのようにして相手のことを理解していくのかも「出会いの型」に影響を受けることが示唆された。例えば、交際を意識していない中で相手と知り合う「偶発的出会い」では日々の単純接触により相互の理解を高めていたのに対し、交際を念頭に交流を重ねる「自律的出会い」ではアプリや紹介者を通じて事前に情報を入手した上で自己開示を通して互いを理解しようとしていた。交際相手候補を探す「自律的出会い」では複数の異性を天秤にかけて判断する可能性も示唆されたことから「偶発的出会い」よりも競争性が高まるが、そんな競争率が高い中で交際にたどり着いた本調査参加者は自分と交際相手との間に「相性の一致」を認識していた。この結果は「個の特性」を重視する西洋人と異なり「対人関係の調和」を重視する東洋文化を持つ日本人 (Miike, 2002) だからこそ導き出された可能性が考えられる。つまり、日本では互いに「この人となら調和が取りやすい」と判断した場合、交際に至る可能性が高まるということになる。

日本では相性が良いことを「気が合う」と表現することがある。ここで上述したことを踏まえれば、「付き合う関係」を構築する二人は互いに「気が合う」ことが理想的だと考えられる。この「気」という考えは中国や韓国含む東洋圏で非常に重要視されている概念である (Miike, 2017; Okabe, 1991)。Okabe (1991) が

古来より東洋では「気」ということばは普遍的なものから身の回りの日常的なものまで幅広い概念を説明する上で使われてきた。「気」は一般的な考え方や特色、東洋の人びとのコミュニケーション様式や対人関係を理解する鍵となり、多様な意味や感情を包含する。「気」とは明らかに目には見えないものだが物理的な空気のように宇宙全体に充満し、私たちの周りに浮き漂いながら精神的な雰囲気や状態に関わるものとして物理的・精神的・情緒的に定義され、東洋人のコミュニケーション態度や対人関係はこの物理的・精神的両面の「気」の意味によって強く支配されている。東洋のコミュニケーションおよびレトリックを学ぼうとする者は、その理論強化を目指して文化的観点からコミュニケーションおよびレトリック的な「気」の機能、可能性、そして構造を説明することによって多くの知見を得ることができると考えるべきだろう (p.87)。

と主張するように東洋でコミュニケーション研究をすすめる際には非常に大きな意味を

持つ。私たち日本人にとって「気」とは「空気」、「天気」、「元気」のように日常の随所に浸透した概念だからこそ個人を包み込む「気」が合う者同士は一緒にいて「気が楽」だと感じられるのだろう。そのため、「偶発的出会い」では「気」が合う者同士が親密な関係を持ち、「自律的出会い」では「気」が合う相手を求めて出会いの経路の拡張を試みると考えられる。すなわち、男女が交際を意識して出会った場合、二人は互いに「気」が合うかどうかをさまざまな相互作用を通して確認しようとすると考えられる。

なお、そんな二人が相互交流を重ねるために使っていたコミュニケーションチャネルはインターネットの普及でオンライン・オフライン双方に広がっていた。オンラインとオフラインではコミュニケーションの形態が大きく異なるが、「付き合う関係」を構築する上では双方の場でスムーズなやりとりが求められていた。また、コミュニケーションチャネルの拡張は相手との親密度に大きく関わることも示唆された。具体的には二人の出会いが学校や職場といったオフラインであれば LINE 上のメッセージ交換や通話などのオンラインへコミュニケーションが拡張することで二者間の親密性が高まり、反対に出会いがオンラインの場合は「実際に会う」ことでオフラインへコミュニケーションが拡張され、バーチャルに留まらない現実世界での関係を構築することが可能となることが示唆された。一方で、関係が不安定な状態でチャネルの拡張を提案してしまうと相手から拒否されてしまう可能性があるという注意点も示された。

さらに先行研究の多くで「告白」に至る段階で男女は両想いの状態にあることが多いと示されていたが (Farrer et al., 2008; 栗林, 2004)、本論文の調査でも交際に至る前から互いの恋愛感情を察知していたという語りが多く見られた。このことは「告白」に至る時点で二人の中で「付き合うかもしれない」という気持ちが生じていることを意味する。また、関係が安定していない段階で自分の認識と相手の言動にズレが生じた場合、ターニングポイントの「認知的不協和の生起」が生じることも示唆された。二次調査で示したように本調査参加者はその後のコミュニケーションで不協和を解消していたが、例えば「私たちは交際を目的に知り合った」という認知と「何度もデートを重ねてハグまでしたのにまだ付き合っていない」という現実の間に不協和を覚えた上で「この人は交際相手ではなくソフレが欲しいんだ」と考えて不協和を解消した場合、そこで自身を納得させて関係を終焉させてしまう可能性がある。すなわち、認知的不協和が生じた際にも互いの考えを確認し合い、「相互に交際を求めている」という共通の認識を構築する必要がある。そして最終的に「告白／関係の確認」を通して「私たちは付き合っている」

という共通認識が構築されることでようやく「付き合う関係」が成立する。現代の日本では「添い寝フレンド (ソフレ)」、「キスフレンド (キスフレ)」、「セックスフレンド (セフレ)」といった「曖昧な関係」が増える中で排他的関係とその他の関係の境界線を明確にするためにもますます「告白／関係の確認」というコミュニケーション行動が求められるようになるだろう。

これらのことを踏まえれば異性と出会った後も互いに意識的にコミュニケーションを重ね、相互理解を高め、共通認識を構築させて初めて「付き合う関係」に至ることから「出会い」から「付き合う」までの過程は非常に長いと考えられる。その上で二人の男女が出会ったからと言って見合いや職縁が主流だったころのように容易に「付き合う関係」に至るとは限らず、「現代の日本的恋愛コミュニケーションプロセス」を理解するには「出会い」の先にある相互作用にも目を向ける必要があると言えるだろう。

6.3. 「結果」より「過程」重視の日本人

恋愛コミュニケーションプロセスの中で二人の関係を「付き合う関係」に移行させる一番大きなターニングポイントは「告白／関係の確認」であった。この結果は先行研究と一致するもので、本論文の調査ではとりわけ女性が確認しないと不安を覚えることも示唆された。このとき、プロセスの途中にある「告白」を重視する傾向は日本人が物事の「結果」よりもその「過程」に意味を見出すこととつながりがあると考えられる。

日本人が「過程」を重視する姿勢は日本人の職人氣質に強く表れており、日本人のものづくりはその細やかさ、繊細さ、丁寧さで高い評価を得ているが、それは日本の職人が使い捨てできるものを短時間で大量に作るよりも一つひとつの商品を長く使ってもらえるように生産過程に時間をかけて作っているからだと言える。過程を大事にする姿勢は職人だけでなく、日本人一人ひとりが子どものころから受ける教えの中に潜んでいる。多くの日本人が幼稚園や小学校で体験する折り紙が一つの例として挙げられる。手本のような作品を完成させるためには、一つひとつの工程を丁寧に進めることが求められる。折り方ひとつ間違えれば予想の作品は完成せず、折り目がずれていけば完成品はいびつな形になってしまう。

日本の伝統文化には茶道、書道、華道、武道といったように「道」がつくものが多いが、これは細かく定められた作法に従って物事を進めていけば結果は後からついてくる

という考えが根付いていることを示す。例えば、エッセイストの森下が長年通っているお茶の教室で学んだことを綴った『日日是好日「お茶」が教えてくれた 15 のしあわせ』（森下、2008）の中にも形式を重んじるお茶の姿が垣間見える。教室に通い始めたころ、茶道の細かなルールに意味を見いだせずその意味を先生に尋ねた森下は「意味なんてわからなくていいの」と諭され、「お茶は、まず『形』なのよ。先に『形』を作っておいて、その入れ物に、後から『心』が入るものなの」という先生の言葉が理解できず、モヤモヤしてしまう。しかし、5年10年と長い年月お茶と向き合っていく中で一つひとつの所作に込められた意味が少しずつ分かるようになっていく。「なるほど、そういうことだったのか」と腑に落ちる瞬間がふいに訪れるのだという。この森下の経験からも、日本人が「過程」を重視することは「結果」を軽視しているのではなく「過程」を大事にすることで「結果」がついてくると捉えていることが分かる。そのように考えると「告白」という形式的な行動も先に「付き合う関係」という「形」を作ることで二人の間に特別な意味が生まれ、その「形」に合わせた行動選択を相互に行うことで結果的に親密的な関係が生じるのではないかと考えられる。日本語では「～することに『なった』」と、あたかも「結果」が自ら意思を持って現れたかのような表現を用いることが多いが、この傾向も「結果」は「過程」の産物だと認識されていることを示唆している。「告白」という過程を経て付き合うことに「なった」と考えれば「告白」の重要性は日本人の形式ないし過程を尊重する態度が現れていると言えるだろう。

6.4. 「告白」という「儀式」

今回、参加者の語りを読み解く中で「告白」は『付き合う関係』を構築する際（主に）男性による交際の申し込みと女性による交際の受け入れといった一連の儀礼的行為から成立する」という特徴が導き出された。この「告白」の型のような流れは一種の「儀式」のように感じられることから本論文では「告白」を「日本人が『付き合う関係』を構築する際に行う一種の『儀式』」と捉えることとする。「儀式」というと一見堅苦しく感じられるが、この概念は不確実性の回避の度合いが強い日本人同士が場を共有する者と共に決められた「型」に従って「儀式」を進めることで不確実性の回避を目指すという特徴を体現しており、日本人の多くは気づいていないだけで子どものころから幾度となく経験しているものである。

例えば、日本の小学校～高校までの学校生活を俯瞰してみれば、入学式、卒業式、始業式、終業式、朝会といった「儀式的行事」が数多く実施されていることに気づく。これら式典は一般的に全校生徒及び教職員が一同に会して行われ、分刻みで決められた予定表に沿って淡々と進められていく。文部科学省（2018）の学習指導要領によれば「儀式的行事」は「学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなるような活動を行うこと」であり（p.89）、その狙いとして「生徒の学校生活に一つの転機を与え、生徒が相互に祝い合い励まし合って喜びを共にし、決意の新たに新しい生活への希望や意欲を持てるような動機づけを行い、学校、社会、国家などへの所属感を強めるとともに、厳かな機会を通して集団の場における規律、気品ある態度を育て、公共の精神を養う」（p.89）ことが記載されている。文部科学省の提言からも「儀式的行事」には「節目」が強く意識されることが見て取れる（水口、2013）。つまり、所属メンバーが集って執り行われる「儀式」は集団の連帯感を高め、「みんなで次のステップに進む」という認識を生み出す役割を担っていると捉えることができる。

なお、「儀式」は学校生活に留まらず、卒業して社会に出た大人たちも日々経験する。例えば、名刺交換や決定事項を確認する形式的な会議、朝礼といった行動は多くの企業で日々見受けられる「儀式」である。中でも日本企業の「会議」は討議事項について「議論する場」ではなく、すでに議論しつくされ、ときには意思決定が下された内容を読み上げ、改めて全員の賛同を「確認する場」であることが多く、非常に「儀式的」である。正月や七五三、結婚披露宴、さらに通夜といった日本の冠婚葬祭に含まれる行事の多くも日本人が大切にする「儀式」であり、現代では簡略化されることが増えたものの人生での重要な通過儀礼の一種と見なされている。すなわち、日本の家庭に生まれ、日本の学校に通い、日本の企業に所属する人はもれなく人生のあらゆる点で「儀式」を通じて「節目」を意識することになる。

アメリカのような結果重視の国からすれば学校の「儀式的行事」、会社の「儀式的行動」、そして冠婚葬祭の「儀式」の中で定められた細かな「型」は無意味で無駄なものに思えるかもしれない。しかし、場を共有する者同士で共通認識を構築し、安心感を持って次の行動に踏み出すことに肯定的考えを示す日本人からしてみれば細かく規定された「型」に則って行動することは決して無駄ではない。そして、「儀式」を重視する日本人だからこそ恋愛でも（主に）男性が女性に「好きです、付き合ってください」と告白し、女性が

「よろしくお願いします」と告白を受ける一連の行為は欠かせない「儀式」だと捉えることができると考えられるだろう。

最後に本論文の目的は「出会い」から「付き合い」に至るまでのコミュニケーションプロセスを調査することであったにもかかわらず、そのプロセスを断ち切るような「儀式」の概念が今回浮上したことは非常に興味深い。それまでは「出会い」に基づいて相互の反応の様子見しながら交流を図っていた二人も「付き合い関係」にステップアップする際には律儀に「告白」という「儀式」を踏む。このように「儀式」を執り行うことはまるでタイミングを合わせて「付き合い関係」の前に引かれた見えない境界線を「せーの」と同時に飛び越える感覚を持つかのようである。このプロセスの中に突如現れる「儀式」の概念は Knapp の階段モデルからは導き出せない日本的コミュニケーションの特徴を示していると考えられる。すなわち、「儀式」という文化的特徴を重視する日本人だからこそ本調査の結果が導き出されたと言えるのではないだろうか。

6.5. 「告白・関係の確認」によって生じる「気のおけない関係」

「告白」は日本を含む一部のアジアの国特有の文化であり（山田、2019）、現代の日本では特に「付き合い関係」を構築する上では避けて通れない儀礼行為になっている（Farrer et al., 2008; 大森、2016; 関野、2012; 山田 1991）。以前、筆者が「告白」の必要性に関して調査を行った際には「境界線のため」や「関係をはっきりさせるため」に「告白」は必要不可欠であるといった回答が多く寄せられた（Tomoike, 2017）。そして本論文の調査でも「告白／関係の確認」を経て「付き合い関係」にたどり着く日本人男女の構図が示され、日本人の恋愛コミュニケーションプロセスにおいては「告白を通して『付き合い』という契約的理解を得ることが重要」（大森、2014、p.115）であることが再確認できた。

一方で調査を進める中で（1）日常では曖昧且つ婉曲的なコミュニケーション様式を好む傾向にある日本人が恋愛では「告白」を通して二人の関係に白黒つける傾向にある点と（2）「遠慮と察し」のコミュニケーション様式を持つ傾向にある日本人が「告白」を経て「付き合い関係」に関係が移行してからは自分が求めるものをハッキリ伝え合う様子が「関係に関する話し合い」、「仲直り／復縁」、「将来に関する話し合い」といったターニングポイントで見て取れた点が大変興味深く感じられた。これらのことは相手と

の間柄にこだわり（浜口、1977）、相手との間柄および文脈に合わせてコミュニケーションスタイルを使い分ける日本人の特徴（Midooka, 1990; Ting-Toomey & Takai, 2006; 岩田、1980；中根、1967）が表れているのではないだろうか。

岩田（1980）によれば日本人は対人関係を自分と相手の対人関係的距離感に基づいて「無縁の関係」、「なじみの関係」、「気のおけない関係」の3つにカテゴリー分けをし、相手との関係が3つのうち、どれに当てはまるかによって自身の態度を変えるという。1つ目の「無縁の関係」は街なかや公共機関で行き交う人びとの間の相互関係、いわば「行きずりの関係」（p.115）を指し、互いに人間的関心を持たないために相手に対する配慮が欠如するという。一見誰にでも親切そうな日本人が、見知らぬ人には「おそろしく無遠慮な、むしろ粗暴ともいえる態度を平気でとる」（p.114）のは相手が自分と一切関わりのない赤の他人だからであり、そんな日本人が意識的に粗野な行為を控えるのは相手との関係が「なじみの関係」になった後だという。日本人は「互いに名前を知り地位を知り、個人的な接触によってその人柄を知るようになると」（p.117）態度を一変させ、二人の間に一種の道義的期待が形成されることから互いにその期待を満たそうと配慮するようになるという。ここでは互いに好意の維持が重視され、「調和的あるいは同調的な関係」（p.118）が築かれるようである。そこからさらに親密さが増すと二人の関係は「気の置けない関係」になり、「相互の好意は努力して維持する必要のないほど確かなものとなり、互いに相手の好意をあてにすることができる」（pp.118-119）ようになるという。相互の信頼が保証されているから「互いに無理を言っても許されると想定されており、また、私的に立入ったことを打ち明けることも許される」（p.119）関係になるという。

Midooka（1990）は上記の岩田の分類に修正を加えて日本人の対人関係を「気のおけない関係」、「仲間／味方」、「なじみの他人の関係」、「無縁の関係」の4つにカテゴリーに分類し、さらに Ting-Toomey and Takai（2006）は Midooka のカテゴリーに倣って「内内集団」（気のおけない関係）、「内集団」（仲間）、「内外集団」（なじみの他人）、「外集団」（無縁の関係）それぞれの対人コミュニケーションスタイルの特徴を挙げている。その内容によると日本人は家族や親友といった「内内集団」に振り分けられる相手とは年齢や階級といった概念を取っ払ってフラットな関係を築くのに対し、毎日顔を会わせる同僚など「内集団」の相手とは親しい一方で相互の役割に合わせた儀礼的やりとりを取り交わし、時々顔を会わせる親友の友人といった「内外集団」の相手には自分の世間体を守る選択が心がけられ、完全な他人である「外集団」が相手だと遠慮のない態度で

接するという。すなわち、高井（2012）が言うように『内内集団』に対しては遠慮せずに率直なコミュニケーションを行う一方、『内外集団』にはより公式なコミュニケーション・スタイルを用い、遠慮や自己卑下を行う自制心を効かせたスタイルをとる」（p.177）のが日本人的コミュニケーションのあり方となっている。

これらの分類を恋愛コミュニケーションに当てはめて考えた場合、出会う前の二人は「無縁の関係」にあり、出会ってコミュニケーションを重ねた二人は「なじみの他人」～「仲間」の関係を築き、「告白」を通して「気のおけない関係」となると言えるだろう。「付き合う関係」にある二人は大森（2014）が言うように『告白』という儀礼的行動によって結ばれる『契約関係』（p.114）にあり、互いに相手の好意をあてにできる関係にある。「付き合う関係」にある二人が互いに「素の自分」を見せたり甘えたりする行動（Farrer et al., 2008）も「告白」を通して「私たちは『気のおけない関係』である」と認識することでそれまで相互に感じていた遠慮が取っ払われるからであろう。

上記のことを踏まえれば日本人が「告白」を通して関係に白黒つけようとするのは、相手との関係が曖昧なままだと自分の身の振り方が分からなくなるからだと考えられる。北山・唐澤（1995）が「役割なしの自己、他者との関係なしの自己の存在を確認することが日本にあっては（西洋におけるよりも格段に）難しい」（p.140）と主張するように相手との関係に則って自分のコミュニケーションスタイルを変化させる日本人にとって自分と相手の関係が確かでない状況は非常に居心地が悪いものである。そんな中、自分と相手の関係をはっきりさせ、適切なコミュニケーションスタイルを選択するという点で二者間のやりとりを円滑にする助けを担う「告白」は日本人にとって重要な恋愛文化のひとつとなっており、「告白」によって生じる「気のおけない関係」に従ってコミュニケーション行動を選択すると自ずと相互に甘えたわがままな態度を取ってしまうと考えられるだろう。

6.6. 第三者の存在と役割

本論文では恋愛コミュニケーションプロセスの全段階で友人や家族といった第三者の言動や存在が二人の関係に影響を及ぼすことが明らかとなり、二人の人間関係を紐解く際には二者間の相互作用だけでなく二人を取り巻く周囲の人間にも目を向ける必要があることが示唆された。

まず、本論文の調査では第三者の存在なしには成立し得なかった「出会い」が散見された。具体的には第三者の紹介によって交際相手と知り合った「紹介依頼型」・「紹介型」、共通の友人がいたおかげで相手と出会った「自然型」、入居予定のシェアハウスに住んでいた知り合いを友人に紹介してもらった「偶発型」、友人開催の合コン、もしくは友人からの誘いで参加した街コンで相手とめぐり合った「グループ交際型」、友人からの勧めで登録したアプリで出会いが実った「マッチング型」、といったように第三者の存在が二人の出会いに多大な影響をもたらしていた。

相手と出会った後も友人との対話を通して相手との関わり方を決めたといった語りが見受けられ、「付き合う関係」構築後も相互の友人や家族との関係によって二人の親密度が高まっていた様子から恋愛コミュニケーションプロセスではいかなる段階でも第三者の存在が二人の関係に強い影響を与えることが明らかとなった。

高度経済成長期以前のように親戚や上司が仲人役を買って出ている時代では第三者が強い影響力を持つことは明白だったが、「仲人」という存在がなくなった現代でも第三者が二人の関係に関与することは興味深い。このことはオンラインでの出会いが交際相手と出会う一番の手段になっているアメリカ (Rosenfeld et al., 2019) に比べて日本では今でも職場や学校での出会いや友人を通しての出会いが理想とされている (p. 20、図表 2-2 参照) こととも関連があると考えられるだろう。なお、このように自分と縁もゆかりもない相手と知り合うことに抵抗を感じないアメリカ人と自分の所属するコミュニティ内もしくは自分の知人を通しての出会いに安心感を覚える日本人の違いに関しては「自己の文化差」が影響しているように思われる。

社会心理学の領域で自己の研究を専門とする高田 (2012) によれば、「人間は誰しも特定の文化の中で生まれ育ち、その文化に特有の社会制度や行動様式を日常普通のこととして受け止め、それに沿った考えや感情をもって行動する」(p.7) ことから自身が所属する文化特有の相互作用を繰り返し経験する中で他者との関係における自己の捉え方にも文化の特徴が表われるという。この「自己の文化差」に関しては Markus and Kitayama が 1991 年に「文化的自己観」という概念を用いて西洋と東洋の相違を示しており、主に西洋文化圏で生活する人たちは自己を他者から切り離された独立する存在として捉える相互独立的自己観を持つのに対し (図 6-1A)、東洋文化圏に生きる人びとは自己を他者との結びつきの中で生じるものとする相互協調的自己観を持つ (図 6-1B) 傾向にあると説明している。この 2 つの具体的な特徴は以下のとおりである (北山、1994、p.154)。

相互独立的自己観：

西欧、特に北米中流階級の文化は、自己とは、他から切り離されたものという信念に基づいている。この相互独立的自己観は、その文化の様々な風習（e.g. 自主性を重んじる子育て）、そして社会的システム（e.g. メリットペイ・システム）等から派生する「ライフ・タスク」に反映されている。こういった文化に適応し、一人前の『人』となり、そのようなものとして認められるための必要条件は、自分自身の中に誇るべき属性（e.g. 才能、性格、能力）を見だし、それを外に表現し、そうすることによって、自己実現をはかり、それらの属性の存在を自分自身で確証することである。人間関係は重要であるが、これは自己の独立が確立されたうえで個人的に選択できるオプションにすぎない。

相互協調的自己観：

日本を含む東洋の文化は、自己は他と根源的に結びついているという前提に立っている。この相互協調的自己観は、その文化の様々な習慣（例：他に気を使い、「もてなす」ことの重視）、風習（e.g. 迷惑をかけないことを重んじる子育て）、そして社会的システム（e.g. 年功序列）等から派生する「ライフ・タスク」に反映している。こういった文化に適応し、「人」となり、そのようなものとして認められるための必要条件は、意味ある社会的関係に所属し、そのなかで相応の位置をしめ、他との相互依存的・協調的な関係を持続することにより、自己の社会的存在を確認し、かくして自己実現をはかることである。個人の独立も重要であるが、これは他との相互共存を満たしたうえで個人的に選択できるオプションにすぎない。

北山の説明から見て取れるように自己をどのように捉えるかは文化的差異に強く影響を受けており、この2つの自己観の相違は広い範囲に及ぶ（高田、2012、p.9；表 6-1）。

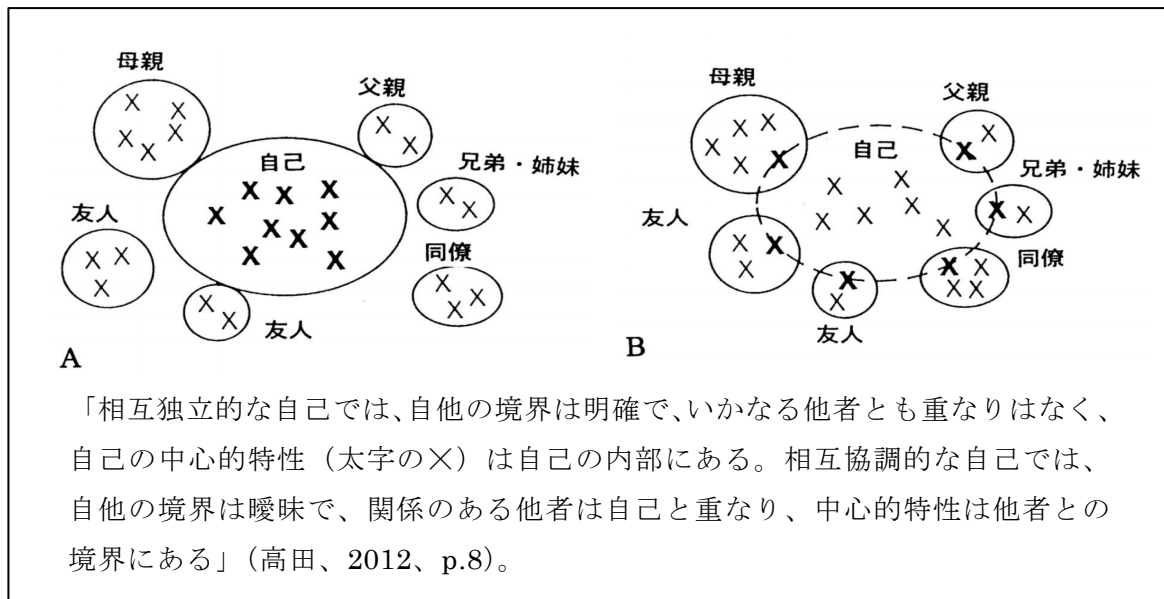


図 6-1 文化的自己観の概念図（相互独立的自己観 A と相互協調的自己観 B）

出典：北山忍（1994）.「文化的自己観と心理的プロセス」『社会心理学研究』10(3), 153-167.

表 6-1 相互独立的自己観と相互協調的自己観の主な相違点（Markus & Kitayama, 1991）

	相互独立的	相互協調的
定義	社会的文脈から独立	社会的文脈と結合
構造	境界が明確 単一で、安定	柔軟、可變的
重要な特性	内部にあり、 私的（能力、思考、感覚）	外部にあり、 公的（地位、役割、関係）
課題	ユニークであること 自己を表現すること 内的特性をはっきり認識すること 自分の目標を追求すること 直接的であること： 自分の考えを表現する	仲間に協調的であること 自分にふさわしい立場をとること 適切に振る舞うこと 他者の目標を援助すること 間接的であること： 他者の心を読む
他者の役割	自己評価： 社会的比較や反動的自己評価 のために他者は重要	自己定義： 特定の状況での他者との関係 が自己を定義する
自尊心の 基盤	自己を表現し、内的特性を認識する能力	協調し、自分を抑え、社会的文脈と和を保つ能力

出典：高田利武（2012）.『日本文化での人格形成 相互独立性・相互協調性の発達の検討』ナカニシヤ出版.

ここに示した特徴を基に考えると相互独立的自己観を持つアメリカ人は自己を個々に独立したものと捉えることから第三者を抜きにした互いの個人的な性格や特性に重きを置いて相手の魅力を測定するのに対し、相互協調的自己観を持つ日本人は自己を他者との結びつきの中で生じるものと捉えることからコミュニティ内の相手の立ち位置や相手とつながりがある人物に目を向けて相手がどのような人なのか認識すると考えられる。自己を他者と切り離して捉えることが難しい日本人にとって重要な他者との関わりの中で生じる出会いや価値観は大きな意味を持つと考えられ、結果的に友人や知人を通しての出会いに安心感を抱き、第三者の意見に影響を受けるのではないだろうか。

なお、本論文の調査では交際開始後に恋人との交際関係と友人との交友関係それぞれにかける時間のバランスを意識する語りがいくつか見受けられた。このことは交際相手との関係はもちろん、友人や家族、職場での関係も自己を作り出す重要な要素と捉える日本人にとっては交際が始まったからといって恋人とばかり時間を過ごすのではなく、第三者となる周囲の人との関係を持続させることが重要になると考えられる。

また、家族と接する恋人を初めて見たとき「いつもと雰囲気が違う」と感じたという参加者もいたが、このことに関しては柔軟で可変的な自己を持つ日本人は関わる相手との間柄に基づいて自分の立場を見極め、その関係に適した態度を取ろうとする傾向にあるため、自分の恋人に見せる自己と家族に見せる自己が変化したと考えられるだろう。そして、多様な顔を持つ日本人だからこそ相手の新たな一面を見たときに相手に対する親密度が高まったり、反対に距離を感じたりすることもあると考えられるだろう。

これらのことを踏まえて今後は日本的恋愛コミュニケーション研究では当事者である二人の間で交わされる相互作用だけでなく、二人を取り巻く周囲の人間にも目を向けていきたい。

6.7. 日本的コミュニケーションとシンボリック相互作用論

本論文の二次調査では当事者間の相互作用に焦点を置くシンボリック相互作用論的アプローチを起用した。すると、調査参加者が自分たちのコミュニケーションにどのような意味を見出していたのか探る上でコミュニケーターの間で構築ないし共有される意味を中心概念とするシンボリック相互作用論は大変適していたことが示唆された。この結果から欧米で提起されたシンボリック相互作用論は二人の「間」で作られる人間関係を

重視する日本人のコミュニケーションを説明するのにも大変有効なのではないかという考察に結びついた。

上記で触れたように現存する人や物を「個として成立するもの」と捉える西洋に対し、「さまざま人や物が複雑に関連し合うことで成立するもの」と捉える東洋では、人と人、人と物、人と自然、過去と今、今と未来、空間と空間それぞれの間で調和が保たれることが重視される (Miike, 2002)。対人関係でも場の調和を保つコミュニケーション行動を一人ひとりが選択することが求められ、個人の普遍的特性を能力の指標と見なす西洋とは異なるコミュニケーションの視点が求められる。

このことを踏まえて Takai and Ota (1994) はそれまで使われていた西洋発祥の能力規定因を文化的差異が考慮されていないと指摘し、日本人特有の対人能力として「察し能力 (Perceptive Ability ; 相互作用の場で相手に共感して気持ちを汲む能力 / 本音と建前を使い分けつつ相手に伝わるメッセージを組み立てる能力)」、「自己統制 (Self-Restraint ; 対人的調和を保つためにネガティブな感情を抑える能力)」、「階層関係管理 (Hierarchical Relationship Management ; タテ社会の日本で目上の人に対して敬語を使い、敬意を示す能力)」、「対人感受性 (Interpersonal Sensitivity ; デリケートな内容について話す際、受け手が恥をかかずに済むよう直接的な言い方を避ける能力)」、「曖昧さへの耐性 (Tolerance for Ambiguity ; 自分の立場をはっきりさせない相手と接する能力 / 自分自身が立場をはっきりさせない能力)」の5因子を規定している。これらの規定因は個々人の特性によって測定することはできず、他者との関わりの中で見いだされる。すなわち、調和を重視する文化に所属する日本人にとっては一人ひとりの能力よりも相手との関係の中で繰り広げられる相互作用が大切となる。

これらのことから二者間の相互作用に焦点を置くシンボリック相互作用論は相手との間柄を意識してコミュニケーションスタイルを変える日本人のコミュニケーションを説明するのに適していると考えられる。一方、西洋で提唱された理論およびモデルには東洋的視点が欠如するという指摘を踏まえ、今後は日本的コミュニケーションを探る上でシンボリック相互作用論的アプローチの適切な活用法を探っていく必要があると考えられるだろう。

第7章 結論

本論文では「『日本人研究者による日本人を対象とした』対人コミュニケーション理論や概念構築の試み」を目的に、日本人の恋愛コミュニケーションプロセスを調査した。二度にわたる質的調査の結果、二人の男女が出会ってから「付き合う関係」に至るまで、そして至った後に見られるコミュニケーション行動には西洋的視点からは明らかにならない点が多く見受けられた。また、コミュニケーション学の観点から調査を進めることによって現代の日本では交際につながる「出会い」の多様化が進んでいることや二人が出会ってから「付き合う関係」に至るまでの間にはさまざまな相互作用が関連し合っていることが示唆された。

7.1. 本研究の限界と今後の課題

本論文の調査は「日本的恋愛コミュニケーション研究」の第一歩にすぎない。今後、さまざまな方向にこれらの研究を発展させていく必要があり、研究を続ける上では次の二点に特に留意を要すると考えられる。

7.1.1. 調査対象者と調査方法

第一に、調査サンプルと方法に目を向けることが求められる。本論文の調査ではスノーボールサンプリングを採択したが、知人から知人へと類似した社会層の人たちを選ぶ結果となってしまうサンプルがホワイトカラーのプロフェッショナルに偏ってしまった。このような層の人たちと他の層の人たちとの間では異なった恋愛経験や恋愛観が共有されている可能性があるため、今後はサンプルの層を広げた調査が求められる。また、本調査では参加者に自身の経験を振り返って語ってもらったが、月日が経っているため彼（女）らの実際の経験とどれほど一致するか立証することはできない。そこで、今後は実際に恋愛コミュニケーションプロセスの最中にある人を対象に長期的調査を実施する必要があるだろう。具体的には「出会い」、「好意への気づき」、「関係構築過程」、「告白」といったように段階を分けて各段階の実態を深掘りすることができれば日本人の恋愛に対して更に深い知見を得ることができよう。さらに、今回二人のコミュニケーションプ

ロセスに第三者の介入が大きな役割を持つと示唆されたことから今後は第三者の視点を取り入れた調査を進めることで新たな知見の習得も期待できるだろう。

なお、本論文は「日本的コミュニケーション」の探究を目的の一つとして恋愛コミュニケーションプロセスに現れる日本的コミュニケーションの実態を探究してきたが、今後は他の文化圏との比較調査を進めることが求められる。例えば「告白」は西洋では見られないコミュニケーション行動であるが、韓国や台湾では実施されていることから「日本での『告白』は韓国や台湾での『告白』と同じ意味を持っているのだろうか」といった疑問を提起することによって日本人の恋愛行動をより深く理解することが可能となるだろう。

7.1.2. 「恋愛」以外の対人関係

今後は「恋愛」以外の分野にも目を向けて「日本的コミュニケーション」の実態を探っていく必要がある。「恋愛」という枠組みの外には友人同士、先輩と後輩、教員と生徒、上司と部下などさまざまな形態の対人関係が存在する。とりわけ相手との「間柄」で態度を変化させる日本人のコミュニケーションを調査する上では各場面での実態を探っていくことが求められるだろう。なお、今回は「付き合う関係」が構築されるまでの恋愛コミュニケーションプロセスに焦点を当ててきたが他の関係が成立するまでのコミュニケーションプロセスを探っていくことによって興味深い知見が期待される。

7.2. 将来の展望

情報技術の発展で人と人とのつながりが希薄化する現代で今後、コミュニケーションのあり方はますます注視されると共にコミュニケーションにまつわる悩みを抱える人の数は増え続けるだろう。そんな現代で多岐にわたる場面でのコミュニケーション行動を探り、現代の日本人の間で見られるコミュニケーション行動を探っていくことは実学志向の日本コミュニケーション研究が目指す姿勢だと言えるだろう。恋愛コミュニケーションに関する人びとの悩みも恋愛格差が広がる現代で深刻化が進むことが予想される。引き続きコミュニケーションの観点から調査を進めることで日本の恋愛研究への貢献を続けたい次第である。

謝辞

本研究を遂行し、まとめるにあたって、実に多くの方にお世話になりました。この場を借りて、感謝の意を述べさせていただきたく存じます。

まず、指導教授の宮原哲先生には学部のことより多くのことをご教授いただき、研究の方向づけから詳細に至るまで大変熱心に指導していただきました。私は大学1年の時に宮原先生の「コミュニケーション学入門」を受講して以来「コミュニケーション学」に恋をしているようです。この学問の面白さ、そして奥深さを教えてくださった先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

本論文副査のドゥエン・オルソン先生と清宮徹先生には本論文を執筆する中で研究の意義や発展の可能性に関して多大なる助言をいただきました。お二人には修士論文でも副査を担当していただいております、重ねて御礼申し上げます。

本論文は調査に参加してくださった参加者のみなさん抜きには完成しませんでした。自身の恋愛経験とプライベートな内容にもかかわらず快く面談を承ってくださった上、二次調査に関してはコロナ禍で直接お会いできない中、みなさんのご協力の下、Zoomを使った面談を実施することができました。

また、多様な分野で励んでいる友人たちの姿はいつも私を奮い立たせてくれました。彼女／彼らとの対話からも研究につながるたくさんのヒントを得ることができました。

最後に、父・母・姉二人は、私の研究生活を全力で支えてくれました。何より恵まれた環境の中で長年研究に専念することができたのは両親の支えがあったからです。

以上の皆様のご理解、ご協力なくして本論文は完成しませんでした。博士論文を書き上げられたことに対して、これまでお世話になった全ての方に深く感謝申し上げます。

引用文献

- Alksnis, C., Desmarais, S., & Wood, E. (1996). Gender differences in scripts for different types of dates. *Sex Roles, 34*, 321-336.
- Altman, I., & Taylor, D. A. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Baxter, L. A., & Bullis, C. (1986). Turning points in developing romantic relationships. *Human Communication Research, 12*(4), 469-493.
- Baxter, L. A., & Pitmann, G. (2001). Communicatively remembering turning points of relational development in heterosexual romantic relationships. *Communication Reports, 14*(1), 1-17.
- Berger, C. R. & Calabrese, R. J. (1975). Some explorations in initial interaction and beyond: Toward a developmental theory of interpersonal communication. *Human Communication Research, 1*, 99-112.
- Blumer, H. (1986). *Symbolic interactionism: Perspective and method*. LA: University of California Press.
- (ブルーマー, H. 後藤政之 (訳) (1991). シンボリック相互作用論-パースペクティヴと方法 勁草書房) .
- Bolton, C. D. (1961). Mate selection as the development of a relationship. *Marriage and Family Living, 23*, 234-240.
- Braithwaite, D. O., & Baxter, L. A. (2008). Introduction: Meta-theory and theory in interpersonal communication research. In L. A. Baxter, & D. O. Braithwaite (Eds), *Engaging theories in interpersonal communication: Multiple perspectives* (pp.1-18). LA: Sage.
- Cappella, J. N. (1988). Personal relationships, social relationships and patterns of interaction. In S. Duck (Ed.), *Handbook of personal relationships: Theory, research and interventions* (pp. 325-242). Chichester, UK: Wiley.
- Craig, R. T. (1999). Communication theory as a field. *Communication Theory, 2*, 119-161.
- Duncan, H. D. (1967). The search for a social theory of communication in American sociology. In F. Dance (Ed.), *Human communication theory* (pp.236-263). New York, NY: Holt, Rinehart and Winston.

- Eaton, A. A., & Rose, S. (2011). Has dating become more egalitarian? A 35-year review using Sex Roles. *Sex Roles, 64*, 843-862.
- Farrer, J., & Gavin, J. (2009). Online dating in Japan: A test of social information processing theory. *Cyber Psychology & Behavior, 12*, 407-412.
- Farrer, J., Tsuchiya, H., & Bagrowicz, B. (2008). Emotional expression in *tsukiaiu* dating relationships in Japan. *Journal of Social and Personal Relationships, 25*(1), 169-188.
- Festinger, L. (1957). *A Theory of cognitive dissonance*. Stanford University Press.
(末永俊郎 (訳) (1965). 認知的不協和の理論 誠信書房) .
- Galvin, K. M., & Wilkinson, C. A. (2011) In K. M. Galvin (Ed), *Making Connections* (5th ed, pp.5-12). New York: Oxford University Press.
- Griffin, E. (2012). *A first look at communication theory* (8th ed). New York, NY: McGraw-Hill.
- Heino, R. D., Ellison, N. B., & Gibbs, J. L. (2010). Relationshopping: Investigating the market metaphor in online dating. *Journal of Social and Personal Relationships, 27*(4), 427-447.
- Hofstede, G. (1991). *Cultures and Organizations: Software of the Mind*. London: McGraw-Hill.
- Homans, G. C. (1958). Social behavior as exchange. *American Journal of Sociology, 63*(6), 597-606.
- Ishii, S. (1984). *Enryo-sasshi* communication: A key to understanding Japanese interpersonal relations. *Cross Currents, 2*(1), 49-58.
- Knapp, M. L. (1978). *Social intercourse: From greetings to goodbye*. Boston: Allyn & Bacon.
- Knapp, M. L. (1984). *Interpersonal communication and human relationships*. Boston: Allyn & Bacon.
- Knapp, M. L., & Vangelisti, Al. L. (2009). *Interpersonal communication and human relationships* (6th ed). Boston: Ally & Bacon.
- Knapp, M. L., & Vangelisti, A. L. (2011). Relationship stages: A communication perspective. In K. M. Galvin (Ed), *Making Connections* (5th ed, pp.151-158). New York: Oxford University Press.

- Lever, J., Frederick, D. A., & Hertz, R. (2015). Who pays for dates? Following versus challenging gender norms. *SAGE Open*, 5(4), 1-14.
- Lindlof, T. R., & Taylor, B. C. (2018). *Qualitative communication research methods*. LA: Sage.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychology Review*, 98, 224-253.
- Metts, S. (2006). Gendered communication in dating relationships. In B. J. Dow & J. T. Wood (Eds.), *The Sage Handbook of Gender and Communication* (pp. 25-40). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Midooka, K. (1990). Characteristics of Japanese-style communication. *Media, Culture, and Society*, 12, 477-489.
- Miike, Y. (2002). Theorizing culture and communication in the Asian context: An assumptive foundation. *Intercultural Communication Studies*, 11(1), 1-21.
- Miike, Y. (2017). Non-western theories of communication: Indigenous ideas and insights. In L. Chen (Ed.), *Intercultural communication* (pp. 67-97). Boston: Walter de Gruyter.
- Miike, Y. (2018). Asiaticity. In Y. Y. Kim (Ed.), *The international encyclopedia of intercultural communication* (Vol. 1, pp. 39-46). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Miike, Y. (2019). The Asiatic idea in communication: Understanding the significance of a paradigm. *Studies in English Language and Literature*, 60(1), 50-73.
- National Communication Association. (n.d.). What is communication? <https://www.natcom.org/about-nca/what-communication> (2020年9月8日最終閲覧).
- Okabe, R. (1983). Cultural assumptions of East and West: Japan and the United States. In W. B. Gudykunst (Ed). *Intercultural communication theory: Current Perspectives* (pp. 21-44). Beverly Hills, CA: Sage.
- Okabe, R. (1991). Intercultural assumptions of communication and rhetorical theories: East and West. In P. G. Fendos (ed.), *Cross-cultural communication: East and West*, Vol.3. (pp.71-93). Taiwan, Taiwan: Department of Foreign Languages and Literature, National Cheng-Kung University.

- Rose, S. M., & Frieze, I. H. (1993). Young singles' contemporary dating scripts. *Sex Roles, 28*(9), 499-509.
- Rosenfeld, M. J., Thomas, R. J., & Hausen, S. (2019). Disintermediating your friends: How dating in the United States displaces other ways of meeting. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America, 116*(36), 17753-17758.
- Saito, M. (1982). Nemawashi: A Japanese form of interpersonal communication. *Etc., 39*(3), 205-214.
- Serewicz, M. C. M., & Gale, E. (2008). First-date scripts: Gender roles, context, and relationship. *Sex Roles, 58*(3), 149-164.
- Takai, J., & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology, 33*(3), 224-236.
- Tezuka, C. (1992). *Awase* and *sunao* in Japanese communication and their implications for cross-cultural communication. *KEIO Communication Review, 14*, 37-50.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H. H. (1959). *The social psychology of groups*. New York: Wiley.
- Ting-Toomey, S., & Takai, J. (2006). Explaining intercultural conflict: Promising approaches and directions. In J. G. Oetzel & S. Ting-Toomey (Eds.), *The Sage handbook of conflict communication*. Thousand Oaks, CA: Sage. pp.691-723.
- Watanabe, K. (2018). A Japanese path to mindful communication: Understanding the silence of the Japanese. In K, Seneviratne (Ed.), *Mindful communication for sustainable development* (pp. 181-191). Thousand Oaks, CA: Sage.
- West, R. L., & Turner, L. H. (2010). *Introducing communication theory: Analysis and application*. Boston: MacGraw Hill.
- Wood, J. (1998). Ethics, justice, and the "private sphere". *Women's Studies in Communication, 21*(2), 127-149.

「AI 彼女心救う」『毎日新聞』2020年4月19日朝刊 (p.3).

「36歳 AIに恋して」『毎日新聞』2020年4月19日朝刊 (p.1).

- 赤松啓介 (2004).『夜這いの民俗学・夜這いの性愛論』ちくま学芸文庫.
- 岩澤美帆・三田夏美 (2005).「職縁結婚の衰退と未婚化の進展」『日本労働研究雑誌』47(1), 16-28.
- 岩澤美帆 (2010).「職縁結婚の盛衰からみる良縁追求の隘路」佐藤博樹・永井暁子・三輪哲 (編)『結婚の壁 非婚・晩婚の構造』(pp.37-53) 勁草書房.
- 岩澤美帆 (2013).「失われた結婚, 増大する結婚: 初婚タイプ別初婚表を用いた 1970 年代以降の未婚化と初婚構造の分析」『人口問題研究』69(2), 1-34.
- 岩田龍子 (1980).『日本的センスの経営学』登用経済新報社.
- 牛窪恵 (2015).『恋愛しない若者たち-コンビニ化する性とコスパ化する結婚』ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- SLAA 研究会 (2013).「質的研究-基礎: 定義・特徴・量的研究との比較他」.
- 大谷尚 (2008).「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案-着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き-」『名古屋学大学院教育発達科学研究科紀要』(教育科学) 54(2), 27-44.
- 大谷尚 (2011).「質的研究シリーズ SCAT : Steps for Coding and Theorization -明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』10(3), 155-160.
- 大谷尚 (2017).「質的研究とは何か」『薬学雑誌』6, 653-658.
- 大谷尚 (2019).『質的研究の考え方』名古屋大学出版会.
- 大塚明子 (2003).「戦前期の『主婦の友』にみる『愛』と結婚」『立教大学女子短期大学部研究紀要』46, 1-11.
- 大森美佐 (2014).「若者たちにとって「恋愛」とは何か-フォーカス・グループディスカッションによる分析から-」『家族研究年報』39, 109-127.
- 大森美佐 (2016).「日本の若年独身者における親密性 -性行動内容に注目して-」『人間文化創成科学論叢』19, 35-143.
- 大森美佐 (2019).「『恋愛』への意味づけの書き換え-愛・性・結婚の結合と分離に注目して-」『家族関係学』38, 43-55.
- 桶川泰 (2007).「大正期・昭和初期における『婦人公論』『主婦之友』の恋愛言説-『お見合い至上主義』言説・『優生結婚』言説の登場とその過程-」『フォーラム現代社会学』6, 93-104.
- 小澤千穂子・山田昌弘 (2010).「結婚仲人の語りから見た『婚活』『婚活』現象の社会

- 学日本の配偶者選択のいま』(pp.65-80) 東洋経済.
- 加藤秀一 (2004). 『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか』 ちくま新書.
- 菊池美智子 (1981). 「教育史における森有礼の評価」『教育學雑誌』 15(0), 48-57.
- 北村文・阿部真大 (2007). 『合コンの社会学』 光文社.
- 北村透谷 (1970). 「厭世詩家と女性」『北村透谷選集』 岩波書店.
- 北山忍 (1994). 「文化的自己観と心理的プロセス」『社会心理学研究』 10(3), 153-167.
- 北山忍・唐澤真弓 (1955). 「自己：文化心理学的視座」『実験社会心理学研究』 35(2), 133-163.
- 貴戸理恵 (2018). 『「コミュ障」の社会学』 青土社.
- 久木元真吾 (2011). 「不安の中の若者と仕事」『日本労働雑誌』 53(7), 16-28.
- 桑原桃音 (2017). 『大正期の結婚相談-家と結婚にゆらぐ人びと-』 晃洋書房.
- 栗林克匡 (2002). 「恋愛における告白の状況と個人差 (シャイネス・社会的スキル) に関する研究」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』 39, 11-19.
- 栗林克匡 (2004). 「恋愛における告白の成否の規定因に関する研究」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』 41, 75-83.
- 厨川白村 (1922). 『近代の恋愛観』 改造社.
- 高坂康雅 (2011). 「"恋人を欲しいと思わない青年"の心理的特徴の検討」『青年心理学研究』 2, 147-158.
- 『広辞苑 (第6版)』 (2008). 岩波書店.
- 厚生労働省 (2019). 「人口動態統計月報年計 (2019年)」 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai19/dl/gaikyouR1.pdf> (2020年12月6日最終閲覧).
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2015). 「第15回出生動向基本調査 (結婚と出産に関する全国調査)」 http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp (2020年9月7日最終閲覧).
- 小林盾・大崎裕子・川端健嗣・渡邊大輔 (2017) 「ロマンティック・ラブ・イデオロギーを分解する—2015年社会階層とライフコース全国調査 (SSL-2015) による恋愛・結婚・出生心理の計量分析—」『アジア太平洋研究』 42, 115-126.
- 小谷野敦 (1997). 『〈男の恋〉の文学史』 朝日選書.
- 小谷野敦 (1999). 「『誰にでも恋愛はできる』の嘘」AERA Mook (編)『恋愛学がわかる。』 (pp.10-13) 朝日新聞社.

- 小谷野敦 (2005). 『恋愛の昭和史』 文藝春秋.
- 小谷野敦 (2010). 『日本文化論のインチキ』 幻冬舎新書.
- 阪井俊文 (2012). 「雑誌の内容分析による恋愛の現代的様相—『消費社会化』『ジェンダー』『社会階層』の視点から—」 北九州市立大学大学院社会システム研究科博士 (学術) 学位請求論文.
- 佐伯順子 (1999). 『「色」と「愛」の比較文化史』 岩波書店.
- 『新解明国語辞典 (第5版)』 (1997). 三省堂.
- 『新解明国語辞典 (第7版)』 (2011). 三省堂.
- 「人工機能が変わる 恋愛も人の心も AI と『結婚』した男性」『毎日新聞デジタル』 2020年4月17日. <https://mainichi.jp/articles/20200416/k00/00m/040/134000c> (2020年12月5日最終閲覧).
- 菅野聡美 (2001). 『消費される恋愛論 大正知識人と性』 青弓社.
- 関野裕美 (2012). 「恋愛における〈告白〉の形成に見る現代日本社会」『国際文化研究紀要』 18, 279-309.
- 総務省 (2020). 「情報通信白書 令和2年版」. <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r02/html/nd252120.html> (2020年1月25日最終閲覧).
- 高井次郎 (2012). 「なぜ空気を読もうとするのか、そして空気は読めるのか?—日本的対人コミュニケーション」吉田俊和・橋本剛・小川一美 (編) 『対人関係の社会心理学』 (pp.171-189) ナカニシヤ出版.
- 高田利武 (2012). 『日本文化での人格形成 相互独立性・相互協調性の発達の検討』 ナカニシヤ出版.
- 立脇洋介 (2005). 「異性交際中の出来事によって生じる否定的感情」『社会心理学研究』 21, 21-31.
- 田中秀和 (2011). 「恋愛や結婚は個人の問題か—公的支援導入の提言」『新潟医福誌』 11(2), 70-75.
- 谷本奈穂 (2008). 『恋愛の社会学—「遊び」とロマンティック・ラブの変容』 青弓社.
- 谷本奈穂・渡邊大輔 (2016). 「ロマンティック・ラブ・イデオロギー再考—恋愛研究の視点から」『理論と方法』 31(1), 55-69.
- テクテク株式会社 (2019). 「LoveTechMedia」『出会い支援サービス カカオマップ2019』 <https://lovetech-media.com/lovetechlifelab/deaicaosmap/> (2020年9月4日最終閲覧).

- 友池梨紗 (2017). 「日本人の恋愛観 - 「恋愛したくても出来ない」日本人-」西南学院大学修士論文.
- 内閣府 (2007). 「平成 19 年度 少子化社会白書」 <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2007/19pdfhonpen/19honpen.html> (2020 年 8 月 25 日最終閲覧) .
- 内閣府 (2014). 「平成 26 年度『結婚・家族形成に関する意識調査』報告書」 <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h26/zentai-pdf/index.html> (2020 年 8 月 25 日最終閲覧) .
- 内閣府 (2017). 「子ども・若者白書」 <https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/index.html> (2020 年 4 月 20 日最終閲覧) .
- 中西雅之(2011). 「対人コミュニケーションの特徴と研究概要」日本コミュニケーション学会 (編) 『現代日本のコミュニケーション研究』 (pp.18-24) 三修社.
- 中根千枝 (1967). 『タテ社会の人間関係』講談社.
- 中根千枝 (2019). 『タテ社会と現代社会』講談社.
- 中村真由美・佐藤博樹 (2010). 「なぜ恋人にめぐりあえないのか?—経済的要因・出会いの経路・対人関係能力の側面から」佐藤博樹・永井暁子・三輪哲 (編) 『結婚の壁 非婚・晩婚の構造』 (pp.54-73) 勁草書房.
- 西村智 (2014). 「未婚者の恋愛行動分析—なぜ適当な相手にめぐり合わないのか」『経済学論究』 68, 493-515.
- 西村智 (2016). 「若者の恋愛離れに関する一考察：恋人探しにみる先送り行動」『人口学研究』 52, 25-37.
- 日本経済団体連合会 (2018). 「2018 年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」.
- 『日本労働研究雑誌』編集委員会 (2011). 「不安の時代と労働」『日本労働研究雑誌』53(7), 2-3.
- 浜口恵俊 (1977). 『「日本人らしさ」の再発見』日本経済新聞社.
- 浜口恵俊 (1982). 『間人主義の社会 日本』東洋経済新報社.
- 樋口匡貴・磯部真弓・戸塚唯氏・深田博己 (2001) 「恋愛関係の進展に及ぼす告白の言語的方策の効果」『広島大学心理学研究』 1, 53-68.
- 深澤真紀 (2009). 『草食男子世代 平成男子図鑑』光文社.
- 府中明子 (2016). 「恋愛結婚の条件—首都圏にくらす未婚女性へのインタビューから—」『家族研究年報』 41, 41-57.

- 松永正樹 (2013). 「日本コミュニケーション研究の未来に向けて-研究テーマと『実学志向』に関する提言-」『ヒューマン・コミュニケーション研究』 41, 127-140.
- 三池賢孝 (2019). 「アジア中心性」 *Key Concepts in Intercultural Dialogue*, 24.
- 水口洋 (2013). 「学校における儀式的行事の存在価値」『教育研究』 55, 43-53.
- 宮原哲 (2006). 『入門コミュニケーション論』 松柏社.
- 宮原哲 (2011a). 「コミュニケーション研究に関する課題と手法」 日本コミュニケーション学会 (編) 『現代日本のコミュニケーション研究-日本時コミュニケーション学の足跡と展望』 三修社 (pp.168-177).
- 宮原哲 (2011b). 「まえがき」 日本コミュニケーション学会 (編) 『現代日本のコミュニケーション研究-日本時コミュニケーション学の足跡と展望』 三修社 (pp.3-10).
- 宮野真生子 (2014). 『なぜ、私たちは恋をして生きるのか-『出会い』と『恋愛』の近代日本精神史』 ナカニシヤ出版.
- 宮野真生子 (2016). 「近代日本における『愛』の変容」. 藤田尚志・宮野真生子 (編) 『愛-結婚は愛のあかし?』 ナカニシヤ出版.
- 茂木暁・石田浩 (2016). 「結婚への道のり-出会いから交際そして結婚へ」 佐藤博樹・石田浩 (編) 『出会いと結婚』 勁草書房 (pp. 44-75) .
- 森岡正博 (2008). 『草食系男子の恋愛学』 メディアファクトリー.
- 森下典子 (2008). 『日々是好日「お茶」が教えてくれた 15 のしあわせ』 新潮社.
- 文部科学省 (2018). 「高等学校学習指導要領解説 特別活動編」.
- 柳父章 (1982). 『翻訳語成立事情』 岩波新書.
- 山田昌弘 (1991). 「現代大学生の恋愛意識-『恋愛』概念の主観的定義をめぐって」『昭和大学教養学部紀要』 22, 29-39.
- 山田昌弘・白河桃子 (2008) 『婚活時代』 ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 山田昌弘 (2016). 『モテる構造：男と女の社会学』 ちくま新書.
- 山田昌弘 (2019). 『結婚不要社会』 朝日新書.
- リクルートブライダル総研 (2017). 「『自然な出会い』は本当に幸せになれるのか-恋愛困難時代を乗り越える『自律的出会い』の提言-」.
- リクルートブライダル総研 (2020). 「恋愛・結婚調査 2019」. https://souken.zexy.net/d/ata/ra/renaikan2019_release.pdf (2020年10月12日最終閲覧) .

付録（調査データ）

付録 1 : 一次調査ストーリーライン.....	165
付録 2 : 二次調査コーディングに対する語り抜粋部の割り当て.....	183

付録 1 : 一次調査ストーリーライン一覧

A のストーリーライン

A は現在の恋人と半年にも満たない交際期間を有している。交際相手との出会いのきっかけは、友人による紹介という人工的な出会いであり、お見合い的出会いである。紹介者との認識共有はそれまでの交流で行われており、好みのタイプも伝え合っていた。紹介された相手は紹介者の高校の同級生のため年齢差はなく、相手の立場（身元）の把握もできていた。はじめは紹介者による促進も相まって、LINE を通じた **CMC コミュニケーション**で必要最低限のやり取りが交わされた。

A は、会ったことのない相手への不確かさを覚えたが、非常に曖昧な伝達ではあったものの、紹介者である友人の言葉を通して相手への第一印象形成を行い、本人と対面した時に紹介者の言葉への納得を覚えたという。交際前の服装に関しては双方多少なりとも気にかけていたようである。

限定的な CMC コミュニケーションで約束を取り付けた初対面の場で男性は飲酒を前提とした店の選択をし、当日は表面的な自己開示を通して互いの情報の探り合いが行われた。紹介者という共通の知人の話題が初対面での話題の限界性を突破する助けとなり、二人は意気投合し、男性による 2 軒目の提案がなされた。話題の広がりを作ったのは紹介によるメリットの一つであり、紹介者による探りやサポートといった仲人的行動も大きな助けとなったようである。初回デートの支払行動に関しては、男性が多めに負担する性役割行動が見られた。紹介者の性役割意識も高かったという。解散後の **LINE** では食事へのお礼に次回デートの暗示が添えられていた。

男性からの 2 回目のデートへの誘い（食事）があったが、このときも予定の計画時の必要最低限のコミュニケーションのみ行われ、交際前のやり取りの限定性が見て取れる。両者とも社会人のため互いのスケジュールに合わせた交流が図られたことから 2 ヶ月というデート間の空白期間があったが 2 回目のデート段階で行動パターンの安定化が見られ、回数を重ねるにつれて共有する行動時間の長期化・共有するアクティビティの幅の拡張も進んだ。

3 回目のデートは男性の所有車という密室状態を伴う目的を持ったドライブだった。ここでも男性による送迎という性役割行動が見て取れる。A は密室状態という逃避不可能な状況への緊張を覚えたが、比較的安定した会話と相手による計画的行動によって緊張は解けた。当日は男性の柔軟な対応が見られ、食事、特別感のある情景といった景色の共有をして最終的に長時間デートとなった。楽しいデートになった一方で A は交際前の関係に対するラベリングの困難さと関係を問われた際の気まずさを覚えた。関係を問われた際の居心地の悪さが忘れられないという。その後、4 回目には

正式な交際開始と交際に至るまでの会う回数の少なさからスピード交際と捉えることができる。

A は交際前、デート相手への恋愛感情の欠如から交際を迷ったが、相手の問題の有無による判断から告白を受諾した。当時、交際を見込んだ複数の異性との交流を経験して他者との比較が可能となったことから第三者を通しての相手の印象形成を通じて彼の親しみやすさの再認識をした。他の異性に関しては限定的交流の中で相性の不一致が発覚した。このように交際前のデート行動では相性の見定めが不可欠である。現恋人に関しては柔軟な対応といった性役割期待に沿った期待通りの行動が A の好感に繋がったという。

告白も男性の性役割行動によって行われた。互いの家の把握が完了し、相互にテリトリー侵入の許可を行っている状態で実施された。男性の中で告白のシナリオがあったようだが、それは実行されなかった。男性から告白の前置きがあり、それによって告白の真剣さが設定された。告白で男性は A に対する好意形成の経緯を語った。共通の友人を通しての繋がりだったが、SNS の活用によって A を知り、写真を通しての印象形成が行われていたようだ。実際会ってみて印象形成を続けたあとも親しみやすさを覚え告白に至ったという。A は彼が会う前から個を見てくれたことへの喜びを覚え、告白の受諾に至った。

告白前、紹介者による仲人的働きによって A の気持ちが問われたが、このときは気持ちの揺れや交際への不安があった。建前的なやり取りや表面的な自己開示といった限定的な交流しか経験していない関係の未熟さによって生じる不安であった。しかし、A は自身の中で結婚と恋愛の結びつきの希薄化を行い、交際への難易度を自ら下げ、お試し感覚で交際への踏み入りを行った。この告白時の経験を自己の経験の語りとして友人に伝えた際、家の裏口で交際が始まったことにちなんで「裏口入学」と茶化されるという第三者による行動のラベリングによって記憶の整理も行われている。

B のストーリーライン

水商売といった女性特有の職業経験を有する B は、現在の恋人とは交際初期段階にある。彼との出会いは紹介がきっかけ。紹介者自身、男性とお試し交際したが性交渉目的だった彼女と彼の間で発生した目的のズレによって交際相手の不要化が発生し、男性は紹介者と恋バナする程度の仲にあった B に譲渡された。紹介者は性行為の欠如による関係の魅力低下を公表するほど性への積極性が強かった。B は元恋人と破局直後だったこともあり、新しい恋を求めて紹介依頼を申し出た。

B と男性は CMC コミュニケーションを通じた継続的やり取りを経てデート行動に至った。交際を目的とした紹介だったため、交際前デートへの流れもスムーズでスピード感のある段階展開となった。男性によるリードという性役割行動も見られ、無難な初回デートとなった。B は男性に対して好意的な第一印象を抱き、その後もデート行動が重ねられた。特に嗅覚的印象が好意的だったと強調する。紳士的デート内容に対する好印象の形成も交際に繋がる大きな要因となった。B は相手の職業と外見の結びつきを見出し、爽やかな雰囲気にますます好印象を抱いた。

初回デートでは過去の恋愛への探りが行われ、同時に永続的關係への期待が二者間で共有された。ちなみに B は結婚願望ないしロマンティック・ラブ・イデオロギー的考えを抱いていた。

デート行動は飲食を伴ったものが多く、デート行動の定着化が完了した暁には長時間デートも実施された。デート時は男性による一方的な金銭負担という性役割行動が見られ、伝統的性役割という規範の無意識的共有と規範への徹底的従属の下、支払いに関する暗黙の了解的認識が構築されており、B は相手の支払い行動から誠実性を感じ取っていた。

交際前に一度、B にとって想定外なタイミングでの告白があった。男性によってムード形成が行われ、關係の明確化への追及が行われた後、好意の伝達を伴った交際の申込みがあった。しかし、B は過去のトラウマ的交際経験によって交際を躊躇、好意と不安の葛藤に揺れ動く中、交際の可能性を残した拒否を伝えた。このとき、拒絶はしたものの B の中で相手に対する好意の形成が行われており、交際の可能性を見出していた。相手の寛容な態度や相手を気にかける態度、外見への称賛といったコミュニケーションによる親密化が功を奏していたようである。

ただ、告白を承諾していないにも関わらず男性から手をつなぐという身体接触が実行され、状況と行動の矛盾が見られた。さらに男性は過去の職業で身につけた対人能力を活用し、巧みな雰囲気形成を成し遂げ、現実離れした行動によって性交渉への一方的誘導を行い、合意のない性交渉（性行動）へ事を運んだ。交際前の性交渉に対して B は段階スピードへの認識を持つこととなった。積極的態度の男性と受動的態度の女性という伝統的性役割に則った男女の姿が顕著となり、性交渉の慣習化によって合意のない性交渉は続いたことで B は落胆する気持ちを覚えた。

飲食と性交渉がメインとなったデート行動を繰り返す半端な關係に B は關係性と交流内容の不一致があると感じ、關係性への不満をメタコミュニケーションによる認識の共有で相手に伝えた。非建設コミュニケーションへの自省の念を抱きつつ、理想と

現実の矛盾の主張を行い、相手への批判を交えた詰問と感情の限界の言語化を行った。

相手からは慰撫され、返事の保留が言い渡された B は男性の婉曲表現を口実的口調と捉え、相手からの拒絶に対する幻滅を覚えつつ、自己内の関係終焉を悟った。しかし、その後、CMC コミュニケーションを通して最終的な意思決定権を獲得した男性から第三者に抱くライバル意識と独占欲の主張が告げられ、好意の直接的伝達を伴う交際の申し込みがあった。B は申し入れを承諾し、交際が始まった。

D のストーリーライン

D は偶発的な出会いによって知り合った恋人と交際初期段階にある。連絡先交換から 1 ヶ月間の空白期間はあったものの、男性からの突発的連絡によって CMC コミュニケーションが取り交わされるようになり、ユビキタス社会の具現化とも言えるメッセージ交換を介して、FtF コミュニケーションの約束が交わされた。当時、D は破局直後で、他者への関心が高く、恋愛というより交友関係の探究及び自己コミュニティーの拡張を期待していた。二人は会うまでコミュニケーションチャンネルの限定を続け、SNS 上でのやり取りに留めた。相互の予定のすり合わせによって初回は平日夕方に食事デートが決行され、店は当日相互的意思決定で決まった。

初対面のときは情報不足による警戒を感じていたものの、食事デートの際、相手のオンオフの切り替えによる印象変化で D はギャップ萌えを経験。相手が形成する場の空気感から悩みを吐露することとなり、深い自己開示による親密化が一気に進んだ。成熟した態度を持つ相手に悩み解決への期待の高まりを感じていた D は相手の真摯な態度に多大な好意を抱く自己を内観した。外交的な性格の相手に誘われて相手コミュニティーの参入も果たされた。そこでは場面毎のアイデンティティ調整を行う相手の多面的アイデンティティへの気付きもあった。この日は長時間デートの末、相手宅の訪問の流れとなり、お酒による身体接触の誘発も見受けられた。同日、コミュニケーションチャンネルの拡張による関係進展によって新たなチャンネルを介しての約束の取り付けが行われた。

その後、D は相手宅への再訪という経験から相手との間に異性を家に招くことに対する認識の相違を覚えたが、相手は留学経験によってパーソナルスペースの縮小を経験したのだとコミュニケーションスタイルの文化的背景を知ることで納得した。D は「軽い女」というレッテル回避を望む気持ちと断れない空気の間で揺れたが、レイプの危険性を一切感じなかったため再訪を選択した。

D は将来の話をしたことで相手に強い敬意を抱き、性を超越した「人間性」の高さ

を見出した。一方で二人の関係性にまつわる話題はなくメタコミュニケーションの欠如が続いた。後日、相手から誘いがあった時、それまでなかった恋愛関連の話題提起があり、Dは自問自答を経て相手が自分にとって唯一無二な存在であることに気づく。好意への気付きが明確化したのである。同日、相手からの暗示的告白によって関係形成がなされた。Dは告白に対し、これまでの相手の態度に対する謝意を伝え、二人は理想的な関係を伝え合ったという。

E のストーリーライン

職場内の建設的コミュニケーションと周囲のサポートが相まって出会いの経路の確保が行われ、Eと相手との間に人工的な出会いが成立した。二人の交流は CMC コミュニケーションから始まり、メッセージの長さの個人差によって連絡に対する認識の不一致が生じたものの、Eはこれを異文化理解だと捉え、内容重視の CMC コミュニケーションの慣習化を進めた結果、紹介者のメンツも意識され、「付き合う前提」の交流へと発展していった。

仕事と恋愛の両立前提の相互の日程調整と能動意識によってデート行動への移行が可能となり、性役割規範に則った男性のリードによって初回デートが決行された。Eは当日リスク回避を意識し万人受けする格好を選んだ。緊張の対面だったが、紹介時の相互の認識齟齬の修正や談笑を交えながら文化的背景の類似による相性の一致が見られたことで場の和みが促進され、ポジティブな心理的距離感の変化が生じた。当日はノープランデートで、気ままな行動が多く、デート相手の配慮もありサクッとデートで夕方には解散となった。じっくりデートへの期待を抱いていた Eは理想と現実のギャップによる寂しさを覚えたが、最終的に相手が次回のデートのほめかしを示して初回デートは終了した。

関係構築超初期段階で情報不足によるコミュニケーションの建前化は避けられなかったが、デート行動による親密感の生起が見られ、Eは自分だけに向けられた優しさへの喜びを覚えた。草食系男子である相手は誠実なやり取りを重んじ、交際前のスキップ回避を心がけた。過去の経験の影響も相まって Eは相手の真摯な対応への好印象を抱いた。Eは充実的デートによる関心の高まりを覚え、次回への期待を感じた。その後、CMC コミュニケーションを通しての相互的自己開示の定着を通じて「恋愛」への過剰意識による恋バナ回避は続いたものの、体験の共有は引き続き行われた。

2回目のデートも性役割規範に則ったアクションで男性から誘いがあった。会いたい欲を抱いていた Eは「バレンタイン」というカップルイベントを活用し、デート間

の空白期間縮小の試みを行った。当日は外見的特徴のすり合わせを試みて服を決めた。相互協力によるデートプランで内容を定め、アクティビティの共有や、「一緒にディナーを食べる」という約束の遂行を通じて親密化が図られた。男性によるリードで本質的自己の呈示が可能となり、相手の行きつけの居酒屋へ行くという相手のテリトリーへの誘導もありつつ、基本的に柔軟性の高いデートとなった。

相手の不透明な恋愛感情に不安を抱いた E だったが相手が心の緩みによる自己開示を通してデートの連続性に対する期待と不安を抱きつつ相手 (E) の好意的反応による自尊心の向上を経験していたことが語られた。勢いによる告白の回避を選択した相手は告白の先延ばしを決意した。自己卑下的発言を交えつつ、告白宣言を行い、E に「OK だったら次のデートに来て」と「行動による告白の返事」を促した。リスクへの予防線を張りつつも友達関係からの脱却という関係進展の提案をしたのである。E はこの期待違反行動へ驚きを隠せなかったが、別れ際にバレンタインの贈り物を渡してこの日は解散となった。

非対面時の告白回避を意識しつつ、CMC コミュニケーションを通じての連続的自己開示が行われる中、E の誕生日という個人的記念日の共有を機に3回目のデートが決行された。1・2回目は相手が E を訪ねてきたことからデートコストの平等化を図った E は相手を訪問することにした。相互関係の成立が完了していた二人にとって特別な空間の不必要化が顕著となった3回目のデートでは二人は聞き役と話し役のバランスを上手に取りつつ、相互に積極的な自己開示を重ね、親密的関係を構築していった。同日、プライベート空間の共有を果たした後、男性による気持ちの伝達と関係進展の申し入れを通して交際関係の構築が成立した。E は二者間の「好き度合いのズレ」を認知しており、自己の感情への疑念を抱いてはいたものの、関係構築か終焉という究極な選択を迫られて告白の受諾を決意。緊迫感を覚える全力の告白を受け、言葉に込められた気持ちへの感銘を覚えた E は、好意の返報性も相まってお試し感覚としての関係構築を選択した。告白後、E は相手から気持ちの籠もったプレゼントとして形に残る贈り物を受け取った。相手からの初めてのプレゼントはフラレてもおかしくないリスクを伴うタイミングでの受け渡しだったが、渡すこと前提で用意された贈り物だと知り、交際前の出費から相手の気持ちを察した。同日、交際開始後の軽度のスキンシップが執り行われ、関係構築完了となった。お互い恋愛経験の不足が共通点としてあったため、慎重な関係進展となった。

F のストーリーライン

F と年下男性である元恋人は短期間での関係変動を経験した。日常での出会いのなさを感じた F はネット婚活の普遍化に倣ってマッチングアプリを活用して積極的な出会いを求めた。出会いのきっかけは受け身体制にあった F に対する男性による先手であった。意図的な印象操作の可能性を伴う無機質なデータを基にした画面上の判断ではあるものの、好意的第一印象を抱いた F はマッチングの成立を完了させた。アプリ上の出会いはコミュニケーション促進要素としてのアプリシステムとしての働きも持つ公共への個人データの開示がマッチングの鍵をにぎる。アプリは文章を通じての印象形成が主となるが、関係構築初期では相互の礼儀のわきまえと距離感の調整が求められる。

アプリ上の反応の良さと小気味良いコミュニケーションリズムによって CMC コミュニケーションが重ねられ、相性の一致によりやり取りの慣習化が成立した。F は過去の恋愛のふり返しによって過去の恋愛との決別と新たな恋愛の追求の必要性を覚え、気持ちの切り替えと精神的苦痛からの開放を目的にデート前の選定を行った後、感情に任せた積極的行動として気休め感覚の誘いを相手に投げかけた。草食系男子に合わせた挑戦であった女性による関係進展の促進は結果的にコミュニケーションチャネルの拡張を生じさせ、FtF コミュニケーションの移行につながった。

その後、相互の利他的態度と性役割規範に則った男性のリードによって無難な初対面が実施された。初対面は待ち合わせスポットとコミュニケーションツールの活用で果たされ、デートに対する期待と不安を抱いていた F も脳内の情報照合によって相手を認識し、画面上と実物の差がなかったことから不変的印象への安堵を覚えた。当日は両者とも最低限の身だしなみを意識しており、不確実性の高い状況でのリスク回避が意識され、無難なランチデートが決行された。一方、相手の積極的行動で共有時間の長期化、共有行動の拡張が促され、F 自身も相性の一致を覚えたことから全力の初デートへと転じた。デート開始時の腹の探り合いは時間が経つにつれランダムな話題を通しての相互の連続的自己開示に変わり、結果的に親密的関係が構築された。相互のコミュニケーションスタイルの調整による親密化も関係促進の要因となり、これまでにない恋愛経験で印象的デートとなり、F は相手に高評価を抱いた。同日、相互の恋愛観の探りによって恋愛に関する認識共有が行われた際、利他的性格である相手の男性は相性の不一致による関係終焉した相手とのデートに関する失敗談を語り、その経験から関係段階に合わせたコミュニケーションスタイルの調整が必要であることを学んだと語った。

デート後も CMC を活用したコミュニケーションの慣習化が進められ、相互の日常への入り込みが見られた。自己開示の積み重ねによる親密化も図られ、話題の共有によって心理的距離の縮小、交流の相互性も向上して順調な関係進展が果たされた。F自身も自身の関係への高評価を認めていた。二人は落ち着きのあるお家デートという密室空間も共有し、恋人に近い関係で、男性による甘やかし行動も多く見られたために関係進展期待を抱いた F は性役割期待を胸に待ちの姿勢で相手の出方をうかがったが、一時的に曖昧な関係が続いた。

男性の真摯的態度によって交際前のスキンシップ回避も相まって F は関係への疑念を覚えたが、客観的判断で相手の恋愛への不慣れ具合が要因だろうと結論づけた。その後、日常の共有ややり取りの「あたりまえ」化が進み、F も関係の客観視による将来の関係への展望を抱きはじめてころ、「儀礼的行為としての告白」の実施が行われた。婉曲的好意伝達による告白予告と予定の調整が行われ、デート当日は二人きりの空間の中、スムーズな流れで結婚を前提とした真剣交際の申し入れが提案された。

デート時の店選択などで相手の利他的性格や好みの一致に好感を抱いており、且つ日常性の追求が垣間見える二人の快適な関係を好んでいた F は告白を受諾。関係のラベリング変化による行動変化が生じ、交際開始をきっかけとしたスキンシップの生起も見られた。

G のストーリーライン

仕事柄、出会いの限定性が高い G だが偶発的な出会いと人工的な出会いが重なって現恋人と知り合った。飲み会という少人数での密なコミュニケーションを通して G は同席していた女性に女性的な第一印象を抱き、「野球好き」という好みの一致とスムーズな対話に初対面とは思えないフィット感を覚えたことで、個人的コミュニケーションの生起に至った。

その後、CMC コミュニケーションの慣習化による関係進展を経て、相互の存在の定着化が進み、性役割規範に則った男性によるアプローチによってデート行動が実施された。社会人の恋愛ということで多忙さも相まって出会いからデートまでの空白期間はあったもののコミュニケーションツールの活用による関係維持が果たされた。絵文字の活用といった CMC コミュニケーション時の非言語シンボル活用によるノイズ除去を伴った自己開示の蓄積による親密化も進み、結果として FtF コミュニケーションへの移行が図られた。

恋愛以外との兼ね合いもあったが相互スケジュールの一致でデートは週末決行され

た。時間的コストの負担はあったが、Gは女性の居住地を訪れ、地域コミュニティーとの繋がりの強さもある女性によるデートプランで当日は気軽且つ慎重な初デートが行われた。お手軽デートではあったがGは最低限の身だしなみを意識してデートに挑んだ。時間の有効活用の結果、相性の一致による不確実性要素の低下も相まって長時間交流による親密化が進んだ。会話内容としては環境的背景の共有や相互の過去の恋愛の探りによる恋愛観の共有などであった。同日、二者間に生まれた空気と相互判断によって恋愛関係の成立が果たされた。二人の交際はなりゆきの結果とも考えられる。

交際関係構築に大きく貢献したのは相手の裏表ない性格であった。Gは社会的交流を介して構築された認識を基に関係初期段階時の建前的コミュニケーションの際に情報不足による警戒心を抱き、関係深化による本質の表面化を待つて本質の見極めを試みたが、予想に反して相手の態度が変わらず、好感を抱いたという。

Hのストーリーライン

出会いの経路の多様化が進む中、Hは周囲からの恋愛促進を受けて積極的な出会いを求めることとなった。Hは性役割規範に則ったコスト負担が課せられることから恋愛市場参加へのハードルの高さを覚えつつも利便性を意識した中心部での開催となった「出会い」目的の場としての街コンに参加し、現恋人と知り合った。恋活・婚活イベントは男女比率の調整が事前に行われ、参加者の条件制限による類似性の向上も図られており、少人数による密なコミュニケーションを通じて幅広い出会いの可能性が見込める。参加者の交際希求度のばらつきは見られるものの、長時間の交流による相互理解で相手が求めるものを見極められる。明確な目的を持った恋活にはピッタリの出会いの場である。

「積極的な出会い」で求められる当事者の力量は関係構築に不可欠で、恋活苦難者が生じることもある。婚活の普遍化が進んだ今、恋愛市場の戦場化が進んでおり、結果的に恋愛格差が生じている。恋愛経験の個人差が物を言い、ライバルからの恋愛可能性の奪略が生じることもある。中には、周囲との共同婚活を行う者や周囲のサポートを受けて恋愛にたどり着く者もいる。Hも場に合わせた空間選択などの幹事力を持つサポーターによるきっかけの成立が恋愛成就につながったと認識している。

初期の関係の将来展望の欠如が「出会い期」のインパクトの弱さを引き起こしたため曖昧な記憶だが、街コンイベント終了後、ライバルへの批判と自分たちへの自信を示したHは友人と共に男女比率のズレがある二次会へ女性を促したという。二次会では関係超初期段階の「整っていない場の空気」に不安を覚えながらも友人の積極的行

動による関係進展の結果、後日の食事会の実施が決まった。関係構築に苦手意識を抱いており、非恋愛体質で受け身体制の H だが周囲のおせっかい行動のおかげで関係がそこで途切れずに済んだことは恋愛における人脈の重要性を体現している。

食事会では規範に則った無難な交流内容となったが、草食男子である H と相手の間では相変わらず個人的交流の欠如が続いた。その後、ようやくコミュニケーションチャンネルの拡張に伴って個人的交流への移行を果たした。この頃から好意の相互性が見られ、互いに友達以上の関係希求を示したことから関係進展に向けてデート行動が実践された。初対面時に相互のコミュニケーション能力の相乗効果によって円滑なコミュニケーションが図れたことで良好な第一印象が築かれていたことが大きな助けとなった。デート当日は交際を意識した異性交流ということもあり、共行動による親密化が図られた。礼儀正しさを重視したコミュニケーションから親密性を重視したコミュニケーションへの移行も図られた。

デートした頃からコミュニケーションツールの活用によるやり取りの日常化も見られ、コミュニケーションスタイルの相性の一致によって親密関係が構築されていることから相性の重要性が見て取れる。その後、長距離デートを実施した際に相手から贈り物を通じての好意伝達があり、好意の察しを覚えた H は好意の返報性に従って別れ際の告白を決行。当時は関係構築に必要な最低限の好意しか持っておらず、恋愛感情の明示的伝達の回避はあったものの、性役割規範に則った告白として男性による交際の申込みを通じての関係変化を経て交際に至った。

I のストーリーライン

I は高い観察力によって相手の外的魅力への反応を示し、初対面での自発的行動によって元恋人と知り合い、職業類似による親近感も相まって完全コミュニティ外での関係構築が成立した。この偶発的な出会いが関係構築につながったのは当事者のコミュニケーション能力による賜物である。

CMC コミュニケーションによる超初期段階の関係構築が行われた後、コミュニケーションチャンネルの拡張を試みて FtF コミュニケーションへの移行、すなわちデート行動への移行が行われた。相互の予定調整と恋愛経験豊富な I のリードの下、おしゃれデートが決行された。当日、I は相手の身体的魅力の再認識を経験し、過去の恋愛の探りといった自己開示を介しての親密化が図られた。当初は関係未発達段階だったため、外見を通しての印象形成が中心となり、結果的に外見的魅力の重視が促進された。ノンバーバルによる印象形成関連に関して I はブランド物装備による自己呈示を行って

いた。若者の日本語活用能力の低下を懸念する I はデート内の生産性のある会話の成立に好印象を抱いた。デート中、コミュニケーション能力活用による親密化を通して相手の警戒心の緩和も見られた。さらに「おごり行為」による印象形成という性役割規範に則った支払い行動を通して I は暗黙的好意伝達を図った。

この日は超初期段階時の様子見デートではあったが、暗黙の合意を基に性的関係への発展が生じた。身体的急接近による好意の確信を得た I は巧言による性行為への誘導と目的にあった場所探しという自然な展開づくりによって性行為の実施へ事を運んだ。性行為後、女性の献身的態度に恋愛感情の生起を覚えた I は瞬時的判断を通して関係進展欲を示し、交際申込みをするという急展開を見せた。相手の思いやり行動という異性の模範的態度に対する好感を抱いた結果である。その後、I は交際関係構築に向けた戦略立てを行い、複数のコミュニケーションチャネルによる関係維持を心がけ、2回目のデートにこぎつけた。2回目のデート当日、I は空間による演出を通して他の女性との差別化を示し、交流の蓄積による親密化を行った上で排他的関係の構築願望を相手に示した。このとき、「人は未知なものに対する好奇心を、既知なものに対する無関心を抱く」と認識していた I は自分と相手と同業者であることを隠し、自己開示の調整による印象操作をしつつ、「友だち止まりの脱却」と「排他的関係の追求」を目指した告白を実行した。「女性による展開の歯止め」としての告白保留を受けたものの、感情の高ぶりのあまりに感情の吐露として涙を見せた際、感情の伝染による心身的繋がりの生起を覚えた I は関係新展開の確信を抱いていた。当時、I はこの恋愛を通して自身の経験値の向上を感じ、情緒不安定に陥るほどの「大恋愛」に希少的価値を見出した。この経験により I は身体的繋がりの不必要性と精神的つながりの重要性を説いた。

その後、告白を受けたことによる優越感に浸っている相手とコミュニケーションツールの活用によってやり取りの定着を進めていき、恋愛と仕事といった活動のバランスを図る恋愛ライフバランスを保ちつつ、再びデート行動にこぎつけた。この時点で相手の中の特別感情生起を見出した I は再び空間による演出を伴った告白の返事の促しを行った。結果、交際関係成立を果たし、スピード交際に至った。

Jのストーリーライン

Jは婚活ツールの活用という積極的な出会いを通して元恋人とつながりを得た。データ照合による理想との一致に加えて相手の積極的アプローチによってコミュニケーションの定着が完了した。CMC コミュニケーションによる関係構築を経て、相互の恋愛観の共有などが行われた後、スピード交際に至った。このとき、排他的関係の申し入れはあったものの、相手がゲーム感覚の恋愛をしているように感じられ、相手にとっては「遊びの恋愛」だったのではないかとJは感じている。

Jは自由度の高い情報登録が可能なアプリは認識操作が容易なため「本音」と「建前」の見極めが困難となり、信頼関係構築のハードルが高くなると考える。「氷山の一角」的データは批判的姿勢で見極める必要があるという。事実、元恋人の公開情報の中にも高ステータス男性としてのモラハラ発言と見受けられる内容が含まれていた。また、同時進行の異性交流が可能となるアプリでは常にライバルの存在が生じる。「運命の出会い」への期待を抱いていたJの中でこの経験はトラウマと転じている。この経験を受けてネット婚活上のリスク回避のためにはツールの見極めが鍵をにぎるとJは考える。同時に、見合いのメリットとしての「相手の情報把握」を挙げ、見合いの安全性を主張した。

Jは恋愛状況の自己分析を通して自分が男性の社会的ステータスおよび甘言蜜語に弱く、「本音」と「建前」の見極めができないために相手の好意の体現に好意の互換性を持って好きになってしまうという。学生時代、親からのアドバイスとして恋愛経験の向上を目的とした「遊びの恋愛」の推奨を受けたが、Jはそれを実践しなかった。今では「失敗が許される学生恋愛」の段階で恋愛しておくべきだったと悔やみ、恋愛経験不足による不安を覚える。デートには行くが、初回デートでの峻別を経て交際可能性が感じられず、排他的関係の構築の困難さを思い知る。

また、恋愛指南を参考に「伝統的性役割規範に則った関係構築」という恋愛テクニックの学習も行っており、実際にテクニックの実践による成功事例も経験済みである。中でも長期的関係への展望が見込める相手には性役割規範に則った自己呈示を行っているという。ネット社会の現代ではメディアの影響力が強力であるがゆえに一個人の意見の力も強くなり、一般者でも恋愛コミュニケーションコンピテンスモデルとしてもてはやされる。結果、読者に異性に対する固定概念を植え付け、無意識な性役割意識の再構築が行われる。例えば、女性として「身体的魅力」の保持をすることで「美」という資産による浮気防止を促進する必要があるとJは訴えていた。それは女性として最低限のマナーであると捉え、さらに会話の促進役を請け負うのも女性の役割であ

ると認識している。しかし、同時に読者は恋愛マニュアルを参考にするあまりに「自己主張」と「自己抑制」のバランスが取れず「自然な自分」と「人工的な自分」の使い分けに悩む可能性も生じる。

さらに「出会いのツール」の乱用により「出会い」の無限化を感じつつも婚活の代償としての「男性依存」に陥っていると自認している。Jは依存癖があり、無意識な恋愛の最優先化を図るばかりに情緒不安定になることが多いという。良好な人間関係構築に不可欠な「自立心」を取得する前段階として依存からの脱却の必要性を感じており、今が恋愛観の見直しの時期だと捉えていた。

Kのストーリーライン

学位取得に向けて休職を選択したKは学生同士として相手と出会った。二人は共同コミュニティでの活動により関心の一致が見られ、単純接触機会も多かった。容姿に基づいた判断で相手に好印象を抱いたKだったが、当初は他の女性と交際中だったため相手を恋愛対象外としていた。相手からのきっかけづくりで二人は話すようになり、その後授業タスクの共有によって交流機会の向上が見られ、相手に外見的魅力を感じていたKは好意の芽生えを覚えた。この頃、Kは元恋人との破局という状況変化がきっかけとなり相手へ恋愛感情を抱くという認識変化を経験していた。友人との会話の中で感情整理をしていた際、好意の言語化を通して自分の中で意味構築が生起し、言葉として感情が芽生えたという。しかし、そのころは相手も排他的関係を持っていたため状況判断の結果、リスク回避として自制行動に留まった。

その後、表面的会話が続いていた二人だったが相手の排他的関係の終焉という状況変化をきっかけに関係進展が促進され、デート行動への移行が見られた。デートの慣習化に伴って自己開示による親密化が図られ、ツールの活用によるコミュニケーションの定着も見られた。

元々単純接触機会が多かったことから相手も安心感を抱いており、デートを通して急速な親密化が見られ、親密的雰囲気の中で性役割規範に則った男性による告白を通してスピード交際に至った。このときKは相手の深い自己開示を通して相手と親密的関係の構築を通してパーソナルスペースを詰めることができていると認識し、両思いだろうと判断し、成功の確信を得ていた。長期的関係構築の展望を言葉による意思疎通で伝えたKと相手は排他的関係を結ぶに至った。交際開始前は礼儀正しさを重視したコミュニケーションスタイルだった相手も交際開始後は親密性を重視したコミュニケーションスタイルに移行させていた。

Lのストーリーライン

出会いの経路の限界を感じていたLは仲介者である上司による恋愛の世話を受け、「職場内の建設的コミュニケーションを目的とした紹介」という名目の元、実際相手と知り合うという伝統的恋愛シナリオに則ったような出会いを果たした。相手の第一印象として芯の強さを見出し、将来の関係展望を抱くも積極性の欠如が見られたLだったが仲介者によるサポートによってお試し交際が始まり、CMCコミュニケーションから個人的関係の構築開始をするに至った。

コミュニケーションの定着が進み、礼儀を重視したコミュニケーションスタイルから親密性を重視したコミュニケーションスタイルへの移行も見られたところでコミュニケーションチャンネルの拡張としてデート行動へ移行するというスムーズな関係展開を見せた。

Lは期待と不安を胸に周囲からのアドバイスを受けながらデート状況の事前準備を進めた。デート時のマナー意識は相互にあったとLは感じている。初対面時は仕事終わりでフォーマルな装いだったため個性の欠如が見られたが、2回目はカジュアルな装いとなり個性の現れを確認できた。

デート当日、体調を崩すというタイミングの悪さを覚えたLだったが、本音コミュニケーションを通して感情の共有と受容を経験したことにより相手との関係に親密感を覚えた。初回デートのセッティングでは緊張緩和を意識し席の配置まで気を配ったLだったが、相手のポジティブなフィードバックの暗示によってデートを計画したLのメンツ意識が保たれた。同世代の相手とは「相性一致」の認識を抱くことができ、相手のポジティブな予期違反行動によって自分の中の好奇心の向上が刺激され、恋愛感情の芽生えを覚えた。価値観の類似性も見られ、相性の一致に心地よさを感じたLは将来性の展望を抱き、共行動の積み重ねを続けていった。

「本音コミュニケーションが図れるという安定的関係は自分に合った関係だ」と認識し、相手との信頼関係且つ安定的関係はLにとって精神的親密感を覚える憩いの場となった。初回デートで体調不良という外的要因による予定の変更が見られたものの、結果的に相手との関係に落ち着きを感じ、交流を通しての恋愛感情の芽生えを覚えた。

交際前のデートには男性の運転によるドライブデートもあった。事前知識に基づくデートプランが立てられ、且つ空間という外的要因を活用したリラックス状態でのコミュニケーションが成立し、関係構築超初期段階の腹の探り合いといった警戒態勢を解くことが可能となった。

交際意欲を覚えたLが恋愛イベントに便乗しデート終了時に恋愛規範に則った方法

選択でストレートな告白を実施し、相手が告白の受諾を伝えたことで相互による契約完了が果たされた。 3回目のデートでの告白だったが、相性の見定め完了後の排他的関係構築の試みだと考えられる。関係へのラベリングが曖昧なこの時期に関係齟齬への焦燥感を覚えた L は明確な関係変化の区切りをつけるためにも告白したと振り返る。 恋愛感情とは刹那的な感情のため、絶妙なタイミングの見極めが不可欠となることを示唆する。

ただ、告白は受け入れられたものの「恋愛感情の度合いのズレ」によるお試し交際の延長が相手から提案され、「恋愛のはじまり」としての関係構築となった。このように関係開始時の「不完全性」が見られたものの、相互的関係の成立によって「1対1の関係」から「2人の関係」への移行といった関係変化も徐々に見られるようになった。 相互協調的自己観を保有する日本人のため、関係へのラベリングの影響は強力で、重大な役割を持つ「告白」段階を一つの区切りに腹の探り合い期間としての「デート期」から歩み寄り機関としての「交際開始期」に移行していったのである。

以前は外見的魅力の重視を意識していた L だったが、今のパートナーに関しては内面的魅力による判断が大きかったと振り返る。外見的魅力による判断での恋愛はメンツ意識が強くなりすぎ、精神疲労を巻き起こすことから自分に合っていない恋愛だとし、外見がタイプではないということで「コミュニケーションノイズ」としての「よこしまな気持ち」の低減につながっていたと L は主張した。

M のストーリーライン

M は共通コミュニティという自然な出会いを通して知り合った相手と長年の交友期間を経て現在交際中である。M が通っていた学校は多様なコースを保持し、同級生だった相手とは関わりのない状況にあったが、「学校」という大きな枠組みのコミュニティの中で第三者を通じて成立した「縁」という偶発的な出会いによって知り合った。

在学中は限定的交流に留まっており、交友関係の成立が果たされていたため M は相手を恋愛対象外としていた。当時は第三者に容姿判断での恋もしていたという。二人は接触機会の蓄積を重ねるものの交友関係維持のまま卒業を迎えた。卒業をきっかけに生活環境の相違によるすれ違いが生じ、単純接触の減少が見られる一方でコミュニケーションツールの活用によって「友人」としての関係維持が続けられ、自己開示による親密化が図られた。

その後、M も就職し、環境変化に伴った話題選択の変化によって M の中に社会で必要な知識の取得を果たしてサービス業に就いていた相手に対して敬意の念が生じ、そ

れが恋愛感情の生起につながった。この頃、物理的距離が要因で FtF コミュニケーション状況を作り出す困難性が高かったが、M はアプローチに掛けるコスト負担を惜しまず能動的行動を見せた。プライベートな空間でのコミュニケーションも見られ、M は交際前のスキンシップというパーソナルスペースの調整による好意伝達も行った。このとき、M は告白による関係変化の試みをしたが、認識のズレというコミュニケーションノイズの発生のため気持ちの伝達失敗に終わり、関係は友だち止まりとなってしまった。

これを機にコミュニケーションチャネルの限定という距離感調整が行われ、各々恋愛経験を積むに至った。しかし、状況変化をきっかけとしたコミュニケーションチャネルの拡張により再び単純接触機会の増加が見られ、親密な交友関係の維持が続けられた。当時、相互に恋人がいたためスキンシップ回避による恋人との区別化が図られていたが、その後お互い恋人と別れるという恋愛ステータスの変化に伴って関係構築判断が下され、相互の恋愛感情の一致により恋愛関係の成立が果たされた。相手は関係変化への不安を見せつつも「恋人」へのステップアップに同意した。このとき、「人生の伴侶」としての交際申し込みをした M に対して相手は将来的関係への展望生起を強く覚えたという。長期的コミュニケーションの産物として生じた強固な絆によって無意識の内に代替不可な関係が成立していた。

N のストーリーライン

積極的な出会いの探求のため仲間内での出会い提供を繰り返していた中でひとつの合コンが幹事同士の「縁」による実現を果たした。事前に男女の参加人数の統一が図られ、当日はグループ分けによる密なコミュニケーションによって期待以上の盛り上がりが見られたことに N は満足感を覚えた。一期一会によって築かれた場の空気は参加者のコミュニケーション能力の相乗効果によって関係超初期段階での親密的やり取りができるほどとなった。結果、高揚感を伴った帰宅を味わうことができ、帰宅後、儀礼的連絡先交換のみが行われた。

その後、交流内容の振り返りによって関係展望を示す N だったが気持ちと行動の矛盾が見られ、行動に移されることはなかった。しかし、偶発性によって縁の復活が生じ、関係進展が有言実行された。当時、複数の恋人候補との交流を続けており、交際への好奇心とシングルへの執着という交際ステータスに対する葛藤を抱えていた N は天真爛漫な印象を抱いた相手を友だち候補とし、恋愛対象外と認識していた。突発的行動としてのカジュアルな食事への誘いやコミュニティの共有といった集団交流など気

軽な飲み友達関係の構築が進められる中で N は相手に直接的に「恋愛対象外」の意思表示も行っていたようである。

しかしその後、計画性のある個人的交流が図られるようになり、多様なアクティビティの共有且つプライベートな空間の共有を伴う関係に発展し、相手が N の家を訪れる定期的訪問に加え CMC コミュニケーションの慣習化によってやり取りの定着も進み、打ち解けた関係を構築するに至った。 さらに就寝スペースの共有という女性主体による密接距離状態の生起があり、男性主体によるスキンシップという「友だち以上」の行動も見られ、関係ステータスとの矛盾が生じはじめた。 このとき、曖昧な関係への抵抗感を示した相手の女性が関係の明確化を求めた際、スキンシップへの責任も感じていた男性による決断が下され、N は相手の不透明な恋愛感情に疑念を抱いていたものの、周囲のサポートを伴った告白を通して交際開始に至った。

当時、N は相手を友だち認定していたこともあり特別な感情の欠如が見られたため、感情未発達の未熟な関係として交際は始まった。交際関係構築に対して消極的且つ相手を友だち認定していた N が想定外の展開に至った理由として「付き合うかもしれない」と考えてしまう「交際意識」というコミュニケーションノイズの発生が今回は見られなかったのが一番のポイントだと説明した。

**付録 2 : 二次調査コーディングに
対する語り抜粋部の割り当て**

I. 交際前

A. 相互交流

1. 出会い

P (紹介)

最初なんかその「Pちゃんに会わせたい人がいる」って言われて、私最初女の子かと思ってたんですよ。なんか普通に「友達になるみたいな感じでご飯に行ってみらん？」みたいな感じで言われて、私が「友達欲しい」って言ってたから、その時に。社会人になって新しい友達作るの難しいじゃないですか？で、なんか「友達欲しいな」みたいな話をしてた流れで、なんか「Pちゃんと気が合いそうな人がいる」みたいな話をした。あと、私のその当時好きだった人に似てるって言う、顔が。ていうのがあって「ちょっと一回会ってみて」って言われて。それで私はその当時好きだった人は、叶わない恋、と言うか、なんだろう、自分でこう諦めたいじゃないけど、「前に進みたい」みたいな状況だったんですよ。

(紹介してくれた) 友達も結構今の付き合ってる彼とちょっと似てるんですけど多趣味で、すごいいろんなことに興味がある子なんです。で、高校の時にずっと一緒にいた子だったから、私の知らない情報とかをいっぱい色々話してくれて、私はそれを「うんうんうん、へーそんなんあるんだ」みたいな感じで聞く、スポンジタイプの人間なんです。で、だからその友達の的にも、私に何か教えたりとかお話ししたりするのがすごい楽しいみたいで、「すごい聞き上手だ」という風に言ってくれて、その友達が。で、今の彼も結構なんか多趣味で、どっちかと言うとこういろんな人にお話するのがすごい好きな人。で、私は聞くのが上手な人だとその友達曰く、だから、二人はなんか映画とかも好きだし、趣味とかも合いそうだし、すごい二人合うんじゃないかということでご飯に誘ってくれたらしい。

その子(紹介者)が「こういうこと言ってたよ」とか言ったことなかったんですけど、ある日、付き合ってもちょっとぐらい経った時に、その友達が言ったことと同じような事を言ってたんですよ。私を好きになった理由っていうか。私をいいなって思った理由が「聞き上手」というのはポイントとして一個あったみたいで。でもそれだけじゃなかったらしいんですけど。なんか、だからその友達が間違ってたんじゃないかと思いました。友達の紹介って言っても結構すごい親しい友達からの紹介と、とりあえずの友達？そんなに関係が深くない友達からの紹介じゃ、やっぱり全然違うかなって言うのはあります。

Q (オンラインゲーム)

出会ったのは、ゲーム内で、『モンスターハンター』っていうゲームで、あれってあの（中略）みんなで協力して、世界中の色々なプレイヤーと協力してモンスターを狩りに行くっていうコンセプトで、基本私は一人でゲームやってたけど、一人でやってると絶対モンスター倒すのに時間かかっちゃうから、誰かに手伝ってほしいから、呼びかけたら、ランダムで世界中から人が集まってきて。それを何回も繰り返して行って、そのうちの一回（パートナー）と一緒にモンスターを狩りに行って、でそこでの会話というか（中略）なんか、すごく積極的に手伝ってくれるから「ありがたいな」という印象を受けて。

（パートナー）は多分そんなにめちゃくちゃ印象は残ってたようではないけど私は、そのゲームの中でのチャット？文字でのチャットと、ジェスチャーが使えるのね。この自分のキャラクターというか、アバターに「笑う」とか「悲しむ」とか、そういうジェスチャーがあるから、それをすごいよく使ってるので感情がすごい伝わってくるし。「なんかとってもコミュニケーションしやすい人だったなあ」と思って、印象にとっても残ってて、でもなんか「フレンドリクエストしてずっと繋がっていたい」ってまでは思わなかったの、その時は。だから1日空いてて。丸1日。でも、そこから私がずっとそのゲームの中での会話とか「楽しかったなー」っていうのが残ってるから、「もう1回あわよくば一緒にゲームしたい」と思って、自分から一緒にプレイした人を探しに行って、その中で「あーこの人だったな」って見つけたから、勝手にフレンドリクエストを送って、でそれを…そうだなあ、そのフレンドリクエストしてから12~3時間ぐらい空いて、承認が来て、そこからなんか結構仲良く、一緒に二人だけで狩りに行ったりとか、手伝ってもらったりとか、新しい武器の使い方を教えてもらったりとか、そういうところから始まりました。

R (オンラインゲーム)

「ゲーム友達」がスタートっていうめちゃくちゃ現代っ子っぽい俺の恋愛観からしても10年前くらいだったらありえないかなって思うようなスタートだったんだけど。お互い当時やってた好きなゲームっていうのが『モンスターハンター』で（パートナー）はまだプレイの成長段階の状態にあって俺はもう全クリした後に救済を求めている人のヘルプに行くっていうのを楽しみでずっとやってて、何人か助けに行かせてもらった人の中の一人が（パートナー）で、自分のアカウント名で募集みたいになってるところに俺が入り込んで行って二人で目的のモンスターを倒しに行くのが最初。

今のゲームっていうのは発達していて、コントローラーで操作しながらほぼ同時にチャットっていう形でゲームの画面内で文字上のやりとり、LINE と同じようなやり取りっていうのができるようになって、そこから「初めまして」っていうところが始まったんだけど「一期一会」ぐらいな感覚でやってるそのゲームでの出会いで「楽しかったです。ありがとうございました、また会えたらいいですね」って言うとお別れして、1日経って（パートナー）の方から PlayStation®のアカウントっていうものにメッセージが届いて、ゲーム内での名前を見た時に「あれ昨日か一昨日だったかな？一緒にやった人だなあ」と思って文章を読んでみたら「良かったら友達登録をして、また一緒にゲームやってもらえませんか？」っていう風にメッセージを送ってきてくれたから、俺としても初めて一緒にゲーム内でやり取りして、言葉交わしたっていうその時間が楽しかったという印象があって当然拒否する理由もないので「是非また一緒にやりましょう」っていう返事をして。

『モンスターハンター』っていうあのゲームがそうさせてくれたなっていうのがあって。知らない人のところに突入して行って、楽しめますよっていうゲームの作りがされてて。そこで出会った顔も素性も知らない（パートナー）と知り合う事っていうのは出来たんだけど、（パートナー）が俺と初めてゲームをやったその瞬間から何を思ってくれたかわかんないけど、（パートナー）のアプローチが嬉しかったかな。俺もそれに応えるようにアプローチして行こうと思った。

S（合コン）

出会い自体は、（恋人）の会社の同僚が元々私の友達（以下友人）だったから。（友人）と私は中学校が一緒で、たまたま共通の友人の結婚式で（友人）と再会して「久しぶり」ってなって、ただその時（友人）達が、（恋人）達が「合コン強化月間」だったみたいで。っていうのもあって、幹事をそれぞれ回してて、多分「次（友人）の時期です」ってなった時に「ちょっと S ちゃん合コンせん？」みたいな感じになり、「いいよ」って言って開いた合コンが出会いですね、（恋人）との。

合コンで出会って、その時は普通に二次会とかもなく、一次会だけ何時間かお互い飲んでしゃべって。（中略）たまたま私の向かいにいた状態だったんだけど、特別二人でずっと気が合ってしゃべり合ってたわけでもなく、あくまでもその何人かで。だからすごくその人たちとわーわー喋りながら「楽しいな」ぐらいだったけど一次会で終わりました。その後もグループチャットかな、LINE が特に盛り上がるわけでもなく「ありがとう、楽しかった～。また飲もうね～」みたいな社交辞令だけで終わって。

私のその時の（恋人）の印象っていうのは「何か特別プラスがあったわけでもなく」って感じだったけど、嫌ではない感じ？嫌ではないというか、「楽しかったなー」っていう思い。

T（職場）

私の職場が金融業なので支店がいろんな所にあって、その支店が同じだったんですけど、私が配属された時に今の彼氏が「その支店に先輩としていた」みたいな感じで、それで最初出会ったみたいな感じですね。

「仕事ができそうだな」っていう印象が一番は大きかったですかね。

（相手の方から自分に対する第一印象をうかがった事ってありますか？）歳が6個離れてるんですよね。なので、最初は、何て言うんでしょう…自分も18だったから、「かわいいちょっと年下の女の子」じゃないですけど、その支店も女の子が入ってきたっていうのが割と久しぶりだったので、割とチャホヤされてたというか、多分そんな感じだったかなって言ってましたね。

（恋人は）仕事が、私の中ではすごいできるなって思ってた、単純に今もそうなんですけど、尊敬の気持ちがすごい強くて。「憧れ」みたいなそんな感じはありました。

U（大学）

一応同い年ではあるんやけど、自分が一浪して大学に入ったから学年で言うと一個上の先輩にあたるのが彼女だったんよね。で、経済学部しか入れんサークルに入ってた、そのサークルで同じだった。で、初めて出会ったのは先輩たち企画の飲み会で、その先輩も来て「綺麗な人だなあ」ぐらいで最初はすごい喋ったわけでもなく終わって、それ以降も飲み会でしかあんまり会わなくて

席も分かれてたから直接会話した記憶はないかな。

定期的に年に6回ぐらいかな？そのサークル全学年が集まって、うちのサークルってオープンキャンパス手伝ったりとかいろんな年に何回かイベントがあるんやけど、そのイベント後に絶対打ち上げみたいなものがあるんよね。その大きな打ち上げの時に初めてしゃべったかな。最初出会ってから多分1~2ヶ月ぐらいだと思う。で、大きな飲み会中に「すごい第一印象きれいでしたよ」みたいなのを話した記憶がある。

（相手は何ておっしゃってました？）シンプルに「嬉しい」みたいな。

V (アプリ)

彼氏が欲しいと思ってて、出会いもないし、友達に教えてもらったアプリに登録して、それで何人かちょっと会ってみたんよ。その中で出会った人。私もう期間限定で、例えば「1ヶ月」って決めて「出会い頑張ってちょっと色んな人に出てみて、難しかったらこのアプリで出会いは求めない」と思いよったっちゃけど、たまたまちょうど1ヶ月ぐらい何人かと会ってて、(今の恋人は)最後に会った人。

(私が利用したアプリは) ある程度の年齢とか職業とか、本当かどうかはわからないけど年収とかもざっくりとしたのが男性はお金払わんと、ちゃんとした身分登録がないとできないやつやったけん、それもあって「ちょっとは信用できるかな?」と思って、あと普段何して過ごしてるかとか共通の趣味みたいなのも検索ワードみたいなもの引っかかるやんか?そこに絞ったと。それまでね、結構合コン行ってみたりとか、友達に紹介を受けたりとかしたけど、ことごとく自分が求めている人とは違って、本当に何人それで切ってきたかいなっていうぐらい合わなかったけん、ご縁がなかったけん。もうそれやったら「数撃ち当たる」よりも「自分からの絞っていった方がいいやん?」と思って。そしたら「アプリもありかな」と思ってやってみたと。

(相手とマッチングしたきっかけは) アウトドアが好きっていうのとあとお酒が好き。外でご飯を食べたり飲んだりするのが好きっていう共通の趣味、そこが話のきっかけやったかな。

「いいね」ってきて、相手のプロフィールとか顔とかを見て、「この人だったら会ってもみてもいいかな」って思う人だけをとって「いいね」で返してた。

顔もね、そんなに不細工って感じではなかったし、年齢的にも同じ30代近いのもあるし、あとは趣味「アウトドアが好きです」とか「お酒よく飲みます」っていうのが引っかかったかな。

私は結構それまでは、誰かの紹介だったり、「誰かの知り合いの誰々の仲間」とかやったけん、なんかこう情報がそっちに「あの人ってどんな人なの?」みたいな聞けたけど、それが無いのは一個不安やったかな。でも条件絞って探せるのは断然こっちの方が手っ取り早いと思った。だって自分が求めている人、ある程度「これとこれとこれ」って絶対これは、一緒の共通の、私は「これとこれとこれ求めたいな」っていうことにある程度は三つのワードがあったとしたら、これには引っかかるとるわけやけん、まあ「効率はいいな」と思ったよね。

(相手の V に対する印象は?) 私その時の写真、髪の毛が短い時の写真で、彼なんかボブが好きらしくてね。割とショートヘアが好きらしくて「いいやん」と思ったって。あとはやっぱり年齢も向こうも求めている年齢だし。

他にもやっぱり (アプリ) してて、そこから彼氏ができてとか結婚したって人が結構いて「このツールもアリなのかな?」と思って。最初は反対派やったっちゃん。「ちょっと怖い」みたいなのが。昔で言ったら「出会い系サイトやん」と思って、ちょっとそれが怖いという印象が強かったんやけど、実際に使用してみたら全然むしろこういう (怖い) ことももしかしたら起こるのかもしれないけど、私はそういうこともなかったし「全然いいツールやん」って思えた。そこで彼氏ができたけんやろうけど。

W (合コン)

飲み会 (合コン) で知り合って、元々お互いの友達同士がいいなって思ってたみたいで、それきっかけで話してたんですけど、でもその飲み会の時に、彼から連絡先を聞かれました。(中略) その時お互いそんな「付き合いたい」とかはなかったんじゃないかなと思うんですけど、なかったのかな? お互い好印象だけど、付き合うとかまではお互い考えていなくて、唯一盛り上がったのが、彼がイタリア旅行から帰ってきていて、私がちょうどオランダ・ドイツ旅行から帰ってきていたので、そういう海外に興味があるっていうのもちょっとお互い合ってたのかなって思います。

もともと私 (その合コンに) 行く予定がなくて、友人がそれに参加していて、帰り送ってもらったので、それでたまたま合コンが終わってなくて参加したんですけど。

ヨーロッパ旅行の話と、あと、彼が結構周りをよく見てるタイプで、いろんな人と話してたんですね。それで、彼の友人が私の友人の事をいいと思ってるっていうのを聞いたので、その話をしてました。

(相手の第一印象は) 明るい。笑顔が良かったので「明るそうな人だなあ」とは思いました。「友達が多そう」とか。

(相手の W に対する第一印象は) 「ファンキーだなー」ってずっと言われてて。(中略) ちょっと普通じゃないって思ったみたいです。面白そうって思ったのかもしれないですね。でも今日それこそ聞いてたんですけど「第一印象はファンキーもあるけど、人の悪口を言わないとか、なんかそういうのが今考えても合ってたのかも」って言ってみました。お互いそういうことを言わないから、愚痴とか。

X (紹介/シェアハウス同居人)

私がシェアハウスに入居することになって、そのシェアハウスが船橋なので千葉県にあるんですけど(中略)埼玉県でずっと育ってきたので千葉県に全然馴染みがなくて、千葉県に住むことに決めたもののなんかちょっと不安になった時に、その当初務めていた会社の同期に千葉県の出身の子がいて、その子に「このシェアハウスに住むことになったんだ」という風に連絡をしたら、偶然その子の大学時代のゼミの友達もそこに住んでいるっていうのがわかって、「事前に聞きたいこととかあれば」というので連絡先を教えてもらって、その教えてもらった人が今の夫なんですけども。

(当時の)恋愛面については、特に相手もいなくて、当時29になる年だったんですけど、なので結構親も心配していて「早く結婚して欲しい」みたいな感じで。そういうのも実家にいると結構言われるので、それもちょっと嫌で「一人暮らししよう」と思って、っていう状況でしたね。

できれば30ぐらいまでに結婚をして、子供も早いうちに欲しいと思っていたのでそういう(恋人が欲しいという)気持ちはありましたね。

(連絡先を教えてもらった時の)夫のアイコンが多分山登りに行った時に撮った写真で、私も山登りが好きで友達とかともよく行っていて、なので「彼氏とか夫になる人がそういう同じ趣味とか持っていたら長く楽しんでいけるな」というので「山登りする人っていいな」と思っていたので、そのアイコンの写真を見て「山登りするんだな」とって好感を持ったっていうのはあります。

Y (アプリ)

(アプリを利用する)メリットは「時間短縮」。一気にいろんな人と連絡を取れるから自分の家にいる時間も活用できる。街コンとか合コンとか行くと、人数が限られてるから自分の好みの人が中にいなくてお金を払って無駄な時間を過ごすっていうことになるけど、マッチングアプリは最初から自分が「いいな」と思ってる相手としか会話をしなくていいっていう面ではいいと思う。デメリットに関しては(中略)見た目判断して中身や雰囲気を見ることができない。から、もしかしたら「ごめんなさい」としてた人の中にすごく相性がいい人がいるかもしれない。あとは、男性側も女性側も出会う人が多すぎるから選択肢が増えすぎて選ぶのが大変。ていうのと遊び目的の人もいっぱいいる。

(判断基準は) まずは写真の印象。どっちかって言ったら見た目を気にするタイプだから、私が。見た目が自分の中の許容範囲かどうか。で、(相手のプロフィール画面に) 飛んで行って文章の感じを見て「この人と一緒に過ごすことが想像できるかどうか」、「一緒に何かをされていて違和感がなさそうかどうか」…「楽しいかどうか」かな。楽しめるかどうか。例えば「ダーツが好きです」とかウェイウェイ系過ぎる感じだったら私は自分が違うから合わない。から、それはどんなに見た目がタイプでも「違うかな」って排除してたかな。

(恋人の) プロフィールを見たときは、「滑ってるのかな？面白い風に行こうとして滑ってるのかな？本気なのかなー？」っていう。「ちょっと残念なタイプなのかな？(笑)」っていう印象を受けたかな。

「動物が好き」というところと、あと「大学卒業してる」ってところ。あと年齢が同い年。そして本当かどうかわからないけれども年収が良かった。そこも目に付いたよね。で、「タバコ吸わなくてお酒が好き」という自分の求めている条件に合ってる人だった。

2. 自己開示・情報入手

P (紹介)

結構あっちの話の聞いていることが多かったですね、どっちかって言うと。「これ知ってる？」とか「これ面白いから見てみて」みたいな。(中略) 一番最初会った時の思い出話とか。「あんときこうだったよね」みたいな、話とかしたな。

(当初好きな人がいたことは) 伝えてましたね。その(当時付き合っていた) 彼の話もよくしてましたね。当時の彼の「こういうことがあって」みたいな。「こういう時って男の人どんな気持ちなんですか？」とか。そういう話をしてました。

Q (オンラインゲーム)

毎日すごい仲良くなっていたんだけど、なんかね、チャットをプレステ内ですごいできるの、なんかもう LINE みたいな感じで。アプリもあって、プレイステーションの。プレイステーションのアプリで打つから、LINE してるのとほぼほぼ変わらないというか。

ゲームの話から、それぞれの個人的な情報を話し出すようになって、「何歳なの」とか「他に趣味ないの」とかそういう一般的な話をしたんだと思う。で、その中で、(パートナー) は自分がどんな人かを伝えるために YouTube で「(パートナーの職業名)」って検索してって言ったから、検索したら、「そこに出てくるその白い服着た男が俺です」って言ったから「あーこれか」と思って。

R (オンラインゲーム)

「ゲーム友達」っていうのから始まって、ゲームの回数重ねてったら「ゲームをやる」という行為が、段々なんだろうな、二人で会話をするための入り口の手段でしかだんだんなくなってきて、ゲーム画面に二人がいるんだけど、モンスターを倒しに行くわけじゃなく、(画面上の) 旅に行く前の所でもう二人ただ棒立ちになって、文字のやり取りだけでずっと会話するみたいな時間とかも出来てきて。

ゲームと関係ない文字だけのやり取りをやってるところで、「普段は何してるんですか？」っていう。基本ゲーム友達の間では自分のことを自らしゃべるって事はほぼしない。顔も知らない相手に自分の素性を。ましてや自分の職業っていうのが特殊な職業だから、自分が簡単に身バレをするような環境にあると。

掘り下げて「私は普通の OL」とか教えてくれて、「何やってるんですか？」って。「まあなかなか言いにくいんだけど」って言って最初に言ったのが「YouTube 開いて『(自身の職業名)』で検索して」っていう、俺から伝えたことによってパンって開いてもらった瞬間にもう俺の顔面やら素性が全部 (パートナー) には伝わって。

まず文字で「(自分の職業名) なんだけど」っていうところからスタートしたら、まあ説明が必要だなって、一般の方には、OL には理解できない世界だと思ったから。というのがあって、あとね、(職業名) って自分がやってるこの、演奏・音・音楽っていうのをかっこいいんだよっていうのも知ってもらいたくて、もう演奏姿を見せるのが一番早いなと思って。で、その時ちょっと自分の中で自慢だった YouTube で「(職業名)」で検索すると自分の動画が一番上のトップに来るっていう状況がちょっと誇らしかったから、わかりやすさとかっこいい音楽とあとは自分の一番光ってる姿を見せられるのがその画だと思った。

S (合コン)

最初は家も近かったから、向こうも向こうで仕事終わりに「飲もうや、食べようや」っていうタイミングで「じゃ、あいつも呼ぶかみ」みたいな感じで呼んでくれてて。私も私で「行く行く〜」っていう感じですがすぐすっ飛んで行ってたから、ご飯の場によく行くようになったかな。で、だんだんいろんな (パートナーの職場) の人達との飲みに「変なやつおるよ」みたいな、「すぐ来るよ」みたいな感じで呼んでくれてて、その向こう、(パートナー) 側の人と仲良くなってもらって。

付き合っても何でもなかったけど、お互いの「どんな恋愛をしてきたか」とか「家庭今どんな感じなん」とかそういう話をした記憶があって。「変な人じゃないな」っていうのをそこで感じてたかなっていうのがあって。

仕事のこととかが、話とかが多かったかもしれない、向こうの。とか、職場の人の話とかそういう話が多かった気がする。あと向こうの過去の恋愛の話とか。今となっては「聞かんどけばよかった」って思うけど。元カノの話とか。

今までの生い立ちって言ったらおかしいけどそういう大学時代のこととか、「旅行行った」とか、「どこどこに行った」とかいう話を聞いてたかな。あと過去の友達、過去の友達っていうかこの時代になった友達とか女友だちの話とか割とそういう話が多かったかもしれない。

私が知らないこととかも色々教えてくれるし「いいな」って思ってたかもしれない。

恋愛の話をした時に「昔こんな人と付き合ったよー」とか。詳細には話してないけど、私4年間（パートナー）の前に彼氏とかいなかったから「タイプは何なの？」とか「4年間男の人とかとご飯行ったりとか、何もなかったことはないでしょう？」とか。「いやほぼないけど」と思いながら。なんだろうね、自分の話で言うと「4年間いないよー」とか「その前に付き合ってた人はこんな人だったよ」とか「ちゃんと付き合ったなって人が韓国人の人しかいなかったから、あんま日本人と付き合うこと大人になってわかんない」みたいな話をしてたかもしれない。

T（職場）

4月に入社したので、4月に初めて会ったみたいな感じで、それで、もう一人歳が近いとか割と近めな先輩が、男性の先輩がいたので、よく3人でご飯に連れてってもらったりとか、そういう機会が割と多くて、最初はその先輩も含めて3人でご飯に行った帰りかなんかに。

（3人の飲み場では）結構プライベートの話とかの方が多かったです。

バレンタインを最近あげたかとか、貰ったかとか、そういう軽い話はしたり、直近の彼女の話は具体的には聞いてなくて、他の会社の女性の方がポロって言ったみたいな。彼氏の前の彼女の話っていうか。本当に「どこどこに行ったって言った彼女は怎么样了と？」みたいな話を偶然しちゃって。「あ、そいつとそこ行ったんや」みたいな思ってたんですけど、前の彼女の話とかは私も相手も今でも全然しないですね。

U（大学）

一回だけ飲み会中にその「彼女とうまく行ってないんです」みたいな恋愛相談受けてもらった記憶はある。その時が一番初めてちゃんと話したかもね、二人で。

V（アプリ）

（マッチング後の最初のメッセージ）「自分もアウトドア好きなんです」って。私がそもそも自分の自己紹介欄に「休みの日は友達とドライブしたりとか最近外でバーベキューしたりとかアウトドアにもハマってます」みたいなことを書いとったら、「自分も好きなんです」みたいな感じで。元々学生時代のバイトで、スポーツのヒマラヤ？あそこってキャンプ用品とかも売ってるやんか？あそこで働いてたらしくて、キャンプのことにも詳しくって、最初はちょっとそれでひと盛り上がりしたかな。

好きなタイプとか、「どういう人がタイプですか」という話はしたかな。恋愛のことは、そんな感じで話したかな。

とにかく「マメやし、真面目な人なのかな？」と思った。まあやり取り上では真面目までは分からなかったかな。「とにかく会ってみないと」と思った。

うちらは多分長文派やったと思う。文章でちゃんと送ってた。

「もし彼女がいたらさ／彼氏がいたらさ」とか、「今までこういう男性と出会ってさ」とか。アプリで出会っとるけん、やっぱり「(アプリを通して)何人の人と会ったと？」とか「どういう人と会ったと？」とか、前に会った男性達とか、聞かれるやんか。で、私も気になるやんか。後はこう「今までどんな人と付き合ってたん？」とか、ちょっとそんな中で出会った面白い人の話とか。「こういう女性はないね」みたいな。「こういう男性はないね」とかいう話をした。

この人の恋愛観がよく見えてこなくて。結構いろんな話はするんだけど、深く突っ込んだところを行くと、なんかちょっと濁すじゃないけど、恥ずかしいんやろね、たぶんそういう、真面目な話をするのが苦手なんよね。でも今までの付き合ってきた彼女との付き合い方とかを聞きよったら、なんやろ、自分と似ているとは思わんけど「安心できる人なのかな」とは思ったかな。あんまり恋愛観とかはね、その時はねわかんなかった。だから、「この人私のことすんげー誘ってくるけど、どう思ってるの？」みたいな。「ただの飲み友達として思われるとかいいな私は」みたいな。「面白おかしくいろいろ話すけど、あんまり突っ込んだ話をしてこんよね」と思いよった、その時は。

W (合コン)

(LINE 交換後) 彼がサッカー好きだったので「中田選手が来るらしいよ」みたいな情報を言ったり、借りた本の話とかですね。あんまり覚えてないけど、あんまり途切れたりもしなかったですね。とにかく毎日してました、気軽に。

お互い言ってるんですけど、駆け引きがなかったから、こう(メッセージを)止めたりとか、それらしいこと言ったりとかそういうのがなかったから、気軽…それほどドキドキもせず、気楽だった感じがします、やり取りが。

(話の内容は) 友達のことで、そのとき本を買ったので、私は別にないけど向こうの好きな本の話とか。彼が多分一番話してたのは、彼がその時今の仕事は建築なんですけど、彼もその時は違う仕事をしていて、輸入家具の販売をしてたんですね。で、買い付けに行く予定だから、英語を勉強してるって言ってて、私がちょっと英語分かるので、英語の勉強の話とか、海外の話が一番多かったかなって思います。

X (紹介/シェアハウス同居人)

本当に千葉県のことというか、わからなかったので、「家の近くに電気屋があるのか」とかあとは総武線快速が船橋って通っているところなんですけど、その電車はすごい混むって聞いていたので「本当に混むんですか？」とか、シェアハウスのこととか聞いていたのかな。本当にそういうわりと実務的なことを聞いて。

(シェアハウス入居後も) なかなか時間帯が合わなくて会ったことはなかったんですけど、一回私がラウンジっていうみんなが集まるスペースみたいなところでご飯食べてる時に違う住人の人と夫の話をしてた時に「まだ実は会ったことないんです」っていうふうに言ったら、その人が夫のことを呼んでくれて、そこで初めて会って、ここでは多分 30 分ぐらい話して終わったんですけど。

入居する前からちょっと連絡を取って色々教えてもらっていて、ちょうどその連絡を取っていた時に夫がシェアハウスの人たちと 10 月ぐらいに登山に行こうっていう計画を立てていて、まだ会ったことない段階ではあったんですけど、私も山登りとか好きだったので、ていう話をしたら「日程が合えば一緒に行きますか？」って誘ってくれて、日程も空いていたので一緒に行くことにして、その山登りが 10 月の頭ぐらいだったんですけど。

Y (アプリ)

他のアプリで人と会話する時の会話は当たり障りない会話なんだけど、その人との会話だけはちょっと深い会話になっていった。なんだろう、「好きな食べ物は何ですか？」とかではなく、もっとなんか「じゃああの食べ物は好き？」、「この食べ物は嫌い？」とか。具体的な話がいろいろ出てきた、かな？だから会話が弾んだ。っていうのはあるかな。

文章の感じから「すごく丁寧な感じだな」って思った。ずっと敬語だった。

まずは「動物好きですか？」から「好きな食べ物何ですか？」から相手が私の事をちょいちょい褒めてくれてて、次に年齢の話をして、その後に仕事の話をして、その後に私が「頻繁に電話したり会いたい派なんですか？」っていう質問を投げかけてるね。それに対して相手が答えて「お互いのリズムに合わせていけたらって思います」っていう感じ。そういう「すり合わせ」じゃないけど「私はこういうタイプです。あなたはどのような人ですか？」っていう話をして、その後に会話の中から「細かいところまで気づきそうですね」とかそういう相手の性格をね、「あなたはこうこうこんな感じに思います」っていうのをお互い述べたりして。

一通一通が基本的に長くて。その 1 通の中で深い話をどんどん繰り広げられていくっていう。ちゃんと会話ができている感じ。ちゃんとしたキャッチボール。

「話しやすいな」って。

なんか私もなんかこんな残念な部分あったりするから「私も自分と似た人会ったことないけど、ちょっと似てる感じでした。」っていう風な答えはしたかな。で、そこから、なんか「可愛い」とかそういうことをよく言うので、なんだろうな…。

3. コミュニケーションチャネルの拡張

P (紹介)

本当に次の日連絡が来て。「昨日はありがとう」みたいな。「ご飯いつ行く？」みたいな連絡をしてきてくれて。私もまさか来るとは思ってなかったからびっくりして

Q (オンラインゲーム)

モンハン (『モンスターハンター』) で集合するけど、4~5時間自分たちの話だけするっていう。モンスター狩りに行くのはそのうち2回ぐらい。なんかね、もうその時点でボイスチャットしてるね。文字だけじゃなくて、相手の声を聞く。電話?長電話4~5時間ぐらいの長電話を毎日していて、もうその時点で結構お互いに意識してるんだと思うんだけど、でもやっぱり東京にいる人だし、で私は福岡にいたから、「どうなるかなー?」って思っていたけど

桜の話になって。「お花見行きたいな」みたいな。で、「そういえば東京だと目黒川とかすごい綺麗だよな」という話をしたら、私が多分「一緒に行きたいな」とか言って、で、「良かったら今度福岡行くわ。行くけど会える?」みたいな感じで聞いてくれたから、わざわざ福岡来てくれて、(中略)物凄いスピード感で発展して、4月17日会ってその日に付き合うっていう感じでした。期間はめちゃくちゃ短い多分。

「ビデオ通話じゃ足りないな」という気持ちだな。まあ実際に会って、デートしたりしたい。でやっぱり直接会ってどんな風なのかも見たいし、一番の理由…やっぱりもう気持ちが高まっているよね、その時ですでに。

R (オンラインゲーム)

次の段階で「ボイスチャットってやったことありますか?」って言われたのかな。文字上での会話だけのところから今度は(パートナー)がボイスチャットのこと教えてくれて、「あー、やったことない」とって。「これこれこうしたらできるんですよ」とって本当に、コントローラーにイヤホン挿すだけでできるってすごい簡単なやり方だったから。そしたらえっと(パートナー)の声を初めて聞くことになって、「そんな声してるんだ」とって。

(パートナー)の中での距離感が、俺という人物像が見えたと思うから、その時点でぐんと縮まったことによって「次ボイスチャットしませんか」とって「声を聞いてみる」という段階にステップアップしてくれようとしたんだと思うんだけど。で、声を聞いてみたらなんか「可愛い声してるな」とって印象を受けて。

その日のゲーム終わりの「じゃあまた明日、バイバーイ」っていう直前に（中略）（パートナー）の方から「明日からは LINE でやり取りしませんか？」っていう風に言ってくれて、LINE のアカウントを教えてくれたから「ぜひぜひ」っていう形で俺も返事して

（パートナー）がゲームと関係ないところでこれからちょっと出かけてこようと思うって時に、テレビ電話を急につないでくれて。「動いてる（パートナー）ちゃん初めて見たね」みたいなのもあったと思うよ。「行ってらっしゃい」とか言って、電話つないで（パートナー）は出かけて、外に行っ。ゲーム関係ない外に行ってるという。

LINE が繋がってから多分、そこからほぼ毎日夜寝る前に電話をするっていうのが。そこから多分、遠距離期間中はほぼ毎日。俺が仕事でなんか海外に行っとかしない限り時は。ていう習慣が始まったのかな。で、LINE で繋がってテレビ電話を始めて。

確か桜の写真を撮って「桜もうきれいに咲いてたわ」っていうの送ったら（パートナー）が（中略）「目黒川の桜とか一緒に見に行っみたいなの」って。「一緒に見に行っみたいなの」っていうのもワードが送ってきてくれたら「あ、これ、会いに、会ったりして大丈夫な、次の段階（行っ）いいな」と思っ（中略）次の返事で俺が「じゃあもし嫌じゃなかったら、俺福岡に行くから会に行っいい？直接」っていうのをその返事でしたのかな。

「一緒に何々したい」とか「直接会っ何々したい」っていう思いを文字で乗っけてきてくれたからそれに対して俺は今すぐ、その時点で1か月弱ぐらいずーっと毎日やり取りしてることから、俺の気持ちとしても「オンライン上の友達」じゃなくて、実際に会っっていう、もう「現実世界の（パートナー）ちゃんと友達になりたい」って俺は思ったから、「会に行っいいか」っていうお願いしたら、「OK、嬉しい」って返事くれたから、そこから多分1ヶ月後に福岡に行くっっていうことを期日としては決めるんだけど。

（会いたい気持ちは）あった。だけど、「断られたら嫌だ」っていう。そこは「勝ち戦で行かなきゃ」と思っってたから、（パートナー）からはっきりと「会いたい」っていう思が見えた瞬間に、鉄は熱いうちにじゃないけど、「今だ！」と思っ。「今なら言える！」と思っ「会に行っいい？」って。「会いたい」という思はもっと前からあったね。

福岡に実際に行ったら想像してたよりも小さい子が空港にいて。で、太宰府天満宮っっていうのが（パートナー）が連れてってくれた俺らの最初のデートの場所になったんだけど。雨の中二人で傘さして。

S (合コン)

(LINE) むっちゃしてた！してんじゃんって感じだよね。何話しよったんかな。それこそ、ほぼ毎日ぐらいしてて。ほぼ毎日ぐらいしてただけど向こうが LINE よりかは電話で話すのか好きなタイプなのかな。わーって話したいことがある時に長文貼って打つんじゃなくて「えーもう電話！」みたいなタイプの人だから結構電話でずっとやり取りすることもあって、その時にも会社の評価の「気に入らんわー」みたいなことしてたかな。ほぼ、毎日。それこそさっき言った 2 月か 3 月ぐらいに飲むようになってからは、「何時、(お店の名前)」みたいな。「(お店の名前) におるけん来る？」みたいなそういう意味やん。

写真だけぼんってきたり送ってきたりとかもしてて。そういうので、「あ、すごいね」ってそういう話をしたりとか。で、「じゃあどこどこ行く？」っていう話を LINE でしたりとかもしてたし、割とずっと 1 日必ず送ってたかな。付き合う前の方が楽しく LINE はしてたけどね。付き合う前の一番楽しい時期ぐらい。

T (職場)

考えずにお礼の連絡をしたのが個人的に連絡を取り始めるきっかけみたいな感じになって、そこから、電話を向こうがかけてきてくれて、話すようになってみたいな感じでした。

その日がすごい台風の日で、それもあつたので車に乗せてもらってたんですよ、彼氏の車に (中略)。それもあって「申し訳なかったな」と思って (中略) いつもよりちょっと内容がちょっと違って、自分が送った内容も (中略) 何もなければ次の日も会うし、別に私も続けたかったから連絡したわけでも正直なかったの、お礼だけ伝えようと思ってたんですけど、その返事が、また返事をしないといけないような連絡っていうか LINE だったので、私も後輩だったし自分が無視するのもいけないなと思って、でもそれがすごい夜中だったんですよ、返ってきたのが。その時私寝てて、次の日の朝にそれ気づいて、でも「仕事行く前に送っとかないと何か気まずくなるな」と思って朝起きてすぐ送ったら、帰った後にまたその返事が返ってきたんですよ。

それでなんか割と続くようにというか仕事以外でも連絡とか取るようになったみたいな感じですかね。

(LINE) し始めては、付き合うまでは、ほぼ毎日ぐらいしてたと思います。

朝するときはそのまま続いててして、仕事中は全くしなくて、終わったら連絡してるような状態でしたね。

結構電話は、お互いがお風呂とかご飯とか夜にすること全部済ませて、結構 11 時とか 12 時ぐらいからすることが多かったの。3 時間ぐらいは多分してたと思います。夜中の 3 時ぐらいに寝てたような気がします。

電話は毎日ぐらいしてたんじゃないですかね、多分。

私の携わってくれてた直属の女性の先輩が結構割と厳しめであってというのがあったので、それを気にかけてくれてたりとか。まあ後はその仕事の話、重たいってというか、具体的な内容とかはまったく話してはなくて、別にプライベートの話とか、たわいもない感じでしたね。

今でも忘れないのが、(毎日の電話が) 当たり前になってたけど私の中では当たり前じゃないってというか、いつ終わるかわかんないぐらいの気持ちだったので、なんか向こうが「え、今日はせんでいいと？」みたいな感じて、来たような記憶はあります。

なんか、私が同級生としか付き合ったことがそれまでなくて、年上の印象ってやっぱり全然なんかすごい上な感じのイメージがあったんですけど、話すと案外子供っぽかったりってというか、憧れの気持ちが強すぎて最初は、なんか「全てが完璧」ってというか、そんなイメージがやっぱりあったんですけど、なんかそうじゃなくて平気で面白いこと言ってきたりとか、なんか普通に接してくれた時ってというか、なんかその時に仕事とは違う、で、仕事に行った時にまたピシッとしてるから、そのオンオフが見れるような感じがして。

U (大学)

(複数人で遊んだ時に) 初めて連絡先を聞いたんよね。当時はメール。メールやったね、確か。LINE もなかったし。で、その遊びに行った後かな? 「今日はありがとうございました」みたいな連絡を先輩にして、「今度二人で遊びに行きませんか?」みたいな誘い方をしたかな。

「遊び行きましょう」って言ったら、「誰誘う?」って言われて、「いやいや、二人がいいです」みたいな。向こうはまさかそんな気が俺にあるとは思ってなかったみたいで、「びっくりしたけど嫌じゃなかったから行った」とは言ってた、最初は。

V (アプリ)

私は初めてそういうの(アプリ)使うし、ちょっと警戒はしとって、結構長いこと多分そのアプリの中でやり取りをしたんやけど、なんか途中で向こうから「LINE を教えてくれ」と言われて、(進展したのは)その辺からやないかな、多分? 「LINE 教えてくれ」と言われて。でも私ちょっと教えるの嫌で。抵抗があって、「ちょっとまだ会ったこともないし、LINE ID を教えるのにはちょっと抵抗があります」って言ったんよね、相手に。

「そうですね」ってなって「じゃあもうちょっとこのメッセージの中でやり取り続けましょう」って言って、またいろんな会話をして、「今度会いましょう」っていう約束ができたんよね。約束までできたし、具体的なお店も決まったし。「何が好きですか?」って言われて、確か「鶏の唐揚げです」って言ったら、鶏の唐揚げがあるお店をぶわーってピックアップしてくれて、すごい真面目なね、「ちゃんとマメな人やな」と思って「まあ LINE ID は教えましょう」ということで教えた。多分そこから一歩進んだんやないかな?

「そろそろ LINE に移行してもいい?」って言われて、「じゃあそろそろ教えます」ってなったのがもうご飯食べに行く何日か前の話やったけん、そんななんか日常的に LINE はしてないけど、あとは具体的なじゃあ「どこに待ち合わせしましょうか」とかそういう話。

X (紹介/シェアハウス同居人)

見た目が全然想像はできていなかったのだから「思っていたより背が高いな」とかそういうのはあったんですけど、後はまあ話している中で、やっぱり共通の友達もいるし、埼玉出身っていうので共通の話題もあったので、「話しやすいな」というのは思いましたね。

Y (アプリ)

連絡先を交換するのは他の人と比べたらちょっとゆっくりなタイミングだったと思う。それも向こうがおかしい感じで「今気になる人はいます」みたいな。「でも、連絡先を聞けないです。聞くのが怖いです」みたいな。「どう思いますか?」みたいな第三者風な感じで言ってきて。「これはどうしたらいいんだろうな」と思ったけど、私もとりあえず気づかないふりして「聞くぐらいいいじゃないですか? さっと聞いちゃったらいいいんじゃないですか?」みたいな感じで、アドバイスに答えるような感じで言ってって。

そしたら向こうが「連絡を取れなくなるのが怖いです！連絡先教えてください！」みたいな感じで来て。「これもうやばいやつやん」って最初思った、印象としては。「ちょっとこれ大丈夫な人かな？どっちかな、大丈夫かな？」みたいな。

(LINEに移行した後) まず「Yです」というのを言ったら、「私は今太ってる」って話をしたから、「あ、あの、今はコロコロで心はピュアで子供のように可愛らしくて笑顔の素敵な Y さんですか？」ってきて。「わーすごい大当たりです。(恋人) 君っていつもそんな感じですか？」って聞いたのが最初のやりとりだね。

(会う前に)「もしよかったら今度一度電話で話しておきませんか？その方が緊張和らぎそうなので」って向こうから来て、で、そこで電話したのが(5月)30日。

「話しやすいな」と思った。3時間半してるね、電話。

「じゃあ電話します？」みたいな感じでまた電話してるね、2時間ほど。そこら辺から向こうが(LINE上で)ちょっと敬語が多少取れたり、敬語混じりつつっていう感じになってる。

4. 個人間（二人だけ）の交流

P（紹介）

最初2回ぐらいは、あの、その友達と3人で、ご飯行って、なんかカラオケ行ってみたいな感じで、会ったんですけど。そっからなんだろう、2回目会った時に、最初はお昼ご飯食べて解散する予定だったんですけど、なんか、私とそのショッピングをする予定があって、その後。で、「今から買い物する予定があるんですよ」みたいないう話をしたら、「俺もちょっと買いたいものがあるから一緒に行こうかな」みたいな感じで、博多駅でなんか一緒にプラプラすることになったんですよ。で、そこで、なんか結構気が合ったというか、お話が面白い人で。私結構人見知りタイプで、あんまり自分から話題提供できないタイプの人間なんです。けどあっちは結構こう、話してくれるタイプの人で、私もその楽しくて、会話がすごい弾んで、で結局その日、夜、夜ご飯まで食べたのかな？夜ご飯まで食べて帰ることになったんですよ、お酒ありの。

あっちの仕事がシフト制だったから、私のその6時定時でだいたい7時8時ぐらいに終わる日は大体空けてくれてて、なんか「今日はこことこ気になるから行ってみたい」みたいなお店情報がすごいいっぱい来るんですよ。「こことこ気になるけどどこがいい？」みたいな。みたいな感じで、なんか、そんな感じで週に2回3回行くようになりましたね。

再会してから、1ヶ月ぐらいだったから。付き合うまでが。だったから、でもその間にすごい会ってましたね。ひどい時は週5とか。ちょっとう、ご飯食べて帰るっていう日もあれば、ちょっと二軒行って帰るっていう時もある。なんかその当時、彼が（彼の職場の）店長だったから、自分でシフト作ってたんですよ。なんか、今考えると今の状況でそういうことありえないから、なんか空けてくれてたのかな？って。気のせいだと思うんですけど。ていうぐらいすごい今じゃありえないぐらい時間合ってたね。合わせてくれてたのかな？

S（合コン）

とりあえず最初はグループで楽しく交際してたけど、徐々に二人で「あれ行く？これ行く？」っていうのになって、二人で遊びに行くようになり。

初めて二人で遊びに行って、普通にご飯食べて、結構「次何々しよう」みたいな感じで「いついつ何々しよう」というのをその場その場で結構（恋人）が提案してくれて

ワールドカップかな？サッカーがあつて、試合が深夜だったんだよ多分1時とか11時からとかかな？「観ようよ！」ってなって、正直私もそんなに熱狂的なサッカーファンでもなく深夜遅くまで起きてまで観るようなファンとかでもないけど、「一緒に観たいな」っていうのが多分ありまして、「サッカー観よう」ってなって、「いいよじゃあうちで観よう」って（恋人）が言ってくれて。

実家からメロンを多分（恋人）が貰って、「メロンを食べたい」って言って、でも「（恋人）の家に包丁が無い」ってなって、「私切るよ」みたいなの。なんかサッカーとかメロンとか何かと理由をつけて（恋人）のそこ（家）に行ってた気がするんだよ。

決勝リーグに行けて、でもそれこそ1時とか2時とか、しかも平日で。私は運よく仕事が休みで、「だけど平日だしなー」って思ったけど、とりあえず「決勝リーグ行ったね〜」ってなって、「でも深夜何時からだよ、平日だしどうする？」ってなったら向こうもなんか「余裕」みたいな。

（宿泊後）「おはよう〜」みたいな感じになって、向こうは仕事の準備をして、私休みだったから「鍵だけ家出る時ポストに入れて行ってね」って。「出る時はそうやってね、いつでもいいよ」みたいな感じで言ってくれてたんだよ。

T（職場）

なんか電話してる時に「花火しよう」みたいな感じに、話的にこう誘ってもらって、それに「二人で行こう」ってなって、二人で行ったのが、それが付き合った日にはなるんですけど、そんな感じで二人で花火したのが初めて二人で遊びに行った時ですかね。

（花火）三人で行くのか、二人で行くのかって思って。でも私はその時もう「二人で行きたいな」って思ってたんですよ。思ってたけど、「ここでは言えない」と思って、「どうしよう」と思って、こっちから投げかけたんですよ。「三人で行くんだったらもう一人のその先輩を誘っときましょうか？」みたいな感じで私がそれを振ってって感じだったような気がします。「二人で行きたい」って言ってくれて、みたいな。

U（大学）

「ご飯食べに行きましょう」って言って「僕店決めるんで」っていう話までしたら、「『悪の教典』っていう映画が見たい」って言われて、「じゃあ一緒に見ましょう」っていう話で最初は映画を見てご飯を食べたかな。

映画見てご飯食べた後に「ドライブしましょう」って俺が言って、そこで話がもう超弾んで、本当にやけん4〜5時間、朝方までずーっと無駄にドライブしてた。

「どこどこまで行こう」っていうのが結構遠い場所で。でもメインはドライブだった。別に目的地に行きたかったからとかわけではなく。

ずっと敬語だったし。向こうはどうやったやろね？でも先輩後輩かも、やっぱり。

大学のそれこそ別の友達の話とかもそうだし、学生時代の話もしたと思う、お互いの。後は趣味とか、好きな音楽とか、もう本当に初めて会った人と話（を）するような内容かな。

「先日はありがとうございました」みたいなまたメールを送って、せっかちやけんさ、すぐ「また遊びたいです」って言って次の日にちを決めた気がする。

2回目はめちゃくちゃ星が綺麗な場所があって、そこに行きたいって俺の彼女が言ったからそこに行ったね。

2回目はね、本当にほぼドライブやったんよね。また車の中で…でもその時にちょっと探り入れたというか、「今彼氏ほしいと思ってるんですか？」とかそういう質問をした気がする。恋愛の話をしたね、2回目は1回目の時より。ごめん全然覚えてないけど、その時もひたすら遠かったけん、星が見えるすごい田舎の山なんやけど。やけん、ずっと車で話して、景色見て、帰りにちょっとソフトクリーム屋かなんか夜中中空いてる所寄って、帰ったかな。でもなんかその「先輩後輩感」をなくすために頑張ってた気がする、自分が。

V (アプリ)

会って初めて「やっぱこの人関西人なんや」っていうのがわかった。喋りで。「初めまして」から。なんか向こう緊張すると結構バーってしゃべるタイプの人で。緊張を自分でごまかすためにやたら喋る人で、その日もちょっと緊張しとったのか、今思ったらね。「よう喋りよったな、あの日は」って思うけん。(中略) こっちはそれにちょっとびっくりして。LINE の中ではそんなにこの人がこんなにおしゃべりなもの、めちゃくちゃ関西弁なもの(中略) 気づかんやったけど、やっぱり喋ると関西弁やし圧倒されたね。「おー」ってなった。

「初めまして」から1時間ぐらいは「この人ほんと関西人って感じ、ちょっとこう苦手かも」みたいな。「よく喋るし」って思いよったけど、その日のご飯中の「2軒目に行きましょう」ってなったんよね。お互い結構飲んで、お酒も入って楽しくなって。

「2軒目に行こう」ってなって、なんかその時には「まだちょっと性格はよくわからんけど、でもやっぱ面白いかも」ってなって、割と。

次の日二人とも休みで（中略）「じゃあそれやったら明日昼間何かしません？」みたいな感じになって、「いいですよ」ってなって、結構夜遅くまで飲んでたから、一旦お互い帰って寝て、夕方ぐらいかな？次の日よ、集合して、映画を観に行ったんよ。で、その日は映画観て、お酒とか飲まずご飯だけ食べて、早めに解散ってなって、その一週間後ぐらいに、また土日のどっちかで向こうが「良かったらカフェにでも、お茶飲みに行かん？」みたいな感じ、昼間に。「気候もいいし」みたいになって「いいですよ」ってなって。向こうからほぼ全部誘われたっちゃけど。3回目会ったのが、カフェ。（中略）喋りながらお茶飲んで、夜ご飯前ぐらいに解散して。その頃にはお互い打ち解け合っって、「じゃあ次何する？どこ行く？」みたいな感じになっって。で、そうね、初めてご飯行った時に、お互い緊張もしたし、もうちょっとこっぴどく、「私おっさんが行くような大衆居酒屋が意外と好き」って話をしとったら、「じゃあゴリゴリおっさんが行くようなところに行ってみようか」ってなって、向こうはね、いいおっさんやけんさ、知っとるんよ、そういうとこ。

（映画行ったときは）「お酒入ってない時の彼ってどんななんやろう？」と思って、「それを見る良い機会にもなるかもしれん」とはふと思ったけん、そう考えたら居心地は別によかったんよね。リードもしてくれるし、それこそチケット買って待っってくれて、とかさ。普通のことなのかもしれんけど、なんかそういうのをさらっとしてくれたから、その時はね、「優しい人なんやな」って思った。

W（合コン）

連絡先交換したのでLINEはしてたんですけど、結構早いうちに1回会いました。夕ご飯を食べに行き、その時に本屋に行き、おすすめの本を借りたのかな？買ったのか借りたのかしたんですね、彼の。その2巻3巻を貸してくれたりするのが、それで3回会いましたね。

（最初は）待ち合わせがカフェに行き本屋行き沖縄料理ですね。

明るいのか話しやすいのは変わらずでしたね。で、ニット帽を（合コンで）会った時つけて、その（二人で出かけた）時初めて外したところを見てロン毛だったんですね。その時に「おお」って思いました。「あ、おしゃれ好きなんだなー」って。洋服が好きって話もしてたので。「好きなんだなー」って思いました。でもそれほど出会った時から印象はそんな変化はないかもしれないです。ロン毛にびっくりしたぐらいで。

X (紹介/シェアハウス同居人)

一回「じゃあ二人で山登りまた別の場所に行こう」という話になって別のところに行って、多分その流れでまた後日ショッピングモールの所行ったりとか、ちょうど紅葉の季節だったので紅葉を見に行ったりして。

二人で話していてもなかなかリズムが合わなかったり話があまり続かない人っていうのも結構いると思うんですけど、初めて会った時は初対面だったっていうのもあったし、緊張して割と初対面の人と話す感じであんまりリラックスして話していたわけではなかったんですけど、バスとかで話していた時は割と普通にこう話せて、話もちゃんと続いて、「あんまり無理しなくても話せる感じだな」、「話しやすい感じだな」というのは思いましたね。

登山にみんなで行った帰り話した後、自分としては印象が良かったので、「またどこか二人でも行きたいな」と思っていたので、すごい楽しみでした。

(二人で登山に行ったときは) 話す時間も、結構日光ぐらいまで行ったので移動とかも長かったんですけど、特段気まずいと思うこともなく、「やっぱり相性いいのかな」というふうに感じました。

話している中で、夫が仲良くしている友達が、特に仲良い子達が二人ぐらいいて、二人とも結婚をして奥さんがいて、なので「結婚して奥さんがいるとなかなか誘えづらかったりとかするんだけど、奥さんとも仲良くすることで誘いやすくしている」みたいな話をしている、具体的には奥さんにちょっとしたプレゼントじゃないですけど、どっか行ったらお土産を買っていくとかそういうことをしたみたいで、その奥さんにあげるものを「今度一緒に選んでもらえる？」みたいな感じで、当日その話が出て、具体的な日程はまた後日決めたんですけど、そういう話は当日に出てましたね。

Y (アプリ)

連絡先を交換しまして、「会いましょう」となって、1回目ちょっとコロナ禍の中、外出をいたしまして。一応個室でね、周りが人がいないような感じのところでご飯を食べて、二軒目行ってその日は…何したかな？ダーツ行ったかな？向こうがダーツ好きだから、ダーツに行って、で解散。

(会った時の印象は)「え、身長ちっちゃーい。太ーい。誰だ？」って感じ。(笑い)

(写真とイメージが違って) ちょっとテンション下がった。でもご飯を食べてて、ご飯食べてる時の気遣いがすごくあったのが感じられたかな。

例えば「お寿司食べたいって言ってたよね」って言われて「お寿司にしたんだ」って言われて、お寿司だったプラス、「お肉もあるよ」って、「お肉も食べる？」ってお肉とか食べさせてくれたりとか。あと会話の中で「とびっこめっちゃ好きでさ、とびっこ絶対食べるんよね」とか言ったら「とびっこありますか？」って店員に聞いてくれて、とびっこも頼んでくれたりとか。そういう臨機応変な対応？かな。

見た目はだめ、だめって言うかあれだけど、「性格的にはとってもいいな」と思った。

(二軒目) 多分向こうが誘いたそうにしてるけどなかなか誘えないから「じゃあ私が」って「え、じゃあ次行く？」みたいな感じで、全部、全部なんか、なんだろうな、全部…。

誘導だね。メンツをつぶさない程度に誘導した。

(長い時間一緒にいても) 苦じゃなかったね、楽しかった。

まだなんか見た目がやっぱちょっと違ったから「付き合えるかな？この人と」みたいなさういう。「一応そういう対象として考えるけど、どうなんだろう？」っていう感じだった。

主に飲みに行ったりが多かったけど、一回水族館行ったかな。水族館行く、後はもう私が行きたいお店に連れてってもらおう。

5. 救済行動

S (合コン)

会社の人の結婚式があるってなって、会社の人たちからの余興って意味で動画を作っ
て欲しいってことになって (中略) 編集ソフトがなかったから (中略) 私が (恋人) に
そこまで二人で親密になる前だったかな? お願いしたんだよ、(恋人) に。「会社の人
の余興でちょっと動画作んなきゃいけなくなったんだけどごめんちょっと手伝ってく
れたら嬉しいな」とかいうので。そこに快諾してくれて。

最後の最後らへんまで名前を打ち終わった時にパソコンの電源が消えてしまってデー
タが全部パツとなってしまって「きゃー」ってなってその時に、私がもうチーンって
なってたら「じゃあおれがやるから、大丈夫だから」みたいな感じでやってくれたん
だよ。

今思えば私がふんすかふんすか言ってたのが面倒くさくて「俺がやったほうが早
い」って思って言ったのかもしれないけど、とりあえずそれが私は「自分関係ない作
品なのに人のためにこんなに、家も開けてくれて、夜まで付き合ってくれて、こんな
ミスしたら『じゃあ僕がやるよ』みたいな言ってくれて、人のためにすごいやってく
れる人やなー」って思ったんだよ、その時に。

6. 好意表明

P (紹介)

(相手が) 結構好意を持ってきてくれるのかなっていうのは、結構序盤で、なんかストレートな人で、思ったことを口にするタイプの人なんですよ、包み隠さず。というか、なんか溢れ出てる…溢れ出てるっていう言い方も変だけど。態度とか行動とかに出るタイプの人。ただ、その、私も一応彼氏がいるっていう状況だったから、ちょっと罪悪感を持ちつつも、食事が楽しくて、その飲みに誘ってくれてたから、行ってたんですよ。

「あんまり自分の周りにお酒を結構飲める人がいないからすごい楽しい」って言ってくれたり、「Pちゃんは意外とこう打ち解けてきたら話すし、聞いてもくれるし、なんかよく食べるしよく飲むし」みたいな。なんか「もう見てて楽しい」みたいな。結構もう言葉で伝えてくれる人だったんです。それが私は好意を持ってきてくれるんだなって勘違いしてただけかもしれないけど、結構ストレートにこう言ってくれてた。

Q (オンラインゲーム)

好意を示すようなこと？私がすごい出してた。私からが多くて、もうなんか、「好きと言いたい」…「好きと言いたいなあ」みたいなことを言っていた気がする。めっちゃ体に触ろうとするし私が、その会った時に。(中略)できるだけ、「伝えたい」っていうのが私の方で。

R (オンラインゲーム)

(相手の好意は) 感じ取れたね。結構熱かったんじゃないかな。熱烈なものを頂いてた気がする。実際会ってみても、本人見ても、感情を隠せない子なので、文字にも現れてるっていうのが、そのなんかストレートさが惹かれていったすごく大きいポイントでもあるんだけどね。「計算してないな」みたいな感じ。

ワンステップワンステップ進展させてくれる (パートナー) のその姿は見てないけど、(中略)「ものすごく僕に好意を抱いてくれてるな」というそこまで感じ取れるぐらい何か温かいものを、ものすごい文字から始まり、そのラリーやら何やら感じてたから、それを繰り返すうちに「あ、この子には自分のことをオブラートにも何も包まず話せるな」という距離感になっていって。

T (職場)

お互いの印象の話っていうか、第一印象とかではなくて、こうなんか「どういうところがいいと思うか」っていうのはちょっと重たいんですけど、良いというか、そういう話をしたような気がします。それで私は何か言って、そこから急激に進んだような気がします。

U (大学)

最初誘って「他誰か呼ぶ？」って言われた時に「2人で」って言った時点でちょっとほめかしてる。

V (アプリ)

(それまで何人か他の人とも会って、今回今付き合っている人と会って、他の会った人との違いっていうなにかあった?) 不器用ながらも向こうからアプローチしてくれたことかな? 多分彼なりの、「会う機会を増やす」ってことが彼なりのアプローチの方法だったんだろうと今となっては思うけど。あんまりこう直接口説いてくるようなタイプの人じゃないけど、そこを積極的にしてくれた彼と、他の人は、そこまで会う頻度が、会うスパンが短かったっていうのが多分大きいと思うんよね。その後もう 2 週間とか 3 週間おきに急に連絡がポーンポーンとくる人もおったんやけど、やっぱ会っても、その 2~3 週間の間にアプリをしよるけんさ、いろんな人とやり取りが生まれとるけんさ、薄れちゃうんよ。だけんなんか印象を薄れさせんために会うスパンが短かったのは大きかったと思う。

W (合コン)

大体 2 回 3 回会って、2 回目の時にちょっと告白っぽいことをされて、それで「返事を聞かせてね」って言われたまま 3 回目に会いました。1・2 回目は夕ご飯を食べに行ったぐらいかな? 食べに行ってる、で、3 回目は酒蔵開きっていうので午前中から夜ご飯まで一緒にいて、その時に付き合うことになりました。3 回目の時に。

X (紹介/シェアハウス同居人)

夫は割と好き嫌いがはっきりしていて、なので、登山の帰りに話した二人で話した時から結構楽しそうな顔をしていて、なのでその時から割と「好意的に見てもらえているのかな?」っていうのはありましたね、その時から。

Y (アプリ)

「話しているとすごく気を遣える人なんだなって思います」とか言ってくれたりとかして、向こうが。で、こっちも「私もあなたは聞き上手だなと思いました」とっていうようなことを返して、そんな感じかな。「私と話しているとなんかすごく落ち着きます」とって言ってくれたから、「ありがとうございます」とって答えたら向こうが「いつか同じような気持ちに持ってもらえるようになればと思います」とみたいな感じで来てたかな。

7. 告白／関係の確認

P (紹介)

(私が当時付き合っていた恋人に別れを告げるために)名古屋に行く前日に、なんか自分の気持ちを伝えてくれて、今の彼が。「彼氏いるのは分かってるけど」みたいな。「一緒にいて楽しいし、もしできたら、今の人と別れて僕と付き合っ欲しい」っていうふうに、なんか素直に言われたんですよ。その結構素直に言ってくれたことが嬉しかったのと、なんだろうな、なんかあんまりそんなストレートに口にする人っていないじゃないですか。なんかこうぼやっと付き合うような流れになったりとか、いう人が多かったんですよ私の周りでは。だからそうやって自分の気持ちを伝えてくれるのが嬉しくて。しかも私が別れようか別れまいか迷ってた時に、最後にポンと背中を押してくれて。

(別れた)次の日に「どうしてももう1回会いたい」みたいに言われて、仕事終わりにまた会った時に、何か改めてちゃんと言ってくれたんですよ。その別れたっていう話を飲みの席で話した後に、何か「改めて言うけど」みたいな感じで言ってくれて、もう本当にストレートに「好きです」みたいな感じで言ってくれて、「そんなに思ってくれる人いないなー」と思って、別れた次の日に付き合うっていうことになりました。

Q (オンラインゲーム)

太宰府の、ベンチがいっぱい置いてある結構奥の…大きいお社の向かって左側にいっぱいベンチ置いてあるところあるんだよね。写真スポット。そこでベンチ座ってる時に、(パートナー)から言ってくれた。

「付き合ってください」だったのかな、すごい言葉に詰まった。ていうのを覚える。

R (オンラインゲーム)

直接東京⇄福岡ってそう簡単に会えるような距離じゃないから、初めて会った時に「直接会ったフィーリングが今感じてるこの感情と間違い(ズレ)がなかったら、どこかのタイミングで俺が帰るまでにもう付き合っ欲しいと告白しよう」ってそこから一か月の間に決めて。

「楽しいなあ」とか思いながら、二人でベンチ座った時に「あ、もう俺、早く言おう」と思って「伝えたいことがあるんだけど」って言ったんだけどそこからなんか「さらっと言えるかな」と思ってたら意外と言うことを決心してから全然言えんくなって。

なんか「うーん。うーん」て。もう察してると思うんだけど隣では。で、もう俺の方から「付き合ってください」っていうのを言ったら、OK をもらえて、そこから「カップル」として付き合うっていうことが4月17日に決定したんだけど、ゲームで知り合ったってのはそこから一か月前、3月の半ばがスタートだったから、超スピードで距離を詰めて。

俺は遠距離に対しての抵抗は全くない人間だったので。気持ちが強ければ、相手を思う気持ちが強ければ距離は関係ないと思ってたから、そこに対しての抵抗があったとしたら多分会いに行っていないから。もう会いに行っていて、俺が想像してる通りの子ならばもうお付き合いしたいと思って会いに行こうって決めたから、そうだね、遠距離に対してっていう抵抗はないっていうのが正直な答えかな。後はね仕事柄、各地転々とする仕事なので、一箇所ですっと同じ作業をするっていう仕事じゃないっていうのも功を奏してたかな。「会おうと思ったら簡単にいつでも会えるでしょう」ぐらいな感覚でいたのが大きいかもしれないね、遠距離恋愛に対しての抵抗感のなさは。

S (合コン)

「(付き合っていないのにハグした) ことについてちゃんと話したいから、夜時間をください」っていうので返信が返ってきて、その夜にうちまで来てくれて。友人の車でね、言葉は正直もう覚えてないけどそこで「僕はSちゃんが好きなんだと思う、付き合ってください」っていう話になって、お付き合いになりました。

(告白があるまで相手の気持ちは) わかんなかった。だって「そのことに関してはちょっと夜伝えていいかな？」って言われたら。一字一句そう言ったかはわからないけど「夜に改めて話す」って言われたら二つ考えれるやん？でも告白されると思ってなかったかも。「ちゃんとしてる人だからこそ誤解のないように伝えてくるのかな？」ってちょっと思った。別に私も告白してるわけじゃなかったから、「勘違いしちゃう」みたいなことは言ってたけど。「そのままそういうハグとかされたら勘違いしちゃうから、なんかそういうことじゃないんだったらちゃんと『友達』として付き合っていきたいから」って言った気がするんだよな。「『友達』として付き合っていきたいから、ハグとかやめてほしいな」みたいな感じで、告白はしてないってそれに対して「それに関して夜お話しします」って言ってきたから、向こうの気持ちは全然分からなかったかな。

(交際開始後) 私はすごい意識しすぎたかもしれない。(中略) いきなり彼氏になって「どうしよう？」って、そういう私の気持ちがちょっとあって(恋人)にも「Sちゃん、付き合ってから気を遣ってない？」って。1日2日目ぐらいで「気遣ってない？」みたいに言われてしまうことがあったんだけど。付き合う前は「やー！」みたいな(相手を叩いて)バシバシやってたけど、今もしてるけど、なんかそうなるかは別として、今思えばちょっとしおらしくなったかなって感じが。きつくなってないよ。「どこが？」と言われると思うんだけど、なんか友達だった時みたいにみんなにギャングァン話しかけたりとかしてはないかなと思う。

「(恋人)と私」っていうよりかは「(恋人)たちと私」って見た時にね、(恋人)含む、あの人達に会った時に、友達として「Sちゃん来たぜ」みたいな。「Sちゃん来たよ」みたいな。「イエー！」みたいな。友達だった時の方が、あの男の子たちが「うっせー！」みたいなこと言ってくれてた気がするんだよ。言ってくれてたっておかしいね、一友達として。(恋人)と付き合うようになってかな、変わらず友達としてはいるんだけど、もうちょっと私バカしてたんじゃないかなと。そういうことに関しては、人によるかな？扱いが前の方が「もっと(グイグイ)来てたじゃーん」って思う時はある。

(恋人)も(恋人)で友達だった時は別に私がアホなことを言って周りが「は？」ってなるのが、「また変なこと言ってるよ」みたいなとかで見てたと思うんだけど、彼女になってからは、「俺の彼女がスベるとこは見たくない」みたいな。若干そういうのがある感じかもしれない。だから関係性がどう変わったっていうのは難しいんだけど、全体的な「自分の立ち位置」みたいなやつが変わったのかなっていうのは思う。「もっと自由にやらせろよ」って思う時はあるけどね。

T (職場)

(相手が)よっかかってきたんですね、確か。背中合わせで。(中略)「あ、まずい、どうしよう」と思って。その後向き合う体制になった時に(中略)私は「遊ばれたらヤバイな」と思って、そこで一旦止めて「遊びならやめてほしい」ということを伝えたんですね。そしたら何も言わなかったんですね。多分向こう的には電話とかでお互いそんな感じにはなってたし、「お互いの気持ちわかってるだろう」ばりの気持ちで来てたんですけど。(中略)何も言ってもないのにこう近づいてきたんで「絶対に遊ばれるな」と思って。で、「遊びならやめてほしい」ということを伝えて、そしたらまあ真剣に「好き」ってことを伝えてくれて。

「好きです。付き合ってください」みたいなのが欲しかったわけでもないんですけど、なんか「好き」って言われて、私のことも別に聞かれなかったんですよ。だから「どういう展開？」って思ってた、気持ちでは。でも多分向こうは言ったことに対して満足してるので。

(花火の後)車の中でそのまま寝ちゃって、たぶん疲れちゃって。変な話、目を開けたらホテルにいたんですよ。「完全に遊ばれたわ」と思って、そんな気持ちが強くなってきちゃって。向こうの車で来てたし、自分がどこにいるかもわかんなくて。部屋まで一緒に行ったんですけど一切近づく前に「本当に遊びならやめてほしい」ってことをもっかい言ったんですよ。「さっき想いを伝えてくれたのは伝わったし、けどその後どうするかっていうか付き合いたいのかそうじゃないのかも正直わからない」って言って、二人で正座で話し合いました。「付き合いたい、てか付き合おう。自分もその、言葉足らずだった」っていうことを言われて、私も「好きだった」ってことを伝えて付き合うことになったみたいな感じですかね。

U (大学)

自信はなかったけど、全然。本当に。でも最悪一回ダメでも、後輩じゃなくて男として見てもらうためにも1回気持ち伝えようみたいな感じもあったかも。

2回目のデートの帰り際に告白した。

車の中で「好きなんで付き合ってください」って言ったかな。

V (アプリ)

(相手は)「好き」とは言わなかったっちゃん。なんか超回りくどくて。超回りくどくて。なんか1時間ぐらいそういう恋愛の話を色々してて、好きとは言わないけど「Vちゃんとおったらすごい楽やし、落ち着くし、素でおれる」みたいなことを言われて。なんかそういうことをずっとだらだらだらだら、決定的な「付き合しましょう」がなかなか言い出せんかったっちゃんろね。なんかもうさ、寒いしさ黙ってさ「うんうん」で最後聞きよって、「なんや言うんか言わんのかこいつは」と思ったら最後に「ってことで付き合ってください」って言われて、「好き」って言葉を言ってない。けど「こういうところがいいと思った」とかそういうことは、かすかに言ってくれた気がする。

自分と(一緒に)おってポジティブにいいと思ってくれてる部分はすごい嬉しかったけど「早う言わんかい」と「ちゃんと好きってなのか何なのか、何よ」ってちょっと焦っちゃった。焦ったって言うかもどかしかったね。嬉しかったよ、うん。

W (合コン)

1回目とか2回目の時は、2回目(好きって)言われる前までは、「友達を増やしたいのかな?」っていう感じで思ってたんですよ。なんか例えば「次の合コンの幹事してほしいのかな?」とか。別に私に好意があるっていうよりは、「友達作りとか、違う彼女を作りたいのか、女の子を探してるのかな?」っていう印象だったけど、その2回目に言われてから、「あ、私だったんだ」っていう感じだったので、ちょっと意識しましたねやっぱり。

(告白された後)私はその「いいところを見つけよう」ではないけど、「付き合ったらどうなのかな?」っていう感じで見てたと思います。

2月13か14…バレンタインにとにかく1日2日近くて、それでチョコレート実は持って行ってたんですよ、買って。でもその時はまだ好きとか全然そういう感じではなかったんですけど、そのイベントと一緒に行って、酒蔵開き行って、「楽しかったら渡そう」って決めて、で渡しました最後に。なので改めて(告白)された感じではないかもしれないです。

「長時間でも楽しかった」とか。結構酒蔵イベント、歩いて色んな所行ったりもできるし、バスで直行で行けたりするんですけど、私たちはとにかくずっと歩いたんですね。そういう歩いて疲れたりとか、でも会話が途切れなかったり、そういう「歩いていろいろするのも好きっていうのがお互い合ったね」って言ってます。

X (紹介/シェアハウス同居人)

埼玉かどこかの紅葉を見に行っって、何回か二人で遊びに行ってるし、私もそんな「ダラダラしたくないな」って思っていたので、割とその二人で色々行ってたりしたので、「これって付き合ってるのかな?」っていう感じで私が聞いて、「そうだと思ってた」みたいな感じで始まった感じでしたね。

Y (アプリ)

5回繰り返したのかな?飲みに行ったり遊びに行っって、を。で、5回目にやっと告白が来まして。で、お受けしたというような感じですね。

野球を見に行っって、それは私から誘ったんだ。野球を見に行っって、その後お店を私がもう予約してて「どうせ飲みに行くかな」と思って。そしたら相手車で来てたんよね。でも「実はこの後一応お店の予約したんやけど」って言ったら「行こう」って言ってくれて行ったのね。

帰り送ってくれるってなって「神社とかがあるらしいね」みたいな感じで言われたから「あ、行きたいのかな」と思って「あ、寄る？」って言って「あ、いいの？」ってなって神社うろちよろちよろちしてたけど。「これもしかして言って（告白して）くるのかなー？」って思ったんよ。でも、うろちよろちしてても何もないけん、「もういいや」と思って「じゃあもう帰ろっか」みたいな感じで車に乗ったら、なんか、ゴニョゴニョ言い出しよって、そこでやっとして感じ。それもなんか誘導したのか何なのかっていう感じだけど。

「どう思ってるの？」みたいな感じで言われたんだけど、「俺のこと」みたいな。「これからどうしていくつもりなの？」みたいな感じの質問が来たんだけど「これなんか違うな」と思って。「これを私から言わせるの？」と思ってずっと黙ってた。「ん？」ってずっと言ってたの。そしたら向こうが「いや違うね」って。「これはちょっと違うね。もう言うね」みたいな。その前に向こうがお酒飲んでなかったのは…あ、そもそもその前に一緒にお泊まりしちゃったことがあって。だけど何もなかったのね。お互いマジでガチ酔いして、ビジネスホテルに泊まったのよ。それを向こうは後悔したみたいで、「順番を間違えた」みたいな。何もないんだけど。それで飲まなかったみたい。で、そこでまあ15分~20分の時間を費やし、やっとなんか「よければ僕とお付き合いしてください」みたいな感じで言っていただいて、「じゃあよろしくお願いします」って言ったかな。

B. メタ認識

1. 好意への気付き

P (紹介)

当時付き合ってた彼と一緒にいる時に、本当に良くないんですけど、「あー、楽しくないな」ってふと思う瞬間があったんですよ、毎回、会ってる時に。もうだめじゃないですかその時点で。けど今の彼と一緒にいる時は、なんか「あ、楽しいな」って、常に「楽しいな」って思ってる自分があるのに気づいたのが多分 2 週間ぐらい過ぎたところかな。結構もう 5~6 回ご飯行ったぐらいの時に「私この人という時は楽しいって思ってる」って気づいたのがそれぐらいで、比較するのはよろしくないと思うんですけど、その当時付き合ってた彼と結構比較しちゃってた。ていうのがあって「あの人はこうだけど、この人はこんなことしてくれるんだ」みたいな。「こんなこと言ってくれるんだ」みたいな。「あの人にはないなあ、そんなところ」とか。結構その当時付き合った彼と比較してしまっって、どっちかと言うとこう今の彼が上になってたから「この人と付き合った方が楽しいかもしれないな」っていうのは再会してご飯行きだして 2 週間経ったぐらいからは思ってたね。「なんで今の彼と付き合ってるんだろうか」みたいな。

意外と恋愛経験がそんなに多くない人で、彼が。だから…何だろう…。「意外とピュアだな」って思ったのが、最初かな。「5つ上だけど意外と純粋で可愛らしいな」って、5つ上の人に思ってしまったっていうのが最初です。でも逆にそれがいいなって思いました。

Q (オンラインゲーム)

(YouTube で検索して) そこで初めて顔を見たんだけどバレーボールの清水選手に似ていて、その動画が。「あーなんか可愛い」って思って。私清水選手のすごいファンだったの高校の時。だから「なんか懐かしいなあ。そういえばすごい好きだったな」と思って、「顔がすごくいいな」っていう印象を持ったから、その瞬間に。

それまでは『ゲーム友達』として仲良くしてたけど、やっぱり顔もいいなって思っちゃったら、もう恋愛対象というか、私の中で、認識しだして。「この人可愛いから割とアリだな」と思って。思ったから、そういう風に見出したかな、多分、その時点で。

私はもう「好きかも」と思いたしてるから、「好きかも」ってなってるから、「とにかく連絡を取りたい」と思って、LINE を教えてもらって、で LINE しだしたらもうそこからどんどん止まなくなっていて気持ちも。「会いたいな」って思うじゃん。で「会いたいな」って思うから「どうやって会えるかな」というのを考えてはいたけど、なかなか切り出すのって難しくて。

R (オンラインゲーム)

お互い LINE で友達登録で繋がった時に今度は俺は (パートナー) の、この時点では声を知ってるっていう段階から (パートナー) の顔を知ることになったかな、(プロフィール) 写真を介して。そこでまた「可愛い、俺のタイプの子だなー」って思って、LINE でお互いやり取りしましょうからさらに加速したのかな、距離の縮まり方が。

一緒に直接会うっていうことも決まったから、お互いのテレビ電話、ただの夜の電話からテレビ電話つないで寝るっていうところになるぐらい、どんどんどんどん距離感縮まっていく電話のやり取りになるうちに、やっぱり「友達」っていうところからまだ直接会ってないけど、俺の中では恋愛の感情が芽生えてきて。

恋愛対象として見始めたきっかけは、一番正直に言うとスタートは、LINE のアカウント教えてくれて、顔写真を見れたところはやっぱりこの俺の好みのドストライクのサムネをしてたから。で、声も知ってるから、重ね合わせて、「こんな子か」って想像して、「うん、可愛い」と思って。そこから「あ、ちょっと好きになっちゃうかもしれないな〜」っていう。

文字のやり取りで結構好きにならされてたんだよね。相手の顔も知らない状態で楽しい、付き合う前の一番楽しい LINE のやり取りみたいな感じも始まってたから、その時点でもう気持ちは動いてたけど、顔も知れて、更にそこからテレビ電話で動く (パートナー) を映像上だけ見て喋れた時は更にな、ぐんと恋愛感情が動いたのは。その (パートナー) を見てやっぱり「直接会いたい」ってなっちゃうもんね。

S (合コン)

1 回「ホテルを見に行こう」ってなって、ホテル見に行こうってなったんだけど (恋人) が長期の海外出張が被っちゃうかもってなって、行けないってなったんだよね。「多分被ってしまったからごめん、この日無理かも」ってなった時に結構「えー」ってなって「行けないんだ残念！」って思ってたから、その時とかにはもう「二人で遊びたいな」とか結構思ってた、気持ち的には。

(相手の家の) ソファで横になったんだよ。横になって寝てた時に、なんでだろうね、座る部分も別にそんな幅があるわけじゃないけど、そこで二人とも横になって寝てたわけさ。だからって別に抱きつくとかでもなく、ただ私もこう寝転がってテレビつけたのかな、そこ二人でとりあえずそのソファで横になってドキドキしましたと、私は、結構。「なんじゃこりゃ」みたいな。でも、いいドキドキだよ。ちょっと緊張するみたいな感じで。

(深夜のサッカー観戦に関して)「仕事帰ってきてから一回寝て、その時間になったら起きるから別に大丈夫だよ」みたいな言ったから、「やったー、行ける行けるー」と思って、「行ける」、「観れる」、「嬉しいな」っていう私も「好きだな」って気持ちがありーの。

ホテルに行けるかも？行けないかも？行けるかも？行けないかも？とかあぐらの自分の「行きたかった〜」みたいな落ち込み具合。あれは5月の頭とかかな。二人で遊ぶようになってから「会いたいな」とか。「遊びたいな」とか、「お付き合いしたいな」とか、そのへんかもしれん。「付き合いたいな」って。「付き合ったら楽しいだろうな」とか。

T (職場)

3人でご飯に行ってた時に、曲の趣味とかが合ったんですよね。同じ歌手が好きだったりとか、そういうのが判明していった時に、自分と合うっていうか、合ったのが私も好きな気持ちっていうか、「いいな」って思ってる気持ちもあるし、「普通に合うのかな」っていうのもあったところから自分のそういう気持ちに変わってたかなって思います。

(職場では) なんか恥ずかしかったです。なんかもう自分も意識しちゃってるっていうか、なんか違うこう、感情が芽生えてきたのか、微妙に2人になる瞬間っていうか、何か違う部屋に偶然入ったとか、意図的じゃなくて、偶然になった時がすごい気まずかったです。

もともと尊敬してたり憧れてたりっていう気持ちがあったので、そういう意味での「好き」っていうか、そういう悪いことは全く思ってなかったんで、でもまさか自分が「こういう人だったらいいな」っていうのを勝手には思ってはいたんですけど、でも別に「付き合うまではならないだろうな」っていうか、自分がまさか付き合うっていうことは思ってもなかったですね。

U (大学)

少人数で遊ぶ機会があったんよね。それは別に飲み会じゃなくて。そこでたまたまその先輩も来てて、同じ車とかにもなって、色々話して「あーやっぱり話しやすいな」っていうのもあるし、まあもともと「綺麗だな」って思ってたのもあって、「本気で好きかもしれない」みたいな感情がそこで芽生えて。

(二人で出かけて感情は) さらに強くなったね。めちゃくちゃ緊張すると思ったけど、意外とそのせなくて、憧れの人だったのに。「めちゃくちゃ居心地も良いな」っていうので何かプラスに。気まずかったらね、二人で車内に4～5時間とかきついやん？それも全く苦じゃなかったけん、そういう意味ではすごいより好きになったっていう感じはあったね。

V (アプリ)

3回目のカフェの時に、なんかもう「このまま行ったらもしかしたら付き合うのかな？」とか思ったりした。「そろそろそういう雰囲気になるのかな？」と思いつたけど、なんか一向に相手の方がそういう感じを出してこんけん「あれ、違う？」と思って。

最後の、飲みに行った帰りに「公園でちょっと話そうか」ってなって、その時に(中略)「もし彼氏ができるなら、どういう付き合い方したい？」みたいな感じで聞かれたから言ったし、向こうからも聞いた気がするね。そこが、そうそうそう、合致したんよね。「やっぱそうだよね」って共感したんよね。お互い仕事もしよるし、なんかこう、二人がこう、「自分達が(互いに)会ったら、安心できる場所であつたらいいよね」みたいな。そうそうそう、あんまりこう「高め合う」っていう関係性よりは「安らげるとこ」？「なんか安らげる関係性の方がいいよね」って言って、「楽しいが一番だよ」みたいな話はした気がする。

それまで出会った人の中にはやっぱり「彼女にもストイックであってほしい」みたいな人もおったけん。「ちょっと、そうではないかな」みたいな。それはそれ、で、「恋愛はもう本当にお互いに安らげる場所であつてのが大事」と思いつたけんね。そこは合つたのは良かったかなと思った。

X (紹介/シェアハウス同居人)

山登りに行った帰りぐらいに話していて、今までいろんな合コンとかであつて話した人とかよりもやっぱりリズムとかも合つたので、その時点で結構「いいな」とは思っていました。

やっぱり「二人でどこか行こう」という風になった時には、やっぱりシェアハウスって一応限られた集団なので、そこで二人で出かけるっていうのは「そういう可能性もあるのかな？」っていうので、「二人で遊びに行く」となった時には「将来的にそういう風になる可能性もあるのかな？」って思っていました。

Y (アプリ)

基本的にずっと一緒にいて楽だった。無理しなくて良かった。自分が。背伸びしなくて良かった。わがまま聞いてもらえた。自分が「かっこいいなー」って思っていないから好き勝手言えた。

「楽だなー」って。

2. 男性の紳士的態度

P (紹介)

決め手じゃないですけど、「いいな」って思ったのが、付き合う前の期間に、私に彼氏がいるっていう状況で、好きっていう好意を持ってきてて、なんかこう夜お酒とかも入った飲みに行ってた状況で、なんか、なんだろう、私に彼氏がいるから変に手を出してきたりは絶対にしなかったんですよ。結構ベロベロに、ベロベロっていうか結構飲んだなっていう日もあって、お互い酔っ払ってしまったんですけど、私も私でそういうことできないし、できないタイプだから。一切触れないし、けど男の人ってどうなんだろうってところあるじゃないですか。お酒を飲むと変わる人ってなんか、「そういう理性？が持てなくなる人ってどうなのかな」とか思ってたから。けどそういうのは一切なくて、なんか、後々聞いたら「俺は P ちゃんに彼氏がいた時は絶対に何も手を出していないはずだ！」みたいな言ってたから、「気をつけて大事にしてくれてたのかな」と思った。

S (合コン)

ベッドで (恋人) は寝てて私はそのままソファに寝かせてもらっててだけで、すごい腰が痛くて、私が「ごめん。ベッドで寝ていいかい？」って言ったんだわね。(恋人) のベッドで。「あ、いいよいいよ」ってなって、ベッドで寝たわけですよ、二人でね。本当に何も無く。そこも「いいな」と思って。付き合ってもないし、楽しく友達でいる関係だけど一緒に寝たりもしたけど、何もないから。手出してくるとかもないのが、私はなんか「あらま」って。なんも別に襲われるとか思ってなかったけど、そういう「貞操っていうのがちゃんとしっかりしてるんだなー」っていうのを思いつつ。

V (アプリ)

手は 1 回つないだかな？なんかちょっとノリで。でもないよ、ほとんどない、そういうなんか、「チューしました」とか「先にエッチした」とかも全然なかった。

やっぱ「付き合ってからじゃないと」みたいなのはあったみたいよ。いや、「この子とは」ってなったみたい。「私とはこの先彼女になるかもしれんから」。彼もね、良い年やから、その日で終わったことも酔っ払った勢いでとかいうことも数回はあったみたいやけど、私とはそういうのにはならんって思ったみたい。

3. 認知的不協和の生起

S (合コン)
当時（恋人）が人の手料理が食べたい時に仕事終わりに（女友達）に連絡して、（女友達）が車で（恋人）を迎えに来て、車でその子の家まで行って、そこで（女友達）の手料理食べてワンコイン払って送ってもらって帰る。みたいなことがあってたらしいのよ。
結構家に誰でも呼んじゃうタイプだし「ソフレが欲しい」って言ってる、（女友達）みたい子みたいな人がいるってなって「わかんないな」って思っただけど、一緒に寝たら後ろからギュッみたいなのがあったから「ちょっと分かんないどうしよう」って。
（恋人）に「ハグとか一緒に寝るとか友達でもできるみたいな（こと）言ってたけど、今日みたいなこと、ハグとかされてしまうと私多分勘違いしたりするから（恋人）がどういう気持ちでしてるかわかんないけど、それがただの本当に友達としてやってるんだったらやめて欲しい」みたいな感じで言ったんよ、LINEで。
「私もその中の一人の友達なのか」ということははっきりさせたかった。私は私で多分その時ぐらいには「いいな」って、「好きだ」っていう感情があったから、このまま何か勘違いで、その向こうは私のこと「ソフレ」とか「ご飯とか行くような仲間」っていう目でもし見ているんだったら、ちょっと自分も距離感気をつけなきゃなっていう確認したいなっていうのがあったから言ったし、ていう感じかな。
「私じゃなくてもそういう子がいればいいのかな？」って思ってたし、且つ、ある日なんか「添い寝ミッションクリアした」みたいなこと言われたことあって。それこそ、もう「いいな」と思ってる時期。何月かは忘れたけど、言われて、「あ、おるんかい」って思ってしまった。そういう女の子が。分からんよ？何を思って言ったのか。本当にしたから、純粋に馬鹿みたいに言ってきたのかわかんないじゃん。だからそれこそそういうのを言えちゃうぐらい、私も「一フレンドだよ」っていう可能性があったわけ。そういうことがありまして、はっきりさせたかったかな。

T (職場)
私の入りが「自分がまさか付き合うわけない」っていう入りだったので、自分に全然見合うって思ってたので、それもあった上に年齢もあるし、未知の世界な感じがして、「まさか18を相手にするわけない」って思っていました。

私のことが気になってるっていうか「好き」ってストレートに言われたわけではなかったんですけど、なんかそういうニュアンスみたいな、匂わせじゃないですけど、そんな感じで言ってきて。でも私はそれを全くもって信じてなくて。私もまだ18で向こうが24とかだったんで、なんかもう「私遊ばれてるんだろな」って思っ

Y (アプリ)

2回目のデートか3回目のデートの間に、自分の中で「やっぱこの人ないかな」って思った瞬間があって。それは何でかって言ったら、向こうとの連絡を取っている間に急に向こうが敬語を使い出した。で、違和感を覚えて、「え、何それ？ どういう事？」みたいな感じで聞いてたら、それに対してもなお敬語を使ってきて、イラついて、「いや、そんなことないですよ」みたいなこと言われて。なんか、「鋭いね」みたいな。「あなた鋭いね」みたいな感じで言ってきたの。内容を聞いても全部誤摩化されると。「なんなんだこいつは」と思って。まどろっこしいのも嫌いだから苛立って。ただ、その次にまた遊ぶ約束を既にその時点でしてたの。で、「断ろうかな」って思ったけれど「まあ、もう約束してた以上行くしかない」と思って行ったの。その時に飲んで、そういう出来事があった時に、「もういいわって思った」って自分の気持ちを正直に。「めんどくさい」って思ったっていうことを言った時に、「実はあれは他の人とも連絡を取って、その人と敬語で話して、誰と会話してるか分からなくなって敬語使ってしまった」と。ということが分かって、「それだけのことか！」と。「しょうもない」と。

C. 第三者との関わり

1 第三者への相談

Q (オンラインゲーム)

やっぱ「実際に会って見ないと」っていうのを、友達から言われたし。「こういう風に今仲良くしてる人いるけど、一回も会ったことなくって」っていう話をしたら、「会って見ないとわかんないよね」って言われたのもある。

T (職場)

Pちゃんと、もう一人、結構高校の時に私の幼馴染みたいな子も高校が一緒で。二人は今でも覚えてると思います。私が付き合う前のこの話してて、その連絡取ってる事とか、それが多分そんなすぐ花火に行ったので、もうすぐ行く話とか。で、二人は、私とその今の彼氏が「絶対に付き合うよね」っていう話をしたって言ってました。

U (大学)

1回目のデートから2回目のデートの間に、一人の女の先輩に実は相談してて、その先輩から間接的に「めちゃくちゃ楽しかった」みたいな、ちょっとテンション上がる情報は聞いた。そこで「0と思った可能性がちょっと上がったかな」っていう感じはあったね。

X (紹介/シェアハウス同居人)

夫もシェアハウスの人たちに「自分の知り合いの知り合いだ」みたいな感じで最初紹介をしてくれたので、周りのシェアハウスの人たちから会ったことない段階から話題として夫のことを聞いていて、同い年だし、夫が大学社会人ぐらまで暮らしていたのが埼玉県で、かつ私の実家がある同じ沿線上のもうちょっと奥の方で高校も私の実家の割と近くだったりして、「共通点が結構あるな」っていうふうに思っていて。

私は悩みとかあると結構シェアハウスの友達とかに話したりしてたので、そういう相手を知っている人もいるのでそういう相談もできていたり

Y (アプリ)

友達と飲んでて、その話をした時にその友達が「いいんじゃない？その人別に、いいじゃん、連絡先交換してみなよ」っていうひと押しがあったから連絡先を交換したけど、それがなかったら交換してないと思う。そもそもが。

2 (元) 恋人との不仲・破局

P (紹介)

(今の恋人と) 2年ぶりに再会したときに彼氏がいたんですよ。(中略) ちょうどその時、結構、あんまりうまくいってないというか、なんか、「何のために遠距離してるんだろう」みたいな感じで悩んでる時に再会して。その話を結構熱心に聞いてくれたりしたんですよ。

当時付き合ってた人と、なんかちょっと別れの危機になってしまった時に(中略) 私結構自分の気持ちを口で伝えるのがすごい苦手で「別れよう」って言う勇気がすごいなくて。「ふざけんな」って感じなんですけど、今まで人生で振られる人生しか送ってこなかったから、どういう風にこう、告げようかとか、どういう風になんかなんだろう、『別れよう』って言い切らんかもしれん自分』って思って。でグチグチグチグチ悩んだんですよ。そんな相談を聞いてくれながらも、結局その名古屋に行く前日に、なんか自分の気持ちを伝えてくれて、今の彼が。(中略) 私が別れようか別れまいか迷ってた時に、最後にポンと背中を押してくれて。

U (大学)

(現恋人と付き合う前の恋人とは?) 浪人したっていうのもあって入学のタイミングも向こうと1年ズレとって、福岡の大学に行く予定やったんやろけど俺も、ちょっと一人暮らししたいなっていう気持ちも出てきて、で大分行くことになって。(付き合っていた恋人と) 遠距離になるやん?で、初めての遠距離で、且つ大学っていう…なんて言うのかな、サークルとかお酒飲んだりとかちょっとそういう「ちょっと楽しいイベント」とかお互いあって連絡とか減ってきたし、そもそも一年間俺は浪人しとって向こう大学でみたいな時期から若干もうすれ違いじゃないけど連絡減ってきて、で、大学入って1年間ぐらいは付き合ったけど、何て言うのかな…ちょっと正直冷めてたかな。冷めちゃったというか、距離もあって会えなかったし。っていうのが正直なところやね。

(現恋人と一度別れた際に付き合った相手とは?) 結構その子、地に足ついてないような子で、表現が難しいけど、すごくいい子ではあったんやけど、なんか今付き合ってる彼女の時みたいに「結婚この人がいいな」みたいな感覚が一切なくて。もうその時26~7(歳)だったし「この人とずっと付き合ってもな」みたいな感情が正直結構あって1年ぐらいの時にその時は自分から「別れよう」って言ったね。

3 他の異性との関係変化

Y (アプリ)

(恋人と付き合う前に他の異性と交際を目的に) 会ってた、会ってた、会ってた。大濠公園の散歩っていうのを繰り返してた。で、そうだ！何人(なにじん)だ？一回外国人と会ったんだ。で、その(外国人の)後のこの人だったんだよね。日本人といっぱい会って、「日本人なんかもう違うのかな。外国の人一回相手してみよう」って思って外国の人と会って見たら、すごくグイグイくる感じの人で、疲れちゃって、「これはちょっと違うな」って思って。そんな時にこの人と会って、この人と連絡を取り始めたぐらいからはこの人と連絡をするのが楽しいから他の人の連絡はもう疎遠になってた。

II. 交際開始後

A. 相互交流

1. クオリティタイム

P (紹介)
(紹介してくれた友達に) 付き合い始めた次の日ぐらいに「付き合いました」というのを報告して、一応その友達の彼氏も、友達と私の彼が出会ったきっかけになったバイト先で一緒に働いてた子なんですよ。そのカップルと私の彼はすごい昔から仲良くって、だから何回か4人でどっか出かけたとかもしましたね。不思議な感じ。
忙しくてっていうのもあるし、多分私がこういう性格だから、詰めたりするタイプじゃないんですよ。「会いたい会いたい」とかもないし、まあ言えればいいんでしょうけど。「時間が出来た時に会おうか」みたいな感じになっちゃったから、最近は2週間に1回ぐらいかな?でも会ってるほう?でも家近い割には…どうなんだろう?私が一人暮らし始めたのは結構大きいかもしれないです。去年9月から一人暮らし始めて、お互いの家を行き来できるようになったっていうのは変化があったかもしれないですね。
最初よりは、長い時間会えるのが増えた。会う頻度はどうかって感じですけど、時間的には長い時間会えるようになったというのはありますね。けどまあ、私的には全然いいかなっていう感じ。

Q (オンラインゲーム)
(付き合いからは) より一層「早く家に帰ろう」と思った。「早く家に帰ってゲームにログインしよう」と思った。
(会う) 頻度は2ヶ月に1回かな。で、交互に、基本的には。「私が東京に行く」、「(パートナー)が福岡に来る」、を繰り返す。でも遠距離が、1年だけだから、期間的に。もう一年のその間に、そうだね、そんぐらい、5~6回かな、会ってるとしても。

R (オンラインゲーム)
付き合いことに決まってそこから1年間、遠距離恋愛っていうのがスタートするんだけど、毎日テレビ電話でお互いの状況報告するっていうことは当然で、後はほぼ交互って感じで「(パートナー)が東京に来てくれる」、「俺が福岡に行く」というのを「可能な限り、無理のない程度に会いたいな」という風に思ってたから。大体月一回行って3日間とか4日間滞在するっていうペースで一年通して遠距離恋愛っていうのを続けてて。

S (合コン)

別に一緒に住んでるわけではないけど、私が(恋人)の家に行ったりとかしたら「おかえり」って向こうも言ってくれるし、私の家に来ることほぼないけどたまにご飯食べるとかなったら「おかえり」って言うかな。そんぐらい。「いらっしやい」とかではないんだよ。「ようこそ」みたいな。「おかえり」みたいな感じ。

(恋人)の家において、私が休みの日があれば、シフト制だからさ、月～金じゃないから、(恋人)の家に行って一緒に寝るけど、(恋人)が仕事の日もあれば私が遅番の日もあればっていう感じなんやけど、その時は長く寝れる方が寝たままなんやけど、「行ってきます」という時に飛んで行ってチュミたいなのはあったかな。どっちかが先に出る時はね。

T (職場)

私がまだ一年目の時だったので、仕事が定時で終わったので、相手も早そうな時とかは近くとかで待ったりとかして、一緒にご飯食べたり、食べて帰ったりとかは平日、仕事終わりでもしてましたね。

一緒に過ごす時間がすごい多かったのと、あとは割となんか「すごい大切にされてるなあ」ってその時すごい感じてて、その時に「そうなのかなあ」ってちょっとずつ思い出したのと、自分も…。そうですね、「大事にしてくれたな」と思ったのが一番でかいかもしれない。

結構マメっていうか、気にしてくれることが多い。気にかけてくれたりとか、何て言うんですかね…。でもなんか、休みの日の時間を割と自分に使ってくれてたりとか。

私結構友人とも遊びに行くことも多いので、そっちもうまくこう、やってくれてるなって思った時ですかね。ちょうどいい感じに友人とも遊びに行けてたしみたいな感じだったので、でもその中でも「二人でいる時間とかはすごい大切にしてくれてるな」って。あんまり時間なかったりとかする時も何するか考えてくれてたりとか、そういうので「大切にされてるな」って思っていましたね。

私が一人暮らしを始めたんですよね。なので、家にやっぱりいる時間が、一緒にいる時間が増えたので。やっぱり一緒に、ほぼほぼ半分ぐらい生活してくるとやっぱり言わないとどうにもならないことが増えてくるじゃないですか。なのでやっぱり、そういう面では色々コミュニケーションというか、口にするようにはなったし、その分言い合いすることも増えたんですけど、そっちの方がいいなって今はすごい思ってます。

U (大学)

向こうは実家やったんよ。で、バイトも全然違ったし、頻繁ではないかな。まあ週に1回会うか会わないかぐらい。付き合っただけでもそんぐらいだった。

でも週1回はなんだかんだ会えてたから、そんなかな。月に2~3回とかだと思う。

まあでも大分って自然しかないけんさ、滝見に行ったりとか、何かそういう自然を感じるような、弁当を作って公園で飯食ったり、かな。結構外行くことが多かったね。家でなんかずっと一日中いるとかは記憶にないね、あんまり。

(復縁後も) なんか自然と、連絡もずーと取り合うように、より戻したけん(連絡) 取り合うようになって、電話とかもして。やっぱりすごい楽しいし、楽だし、ていうのがすごいあって自然となんか前の関係に戻れたなーって感じかも。

毎日のLINEとか連絡のやり取りは自然とできたルーティンだと思うし、あと何かな…。でもお互い自然と束縛みたいなのは一切ないかも。遠距離が長かったっていうのもある、てか今も遠距離だし。「自分の用事第一でいいよ」みたいな感じかも、お互い。でも彼女の方が立場、常に上。それはなんかずっとそうかな。別に威張るとるとかではなく。

考え方もすごい似てるかもしれんね。あと空気じゃないけど…俺って結構おしゃべりな方だと思うんやけど、その家族の前でもめちゃくちゃぺちゃくちゃぺちゃくちゃ喋るかって言われたらそんなにそうじゃなくて、そういうのもその彼女とはすごい共有出来たって言うか、一緒におってすごい静かな時間も全然あるし、なんかそういうところがすごい、なんだろうな…「合うな」とは思ったけどね。「空気」って言うていいかわからんけど「静かなのが絶えられない」って人もおるやん、付き合っただけでも。そんなんは全然なかったね。

V (アプリ)

「彼氏と彼女」になったけん、お互いの休みの把握とか「次いつ会う？」っていうなんかも「おはよう」から始まり「おやすみ」が生まれるようになったかな。毎日の、その日常生活の中でのやり取りが生まれるようになったかな。逐一ずっとLINEしてるわけじゃないけど、お互い働いてるから。まあでも「今帰ったよー」とかそういう感じ。「今から飲み行ってきます」みたいなそんな感じのやりとりが始まったかな。

週末だいたい向こうが土日休みやから、週末ご飯に行って、そのまま向こうのお家泊まって、日曜日にまた二人とも休みやったら日曜日どっか昼間にどっか行く、デート行くみたいな感じ。

W (合コン)

夜遅くまでとか泊まるようになったりとかして、「付き合ってるんだなあ」って思うようになりましたね。

X (紹介/シェアハウス同居人)

向こうはできるだけ時間を共有したいタイプだったので、同じ所に住んでいたのもあるのでお互いの部屋とかで一緒に過ごす時間とかも増えたし、ご飯とかも同じタイミングで食べれば一緒に食べてたりしたので、一緒に過ごす時間が圧倒的に長くなったかなという。

同じ所にずっと住んでて、食事も基本一緒だったので、お財布は一応別々だったけど一緒に買い物したりとか一緒にご飯作って食べたりとかそういう機会が圧倒的に多くなったので、やっぱりそういった面で「家族」じゃないですけど、そういう感じになっていったっていうのはありますね。

(旦那の留学プログラムと一緒にいくことにしたとき) 日本に住んでいた時は仕事も財布も別々だったので、自分で自由に決められることとかも多かったんですけど、やっぱりメキシコに行ってからは同じ学校に通ったりもして、本当に一日中一緒だし、財布も一緒だし、かつ私の方はプログラムに乗って行ったわけじゃないので自分で手配とかもしないといけなくて自分たちで色々決めないといけないこともあったりしたので、そういう中で前よりも過ごす時間も長くなったし、あと旅行とかもすごい一年を通して色々行って、その中でいろいろ小さい事で喧嘩することもたくあったんですけど、その中で喧嘩の仲直りの仕方とかもある程度決まってきた、向こうで体調を崩しちゃったりとかお互いしたこともあったので、ホームステイ先のファミリーはもちろいろいろ支えてくれたんで頼ってたんですけど結局頼れるのお互いしかいなかったんで、メキシコの一年間は結構すごく自分たちの仲は深まってかなと思います。

Y (アプリ)

一泊二日 (の旅行)。でもその時私女の子の日だったから (セックスは) 我慢してもらったんだけど。その由布院に行った時ぐらいに初めて手繋いだりキスとか? そうそうそうそう。だってチューする前手繋ぐ前にお風呂一緒に入ってるからね。色々順番ぶっ飛ばしとる。あっ、違うか。先に足湯してたんだ。足湯して、そしたら花火が上がって、花火見に行って、で、その後自分たちのお風呂の時間が来て、貸切風呂がね。で、お風呂一緒に入ったのか。そうだ。

2. 性的行為（手を繋ぐ、キス、セックス）

P（紹介）

あっちが忙しくなっちゃったから、一日中会えることがなくて。付き合う前みたいに夜ご飯食べて飲んで帰るっていうのはあったんですけど、私はそのとき実家だったんで、終電を気にしながらやってたんですけど。だから結局付き合って一か月してやっと1日デートっていうのができたっていう感じだったから、その時に初めて手を繋いだかもしれない。

私あまり手とか繋ぐのが恥ずかしいタイプの人なんで。なんかこう、昼間とかに手を繋いで歩くのは恥ずかしい（笑）。夜暗くなって、とかならいいんですけど。あんまりこう人がいっぱいいるところっていうのがあったから。

S（合コン）

ハグも本当に1回ぐらいだったから、付き合ってからもうちょっとは増えたんじゃないかな？うん、増えましたね。

Y（アプリ）

付き合いだしての初めてのデートがお泊まりだったのよ。湯布院に行ったのが付き合ってから初めてのデートやったんよ。

（キスをして）「あ、第一関門クリア」って感じ。

自分の中でのその「この人を受け入れられるか」という思いが。やっぱり付き合ってみたらやっぱりそういう（性的）関係になんないかな？でもそれができるかできないかわかんなかったけど、いざちょっとその場面になってみたら「あ、意外と、まあまあ大丈夫。よし」みたいな。

3. 関係に関する話し合い

P (紹介)
お互いそのまず第一に、時間が合わないっていうのが私たちあったから「付き合って、もし仕事が忙しいっていう理由で会わなくなるのはやめよう」とかそういう話はしましたね。
私的には「合わせられるほうが合わせればいいと思う」とっていう話をしたんです。「お互い無理せずに、合わせられる方が、例えば会いに行ける方が会いに行けばいい」って。
(相手が忙しくて連絡がない日が続いて) 3ヶ月ぐらい経った時に「ごめんね」みたいな、「ちゃんと連絡もするようにするわ」みたいな感じのこと言ってくれてからは、毎日何かしら、例えば「おはよう」でも、何でもいいんですよ私は。もうとりあえず生存確認がしたくて。生きてるのかどうか分からないから。で、そういう連絡も、ちゃんと毎日返ってくるようになったし。

Q (オンラインゲーム)
私は「付き合いたい」という気持ちもあったけど、遠距離はすごい自信なくて、本当は。今までうまくいった試しが1回もなくて。やっぱ近くにいないとなかなかコミュニケーション？スキンシップ取れないし。そこはちょっと不安があったけど、それに関して相手に伝えた時に、「自分はまったく不安じゃない」って言ってたし、だから「不安にさせるようなこともしない」みたいな言ってくれてたから「じゃあ信じよう」と思って。
「将来考えて付き合っていきたいと俺は思ってる」って言ってたから「真剣なお付き合いだ」という認識ではいた。まあ「うまくいかなかったら別れよっか」ぐらいじゃなくて(中略)「いろいろ問題があったら話し合っ解決したい」って言うてるから、「あ、それって素敵だな」と思って、私も何か「二人の間でトラブルがあったらちゃんとお話し合いして納得いくまで話し合う。で解決する」というのが基本にあるべきだと思ってる。
(パートナーが)「思うこととかいろいろあったら気兼ねなく言って欲しい、俺も言うから。で、なんか喧嘩とかしたらちゃんと話し合おう」って言ってたのかな？

R (オンラインゲーム)

ぶつかるときは相手を嫌な気持ちにさせて、無言の時間を貫くとかそういう二人の時間をもったいなく使ってしまうことが俺は嫌だし苦手だから、はじめからもう（パートナー）に事前に伝えてたのは「喧嘩をする時は、もうお互いの思うことを何も隠さないで全部言い合ってお互いが納得するまで、解決するまで話し合うことを約束しよう」って。

「とことん解決するまで話し合おう」っていうのは最初から言ってることではあったんだよね。もう一つあとね「喧嘩の使う言葉の武器として、『じゃあ別れよう』って、この言葉は絶対なしね」っていうのはこれも確かに（パートナー）に伝えてて絶対伝えて決めてることで。別れを告げる言葉は本当に最後の言葉のときしか使っちゃいけないって。そういうことになってもいけないって思ってるから。俺ら結婚するから。離婚も絶対あっちゃいけないと思ってるから。

T (職場)

結構割と一か月ぐらい経った時に。人から見たら（私は）結構はっきりしてる性格って言われるんですけど、なんかそういうのがだんだんこう出始めて。最初とはちょっと殻が破れてきたっていうか。そういうのがあったので、そこからは、はっきりでも言っはなかつたと思います。何かふんわりっていうか、そんな感じで伝えてたと思います。でも向こうの言い分っていうか、私だけがバーって言うだけじゃなくて、「相手が言うてくることもきっと間違っていないだろうな」っていう思いは最初からあったので、それもちゃんと聞くようにはしてました。心掛けてはいました。

お互いが考えてることがだんだんこう…優先ってゆうか相手の考えてることを考えられるようになったっていうか。それでこう合わせていくっていうか。相手が考えてくれてたら、自分もやっぱりそういう風にしようってちょっとずつを思っていくし、そういうのでだんだん良くなって良い方向に進んでいたのかなとは思っています。

V (アプリ)

いつも同じような事でバチバチ喧嘩して、喧嘩する度に同じような話し合いしてっていうのがあったけど。もうしんどかったんよ、その期間すごくしんどくて「もうなんか性格が合っていないのかもしれない」と思ったけど、それを「お互い指摘しあうことももちろん大事やけど、認めることも大事なんやと思う」って私が言ったことがあって。そしたら向こうもその考えに「せやな」ってなってくれて。

「やっぱある程度さ、違う人間同士なんやけん、相手にどんだけ伝え続けたって、私は相手を変えることはできんと思うっちゃんね」って。「やけん、ある程度今から長く付き合っとうと私は思っとうけど、あなたも思っうんだたら、ある程度お互いのことを認め合っとうっていう方の努力をして行っとう」っていう話をしたんよね、多分その頃。その辺からだんだんこうちょっとずつ変わってきたかな。

W（合コン）

実はノートを付けてるんですよ、私たち。月に1回ぐらい。その時に思ったこととかを書いてるんですよ。（中略）（ノートを見ながら）彼は疲れていると、態度に多分、挨拶がなかったりとか、出るのかな？たぶん。そういう時に私の同じタイミングで疲れてたりして、ピリピリしてて、『挨拶しよう』とか、本当に些細なことですね。大体今まで楽しかったこととか、『ありがとう』とかそういうことが多いですね。だから、これを通して、何かあった時にちょっと気になるような言葉を言われた時に、なんか「私はびっくりした」とか、「こんな夫婦になりたいんだけどなんでそういうこと言うの」って書いたら向こうが返事をして、そしたらその内容がやっぱり「職場でうまくいってなくて落ち込んでいた」ってことを彼が書くんですよ、それを知って、「あ、そういう状況だったんだ」って思うことの繰り返しをずっとしています。

私が書いてるのは『毎月15日（入籍日が2月15日）が忙しく慌ただしく過ぎている日々の中で二人の生活を振り返る良いきっかけになっています。せっかくなので年をとってからも二人で振り返れる共有できるものが欲しいなと思って作りました』って書いてます。

私は例えば嬉しいことも書くけどやっぱり気になってることとか、こういうのがあんまり好きじゃないなっていうところを書いたら、向こうがあまりそういう仕事の話とかしなかったの、書いたら向こうがすごい短いんですけど、向こうの心の中とか、「こういう風に思っとうんだ」って分かるから、なんか違う一面を見れるというか、喋っとうるだけが全てじゃないんだなっとう思います。

4. 価値観の違いによる対立・破局

Q (オンラインゲーム)

(同棲して)最初は、そうね…。私がお部屋の片付けが苦手だから「これはこうしようね」って言われることに頑張って対応しようとしたり。後はあれだね、まあ私の生理前の PMS が激しすぎて、感情のブレがすごいから、それに戸惑ったりとか。あと、私は1回食中毒で入院してて、高校の時。そのトラウマ？のせいで、食品をすぐ捨てたがるの、日が経つと。もう賞味期限切れぐらいで捨てちゃうんだけど。消費期限とかもってのほかって感じで。お水とか飲み物に関しても結構多分厳しいみたいで、彼からすると。それにちょっと「え、もう捨てちゃうの？」みたいな。本当に小さなことなんやけど、お話し合いしなきゃいけない。

R (オンラインゲーム)

(喧嘩が) 10時11時からスタートしたら翌日(パートナー)仕事なのに、3時過ぎてもベッドの上で終わらないとか。寝ながら喧嘩っていうのがないから、ベッドで喧嘩始まったとしてもグーッと、むくっと起きて、お互い顔を突き合わせて、ずーっと話し合いみたいなので。

外でちょっと喧嘩しちゃったことがあって。で、「もういい」っていう感じで(パートナー)が俺に背中を向けてバーって電車に乗るために歩いて行った時があって。(中略)
(パートナーは)「家に帰ってから話そう」っていう思いでこの場から早く離れたくてバーって電車のホームに向かって歩いて行ったんだけど、その時一切振り返らなくて。「もういい！」っていう言葉と共に去っていった(パートナー)を見て「あ、こいつは話し合いを放棄したんだな」って判断になっちゃったから、俺は追いかけてなかったの。そしたら(パートナー)はホームについて電車に乗るぞっていう時に振り返った時に俺がいないことに気づいて。(中略)俺自身もすごい頭にきたから、「そういう行為をするのね」っていう頭になっちゃって。「今どこにいるの？」っていうLINEが来ても、日は跨がないで家に着いたと思うんだけど、一切LINEの返事もしないで別の場所で時間を過ごして。だけどその間、俺らが住んでるのがA町で、喧嘩した場所が東京駅の隣の駅だったんだけど俺が連絡を返さなかった間に一度(パートナー)は最寄りの駅に帰ってきて家で過ごしたのにもう1回俺を探しに戻ったらしくて。俺の気持ちが落ち着いたらLINE開いて帰ろうと思って数時間後に開いたLINEを見たら「戻ってきました」の後に、たぶんもう帰ってるんだけど「私はどうしたらいいでしょう」ってきてて。だからそういうのを見たら「悪いことしたな」と俺も思って。

S (合コン)

(セックスレスに関して) 今まででトータル 3 回話した。1 回目はちょっとジャブよね。「(恋人) はどれくらいの頻度でしたいの？」って言ったら何て言ったか正直覚えてないんだけど「S ちゃんは？」って言われた時に、私は、「別に実際にやってないけんやったらきついんかもしれんけど別に毎日でも」みたいな感じで言ったんよ。そしたら「僕はそんなにしたいって思うことが少ないかは少なめかもしれない。性欲はあるっちゃあるけど」みたいな。(中略)「俺がしたいタイミングでさせて」みたいな感じなことを言われて。向こうがどういう意図でその言葉を言ったかわかんないんだけど、「あー、君は毎日なんだね。でも僕はちょっとしたいなっていうタイミングがあるからそのタイミングでしょう？」っていう意味だかもしれないんだけど。結構私の中であってそれを言われたら(中略)誘ったことないんだけど、私は仕掛けたことはないんだけど、誘いづらいというのを感じてて。

また(最後にセックスして)何ヶ月か空きましたってなった時に、そのセックスレスからくる不安とかで、1回、付き合いだして半年ぐらい経って(中略)「(私と) 付き合ってたって何か得たことはありますか？」みたいな感じで聞いたんよ。「自分に魅力がないのかなとか、付き合いたくないのかなとか、別れたいのかなとか、元カノのことまだ引きずってるのかなとか、そこで嫌なマイナスなことばっか考えちゃうから聞きたいんだけど」っていう体で「私と付き合ってたなにか得たものある？」って話をしたら、すごい馬鹿正直に「正直元カノより人を好きになることはない」って言われて。

「でも大前提として、嫌いだったら別れてる。好きじゃなかったら別れてるから、そこは心配しないで」ってそんなこと言ったんだと思うんだけど。「いいなって思ったから S ちゃんと付き合ったし、僕は告白したけど、そっから好きな気持ちがグッと上がってるかって言われたら正直わかんない」って。

一回さ、友人と 3 人でご飯行こうってなった時に店被ったの覚えてる？あの時に、「お互い別々で行こうとしてた店が被りました」っていうのが事前にわかりましたといった時の言い合いでだいぶ喧嘩になり、一週間ぐらいちょっと連絡とらなかつたんだよね。

向こうから「ちょっと考えさせて欲しい」って言われて。「何を考えるんじゃ」って思ったんだけど、「じゃあ仕事頑張ってるね」みたいな感じで。

T (職場)

結構仕事のことが一年目だったので自分の中のレートが大きくて。だからまあ彼氏に対する「好き」とかいう気持ちもあったんですけど、それより「仕事で気まづくなったら私この先続けていけないな」っていうのがあったので、なんかあんまりこう軽く考えてなくて、付き合ったりとか、そういうことが自分の中で、特にその仕事の人と付き合うってなったらなお付き合いことが重たくて。でも向こうは思うがままにっていうか、そこまで考えてないっていうか、そこがいい意味でもあるかもしれないんですけど。そこで軽い感じで来られた時に、なんかズレてるなっていうか「ちょっと違うかな」とは思っていました。

去年の冬？なんで半年ぐらい前ですかね、半年前ぐらいに一旦ちょっとお別れムードが来て、一旦まあそうしようかなって思って、2か月ぐらい離れてたことがあったんですよ。なんでまあそれが5年間の中では一番大きい出来事かもしれない。

一回付き合って2年ぐらいの時にもう1回（お別れムードが）あったっちゃあったんですよ。なんかそれも考えてることの違いうか、私の中では許せないとかあったっていうか、「今後起きていったら嫌だな」って思うようなことがあって。私も正直口に出すのが苦手だったので、先にこう泣いちゃうことの方が多くて、でも相手からすればそれって何も言われてないのに自分のせいで泣いてるってなるから、多分気に食わないじゃないですか。何が言いたいかもわかんないし、て感じのやつが募って行って、2年目の時に一旦それが来たんですけど、その日は別れなかったんですよ、確か。

2年ぐらい経ってまた同じような…その実際の別れ話とかになる前から雰囲気はずっと悪くて、もうほんと些細なことでだんだんこう、ちょっとした喧嘩みたいなのが増えて行って、私がいってもたってもいられなくなって「話そう」って言って話したんですけど。で2ヶ月ぐらい離れてましたね。

U (大学)

彼女がもう「結婚したい」ってすごい言ってて、自分の中ではまだ就職して1~2年目とかだったし、正直結婚はまだ全然先のことと思ってたから、「正直今んところまだ結婚考えてない」…考えてないというか、彼女が嫌だったわけじゃないけど「結婚自体をまだ考えてない」っていう話をしたんよ。それでも彼女がすごいその時結婚欲がすごかった時期で、なんかそれが耐えられずに「じゃあ別れる」って言って振られた、その時は。

V (アプリ)

私の親友の夫婦が福岡に帰ってくるってなって、(中略)「彼氏に会ってみたい」って私の友達が言って「じゃあ、よかったら、うちの旦那も連れてくるけん、彼氏連れて来て」って言われて「じゃあ一緒に飲みに行こうか」って言って四人で飲みに行ったことがあって。(中略)私結構酔っぱらって。彼氏がおり、久々の友達との再会もすごい楽しくてすごい飲み過ぎてしまったんよね、いつも以上に。(中略)彼から言ったら完全にアウェーな空間におるわけやんか。私の身内にぽつんと。でもそれでも頑張っつてついてきてくれよって、カラオケも行って、で彼が入れた歌を、私が、全く覚えてないけど「誰この歌入れたのー」でプチって消したらしいんよ。で、それでブチってきて、その子達とバイバイってするまでは普通やったんやけど、バイバイした瞬間態度が一変して「もう帰るわ」みたいな感じで。

私がちょいちょいやらかすけんね、それに対してなんかぐちって言われることはあったね。だいたいね、約束しとったのに前の日に遅くまで飲んどって朝起きれなかったとか、完全に私が悪いっちゃけどね。時間を有効に使えないことが彼の中では嫌みたいで。「全然昼まで寝たいんだったら『昼まで寝たい』って最初から言っとってもらっていいって。それを褒に『頑張る頑張る大丈夫』って口約束して破られるのが一番好かん(好きじゃない)」って。

X (紹介/シェアハウス同居人)

本当に多分細かいことで、付き合ってから「お互いの友人同士で合コンみたいなのをしよう」っていう話になって、幹事なので色々決めていくんですけど、その中でお店を決める時に考えが合わなかったりとか、あとはふとした時に夫が職場の悩みとかを話した時に、私の反応が多分夫が期待していたものと違ってそれで喧嘩になったりとか、本当にそういう些細なことが多かったですね、喧嘩するのは。

やっぱり割と夫は金銭的な感覚が結構厳しい感じで、私は実家に直前に住んでいたこともあるし、割と親も甘かったんで、で当時働いていたので、そんなにこう金銭感覚もきつくなかったんですけど、なので一緒にいるようになって、「ご飯どこに行く？」っていうので、そういう一つのことでも割と夫は「そんなに高くなくてでもちゃんと食べられるところ」とかそういうところがあって、私は割とその友人たちも美味しいところ食べに行くのが好きだったりとか、会社も銀行だと結構飲み会とかも多くて、会社の人たちは割とお金気にせず使う人とかが多かったんで、なんかそういう所に最初は結構ギャップを感じたかな？っていう。

5. 仲直り／復縁

P (紹介)

結局ぐっと我慢してたら、仕事が落ち着いたぐらいの時に、落ち着いて二人で会った時に、なんかすごい「ごめんね」って言われて。なんかやっぱり結局私が思ったように、仕事で忙しすぎて、なんか若干「プチ鬱状態」だったらしいんですよ。プライベートより仕事優先みたいな人で、私はそういうところもいいなって思ったから。私が仕事に対してあまり向上心が無いタイプで、そうやって仕事に夢中になれる人、何かに夢中になれる人ってすごい素敵だなって思ってたっていうのもあったから、なんかそこを信じて待ってたら、なんかすごい「連絡も全然返してなかったのに全然文句をひとつ言うこともなく、申し訳ないなって思うけどありがとう」みたいなことを言われて、なんか「そういうのをわかってくれる人なんだ」って思ってた。彼が「私の気持ちを汲み取ってくれるような人で良かったな」ってその時に思って、で、そこからはなるべく信じるように、なんかこう変に女の子の子らしく、よくいる女子？みたいにカリカリせず、心広く受け止めようという気持ちでいるようにしてるんですけど。

Q (オンラインゲーム)

「これってこうしたいんだけど、どうしよう？どう思う？」とか聞いたら、私が期待してる答えじゃなかったりとか。逆にあっちも多分同じようなことがあったりするから、それが私はすごい顔に出ちゃうから、伝わっちゃって。「ちょっと話し合う？」って言って話したり。でもちゃんと「その日のうちに解決する」って決めてる。朝4時から5時まででなくても。次の日仕事とか関係ない。もう「それが第一優先」っていうお約束。

R (オンラインゲーム)

喧嘩した時、どっちがスタートとしても、最終的にいつも思うのは、お互い何かしらの点で「これはごめんなさい」って。「ごめんなさい」って言葉をお互い言ってるような気がする。

やっぱそこで大事なのが、そういう各々の無駄な時間を過ごした後に家に帰ってきて、これをまた解決するために数時間そっから話し合う。「やっぱ良くないな」って思ったその時。より（更に）。話し合いをしないで、ぶいっとして、意地を通す時間っていうのは。

相手も不安にさせるし、「こりゃやっぱよくねえな」って。うわーってヒートアップしたときに解決するまでやっぱ、涙、どちらかが流そうとも、思い切りとことん話し合う方がまだ終わって見た後に「これで良かったな」と思えるなっていう感じかな。

S (合コン)

結局その(喧嘩した)一週間後ぐらいに(恋人)が「別れた方がいいのかなって思っているいろいろ一週間考えたんだけど結果が出せなかった」みたいな感じで家に来たわけよ。「はあ」ってなって、「一週間会わなかったけどやっぱり S ちゃんに会いたいなって思って会って話がしたいなって思ったからごめん何も結論を出せてないんだけど来た」みたいな感じで。

私も「別れたいって思って悩んだんだったら別れた方がいいんじゃないかな？」みたいな話はしたんだけど、私は「あなたが別れたいって言ったらじゃあ別れよう」みたいな感じだったし、向こうは向こうで「お付き合いに関して付き合いしていくべきなのか悩んだけど、今別れたいわけじゃない」みたいな。「今別れたいわけじゃない」みたいな感じになって、結局お互いなんかも「じゃあ別に今別れたいわけじゃないんだったらとりあえず続けましょう」ってなって付き合いを続けて。

T (職場)

別れないまま、でも「自分のことで自分の影でじゃないですけど見えないところで泣いて苦しむっていうかそういうことで悩むのはやめてほしいし、そういうのがあった時はちゃんと話をしたい」という風に相手に言われて「それはそうだな」って自分の中で納得して。

(再び喧嘩したあと) 2ヶ月ぐらい連絡全く取ってなくて、ある日電話がかかってきたんですね。で、その時たまたま地元の友人と一緒にいて、2ヶ月間連絡取ってないとはいえ、考えてないことはなかったし、だからまあ「多分電話を今の時点で取らなかったら後悔するよ」って友達にも言われて「自分が待つとってあげるけん電話出てきていいよ」って言ってくれて背中を押してくれて。

そのまま連絡 LINE はしてたんですけど、その後一時して何回か電話かかってきて「ちょっと会って話がしたい」という風に言われて、会って話をしました。

最初に「別れよう」という話をしてきたのも向こうで、全然今でも私の中では「課題だな」と思ってることなんですけど、付き合った時から多分お互いにその部分だけは似てるのか、「うまくお互い伝えきれないな」と思うときに結構あって。それで溜まってしまったりとか、「お互い不満みたいなのその時嫌やったとことかが溜まってしまふな」と今でもたまに思う事があるんですけど。なので、こう、なんですかね、その別れた時もそれがあったんですよ。向こうも多分上手くこうお互い話せてなくて、会っても話せてなくてみたいなのはずっと続いてて、どうしていいか分からなくて、っていうのがあったので、さすがにもう話した時は、向こうが自分が思ってたこととか、その時は本当に「自分の中で気持ちが冷めたことも事実だし」とてことを全部、今までで1番ぐらいちゃんと言葉にして伝えてきて、伝わったというか、「そうだったんだな」と思ったんで、っていう感じです。

U (大学)

今の彼女と1回「結婚できんなら」と振られて、その後俺も別の人と付き合ったやん？で、彼女も彼女でちょっと経ってから新しい彼氏が出来たんよね。で、付き合ったけど、なんかその時に自分の事とめちゃうちゃ比べてしまったみたいで、で、もう向こうは確か付き合いって2~3ヶ月ですぐ別れて、別れてすぐ連絡が来た、彼女から。でもその時は俺はもう別の人と付き合いってたから、「今彼女いるしごめん」と言って断ったのが2回ぐらいあったんよ、付き合いってる最中に。2回ぐらい「より戻して」みたいな話があったけど、当時は彼女のことが、一年ぐらい付き合い合った彼女のことが好きやったから、2回ぐらい断った。

その元カノと別れてからちょっとして、多分どこかから情報仕入れたんやろね、また連絡が来始めて。で、向こうが研修で福岡に来た時にご飯に行ったのがきっかけかな、また。

相変わらず綺麗で居心地は良かったね。なんか昔のままというか。長く付き合いとったけん安心感じゃないけど、本当の本当に素な感じだったかな。

若干そのすごい向こうの押しもあったっていうのと、あと周りの人とも相談した時にも「もう1回より戻して見たら？」なみたいな意見がめちゃうちゃ多くて。正直周りに若干流されたのもあると思う。あと向こうからもすごい何度も何度も来てくれて「嬉しい」というのもあったし。それでかな。だからめちゃうちゃ「あー、やっぱ好き！より戻そう！」って感じで戻った感じではなかった。

V (アプリ)

謝って解決した。本気で謝った。「ごめん！それは私が悪い」って言って。

「私も極力頑張って合わせるというか自分の言ったことに責任を持つし、あなたが時間をすごく大事にする人なのは分かりました」と。「あなたの考えは分かったから私も気をつけます。無理なことは無理って言うし」って。朝からどこどこ行きたいって言ってその時間無理って思ったら「ごめんその時間多分起きれん」とか「前の日何々だから」とか「その日夜勤明けだから」とか「そんな早い時間に約束しても無理」ってはっきり言うようになったけど、多分自分の性格上、ちょっとう、断れないところとかがあって。「あ、それいかな」と思って、何に対しても。やけんそこははっきりと「それはできません」、「それはできます」とはっきり線引きしたのと、あとは向こうが「とろい子なんやね」と。「もうもともとそういうマイペースな子なんやね」っていう、「元からそうなんやね」って言って、だいぶ理解してくれた、私の性格を、「私時間」をだいぶ理解してくれた。

X (紹介/シェアハウス同居人)

最初の方は割と私が謝ってたんですけど、結婚してから、メキシコに行ってからもそういう些細な喧嘩ってたくさんあったんですけど、私もともと頑固なので、最近というか、ここ1年ぐらいは夫が結構折れて、最初はもうお互い「口もききたくない」っていう感じで、でも私が謝ったりして解決していたんですけど、最近は夫も多分「ずっと怒っていても仕方ない」っていう感じで。一緒にいる時間が長いからこそ、多分喧嘩している時って自分にとっても相手にとっても精神上良くないので、一刻でも早くそういう状況を抜け出した方がいいっていうのが分かったので割と最近は怒ったとしてもすぐ機嫌が直って、私も機嫌が直って、みたいな感じになってきましたね。

夫は、最初に二人で話した時にお金の話から入ったっていうのもあって、「自分は割とお金に関しては厳しい方だ」っていうのは自分の考えは結構はっきり言う方なので、そういう主張を何度か聞いている中で「この人はお金に結構厳しい人なんだな」っていうのは自分も分かって、私もそんなに豪遊するタイプでもないし、「お金使うな」って言われたら別にそんなに、洋服とかは買いたいんですけど、それ以外だったらあんまりこだわりもなかったの、そういうところを合わせて行こうかなっていう風に思いました。

6. 将来に関する話し合い

R (オンラインゲーム)

俺の中の恋愛観で「簡単に付き合う」っていうのが元々なかった人間だから「結婚を考えられるっていう相手と付き合う」っていうステップに行くっていうのが昔からで、それはもう学生時代から「好きになった人はフィーリングがあったらいつ結婚してたかわかんない」っていうのはあったと思うんだけど。だから(パートナー)とも付き合うっていう風に決めて告白をするっていうその時点で、(パートナー)には言ってたか言ってなかったかわかんないけど、俺は「結婚を考える相手」だと思って「お付き合いお願いします」と言って。

S (合コン)

10ヶ月(セックス)レスの期間があって、(恋人)が本格的に東京に行っちゃう前の本当にこの前の3月ぐらいの時かな? 向こう2年は確実に東京になるから遠距離になるし、そのまま住み続けるんだったらお互い29だから30ってなって、「僕はいいけどSちゃんの年齢も年齢で」っていうのもあって、お互い遠距離になる前に今思ってる気持ちとか漠然と将来の「いついつ頃には結婚したいな」とか「そもそも結婚したいか思ってるんですか」みたいなそういうところから二人で話そうってなったよね。

「そういうのを見据えてお付き合いしましょう」って感じ。(中略)だからと言って、「その場でもし本当にいい人がいたら(中略)別に付き合ってるからっていうのを理由に行かない」とか、「彼女いるから合コンいいっす」とか別そういうのじゃなくて、いつお互いね、離れている間にいい人が現れるかわかんないから、そういうのは自分に鎖かけずとか、あまり『結婚の話をした』っていうのを重く捉えずに付き合っていこうみたいな話は、私がした。

T (職場)

彼氏のお友達に会う機会が、結構何人か紹介してくれることとかが多くて。やっぱり(付き合っている)年数も年数だし、みんな「結婚しないの?」とかそういう風に周りから結構言われてくることの方が増えてる状態なんですけど。まあでもなんか二人では「結婚」っていう話はあるしなくて、多分そこは話さないんですけど、相手がそういう話をするのも苦手なんですけど、伝えるのが苦手なんでしょうけど、「一軒家建てるならどこがいいか」とか、そういう飛び越えたことをよく言ってきます、最近。「子供が何人欲しい」とか。でも絶対「結婚」というワードには触れないです。

U (大学)

将来の話は今年になってからかな。より戻して丸一年ぐらいは向こうも「今は結婚欲収まってる」って言ってて。で、ちょうど去年ぐらいから「そろそろ結婚とか考えてる」みたいな話はちらほら出てきたかな、うん。

V (アプリ)

「なんでこういうアプリを始めたの？」っていう会話から、「いや、もうこういう年齢だし、そろそろ結婚したい」っていう想いは言った。「だからそういうふうに見える相手を探したくて私はやった」って言ったら、「俺も」って言ってたから、「その目的はズレてないんじゃないかな」と思っと思ったけどね。

(結婚の話は) ざっくりはよくしてるかな。今彼の仕事がちょっとこのコロナでっていうのもあってちょっと大変で、彼が体調崩したっていうのもあって、今は時々お休みをとりながら仕事をしてるような感じなんよ。で、ちょっと鬱っぽくなってしまっからね。だけん、彼が今「転職しようかな」って言って就活をしてるんよ。だから将来的に一緒にはなる予定ではいるんやけど、まだそっちの彼の仕事関係が落ち着かんとたぶん具体的な日にちとかはないと思う。

X (紹介/シェアハウス同居人)

年齢も年齢だったので、付き合うってなった時に「私は今付き合うんだったら結婚したいと思っているんだけど」っていうのは最初に伝えました。

夫も同い年でもあったので、「自分も」じゃないけど、「そういうのは考えている」っていうような感じだったと思います。

ダラダラ長く付き合うっていうのはあまり考えていなくて、なのでやっぱり1~2年付き合っ結婚するんだたらするし、しないんだたらしないっていうので、「そのくらいの期間で決めていけたらいいな」とは思っていました。

直接その具体的に「いつする」とかそういう話はあんまりしたことはなかったんですけど、何かお話の流れとかで「将来はこうしたいよね」とか「子供何人欲しいよね」とかそういう話は時折出てはいましたけど具体的なお話ではなかったですね。

7. プロポーズ／入籍

Q (オンラインゲーム)

はっきりしたのは去年の11月ぐらいに、私から聞いて。その前から「いつ入籍するか」みたいな話をしてたけど、私はいつでも大丈夫っていう状態だったけど（パートナー）的にはまだなんか仕事の面とかに関しても不安があったみたいで「まだ難しい」って思ってたみたいだけど、私はもうあんまり…なんだろう、長くお付き合いする、関係を続けるって言うのがただただずっと踏ん切りつかないまま、もしかしたら終わってしまう可能性とかもあるし、あんまりもともといい印象を持ってなくて、長く付き合うことに関して。で、「私はずっとあなたと一緒に生きるという覚悟があるんです」っていう話をしたら、「おお」ってなったらしくて。「じゃあ、しましょ」みたいな。

（パートナーに）言ったのが、「（パートナー）がもし犯罪者になっても、浮気したとしても、結婚って軽いものじゃないから、それでも私は一緒にいるっていう覚悟を決めたいと思ってるんですけど、どうですか？」っていう感じかな。

R (オンラインゲーム)

漠然と30過ぎた頃から「35で結婚したい」という勝手なこの数字の区切り所を自分で作って。で（パートナー）と付き合い始めるっていうところでも「35で結婚できたらいいかな」という感じで考えて（パートナー）とお付き合いをさせてもらってたんだけど「（パートナー）の結婚観」というのを真剣に話してくれた時があって、その話を聞いた時に俺自身の不安点を（パートナー）に伝えて。（中略）結婚するって一番大事なのは「男として、夫になる者として、この子を一生不安にさせないための生活を何十年も送っていける状況に今の自分があるのか」というのが俺の結婚の中の大事なポイントの一つで。

「いついつに結婚したいという私の思いがある」というのを告げられたタイミングで自分は全然生活面が安定していなかったから「得られる時は得られるけど、ない時は（収入が）0の月もあるんだよ」というような仕事を俺は何年も続けてきて。（中略）俺は「正直な話をすると現状の不安ってのはこういう点だ」と伝えて「私の結婚をしたいという、結婚するために大事なポイントは全然そこじゃない」という強い想いを話してくれたから、そこに俺は動かされて「この子は全然そういうところを見てるわけじゃないんだ」というのを気づかせてくれたので、俺は違う意味で安心させてもらって、その気持ちを動かされたその瞬間に「結婚してください」と言った。

W (合コン)

プロポーズするきっかけになったのが、彼が4月2日から買い付けで海外に買い付けに行く予定になっていて、私の誕生日が4月3日で30歳だったんですね。彼が言ったのは30になる前に20代にプロポーズ、私がされたいだろうって思ってたみたいなんです。あと私は実家通いだっただけで毎回帰ってたんですね、電車で。それで「もっと長くいたいな」と思ってプロポーズしようと思ったから、自然な流れだった」って。

びっくりして「どうしよう」と思って。30までに結婚したいとかほんと全くなかったんですね。で「結婚私もしないのかな」って、前の彼と別れてから「しないのかな」って思ってたぐらいなので。でもなんか何事もスムーズに行くような感じがして、彼とだったら。「ちょっと早すぎるな」と思ったけど、「ここでちょっと考えさせて」って言っても多分答えは「結婚しよう」ってなりそうな気がして、で「はい」って言いましたね。

(結婚に対して) 温かいイメージは(お互い)一緒だと思うんですけど、私は子供が好きだし、「子供が2~3人いて、家族がいて」っていうイメージして。でも彼の方は別に子供はこだわりがなくて、なんなら「夫婦二人で長く仲良く暮らすのもいいな」っていう感じでした。思い出した。私が結婚を決めたのも、今まで子供がいて「結婚=子供がいて家族がいて」っていうのをイメージしてたけど、彼とだったら「ずっと二人でもいいかな」って思ったのが決め手でした。

どっちかって言うと「好かれない」って思ってたけど、多分今の彼はこっぴどスピードが早いから多分「好かれてる」っていうのがあったのかもしれないです。だから安心して言えたのかもしれないです。

全部スムーズに行きそうな気がしました。なんか人を大切にしているのも分かったので、周りの人とか出会う人を大切にしている人っていうのがわかってたから、それで安心したのかもしれないですね。

X (紹介/シェアハウス同居人)

1~2年ちょっと付き合っただけで、2017年の12月とかに付き合っただけで多分1年ちょっとの時に、夫が会社の研修制度でメキシコに一年間留学するっていうのが決まって、そのタイミングで「メキシコに1年間っていうのでどうしようか」ってなって「せっかくだから一緒に来る？」っていう風になって、それでひとまず結婚することにして、私も会社を辞めて同じ風に留学できるように手続きをして、2018年の8月から1年間メキシコに行って、2019年の8月に帰ってきて今に至るっていう感じですかね。

B. 第三者との関わり

1. 双方の家族との関わり

Q (オンラインゲーム)
割とすぐ親に会いに来てくれて。「将来のことも考えて付き合ってます」っていうことを、佐世保まで来てくれて、直接伝えてくれてるし。そういう話も割と早い段階でしてくれたから、なんか不安に思うことがない。「関係どうなるんだろう」とか。(中略) 遠距離って大変だしコストもかかるし気持ちも相手ももしかしたら突然飽きて他の人と一緒にいるかもしれないとか色々考えちゃうんだけど、そういう心配がないと言うか。
付き合っただけですぐにどんな人物かっていうのが分かったから親はすごく安心してた。お父さんにまで紹介するっていうのは今までなかったから。そのお父さんがすごい (パートナー) の事気に入って、「あ、これはいいな」と思った、その紹介した時に。
うちはやっぱ、お父さんすごい特殊だから。すごい寡黙で、私でさえあんまり、この15年ぐらいきちんとコミュニケーション取ってないから。人と会話してる姿とかもあんま見かけたことなかったけど、(パートナー) と話して、ものすごい楽しそうでニコニコして。「笑うんだ?!」みたいな。なんか笑ってる姿とか見るのも久々だったから「これはとても (Q) の家にとっても、すごい良い風だな」と思って。
(相手の家族は) なんかもうすごいフレンドリーで、例えるならアメリカの家族みたいな感じ。アメリカのご家族ってすごいオープンじゃん。そんな感じ。
(パートナーの家族と会ったときにパートナーのことを) 「長男だな」と思った。なんか、リーダーシップすごいとってて。家の中では、かなり重要人物なんだなと思った。言葉に力があるというか。基本的に家族で一番力があるのって日本だとお父さんになると思うけど「お父さんを越えて行くんじゃないかな」っていうぐらい、しっかりしてて、気が強くて。「なんか長男だな」と思った。

R (オンラインゲーム)
俺自身も数多くの人と出会って接するっていう機会の多い仕事をしてるからファーストコンタクトで相手がどういう感情を抱いてるだろうっていうのは瞬間的に察する力はあるかなと思ってて、一番最初に会って「お付き合いさせていただいてます」っていうことと「今後ともよろしくお願いします」って (中略) ご挨拶させてもらった時は相手から僕に対する嫌悪感みたいなものは全く感じなく「温かく迎え入れてくれてるな」という印象を受けたからもう安心して。

俺は相手のお義父さんお義母さんと仲良くするのは得意技なので、まあ楽しい時間を過ごさせてもらって。で、(パートナー)が俺に喋ってくれたことでめっちゃ嬉しかったのは、お座敷にちょっとあるご飯をご馳走になるっていうのがあって、そこに俺が1度トイレで席を立て戻った時に、戻ってきたその障子のなんか隙間を使ってちょっと笑わせようと思った行為があって。「帰りました〜」みたいな感じてやったんだけど、それを後からお義父さんが戻ってきた時に真似してくれて。「お義父さんおもしろー！」って言ってめっちゃみんなで爆笑してたんだけど。そしたら(パートナー)が後から二人だけの時間になった時に「ねえ、お父さんあんなことするの見たことないんだけど」みたいな言ってくれて。だから俺とお酒を交わしながらお話をするっていうのを好いてくれてるのかなっていうのを感じられたのがめっちゃ嬉しかったかな。めっちゃ喋ってくれて。自分の知ってる、俺の知らない知識を色々教えてくれて。「あーそうなんすか」ってお話しさせてもらって。家族とお話させてもらえる時間は、すごく楽しいね。

同棲スタートしてからも去年の年末に(パートナー)の実家で、佐世保で過ごさせてもらって。初めて泊まらせてもらったし。さらにより多くの時間を過ごさせてもらったから。やっぱ結婚するっていうのは、人によっては相手の親御さんとの関係性っていうのがネックになっちゃったりする人もいると思うけど俺に関しては全くないかな。うちの親たちが(パートナー)に対する想いとかもそうだし、俺が感じている(パートナー)家のご両親含め親戚の方々みんなもかな。

V (アプリ)

うちの親に会ったんよね12月、年末ぐらいお母さんだけやけど。それぐらいから私が将来を意識するようになったかな。なんかちょっと自分の中では「好き」ってだけじゃなくて「あ、この人をパートナーとして」みたいな感じで見えるようになってきたのがきっかけ。

うちの母がずっとね「連れてきなさいよ」みたいな。「会わせてよ」みたいな感じですつと言いよったけん、それをね、彼に伝えよったら、最初は「えー、いやいやいや、まだいいわ」とか言いよったけど、何か「行こうか」みたいな感じでお母さんに初めて会わせたんよね。将来の話が出たっていうよりも急に「お母さんに会おうかな」みたいな言い出したから「ちょっとはそういうのを考えてくれるようになったんかな？」って思い出したきっかけ。

お母さんにも「この人きついな」という印象を案の定持たれてたし、ようしゃべるし、営業マンっていうのもあって、そういう上辺っぽい会話はすごい淡々とするんよね。(中略)私「この人の良さって1回や2回会っただけじゃ伝わらんな」というのが分かってて。私自身がそうやったけん。「この人は何回か回数重ねて会う毎に良さがだんだんわかっていくタイプの人間やけん多分印象が良くないんやろうな」と思ったら案の定でした。

その後何回もうちの家で一緒にご飯食べたりするようになって。「めっちゃいい子やね」とは言いよった。いい子っていうか「意外と口下手な子なんやね」と言われて「いや、そうなんよ。意外とね。人見知りしよるんよ、あんだけしゃべりよるけど」と言ってた。し、本人も「『喋らな喋らな』」って思ってしまうんよね」と言ってるから、多分本当は相当下手で緊張しいな人なんらうなって。

W (合コン)

私が結構恋愛とかは話さなかったの家族に、なので「あ、いたんだ」と思ってびっくりされました。でも「結婚する」という話だったので、びっくりしてましたね。

お互い、まず彼が私の両親と食事して、私が彼の両親のお家に行って、で、その後両家顔合わせしました。

(彼は)「緊張してない」と言ってたけど、すごい緊張してるのわかりました。彼にインタビューしたら「してなかった」と言うと思います。けどしてたと思います。なんかすごい汗かいてました。

お義父さんとはあんまり話さなかったんですけど、お義母さんがウェルカムモードだったので、スムーズに、温かく迎えてもらったって感じですね。なんかもう向こうは結婚式を「キリスト教にする？仏教にする？」みたいな感じの質問ばかりされてたので。

X (紹介/シェアハウス同居人)

「両家顔合わせ」というのはメキシコに行く前にあったんですけど、そもそもその前にお互い自分の実家というか、私は向こうのお母に会っていたし、向こうは私のお母にもともと会ったことはあったので、そこら辺はあんまり違和感なくというか、スムーズに行きました。

2. 出産

W (合コン)

今まで私たち、お酒もご飯食べに行くのも好きだったので、結構夜はしごしたりとか、酒蔵行ったり居酒屋行ったりとか大好きだったんですけど、やっぱり行けなくなったから、そういうのはしなくなりましたね。ただ変わらないのはずっと歩いてる。車もないので、よくお散歩を、二人の時も家族になってもよくしています。

赤ちゃん産んだ人とかは言ったりするんですけど、ピリピリしたり、匂いに敏感になったり、したりするかも。イライラする相手が主人になるっていうのは、言えないけど、多分彼も態度で伝わってると思うんですけど、ですね。やっぱり一番が赤ちゃんになっちゃったかな。今は守らないといけないから。でも赤ちゃんのお世話を通して、いいところも見つけられるようになってきたかなっていう感じですね。

妊娠した時とかから「無理しなくていいよ」とか優しかったんですけど、お世話一緒にしてくれたりとか、できない時はお皿とか家事？前からお皿とか洗ってくれたんですけど、なんか結構すぐ動いてくれたりとか、オムツとかお風呂とか、ですかね。もともと子供とか好きじゃなかったけど息子のこと「可愛い～」とか言ったりとか遊んだりしてるのを見ると、「そんな一面もあるんだな」と思って。

でもなんか前の方が主人に対しての愛情表現はしてたのかなっていうのは思います。ハグしたり、キスしたり、くっついてたりするけど、今は前に比べたら少ない気がしますね。したくてするんですけど私、それを「したい」って思わなくなったんだと思います。それが嫌いだからとかじゃないんですけどね。

「そうなりたくないな」ってちょうど今思ってるところです。「そうなりたくないなあ」って。そして「そう思われたくないなあ」って。「お母としか見られたくないな」って。今ちょうど思ってる時です、1年経って。

C. 環境の変化

1. 仕事などの多忙による交流機会の低下

P (紹介)
付き合ってから3ヶ月ぐらいまでの間に、あっちがちょうど店舗の異動と重なって、あんまり連絡が返ってこなくなっちゃったんですよ。で、それで「やっぱりたぶんこれはそういうやつだ」と思って「多分なんかもうそれまでの気持ちで盛り上がりすぎて、きつと冷めたんだな」と思って、いろんな人に相談したりして、本当に一週間とか既読もつかないみたいな感じだったんです。びっくりするじゃないですか、だって付き合う前は週に2~3回も会って「うおおお」みたいな感じだったのが急にパタッと連絡も取れなくなるっていう。
(付き合ってから)数ヶ月してその連絡が途絶えて、で、連絡が途絶えた時に、私はもう正直3ヶ月で終わると思ってたんですよ。だから、あんまりこう意外と、付き合ってから3ヶ月とか一番楽しい時期じゃないですか？まだまだこうウキウキワクワクの時期なのに、そんな時期にどん底に落ちたから、なんかまだ気持ちも盛り上がってない、自分の気持ちも盛り上がってないっていう状況だったから、もうこのまま、「あまりのめり込まないようにしよう、しよう、しよう」でずっとこう抑え込んでた時期だったんですよ、付き合ってからすぐっていうのが。
出会いも言ったら結構ドラマチックというか、「一回しか会ったことないけど3年ぶりに再会して」みたいなとか、なんか男の人って結構なんか、付き合うまでが、何て言うんですか？「付き合うまでが燃え上がる」とか言うじゃないですか。だからなんかそういう状況が重なって、再会とか、私に彼氏がいるっていう状況とか、そういうのが重なって、なんか「意外とすぐ冷められちゃうんじゃないか」という不安はすごいあったんですよ。

Y (アプリ)
向こうが忙しいんだけどね。私もバイトで忙しかったけど、バイト先が閉店したから。でもう1個の方にはあんま(シフト)入らんどこうって思ってるから。今は全然。

2. 遠距離の開始／終了

Q (オンラインゲーム)

1か月後、付き合ってから。もう絶対離れているのは本当に無理で。だらだらと遠距離を続ける気は全くなくて、私の中で。「仕事辞めてでも行くかな」ぐらいの気持ちでいたんだけど。でも現実的にやっぱ、なんだろう…万が一、東京行って駄目になっちゃったりとかする可能性もあるから、自分の身は持ち崩さないようにしないとイケないし、周りからも心配されちゃうし「ちゃんと仕事のところは整えてから行きたい」と思ったから、ダメ元で「あっちに異動させてください」って言ったら「いいよ」って言われたから。「あ、じゃあ1年待とう」と思って。

R (オンラインゲーム)

年末だったと思うんだけど、ずっと遠距離でのやり取りがそこから半年以上続いて、もっともっと距離が縮まっていったから「同棲」っていう次の段階に入る話も二人の会話の中で出てきて。

U (大学)

俺最初は(就職で)熊本行ったんよ。で、彼女は今もやけど大分で働いてるから、遠距離やね。

学年が一個上やったけんさ、彼女の。やけん就職も彼女の方が早かったんよ、やけんもう就職彼女がしてからは2週間にいっぺんぐらいしか会えんくなったけん、あんまり遠距離になってもなんか急に全然会えなくなったっていうわけじゃなかったから、案外すっと入れたというか、特に問題なく順調ではあった。

3. 同棲

Q (オンラインゲーム)

(同棲開始後)「好きだな」っていう気持ちはあるけど、少しずつ「共に生きていくパートナー」として認識するようになったかな。やっぱり衣食住共にするって。いきなりね、遠距離だったのにいきなりそこに来たから、やっぱり最初は、喧嘩とかも絶えなかったというか…絶えなかったって言ったら悪い印象になるけど、話し合い？喧嘩とか話し合いが多かったかな。

R (オンラインゲーム)

結婚をするっていう一番人生最大の踏ん切りをつける前には同棲は必要だなと思ってたので。だけど、(パートナー)は実際福岡で就職しているわけだから、東京に来てもらうっていうその行為は簡単なことではないから、確か一昨年 of 年末ぐらいから話を始めて(パートナー)は「同棲をしたい」っていう想いを俺に話してくれたから、同棲をするために会社でどういう振る舞いをするべきかっていうことも頑張ってくれて。で、上司からもOKもらって、2019年の4月に東京の本社に異動するっていうことを決めて。

去年の4月から同棲がスタートして1年、ずっと同じ時間を過ごして、たまに喧嘩もしたりとか、ただ「一回も喧嘩しないまま結婚」って気持ち悪いだらうって。夫婦生活に突入していく二人にとって絶対に大事なポイントだと思う。上辺上だけで、そのざわわする時間が嫌いだから流すようにスルーして行って、そこでゴールインに至るのは、ゴールインの後に絶対問題発生すると思ってるから。何かしらでお互いの感情をぶつけあって衝突するっていうことは必要なことだと思ってる

ものすごい大きな変化だったかな。やっぱり「生活を共にする」っていうことは「俺自身が当たり前だと思ったことが当たり前じゃないんだよ」っていうのを言葉にして気づかせてくれたこともあったし。喧嘩で教えてもらうこともあれば、普通に教えてもらうこともあるし。(中略)(例えば)「妹を平気で自分の部屋に泊まらせる」っていうこの自分の中で当たり前だと思った行為が「(パートナー)にはこんなに気を遣わせてしまってたんだ」って思うことがあったり。

お互いに思ったことは全部言おうって言ってるけど、相手のことを思って、自分がある程度我慢しなきゃいけないだったり、サポートしてあげなきゃいけないとか、「あれも直して。これも直して。こういうとこ変えて」っていうの全部言ったらこの関係性は成り立たない。同棲も成り立たない。同棲をするにはお互いの共有する時間がよりハッピーであるべきだなって。ハッピーにするためには全部強要するんじゃなくて、ちょっとそこをサポートするために自分がちょっと頑張ってみるって。これ、自分一人じゃ絶対に考えなかったことだから。(パートナー)も多分大いにあると思うんだよね、俺に対してのそういう面が。それこそ妹を泊まらせてくれる、この二人で住むことになったこの家だけでも「全然泊まってもらって構わない」って言ってくれるから。その泊まりに来るっていうタイミングが(パートナー)の辛いタイミングの日だった時には俺がもうちょっと配慮しなきゃいけないって気づかせてもらった。そういうところかな。「より思いやりが必要だ」と思った同棲には。

X (紹介/シェアハウス同居人)

付き合い始めて3~4ヶ月は別々の部屋に住んでいたんですけど、「どっちかの部屋にもう一人引っ越すと家賃がプラス1万円だけでいい」という風になっていて、ちょっと狭いんですけど家賃的には一緒の部屋にしたほうがいいんじゃないかっていうので途中から同じ部屋に、私の方を解約して向こうの部屋に移って一緒に住むようになったんですけど、本当に6畳ぐらいの部屋に二人で住んでいるので、本当に仕事の時間以外一緒にいたので、その長い時間をより過ごすようになったっていうのは関係が深まったこともあるし、逆に一緒にいすぎて関係が悪くなるというか喧嘩とかもあった時もやっぱりありましたね。